

博士論文

中国民族観光と民族文化の創出
—湖北省土家族の事例を中心として—

Ethnic tourism and the creation of ethnic culture in China:
with a focus on the case of Tujia people of Hubei province

2019年3月

鹿児島大学大学院 人文社会科学研究科
龔 卿民
(Gong Qingmin)

目次

第1章 序論	3
第1節 研究の目的	3
第2節 先行研究	4
2.1 中国の少数民族観光に関する研究	4
2.2 土家族地域の民族観光に関する研究	6
2.3 土家族文化に関する研究	7
2.4 恩施土家族の民族観光に関する研究	9
2.5 民族文化の創出に関する研究	9
2.6 民族文化の伝承とエリートに関する研究	10
2.7 本研究の位置づけ	11
第3節 研究方法	12
第4節 本論の構成	14
第2章 中国における民族観光	15
第1節 はじめに	15
第2節 民族観光の歴史的背景	15
第3節 民族観光の現状	18
第4節 民族観光と民族政策	22
第5節 民族文化と観光文化	26
第6節 民族文化とその資源化	29
第7節 小括	30
第3章 民族文化の表象の諸形態	33
第1節 はじめに	33
第2節 中国における民族文化の表象の諸形態	34
2.1 民族テーマパーク	34
2.2 民族観光村	38
2.3 エスニック・レストラン	41
2.4 民族博物館	42
2.5 民族地域の都市観光	45
2.6 民族イベントと民族商品	46
第3節 土家族における観光の諸形態	47
第4節 小括	50
第4章 湖北省の土家族と民族観光	52
第1節 はじめに	52
第2節 土家族とは	52

第3節	土家族文化と民族観光	55
3.1	土家族文化の形成と連続性	55
3.2	土家族文化の観光化	56
3.3	土家族地域の観光展開	63
第4節	湖北省の土家族観光	70
4.1	湖北省における民族観光の展開	70
4.2	湖北省の観光政策の展開	73
第5節	恩施土家族の民族観光	78
5.1	恩施地域民族テーマパーク	79
5.2	恩施地域民族イベント	85
5.3	恩施地域民族観光村	87
5.4	恩施の自然観光地での民族観光	99
第6節	小括	102
第5章	恩施土家族における「女兒会」の誕生と観光化	104
第1節	はじめに	104
第2節	民族観光としての「女兒会」	104
2.1	「女兒会」の由来	105
2.2	建国以降から1995年まで	108
2.3	1995年以降	110
2.4	「女兒会」と地域エリート	119
2.5	「女兒会」と土家族文化の表象	127
第3節	小括	128
第6章	湖北省恩施土家族における民族文化の継承	129
第1節	はじめに	129
第2節	湖北省土家族との伝統文化	129
2.1	中央政府の文化保護政策	129
2.2	湖北省の民族文化保護政策	132
第3節	湖北省恩施における土家族民族教育	133
3.1	恩施州の学校教育における民族教育	133
3.2	地域土家族文化伝承組織	139
第4節	小括	146
第7章	考察	148
第8章	結論	157
	参考文献	158
	謝辞	173

第1章 序論

第1節 研究の目的

本研究は、中国湖北省の少数民族土家（トゥチャあるいはトゥチア）族の民族観光に関する事例研究である。筆者が本論で土家族の民族観光を研究テーマに選択した理由は、筆者自身が中国の55の少数民族の1つである土家族の出身であることと、湖北省恩施自治州各地の観光地で行われている「女兒会」というイベントが「土家族の伝統文化」として紹介されていることに興味を持ったからである。「女兒会」が「土家族の伝統文化」であるということは、筆者が修士論文を書くため2014年に現地で調査をしていたときに初めて遭遇した事実であったことから、自らの伝統文化について無知であったことを思い知らされた。そこから、そもそも「女兒会」という「土家族の伝統文化」といわれるものが、どういう由来で、いかにして「土家族の伝統文化」として広まったのかということに強く関心を抱くようになったのである。

研究テーマ選択のもう1つの理由は、土家族としての民族アイデンティティーの問題である。高山（2007）によれば、湖南省の湘西と湖北省の恩施（旧称は鄂西）などに多く居住する土家族は、言語も含めてその詳細は不明であったが、建国後の1950年から始まった「民族識別工作」により、1958年によろやく「土家族」と認定されたが、それ以前は「漢化」が進んでいたため、漢族の一部とみなされていたという。そして、漢族や苗族などと登録していた人々が、1980年代に民族籍を土家族に次々と変更した結果、1953年の人口が空欄、すなわち、ゼロから始まり、1963年に52万人、1982年には238万人になり、1990年に570万人、そして2000年には800万人を超え、少数民族で6番目に人口の多い民族となったという〔高山2007:91〕。すなわち、1949年の建国時には存在しなかった土家族という民族が、50年で800万に膨れ上がったのである。遠い過去から存在してきたと思われた筆者自身の土家族が、わずか50年前に突如として誕生したとなると、いったい土家族としてのアイデンティティーとは何なのか自問自答せざるを得ない。しかも、土家族は湖北省や湖南省、貴州省、重慶市に散在しており、互いに共通する確固とした「土家族の伝統文化」なるものが存在し、共有されているようには思えない。ではいったいどうして、土家族の人々が「土家族」として存在しているのか。土家族という民族はいったいどのようにして誕生し、そのアイデンティティーはどのようにして定着していったのか。なぜ多くの人々が漢族から少数民族に民族籍を変更して土家族になったのか。民族籍の変更の時代を生き残った人々と、土家族の民族籍で生まれ落ちてきた筆者の世代との間にはアイデンティティーの持ち方にどのような違いがあるのか。また、「改革開放」以降の国家の観光政策、なかでも顕著な民族観光政策は土家族の人々にどのような影響を与えたのか。特に、かつてはほとんど知られていなかった前述の「女兒会」という、ある僻村の婚姻習俗の一種が、少数民族観光化の推進により、テーマパーク等のイベントで「土家族の伝統文化」として紹介され、広く知れわたっていくという現象は、土家族の伝統文化の新たな創造にでしかないことを考えると、民族観光が民族文化や民族アイデンティティーに及ぼす影響の大きさを再認識させられる。この問題は、何も土家族に限ったものではなく、湖北省や湖南省、貴州

省に多く存在する苗（ミャオ）族や瑤（ヤオ）族などの少数民族にも共通する問題である [瀬川 2003a、2003b、2013]。

既に述べたように、中国の民族観光は 55 の少数民族の文化が観光の対象になっているが、1978 年の「改革開放」政策により、中国政府は経済効果を期待して観光化を推進した。近年、中国の観光化の顕著な発展により、観光は既に国家の重要な産業となり、その発展の内容や方向も多様化してきている。この重要な観光化の 1 つが「少数民族観光」である。

中国の少数民族観光は、「改革開放」政策の開始後の 80 年代後半に、雲南省や貴州省など辺境部のいくつかの指定地域で推進されたが、90 年代以降になると国家政府が全国的に民族観光に力を入れるようになった。そして、中国国家旅遊局（観光局）は、1995 年に、「民族風情遊」つまり、少数民族を中心とした民族観光を展開する観光政策を打ち出した。こうしたなかで、民族観光は雲南省や貴州省などの先進地域と、湖北省や湖南省などそれ以外の後発地域に分かれ、また、民族観光村や民族テーマパークといった観光形態を中心にして発展してきた。

一方、少数民族文化は、建国後の「文化大革命」時代は「旧習俗」、「旧文化」などや近代化を阻害するとして批判や否定の対象であったが、「改革開放」により国家による再評価や再興が行われ、また、民族観光の重要な観光資源として、地域政府や観光産業によって 80 年代以降ますます重視されるようになった。さらに、少数民族の人々の地位や文化も、民族観光の発展により再評価、再認識されつつある。

このように、民族観光は、少数民族地域の人々にとって経済的メリットがあるばかりでなく、民族文化の保護や伝承の面においても一定の効果や肯定的な影響をもたらしている。しかしながら、観光開発により少数民族地域の一連の生活様式や生活環境などが急速に変容する一方で、少数民族の人々の自文化に対する理解や認識も大きく変容しつつあると思われる。

また、中国の急激な経済発展を背景に、90 年代初期から今日までかれこれ 30 年にわたって続いてきた少数民族の観光開発は、この間、少数民族文化というものの捉え方や少数民族の人々のアイデンティティーにどのような影響を及ぼしてきたのかということについても解明する必要がある。すなわち、これまでの民族観光開発において、少数民族文化はいかに資源化され、あるいはまた、新たな民族文化がどのように創出されてきたのか、さらに、このような観光開発により資源化され創出された少数民族文化の多くが少数民族地域においてどのように継承されつつあるのか、ということも、今日の少数民族のアイデンティティーの問題を考える上で重要だと思われる。

そこで、本論では、湖北省恩施土家族苗族自治州の土家族の民族観光の事例を取り上げ、観光開発において恩施地域の「土家族の伝統文化」とされるものがどのようにして発掘・選択され、観光資源化されていったのか、また、どのようにして「土家族の伝統文化」として定着し、継承されつつあるのか、その事実関係を明らかにし、民族観光が土家族の人々に投げかける今日的意味について考察する。

第 2 節 先行研究

2.1 中国の少数民族観光に関する研究

中国では、1978年の「改革開放」政策以降、観光が有望な産業として注目されるようになった。近年では都市の生活水準の向上に伴い、観光ブームが起こっている。こうしたなかで国家が今最も注目しているのが辺境の少数民族地域の観光資源の開発である。1990年代から、国家は全国の少数民族地域で観光開発を促進し、辺境地域だけではなく、内陸部の少数民族地域の観光開発にも力を入れてきたことから、地域経済や社会の発展に大きな変化が見られた。これに伴って、中国民族観光に関する研究も、90年代以降、主に中国辺境地域の雲南省、貴州省、海南省などの少数民族地域を対象に見られるようになった。なかでも、その代表的なものが貴州省の事例研究である（周 2001a、陳 2004、緒川 2010、陶冶 2010 など）。例えば、曾士才（2001）は貴州省の黔东南自治州のミャオ（苗）族の村の観光開発の現状について、民族テーマパークや民族エリートへの関与の問題を中心に考察している。陶（2010）は貴州省雷山県のミャオ族の観光イベントの「苗年文化節」について、国家行政が主導する観光開発が村落の「苗年」の行事に及ぼす影響について考察している。

雲南省の民族観光に関しても多くの研究が行われた（長谷川 1995、長谷 2007、長谷 2008、雨森 2008、長谷川 2008、藤木 2015 など）。例えば、雨森（2008）の雲南省ペー（白）族の観光開発に関する研究や、少数民族の伝統文化や風俗習慣を資源とするエスニック観光（民族風情遊）の拠点都市としてユニークな展開をたどってきた雲南省の省都昆明の民族観光に関する長谷川（2008）の研究がある。同じく長谷川（2005）は、雲南省タイ（傣）族の民族観光による「孔雀舞」という民族文化の創出についても事例研究を行っている。1980年代後半、民族舞踏や民族歌舞はエスニック観光と結びつきはじめ、1988年9月から10月にかけて開催された民族芸術祭は、雲南省のエスニック観光に拍車をかける一大イベントであった。この芸術祭の期間中、省政府は「文芸搭台、経済唱戲（文芸が舞台を作り、経済が劇を演じる）」という全体的な指導方針を打ち出したという〔長谷川 2005:421-422〕。また、長谷（2008）も雲南省タイ族を研究対象にして、雲南省徳宏州タイ族の水かけ祭りの事例研究を行い、民族観光における民族表象のポリティクスに関する論考を発表している。

さらに、海南省も中国の民族観光の先進地の1つと考えられるが、他の2地域と比べて関係する研究が少ない。瀬川（2003a）は海南省の民族観光について、「もともと観光地として知名度が高く、観光客誘致の基盤が備わっていたことが、同地域においていち早くエスニック観光が発展した最も重要な要因であった」〔瀬川 2003a:139〕と指摘し、また海南省のリー族の民族観光においては、保存状況の良い集落を「黎寨」として観光客に開放していること、「伝統文化」として観光資源とし得るだけのものを保持していることが、こうした選択を可能にした重要な要因であると分析する〔瀬川 2003a:143-144〕。

また、民族観光類型に関して、曾（1998）は、民族村と民族テーマパークの2つの形態を指摘し、前者は辺境の民族村を舞台にした民族観光であり、元からある村を開放するケースと人工的に民族村を作るケースがあること、後者の形態は都市近郊に建設された民族のテーマパークやエスニック・レストランで、民族舞踊などに従事する者が辺境から来た少数民族である点が大きな特徴であるという〔曾 1998:45-46〕。そして、民族観光村については多くの研究がある（曾 2001、山村 2007、孫 2009、孫 2012、雨森 2012）。例えば、孫（2009）は雲南省大理白族自治州の白（ペー）族の村の民族観光における女性の役割分担について考察し、観光業の発展により、白族女性の経済的地位や生産労働、再生産労働の面において、様々な変化が見えてきたと指摘する〔孫 2009:48-49〕。また、孫（2012）は雲南省紅河ハニ族イ族自治州元陽県の民族観光村も事例としてとりあげ、地方政府による観光開発の実態と地元

民の対応について明らかにした [孫 2012:59]。

民族テーマパークについての研究は曾 (2001、2002)、高山 (2006)、李 (2013) などがある。例えば、曾 (2001) は辺境民族テーマパークについて、「各民族の伝統家屋や典型的な建築群を再現し、少数民族の若者たちが民族衣装に身をまとい、ショータイムに歌や踊りを披露して観光客をもてなし、売店で工芸細工を販売する」[曾 2001:93] と述べ、また曾 (2002) によれば、民族テーマパークやエスニック・レストランなどが少数民族の若者の働き口にもなっていると指摘している [曾 2002:32-33]。

以上、中国の民族観光は 1990 年代の開始から多く研究者に注目されてきた。雲南省のシーサンパンナのタイ族や大理のペー族や麗江のナシ族観光のように、1980 年代末には民族観光地としてすでに著名になっていたケースもあるし、ここ数年のあいだに新たに立ち上がってきたばかりのケースもある [兼重 2008a: 134]。一方、近年の観光ブームにより、内陸部の民族観光に関する研究も重要であるが、内陸部の民族観光の開始が辺境地域より遅く、多くの地域では 1990 年代中後期から始まり、先進地域との間に観光開発状況に差がある。内陸部の少数民族地域 (重慶市、湖南省、湖北省など) を事例とした観光研究も日本ではまだ少ない。高山 (2005、2007) の湖南省の少数民族に関する民族観光研究はその数少ない研究の代表的なものである。

そこで、次に、本論文が事例として取り上げる民族観光の後発組の 1 つ、湖北省恩施土家族地域の民族観光に関する日本と中国の研究について見ていこう。

2.2 土家族地域の民族観光に関する研究

湖北省を含む中国内陸部の多く地域では、民族観光は 1990 年代中後期から始まり、内陸部の地域に分布している少数民族に関する研究についても、雲南省や貴州省などの先進地域と比べて大きな開きがある。とくに内陸部の少数民族は「漢化」の度合いが大きく、少数民族の特徴があまり見えないことなどから、民族観光を展開する場合にも、辺境地域の少数民族の観光政策との間に様々な相違があることが考えられる。この地域の民族観光に関する研究は 2000 年代から目立つようになってきた。

しかしながら、日本における土家族地域の民族観光研究は極めて僅かである。例えば、高山 (2005、2007) が湖南省の土家族地域の研究を行い湖南省土家族の民族観光における民族文化の真正性の問題について考察している。高山 (2007) が取り上げる湖南省張家界市の土家族観光は 1990 年代に始まり、張家界市永定区に建設された「土家風情園」という土家族テーマパークと「秀華山館」という民族博物館を事例として考察しているほか、張家界・武陵源の国立公園や世界遺産の事例では、保護を進める地方条例制定により「住民」としての土家族がエコツーリズム産業から排除され、ただ武陵源の「先住民」としてのみ、エスニック・ツーリズムに参加していると分析している [高山 2005:58]。

また、中国において観光開発は政府主導で進められる場合が多く、国家政策を受けてまず省レベルで基本戦略を打ち出し、その後それが、市・区・自治州から県・自治県、郷・鎮、村の順で降りてくるため、土家族が分布している 4 つの省・直轄市の間には、観光展開に差がみられる。そこで、以下では、土家族の主要な分布地域である 4 つ地域にわけて、それぞれの土家族地域の観光研究について見ていくが、すべて中国の研究者によるもので、日本の研究は皆無である。

まず、重慶市の土家族地域に関する民族観光について、于 (2010) は、重慶地域内の土家族の民族文化が掘り起こされて整理され、地域の特色のある文化観光産業として発展し、当地域の経済発展にもつ

ながっている一方、観光施設の制限や人材不足などの問題も明らかにしながらその対策を考察した。また、文・譚（2007）は、重慶市酉陽県の土家族の民族観光の発展の現状と、規模の小ささや施設の不備などの問題点を指摘し、観光資源の統合や観光投資の拡大、人材育成などの対策を提案した。

次に、湖南省土家族地域での民族観光について、伍（2016）は、湖南省湘西地域の土家族古村落の観光開発の問題を取り上げ、観光開発と保護の問題や村民との問題、インフラの問題など様々な問題があることを踏まえた上で、打開策を提案した。そして、廖・他（2017）は、「張家界老院子」が土家族建築文化であり湖南省の重要な文化遺産であることを指摘し、その開発の際に生じた問題および解決策を分析した。

そして、貴州省土家族地域における民族観光について、張連橋・張桀（2012）は、貴州省沿河土家族自治県を例として、土家族の文化が学校でどのように教育されているかを調査し、いくつかの問題点を明らかにした。趙・他（2018）は、貴州省葫蘆湾地域の開発の前提条件は土家族民居の保護と伝承であることを指摘し、また、葫蘆湾を開発する際に、「農旅融和（農業と観光業の融合）」と民居の博物館の建設から展開したことにより観光理念が形成され、地域の建築も保護できるようになったと言う。

さらに、湖北省土家族地域の民族観光において、高・他（2014）は、「鄂西生態文化旅遊圈（恩施地域の自然生態と文化の観光圏）」の政策の下で土家族の「儺戲」の現状、発展過程を明らかにし、将来の土家族の「儺戲」に対する観光開発の方針、ブランド化についても検討した。また、盧（2011）は、「女兒会」は刊行観光演芸としてよく保護されていて、「女兒会」を商品化する際は文化の真正性などの問題に注意を払うべきであると指摘した。

以上の先行研究を概観して、中国では、土家族地域の民族観光について多くの関心が注がれているのに対し、日本においてはごく限られた研究しかないこと、また、中国の研究者による土家族地域の民族観光の研究は、そのほとんどが、観光開発を促進するための政策や方策に関するもので、文化論的な視点からの研究はほとんど見られないのが特徴である。その意味でも、本研究は、内陸部の少数民族土家族の民族観光に関する研究の空白を埋めることができるであろう。次に、民族観光の中核となる土家族文化に関する先行研究について見ていく。

2.3 土家族文化に関する研究

日本において、土家族文化に関する研究は、80年代の後藤（1988）の土家族の「儺」（ナ）の戯劇に関する研究が最初で、その後、90年代には、何（1994）の土家族言語の研究や、東（1993、1994、1995）の土家族の文学や舞踊「擺手舞」、創世洪水神話に関する研究があるほか、土田ほか（1998）による土家族民家の研究などがある。

2000年代に入ると、人類学者の研究が登場し、山路（2003）は土家族の葬送儀礼について、また瀬川（2005）は土家族の分布やその言語・文化について研究し、三村ほか（2006）は重慶市酉陽県の土家族地域の死霊祭祀に関する研究を發表している。なかでも、瀬川（2005）は、土家族の起源に関して民族識別工作の調査員として1950年代に湘西・鄂西地区を訪れた社会学者/民族学者の潘光旦の「巴人説」を取り上げ、巴人と「土家」の間の「虎崇拜」という文化要素の共通性が両者のつながりを証明する有力な論拠とされていることを指摘する。そしてこの「巴人説」は1980年代以降の土家族の文化や伝統について書かれた書物の多くに繰り返し引用され、「偉大な古代民族の後裔」としての土家族のイ

メージが、その後の民族籍回復運動の過程で急速に拡大再生産されたことを指摘する〔瀬川 2005:352-353〕。また、1950年代の研究では土家族の具体的な民俗に対する言及がほとんどなかったのが、1980年代以降になると、概説書や研究書で土家族の「特徴」とされる文化要素（その主要なものは、刺繍をほどこした民族衣装、哭嫁などの歌謡、摆手舞に代表される舞踊、土王信仰、巫者・梯瑪など）が繰り返し言及され、定番とも言えるパターンが出来上がり、土家族の特色として掲げる内容はいずれも似たり寄ったりでバリエーションに乏しいと指摘する〔瀬川 2005:353-354〕。

また2010以降になると、重慶市酉陽県地域の「陽戲（傩戲）」に対する研究（福満ほか2012）、重慶東南地域の土家族文化に関する研究（鄧 2012）、土家族の伝統踊りと歌の研究（熊谷ほか2012）、清江上流地域土家族の「還壇神」祭祀に関する研究（雷 2013）などが次々と発表されている。

一方、中国においては土家族文化に関する研究が建国以降からすでに始まっている。それは、民族識別のための土家族に関する民族学的、民族誌的研究である（嚴学寤 1952、汪明禹 1954、王静茹 1954、中央土家問題调研组 1956 など）。なかでも、上述の潘光旦（1956）は、『湘西北的「土家」与古代巴人』において、土家族の歴史的起源や宗教信仰、言語などについて論じている。

その後は、「文革」などの文化運動により土家族文化研究は暫く停止されたが、1970年代末の「改革開放」以降から再開され、多くの研究が発表された。たとえば、田徳生（1982）は土家族の言語について研究し、庾修明（1989）は貴州土家族の「傩戲」に関する研究がある。また、その時期の代表的な研究として挙げられるのは、吳永章『土家族簡史』（1983）、土家族簡史編写組の『土家族簡史』（1986）、劉孝瑜の『土家族』（1989）、彭官章の『土家族文化』（1991）、田荆貴の『中国土家族習俗』（1991）、陳国安の『土家族研究』（1997）、段超『土家文化史』（2000）などである。これら著書は土家族の歴史や宗教、言語、家庭などの文化について紹介したものである。

また、1990年代以降になると、土家族研究が盛んになり、例えば、黄運海（1992）の婚姻習俗の「哭嫁」、朱世学（1994）の建築の「吊脚楼」、楊昌鑫（1997）の踊りの「挖土鑼鼓」など多くの研究がみられた。また、中国の民族大学や土家族地域の政府と大学でも、土家族文化に関する研究が始まった。例えば、1997年に湖北民族学院が土家族研究学術雑誌の『土家学刊』を創刊し、1998年には吉首大学が土家族の歴史などに関する研究叢書『五溪文化叢書』と『湘鄂渝黔辺区研究』を出版した。

2000年代以降になると、国内の土家族文化に関する研究が著しく増加している。その中には、たとえば、蔡（2000）と田（2004）の土家族の民歌に関する研究や陳（2004）の土家族舞踊の研究、胡（2007）による土家族舞踊「花鼓子」についての研究、熊（2007）の「傩戲」の研究、黄（2006）の土家族の「非物質文化遺産（無形文化財）」の現状と保護対策に関する研究、冉（2008）の湖南省土家族織物「西蘭卡普」の変遷とその要因に関する分析、熊（2009）の土家族踊り「毛古斯」について研究、陳ほか（2010）の土家語について研究、熊（2011）の土家族楽器「咚咚奎」についての研究、敖（2012）の貴州省土家族の葬式「鬧喪」の習俗に関する研究、熊（2012）の土家族踊り「跳喪舞」の習俗に関する研究、邱（2014）の貴州省土家族劇の「花灯戲」の戯詞について研究などがある。

兼重（1998）によれば、現在、いくつかの「少数民族」に対して特定の文化要素が特に強く結び付けられて連想されていて、エスニック・シンボルとして定着しているという〔兼重 1998:134〕。土家族の場合は、上述の土家族文化の研究によると、「摆手舞」、「吊脚楼」、「傩戲」、「哭嫁」、「西蘭卡普」などが挙げられる。

このように土家族文化に関する研究は多くなってきているにもかかわらず、その多くは土家族文化を整理し紹介したものが多く。また、土家族が分布している4つ地域のうち、日本の土家族文化の研究では、重慶市と湖南省の土家族地域の研究が散見されるが、湖北省恩施地域の土家族に関するものは皆無である。また、これまで研究の対象とされてきた上述の土家族文化の文化要素の中で、本研究の主題として取り上げるの恩施地域の「女兒会」に関する研究は1つも見られない。そこで次に、湖北省恩施地域の土家族文化に関する先行研究を見ていこう。

2.4 恩施土家族の民族観光に関する研究

中国の民族観光では、少数民族の祝日と祭事、歌と舞踊、飲食、建築、服飾と婚恋習俗などが主な観光資源として開発され利用されている [徐 2016:137]。土家族観光においても同様に、これらが観光資源として開発・利用されている。高山 (2007) は湖南省張家界市「土家風情園」で展示されている「土家族文化」で土家族独自のものは「マオグスと哭嫁のみである」 [高山 2007:194] と指摘する一方、土家族の伝統建築「吊脚楼」の観光開発についても、土家族特有の建築様式であると言われるが、湘西や黔东南、重慶にも見られ、むしろ中国西南部の少数民族の特徴的家屋であるとも言える。それにも関わらず、吊脚楼を土家族特有のものと強調する理由は、「漢化」した土家族のエスニック・イメージのバリエーションの少なさに起因すると述べる [高山 2007:194]。

また、中国の研究者による先行研究では、恩施土家族の主な民族観光文化として、服飾の「西蘭卡普」(趙・趙・徐 2018 など)、踊りの「擺手舞」(唐・張 2015 など)、建築の「吊脚楼」(孟 2011 など)、婚恋習俗の「哭嫁」(姚 2010 など) などが取り上げられている。

また、近年、恩施地域の土家族文化においてよく取り上げられている文化観光資源は婚恋習俗、とくに恩施土家族の恋愛イベント「女兒会」である。例えば、王 (2010) は「女兒会」の開催場所の変化に関して研究し、覃ほか (2010) は民族イベントの観光資源としての「女兒会」について考察し、李 (2011) は「女兒会」における民族歌などの創作の現象について論じている。また、盧 (2011) や王 (2012)、畢 (2018) はいずれも「女兒会」を観光資源として開発するさいの方法や問題について論じ、さらに楊 (2018) は無形文化財としての「女兒会」に関する論考を発表している。

少数民族の婚恋習俗は観光資源としてしばしば開発・利用され、イベント観光も民族観光においてよく使われている手法であるが、特に「女兒会」は、恩施地域の土家族特有の婚恋習俗であり、恩施地域のイベントでもあるため、恩施また湖北省地域の土家族がほかの地域の土家族の民族観光と区別するために、恩施土家族の民族観光の特徴としてアピールしている。こうして、「女兒会」は恩施地域の民族観光の代表的な文化要素になっているのである。

以上、恩施土家族の民族観光文化に関する研究はの大半は中国の研究者によるもので、「女兒会」に関する研究も多いが、その多くは観光資源としての観光開発に関するものやその実態に関する記述的な研究であり、文化人類学や社会学的視点からの分析的研究はほとんど見られない。

2.5 民族文化の創出に関する研究

日本では民族文化の創出に関して、多くの研究がある (兼重 1998、曾 2001、瀬川 2003a など)。たとえば、兼重 (1998) はトン (侗) 族の事例を取り上げ、トン族のエスニック・シンボルの「鼓楼」と「風

雨橋」の創成の過程を、新聞、雑誌や単行本による報道・紹介を跡づけることにより明らかにした〔兼重 1998:134〕。その歴史的背景として、新中国の成立時に中央政府は非漢民族に関する十分な情報をもっていなかったため、1950年から中央訪問団を派遣して言語や風俗習慣の調査を行ったり、国慶節に少数民族代表を北京に呼んだ際に情報を収集し、中央にある程度情報が収集されると、1956年ごろから各民族の紹介が新聞や雑誌や単行本などの出版マスメディアを通じて全国的に行われるようになり中国社会に少数民族像が結ばれていったのだという〔兼重 1998:136（田畑 1989:189）〕。

瀬川（2003a）は、貴州省融水県ミャオ（苗）族の観光事例において、観光によって「民族意識」の高揚が生じる一方、自分たちだけで行う祭りから見せる祭りへの移行によって民族文化が再編されると述べ、この理由として、「このようなエスニック観光と結びついた民族文化の再編や、それと連動した民族意識の強化の動きは、ミャオ族の人々の民族意識の自然な発露、文革期までの時代に否定・抑圧された民族伝統文化の復権の過程のように見え、また、改革開放政策以降の出稼ぎが招いた過疎化や、進行しつつある『漢化』といったものがまず基礎事実としてあり、それに対する危機意識こそが、民族文化の再編や民族意識の強化への模索を生み出している」〔瀬川 2003a:153-154〕と指摘する。

横山（2001）は少数民族の文化の喪失の危機について研究し、雲南省のチノー（基諾）族の事例を取り上げた。「モニュメントや家屋などの目を引く構築物、衣装や器物、道具などの陳列、歌や踊りのショー、さらに飲み物の提供といった似通った構成で組み立てられていることが多い。そして、各構成部分の具体的内容として特に選ばれたそれぞれが、場合によっては誇張や加工をともなって、当該民族に特徴的な文化として提示される」〔横山 2001:33〕と述べる。

この中国の民族文化の創出に関する文化論的研究は、日本の人類学者の間では高い関心を呼んだが、中国では必ずしもそうではない。その背景には人類学における「創られた伝統」論や構築主義論、観光人類学の研究成果などに関する一般的理解があるものと思われる。一方、民族文化の創出の議論は発掘・発見から資源利用へとつながっていくが、創出された民族文化の「伝承」や「継承」に関する問題は、本研究の重要なテーマの1つであるので、次に、この「伝承」に関わる先行研究について見ていこう。

2.6 民族文化の伝承と民族エリートに関する研究

民族文化の伝承に関する問題は少数民族地域の人々、とりわけ知識人や民族エリートにとって、建国以降から現在まで、大変重要な問題である。その理由について、曾（2001）は貴州省の民族地域の事例では、「建国後の画一的な漢語教育、現代文化の浸透などにより自民族の言語や文化への関心が薄れ、文革中には『破除四旧』の名のもと民族の思想、文化、風俗、習慣が封建的であるとして否定する政策がとられた。さらに1980年代に入るとテレビの普及や若者たちの出稼ぎブームにより、代々伝承されてきた伝説、歌、芸能の断片化、担い手不足による伝統行事の簡略化、伝統工芸や民間医療の後継者難、民族建築物の減少、伝統的な礼義や習俗の衰退が深刻化してきた」〔曾 2001:95〕と分析する。

また、日本における中国の少数民族文化の伝承に関する研究としては、たとえば、百田（1981）の西南少数民族の創造神「管見」について研究、酒井（1990）は西南中国山地少数民族の歌謡について研究、村井（1998）はナシ（納西）族の神話伝に現れる鶏について研究、澤田（2001）のヤオ（瑶）族の衣装と伝承について研究、高（2005）の麗江ナシ族の東巴文字復興運動についての研究、山村（2007）のナ

シ族の民族音楽の伝承と観光活用について研究、袁（2013）の貴州省トン（侗）族の「大歌」の伝承と発展における「歌師」について考察、金（2015）のトン族の無形文化財の歌壇の伝承と教育に関する研究、竹田（2018）の中国北方の無文字少数民族の文化伝承についての研究など数多く存在する。

すでに瀬川（2012）が指摘しているように、観光対象となる各地の特徴的な景観、文物、行事などは、外部からの観光客が増加し、メディアで紹介されているのを見ることで、その地域に暮らす人々全体に対し地域的なアイデンティティーの拠り所として機能し始める場合もある〔瀬川 2012:220〕。長谷川（2012）は、学校教育について、近代以降、学校は、多民族国家の中国では、近代化や国民形成ばかりでなく、「民族」としての自己編成や自文化の構築にも深く関わっていると述べる〔長谷川 2012:166〕。

一方、民族観光と民族エリートとの関係について考察した曾（2001）は、特に民族文化の初期収集整理、後の開発、伝承、保護、宣伝など方面においては民族エリートが重要な役割を果たしている。そこで、民族観光においても民族文化に対して考察する際、民族エリートと民族観光に関する考察が重要であるとして、「官僚として『国家』の基層に立ちながら、自民族や郷土への熱き思いを施策に生かしている民族エリートが果たすプランナーとしての役割にもっと注目する必要がある」〔曾 2001:89〕と指摘する。兼重（1998）も貴州省のエスニック・シンボルの創成において民族エリートの吳正光と王勝先の貢献が大きいと述べる〔兼重 1998:143〕。

谷口（2005）によれば、民族エリートは民族観光において文化の優越を追求し、他の「少数民族」との間で一層優越した立場へと抜きん出る「闘争」なのであり、こうした民族表象をめぐる「闘争」のなかから、自文化についての文化的正当性が生まれ、それは民族幹部という社会階層の再生産にも重要な役割を果たしているのである〔谷口 2005:153〕。

次に、目を中国での研究に転じると、近年、中国において少数民族の文化伝承に関する多くの研究がなされ、土家族文化の伝承と関係する研究も数多く見られる（李 1994、劉・袁 2007、劉 2008、田 2009、黄 2012、張 2012、範・王 2012、余 2013、劉・王 2015 など）。なかでも、例えば、田（2009）は土家族の織物「織錦」の伝承や保護の対策として、「織錦」に関する文化的な整理と、学校教育による传承人の養成、民族観光資源としての観光開発を指摘する〔田 2009:52-53〕。範・王（2012）は重慶市石柱県の土家族文化の保護対策について論じた〔範・王 2012:54-58〕。余（2013）は貴州省土家族の民歌に関する伝承と伝播について研究し、劉・王（2015）は湖南省土家族の「地花鼓」文化の伝承における問題と対策について論じている〔劉・王 2015:66-69〕。

このように、民族文化の伝承に関する研究、民族エリートと文化伝承に関する研究は日本でも一部見られるが、恩施土家族の文化の伝承に関する研究は先行研究が皆無であるのに対し、中国では土家族や恩施土家族の文化の伝承に関する研究が数多く見られるが、人類学の視点からの記述や分析が少なく、また、民族観光との関連性も言及されていない。

2.7 本研究の位置づけ

以上の先行研究を踏まえて、ここで本研究の位置づけについて述べたい。本研究は、中国の少数民族の民族観光に関する人類学的研究であるが、日本の人類学者によるものは、ほとんどが雲南省や貴州省など中国南部に位置する少数民族が対象で、湖北省など内陸部の少数民族に関する研究は極めて少ない。しかも、土家族に関する研究は、歴史や文芸、芸能、神話、言語、宗教信仰等に関する研究は比較的多

く散見されるが、民族観光に関するものは、高山や瀬川の論考があるのみで、湖北省恩施州の土家族に関するものや、「女兒会」に関するものは皆無と言わざるを得ない。よって、本研究は、湖北省恩施土家族の民族観光を本題とする事例研究である。とりわけ、本研究は、「女兒会」とよばれる伝統文化の創出と、それを主要な観光資源として展開した民族観光に関する民族誌的研究と位置づけることが出来るであろう。また、日本における中国の民族観光研究の特徴は人類学的視点に立った文化論的なものが多く、主に雲南省や貴州省などの西南中国の辺境地域の事例を対象にしたものが多いのに対し、中国においては、民族観光の後発組であった内陸部の事例を扱った研究が数多くみられるものの、観光開発を促進するための政策や方策に関するものが多く、また、恩施土家族については、文化伝承に関する研究は多いが、民族観光と関連づけたものはないため、本論はそうした日中両国の先行研究の「欠落部分」を補うものであると言える。さらに言えば、恩施地域の土家族と「女兒会」を対象にした研究は日本にはないことと、中国には土家族の民族観光を対象とした文化論的研究がないことから、本研究は、中国湖北省恩施地域の土家族の民族観光に関する、恐らく唯一の人類学的研究と位置づけることも可能であろう。

第3節 研究方法

本論の研究方法は、主に、現地調査と文献調査、ウェブサイトの調査による。現地調査は、現地の住民や観光関係者への聞き取り調査と、民族テーマパークや民族観光村など観光地での参与観察を行った。聞き取り調査は、現地のインフォーマントに対して予め質問項目をきめておき、それを録音機やメモなどで質問を続けていく「半構造化インタビュー」と、その場での対話により構造化されていない質問を通して情報を引き出す「非構造化インタビュー」を併用した。また、文献調査資料は、主に日本と中国の研究者による少数民族観光および土家族に関する論文や著書などである。さらに、ウェブサイトの調査は、インターネットによってアクセス可能な現地の政府また観光地などのウェブサイトから関連する多くの資料を入手した。

現地調査について、主に土家族が多く居住する湖北省の恩施自治州地域8縣市と各観光地の他に、重慶市の市内、石柱県、酉陽県と黔江区、湖南省の張家界市と湘西自治州の永順県、龍山県、鳳凰県、さらに貴州省の銅仁市、印江県、雷山県などで、おもに民族観光村と民族テーマパークを中心に、参与観察調査を行った。特に湖北省恩施自治州は、筆者の出身地でもあることから、調査に多くの時間を割き、家族や友人関係を通して多くのインフォーマントから資料を得ることができた。また、民族観光の先進地である雲南省の民族テーマパーク「雲南民族村」と深圳市の民族テーマパーク「中華民俗村」、それに貴州省の民族観光村「西江千戸苗寨」などでも現地調査を行った。

調査期間は、2016年3月から2018年7月までの間で、2016年と17年にそれぞれ4回ずつ、18年に3回、合わせて11回の現地調査を行った。

まず、2016年の1回目の調査は、3月1日から15日までの2週間、湖北省恩施自治州咸豊県唐崖鎮唐崖寺村と世界文化遺産登録地の「唐崖土司城遺跡」で実施し、地域の住民に対して、土家族の歴史遺産の保護や遺産観光への対応等に関して聞き取り調査を行った。

2回目の調査は、8月1日から30日までの1ヵ月間、湖北省恩施自治州恩施市において、観光局や民族テーマパーク「土家女兒城」と「恩施土司城」の関係者、湖北民族学院や恩施職業技術学院の教員と学生、さらに紅土郷石灰窯村の住民に対して、「女兒会」や民族観光の現状、地元民の民族観光開発への参与、民族アイデンティティー等について聞き取りと参与観察調査を行った。

3回目の調査は、9月1日から15日までの2週間、湖南省の張家界市の民族テーマパーク「土家風情園」や世界自然遺産観光地「武陵源」、湘西自治州鳳凰県の歴史名城「鳳凰古城」、永順県の世界文化遺産地「永順土司城遺跡」、民族観光村「双鳳村」、龍山県苗児灘鎮撈車河村（調査当時は「惹巴拉景区」で、現在も建設中）で聞き取り調査と参与観察を行った。調査は、各地に1日か2日間滞在して住民や観光地従業員から、主に湖南省の土家族の観光文化に関する情報を入手した。

4回目の調査は、2016年12月25日から2017年1月3日まで、重慶市「巴渝民俗博物館」と「巴人博物館」、上海市「上海博物館」を訪問して、土家族の文化が大都市の博物館でどのように展示されているのかということについて観察調査と資料収集を行った。

2017年の1回目の調査は、2月15日から30日まで、湖北省恩施自治州恩施市紅土郷石灰窯村、宣恩県の沙道溝鎮両河口村「彭家寨景区」と椒園鎮慶陽壩村「慶陽涼亭街」、来鳳凰県百福司鎮で、主に、「女兒会」と土家族の「民族観光村」の現状について聞き取りおよび参与観察調査を行った。

2回目の調査は、8月1日から30日までの1ヵ月間、湖北省恩施自治州恩施市の「土家女兒城」と「風雨橋」、恩施市龍鳳鎮「龍馬風情小鎮」、恩施市「恩施大峽谷自然風景区」と「梭布婭石林自然風景区」、建始県「石門河景区」において、「女兒会」イベントの参与観察と聞き取り調査および種々の資料収集を行った。

3回目の調査は、9月20日から27日までの1週間、重慶市酉陽県の「酉陽桃花源景区」と「龔灘古鎮」、龍潭古鎮、石柱県の「畢茲卡綠宮」、黔江区的「重慶市民族博物館」と民族観光村「土家十三寨」で、重慶市の土家族観光について関係者への聞き取り調査と資料収集を行った。

4回目の調査は、12月27日から30日までの1週間、貴州省遵義市の「海龍屯土司城遺跡」において、土家族関係の世界文化遺産を視察し資料収集を行った。

2018年の1回目の調査は、2月15日から20日まで、貴州省沿河県思渠鎮鯉魚池村と黔东南自治州「西江千戸苗寨」において、貴州省の土家族と苗族の民族観光について視察と資料収集を行った。

2回目の調査は、3月1日から15日までの半月間、湖北省恩施自治州恩施市教育局と恩施市施州民族小学校、晒都民族小学校、咸豊県第一民族小学校と民族中学校、宣恩県民族小学校において民族教育の現状について聞き取り調査を行った。

3回目の調査は、5月5日から10日まで、貴州省銅仁市江口県太平鎮雲舎村、印江県の「梵淨山風景区」と思南県で貴州省土家族街を視察し、さらに、雲南省の民族テーマパーク「雲南省民族村」において視察およびガイドに聞き取り調査による資料収集を行った。

以上のように、現地調査は、湖北省を中心に土家族が居住する貴州省や湖南省、重慶市で土家族関連のテーマパークや民族村での聞き取り調査と参与観察のほか、ミャオ族や雲南省の少数民族の民族テーマパークなどでも視察や聞き取りによる資料収集を行った。

また、文献調査に関しては、中国と日本の先行研究のほかに、湖北省その他の各地の土家族民族観光に関するパンフレット類、新聞や地域文芸作品なども資料として利用した。

第4節 本論の構成

本論は1章の序論と8章の結論の他に、6章からなる。本論の主題は5章で展開する恩施州恩施市の代表的な民族観光文化である「女兒会」に関する記述と分析であるが、そこに至る大まかな流れは次のようになる。すなわち、まず、中国国家政府の観光政策と民族観光の歴史的経緯というマクロな視点から中国全体の少数民族観光の現状について概観し、次に視点を国家レベルから省レベルの湖北省に移し、湖北省政府の観光政策と民族観光の現状について概観した後、本題である湖北省恩施州の土家族地域に焦点を当て、よりミクロな視点から恩施土家族の民族テーマパークと民族村、「女兒会」と「地域エリート」の関係を検証する。そこからさらに、「女兒会」と呼ばれる土家族文化の定着と継承の問題を学校教育や地域の取り組みから現状分析し、最後の考察・結論に至る。以下、各章ごとに見ていこう。

第1章「序論」では、まず、研究の背景として、先行研究により、中国建国以降から現在に至る中国民族観光の歴史的経緯と現状、および論点を整理する。そして、観光人類学及び資源人類学の研究成果等も参照しながら、文化資源の観光化による民族文化の創出と変容および民族アイデンティティとの関係に関するについて先行研究を検証し、本研究の位置づけを行なう。さらに、「民族観光」や「観光文化」、「文化の観光資源化」といった本論におけるいくつかの基本概念について整理したあと、研究方法や本論文の構成について述べる。

第2章「中国における民族観光」では、まず、中国少数民族観光の発展の経緯について概観し、次に、民族観光と少数民族地域及び少数民族に対する国家の政策、特に文化政策について詳述した上で、民族観光における民族文化の資源化についてみていく。

第3章「民族観光の表象の諸形態」では、少数民族における民族観光の現状および民族文化の表象の具体的展開について記述し、現在の土家族の観光類型について整理する。

第4章「湖北省の土家族と民族観光」では、まず土家族の民族識別工作の経緯について見た後、土家族地域の重慶市、貴州省、湖南省土家族地域における土家族観光の現状について述べる。さらに次章で詳述する湖北省の土家族について概述した後、湖北省政府の民族観光政策について見ていく。

第5章「恩施土家族における『女兒会』の誕生と観光化」では、本論の主たる研究対象である湖北省恩施の土家族について概説した後、恩施土家族の民族観光について、いくつかの土家族テーマパークで行われている「女兒会」と呼ばれるイベント観光の実態と、この特定地域の伝統的な婚姻習俗の観光資源化に重要な役割を果たした地域エリートに注目し、その民族文化との関係について考察する。

第6章「湖北省恩施土家族における民族文化の継承」では、民族観光政策によって創出された「土家族の伝統文化」の定着と伝承の問題について、まず、中国政府や湖北省政府による民族文化の保護政策について見た後、湖北省土家族地域の民族教育について、恩施地域のいくつかの民族小中学校での土家族文化の伝承の取り組みについて記述し、最後に、恩施地域の様々な伝承組織による保存活動の現状について紹介し、土家族文化の定着と継承について考察する。

第7章「考察」では、湖北省恩施土家族における民族文化の資源化と観光化及び民族文化の創出の問題を先行研究に位置づけてその特徴や民族観光が土家族の人々に投げかける意味について考察する。

第8章の「結論」は、以上の議論を総括し、本論文の意義と課題を示す。

第2章 中国における民族観光

第1節 はじめに

中国の民族観光は「改革開放」政策以降の1980年代に始まったが、90年代中後期以降、全国的に展開され、2010年代以降になると一種のブームになっている。

本章では、まず、1) 中国の観光化の歴史を辿り、2) 中国における民族観光の現状について概観する。次に、3) 民族観光と民族政策および、4) 民族文化と観光文化の関係について述べて、最後に、5) 民族観光における民族文化の資源化をみていくことで、中国における「民族観光」誕生の背景を探る。

世界観光機構 (UNWTO) によると、観光とは、「1年を超えない期間で余暇やビジネス等を目的として、居住地以外の場所を訪れ滞在すること」[山下 2011:6]と定義されている。また、観光人類学者橋本(1999)は、観光を「(観光者にとっての) 異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」と定義した[橋本 1999:12]。人類学者 V・スミスは観光を、「民族観光」、「文化観光」、「歴史観光」、「環境観光」、「リクリエーション観光」の5種類に分け、そのなかで、民族観光を、「土着の人々自身、およびその生活習慣、芸能、建築、服飾、工芸品などの文化的エキゾティシズムを主要なアトラクションとする観光活動の主要な形態の1つ」と定義する[前田 1998:96 (スミス 1977)]。以上の定義を踏まえて、本論では、中国の民族文化や少数民族自身を対象とした観光を「民族観光」と定義する。

第2節 民族観光の歴史的背景

1949年の中国建国以降に始まった観光は、「建国後の20年も続いた東西冷戦と、10年間の文化大革命による鎖国の間、中国の国際観光は政府の外交事業の一部として中央政府の管轄下にあった」[曾ほか 1995:30] のであり、国家の政治宣伝と国際交流の手段として、政府が指定する限られた地域だけで行われた。1949年に成立した「華僑服務社」および1954年成立の「中国国際旅行社」が中国の観光産業の始まりと言われる。当時、それらは主に海外華僑を対象とした帰国訪問や観光などに関するものであった[張 2011:78]。その後、1964年に「中国旅遊事業管理局」¹が創設され、一時的に国際観光の発展をみたが、1966年の「文化大革命」から1978年の「改革開放」まで、中国の国際観光は一旦休止状態に置かれた。一方、中国の国内観光も「改革開放」まで、一連の政治文化運動の展開や経済発展の後退により停滞していた。すなわち、中国の観光化は、建国以降から1978年までの約30年間、ほとんど進展していなかったのである。また、その時期の観光業は国家の対外的な国際政治宣伝の重要な手段の1つでもあった。

¹ 中国国务院の管轄下に置かれ、1998年8月に「中国国家旅遊局」に改名された。そして2018年3月には「中華人民共和國文化和旅游部」となり、中国全国(国内外)を管轄する観光産業の部門である。

中国共産党は1978年の「11回3中全会」で、「対内改革、対外開放」という「改革開放」政策を打ち出した。この「改革開放」以降、中国の経済が急激に発展する一方で、観光業も発展の重要な契機となり、1980年代初頭以降、急速に息を吹き返した。この急速な観光産業の発展の根本的な要因は、政治的・社会的安定を基にした経済的発展であるが、その上で最も重要と考えられるのが国家の観光政策であった[鈴木2008:35]。特に、鄧小平の談話²によると、その1つは、1979年1月6日の「旅遊事業大有文章可作、要突出地搞、加快地搞（観光業がこれから国家の重要な産業となって発展していく）」であり、もう1つは、「発展旅遊事業、增加国家收入（観光業を発展させて、国家収入を増加させる）」というもので、鄧小平は中国の経済発展における観光産業の重要性を強調したのであった。

そこで、1978年の「改革開放」政策以降、中国政府は、「国家の経済発展を推進する資金調達的手段として、国際観光の振興を図り、国際水準のホテルやショッピング・センターの建設、交通網の拡大整備、観光施設のサービスや運営など、包括的な観光開発に努めてきた」[国松・鈴木2006:4]。また、1982年には「中華人民共和国外国人入境管理規定」によって第1回の対外開放都市が発表され、上海や大連など29の沿海都市が「完全開放都市」として指定され、その後も、開放都市が順次追加された。さらに、1984年には、政府が新しい観光資源の開発や国際・国内観光の同時重視、地方政府や個人の観光への投資の重視、企業経営への転換などを含む改革案を打ち出し、旅行社やホテルなど観光サービス産業が行政機関から切り離なされて独立の企業となった[曾ほか1995:30]。

1991年の「關於国民經濟和社会發展十年規劃和第八個五年計劃綱要（国民經濟と社会發展の10年計画と第8回5ヵ年計画綱要）」³によれば、観光産業も国民經濟全体の発展の1つとして重視することになり、中国国家旅遊局（観光局）は1992年以降、全国の観光化を促進するため、毎年度の観光テーマとキャッチフレーズを提示し（表2-1参照）⁴、1995年に、「民俗風情遊」つまり、少数民族を中心とした民族観光を展開する観光政策を打ち出した。「1995年の観光プロモーションは、1995中国民俗風情遊と銘打たれ、『中国は56民族の家』・『中華民族の風情の探法は、忘れがたい奇妙な体験』などのキャッチコピーで行われた、国家旅遊局は民俗風情遊で、少数民族や漢族の地域性をテーマとした観光ルートや少数民族の祭りを観光商品として推奨し、多彩なイベントを開催した。」[松村2000:182]。

また、全国249ヵ所の国定観光地と14のテーマ・ツアーを設定した⁵。さらに、1995年から、国は、週末や祝日などに合わせて3連休やゴールデンウィークなどの連休休暇制度を導入した。

表2-1 中国の年度別観光テーマと観光宣伝文句

年別	年度テーマ	宣伝文句
1992	友好観光遊（友好観光の旅）	遊中国、交友達（中国全国を旅行し、友人を作ろう）
1993	山水風光遊（山水の旅）	錦綉河山遍中華、名山聖水任君遊（中国の多くの山水景勝地でゆっくり観光しよう）

² 『鄧小平年譜（1975-1997）』（上）中央文献出版社、2004、p.465。

³ 全国人民代表大会ホームページ http://www.npc.gov.cn/wxzl/gongbao/2000-12/28/content_5002538.htm より。2016年12月参照。

⁴ 中華人民共和国国家旅遊局ホームページ <http://www.cnta.gov.cn> より。2016年12月参照。例えば、1992年のテーマは「中国友好観光年」、1993年のテーマは「中国山水風光遊」であったが、現在も続いている。

⁵ 中華人民共和国国家旅遊局ホームページ <http://www.cnta.gov.cn> より。2016年12月参照。例えば、「尋根朝敬之旅」、「仏教四大名山朝聖遊」や「冰雪風光遊」などがあった。

1994	文物古跡遊(文化財と古跡の旅)	五千年の風采、伴你中国之旅(中国の五千年の史跡を観光しよう)。遊東方文物的聖殿:中国(中国の多くの文化財を観光しよう)
1995	民俗風情遊(民族観光)	中国:56個民族的家(中国には56民族があり、民族観光をしよう)。衆多的民族、特異的風情(中国には民族が多く、独特の観光も豊富)
1996	休閒度假遊(休暇の旅)	96中国:斬新的度假天地(1996年から中国で新たな休暇観光をしよう)
1997	中国旅遊年(中国観光年)	12億人喜迎97旅遊年(12億人が観光年の1997年を喜び迎えよう)。遊中国:全新的感覺(中国で新しい観光体験をしよう)
1998	華廈城鄉遊(小さい町の観光)	現代城鄉、多彩生活(小さい町で観光しよう)
1999	生態環境遊(エコーツーリズム)	返璞帰真、怡然自得(自然を観光しよう)
2000	神州世紀遊(新たな世紀の中国旅)	文明古国、世紀風采(中国の文化と歴史を観光しよう)
2001	体育健身遊(スポーツ健康の旅)	中国-新世紀、新感受(新たな世紀に新たな中国を観光しよう)。跨入斬新世界、暢遊神州大地(新たな世紀に入り、中国を観光しよう)
2002	民間芸術遊(民間芸術の旅)	民間芸術、華廈瑰宝(民間芸術を観光しよう)。体験民間芸術、豊富体育生活(民間芸術を体験し、体育生活を豊かにしよう)
2003	烹飪王国遊(中華料理王国の旅)	遊歴中華勝境、品嚐中華美食(中国を観光しながら、中華料理を堪能しよう)
2004	百姓生活遊(生活体験の旅)	遊覽名山大川、名勝古跡、体験百姓生活、民風民俗(名山大河と名勝古跡を観光し、人々の生活と民俗を体験しよう)
2005	紅色旅遊年(革命観光年)	紅色旅遊(建国前の戦跡を観光しよう)
2006	2006中国鄉村遊(2006中国の地方の旅)	新農村、新旅遊、新体験、新風尚(新しい農村で、新しい観光、新しい体験をしよう)
2007	和諧城鄉遊(平和な都市と農村の旅)	魅力鄉村、和諧城市、魅力中国(農村と都市の観光で中国の魅力を体験しよう)
2008	2008中国奧運旅遊年(2008年中国オリンピック観光年)	北京奧運、相約中国(北京オリンピックで、中国を観光しよう)
2009	中国生態旅遊年(中国エコーツーリズム観光年)	走進綠色旅遊、感受生態文明(グリーンツーリズムで自然の生態を体験しよう)
2010	中国世博旅遊年(中国万国博覧会観光年)	相約世博、精彩中国(中国万国博覧会で、中国を観光しよう)
2011	2011中華文化遊(2011年中国文化の旅)	遊中華、品文化(中国を観光し、中国文化を体験しよう) 中華文化、魅力之旅(中国文化は魅力の旅)
2012	中国歡樂健康遊(中国歡樂健康の旅)	愛旅遊、愛生活(観光と生活を楽しもう)
2013	2013中国海洋旅遊年(2013年中国海洋観光年)	美麗中国、海洋之旅(中国海洋の観光をしよう) 海洋旅遊、精彩無限(素晴らしい海洋観光を楽しもう)
2014	国内:美麗中国之旅-2014智慧旅遊年(智慧観光年) 国外:Beautiful China、2014-Year of Smart Travel	国内:美麗中国、智慧旅遊(中国で科学技術観光をしよう)。智慧旅遊、讓生活更精彩(科学技術観光を楽しもう) 国外:Beautiful China、easier to visit.

2015	美麗中国-2015 絲綢之路旅遊年 (2015年シルクロード観光年)	国内：遊絲綢之路、品美麗中国（シルクロードの観光、中国の美麗を楽しみましょう）。新絲路、新旅遊、新體驗（新しいシルクロードで新しい観光をしよう） 国外：New Silk Road、New Travel Experience.
2016	絲綢之路旅遊年（シルクロード観光年）	国内：漫漫絲綢路、悠悠中国行（シルクロードの観光で、中国を体験しよう）。神奇絲綢路、美麗中国梦（神秘的なシルクロードの観光で、中国の美麗を楽しもう）。 国外：Explore Beautiful China Along the Silk Road.
2017	旅遊讓生活更美好（旅行は生活を美しくなる）	愛旅遊、愛生活（旅行を愛し生活を愛す）
2018	全域旅遊、美好生活（全域旅行は生活を良くする）	發展全域旅遊、服務美好生活（全域観光を發展させて、生活をよくしよう）

出典：中華人民共和國文化和旅遊部ホームページ <http://www.mct.gov.cn>（2018年9月参照）より筆者作成

一方、中国国家旅遊局は、貧窮地域の經濟を観光産業で發展させて地域間の格差を軽減するという観光化の經濟的機能にも注目している。当時の中国国家旅遊局政策法規司の高舜礼氏（1997）は、「観光産業で中国の貧窮地域の貧困を解消することは可能である」[高 1997:8] と指摘する。

政府の「5ヵ年計画」⁶による国家經濟の發展政策に伴い、近年、国民の収入が増加し、生活レベルが向上したことによって国民の消費觀念も変化してきたことから、第三次産業が国内総生産に占める割合も大きくなり、観光に関する産業値も増えている⁷。

1996年に第9次「5ヵ年計画」の「中共中央關於制定國民經濟和社会發展『九五』計划和2010年遠景目標的建議（國民經濟と社会發展『95』計划と2010年までの發展目標に関する中央政府見解）」⁸という政策および「第8回全國人民代表大會」の會議により、「中国はこれ以降の15年間に第3次産業を中心とした發展を目指し、とりわけ観光産業を重要産業として發展させる」⁹ことになった。また、1998年の「中央經濟工作會議」においても、観光産業が國民經濟の新たな成長スッポトとして提示された。

こうして、「改革開放」以降、中国の観光産業は、従来由国家による政治宣伝や國際交流の手段としての存在から、国家の政策と緊密に結びついた重要な經濟産業として新たに位置づけられ、国家の安定化の政策的手段としても注目されるようになった。

第3節 民族観光の現状

近年の中国国内観光は、中国政府による観光宣伝や観光情報発信などが特に活発になってきていて、北京、上海、西安など一部の大都市中心であったものが、地方に拡大しつつある[鈴木 2008:41]。とり

⁶ 中国の國民經濟の發展ため実施している国策で、5年を一段階として、經濟をテーマとして發展目標を出し、發展計画を作成する。

⁷ 注3を参照。

⁸ 中国人大網ホームページ http://www.npc.gov.cn/wxzl/gongbao/2001-01/02/content_5003506.htm より。2016年12月参照。

⁹ 中華人民共和國中央人民政府ホームページ <http://www.gov.cn> より。2016年12月参照。

わけ、2018年3月に中央政府が「關於促進全域旅遊發展的指導意見（全域観光を促進するための指導意見）」という政策を実施したことにより、全国的に一定の地域を観光地に指定し、観光産業を優先的に発展させようとしてきた¹⁰。周（2001a）によれば、中国の観光産業の顕著な発展の要因として、1つは「政府」、もう1つは「市場」が挙げられる。「政府」による発展要因としては、観光政策や経済政策などが挙げられ、「市場」による発展要因としては、観光客の動向や交通、ホテルなど観光に関するインフラの整備、近年のインターネットなどの新しい観光宣伝媒体の利用などが指摘されている〔周2001a:186〕。

一方、中国における国内観光は、多様な観光の形をとるようになってきている。高山（2007）は中国の観光形態について、「自然旅遊（自然観光）」と「人文旅遊（人文観光）」に大別され、自然観光は環境観光に相当し、人文観光は民族観光・文化観光・歴史観光の総称だと指摘する〔高山2007:20〕。中でも、1980年以降始まった民族観光は中国の少数民族地域の発展にとって重要性を増し、「国家が今最も注目しているのが辺境少数民族地域における観光資源の開発」〔曾2001:88〕なのである。この民族観光は55の少数民族を対象にしている観光であることから、本論で民族観光について考察するにあたって、その前提となる中国における「民族」の概念と民族政策について見ていこう。

「民族」という用語は「和製漢語」であり、19世紀末に中国人留学生が日本から持ち帰り、現代漢語のなかで徐々にその地位を確立してきた〔周2001b:26〕。「中華人民共和国憲法」（1954年憲法、75年憲法、78年憲法、82年憲法とその改正憲法）はその前文で、「中華人民共和国は全国の各民族人民が共同でつくりあげた統一した多民族国家である」〔佐々木2001b:2〕ことを明記している。

中国の56の民族構成は、建国初期から実施された「民族識別」¹¹工作により、1983年には55の少数民族と漢族が認定されたが、当時、いくつかの民族地域において経済社会的遅れや民族差別などの理由から、民族分離運動が行われた。なかでもよく事例として挙げられるのが新疆ウイグル自治区である。新疆ウイグル自治区南部は最も貧困な地域であり、この地域に住んでいる住民の大多数および農民のほとんどがウイグル族という事実が、民族分離主義運動の社会的基盤にもなっている¹²。

中華人民共和国は、建国当初から、「民族区域自治制度」を民族問題の基本的解決策としてきた〔王柯2001:253〕。自治、私的及び公的生活における言語の使用、「内政改革」、地方資源の開発から得た収入の活用、地方民兵の再編成を約束した中央人民政府「民族区域自治実施要綱」が1952年に公布された¹³。現在多くの民族地域で実施されている「民族区域自治」¹⁴制度は、各自地域の経済的、政治的発展の元となっている。

¹⁰ 中華人民共和国文化和旅游部ホームページ <http://www.cnta.gov.cn> より。2018年4月参照。

¹¹ その識別の基準は：(1) 民族的特徴、すなわち、スタンリーの民族の定義による「共同の言語、共同の地域、共同の経済生活と共同の文化」と、(2) 民族的意志、すなわち、民族の人々の民族集団への帰属意識である〔国家民族事務委員会研究室編『中国的民族事務』pp. 28-31〕である。

¹² 2000年1月には、アクス地区で民族独立勢力と武装警察との間に銃撃戦も発生した。貧農によって構成されるウイグル社会は民族分離運動の活動拠点となっている。民族分離運動に加担するのはごく一部のウイグル族に過ぎないが、テロ活動も辞さないため、中国社会の安定に対する脅威は大きい〔王柯2001:248-251〕。

¹³ 『世界の少数民族を知る事典』1993:39。

¹⁴ 少数民族地域の地域政府は、一定の自治権利をもつ政策である。「一定地域に集居している少数民族には、文字・言語の使用権、一定の財政管理権、民兵の編制権、自治条例など単位条例の制定権、省長をはじめ政府機関行政要員の現地民族による構成権、国境貿易権、資源の自主管理権など広汎かつ多岐に渡る自治権を認めることがその内容である。」〔佐々木2001a:424〕。

国の少数民族に対する政策（民族政策）は、国家からの分離・独立の否定が前提になっており、民族自決権を否定する一方で、諸民族の自治権を大幅に認めるものとなっている[佐々木 2001b:2]。中国政府は、少数民族と国の主要民族である漢族との間に政治的・経済的・文化的不平等が存在する事実を認めている。民族区域自治制度は、このような不平等を解消するための制度であるとされてきた。実際、民族区域自治政策のもとで少数民族出身者がいる程度優遇されている[王柯 2001:253]。70年代末から80年代にかけての「民族籍回復運動」も、民族地域の民族意識を目覚めさせるきっかけとなり、少数民族の人々ばかりでなく漢族のなかにも少数民族に民族籍を変更するケースが見られた。例えば、80年代初期、湖北省恩施地域土家族のケースでは、漢族や他の民族から土家族の民族籍に変更する場合、「名字」、「出身地」、「親また祖父母の民族籍」などに基づいて当時の政府部門により判断された。

こうした民族籍の変更が急増した最大の要因として、少数民族に対する優遇政策が挙げられる。1979年以降、中国では1人っ子政策を実施するとともに、法定結婚年齢を引き上げ、男性22歳、女性20歳以下の結婚を禁止した。しかし、少数民族に対しては産児制限を緩やかにし、若年結婚も認めている（人口の多いチワン族は除外）。また、民族自治地方に認定されると、国からの補助金が受けられるなどの経済的特典があるため、地方政府主導で地元住民に民族籍を変更させるケースも出てきていて、いずれも少数民族であることによる民族的・経済的利益を意識した行動である[曾 2000:18]。

中国独自の民族政策は、少数民族の地域における居住の歴史的・現実的状況を斟酌して、行政区画として民族自治区域を設定し、そこでは民族自治のさまざまな権限を区域自治の実施主体となる少数民族に与えるものである[佐々木 2001b:2-8]。こうして、民族観光は民族地域の安定と経済的、政治的手段となり、また民族地域の民族色をアピールして中央から少数民族優待政策を獲得するための重要な方策の1つになっている。

中国の民族観光は1980年代初期に、主に外国人観光客を中心に、辺境地域のいくつかの特定地域において開始された。それは「辺境地であるがゆえに比較的都市部からの様々な影響を受けずに済み、特有の生活文化を色濃く残す地域である。・・・要するに、主要都市部を中心とする様々な経済活動と、それによってもたらされた現代的な生活スタイルの移行から取り残された地域である」[藤木 2015:227]。90年代になると、民族観光が全国的に展開されるようになった。国家が民族観光を促進する理由について、王長文（1985）は、少数民族地域の加工業と商品経済の発展の促進や少数民族地域と他の地域との交流の促進と従来の経済生活習慣からの脱皮、西部地域の経済発展、観光資源の合理的利用にあると指摘し、さらに、国家政府は、観光産業の発展が少数民族地域間の経済や会の格差の縮小につながっているため、国内の政治的社会的安定と国民統合を維持する1つの政治手段として利用していると指摘する[王 1985:63]。こうして、今日の民族観光は、観光産業として、国家経済と社会発展計画の重要な一部となっており、少数民族地域および少数民族の人々自身の文化や経済と深く結びついているのである。

中国における民族観光は、中国語で「民族旅遊」や「民族風情遊」と呼ばれるように、人文観光に属し、その観光内容は、各民族の「民族風情」である。「民族風情」というのは、民族文化を指す[鐘 1988:27]。また、中国の民族観光には、漢族も含まれてはいるが、主に55の少数民族を対象にしている。さらに、中国の民族観光の特徴の1つとして、「中国には少数民族地域が幅広く、民族の数が多く、それぞれの地域性も強く、さらに同じ民族は分布地域によってその支系がある」[王長文 1985:62]というように、中国の民族観光にはそれぞれ地域性がある。

曾（1998）によれば、中国の民族観光には、大きく2つの形態がある。「1つは辺境の民族村を舞台にした民族観光である。民族村といっても厳密には村おこしのために元からある村を開放するケースと公的機関や外部の出資により人工的に民族村を作るケースがある。もう1つの形態は都市近郊に建設された民族のテーマパークやエスニックレストランである。規模は大小様々であるが、民族舞踊などのパフォーマンスに従事する者が辺境から来た少数民族である点が大きな特徴である」[曾 1998:45-46]。また、兼重（2008a）も、『少数民族』を観光の対象とする民族観光は、既存の少数民族の居住地をそのまま観光地として開発する場合と、彼らの居住地とは別の場所に人工的テーマパークを開発する場合の2つに大別することができる」[兼重 2008a:133]と述べる。

たとえば、1991年に建設された深圳市の「中国民俗文化村」と1994年に建設された北京市の「中華民族園」は、中国の民族テーマパークの代表的なものとして挙げられている。こういう民族テーマパークには、少数民族の代表的文化として、いくつかの展示物、すなわち、民族建築や民族祝日、歌や舞踊などの演出、生活様式や生産道具などが展示されている。その観光対象は、少数民族の民族文化を中心にしたものである。たとえば、北京市の「中華民族園」では、「各風景区は伝統的な家屋や村の景観を再現し、定時の公演が見学できる」[曾 1998:51]。これまで、多くの民族テーマパークが、娯楽施設としてだけでなく、国家の民族政策の上から見ても高く評価されている[高山 2007:134]。

一方、中国の民族テーマパークはこれまで大都市近郊に建設される場合が多かったが、近年、少数民族地域の中心都市にも建設される傾向がみられる。また、民族テーマパークのなかの民族文化の展示や体験施設の存在は、少数民族文化の伝承や保護手段の1つでもあると言われている。その上、少数民族地域に位置する民族テーマパークは、所在地にとって、テーマパークのチケットの売り上げなどが少数民族地域の重要な収入源になっているばかりでなく、1つの重要な文化施設として地域の宣伝窓口にもなっている。そのほか、民族観光により、民族テーマパークやエスニック・レストランが少数民族の人々の重要な働き口にもなっている[曾 1998:56]。要するに、このような民族テーマパークの存在は、民族文化の展示や保存、国家の民族政策の宣伝、さらには少数民族地域の経済発展の促進と観光宣伝などで重要な役割を發揮している一方、少数民族の人々、特に若者にとっては、重要な雇用の場となっているのである。

他方、少数民族の居住地が観光開発されなかった村についても、「民族村として観光スポット化した村は、家屋も旧来の民族風の草葺き、竹組・木組みを多用した建物を多く残し、住民は民族衣装をまとい、民族工芸の織物や民族舞踊の実演を行うことによって観光収入を得ている」[瀬川 2003a:104]。少数民族の人々の従来の居住地がそのままの形で観光地化され、従来の建築や生活様式などを変えず、その上に民族衣装をまとい、民族の歌や踊りを演出するといった場合が多い。その観光対象は少数民族の人々自身と彼らの民族文化である。さらに、こういう観光化による経済利益は、彼らに直接還元される場合が多く、彼らや周辺地域の人々も観光開発をきっかけとして道路などのインフラ整備が行われて、生活水準が改善されている。貴州省黔东南自治州の「民族観光村」は、村をそのままの形で観光地として開発したケースとして知られている。こういう民族村の観光開発について、橋本（2001）は、バリ島の事例から、「これらの村では歓迎儀礼、歌とダンス、そして工芸品の陳列を洗練させた。観光団から支払われる入村料は、村の生活に大きな経済的変化をもたらした」[橋本 2001:167]と述べているが、この同じ事が、中国の「民族観光村」にも見られるようになった。

また、近年、民族観光の発展の重要な特徴の1つは、国内観光客が圧倒的に多く、その大半は漢族の地域から少数民族地域へやって来る漢族であることだ。その理由として、「外国へ旅行する政治的・経済的環境がまだ完全に整っていないせいか、少数民族地域は漢族の観光客に人気が高い。その秘密は、美しい風景、汚染のない空気、昔のたたずまいを残した建築、そして純朴な気風が、漢族観光客の郷愁を誘っていることである」[王 2005:159] という。また、曾（2002）によれば、都市民の間でエスニックなものが流行する要因は、80年代半ば以降、(1) 都市民の生活水準が向上し、可処分所得が増加したこと、(2) 急速な近代化、都市化が進む中で一種の文化的回帰現象が起き、伝統的なもの、土着のものへの関心が広がり、民俗ブームが起こっていることだという。さらに、都市部より発展が遅れている多くの少数民族地域では、民族観光を利用して、漢族の人々が多い都市部の人々の、少数民族の「民族風情」に対する好奇心を喚起し満足させることができることも民族ブームの要因の1つだと指摘する[曾 2002:33]。

このように、「改革開放」以降、中国の民族観光は、「人文観光」の1つ重要な要素であり、少数民族の文化や彼ら自身を観光対象としている。また、その形態が民族テーマパークと民族観光村を中心に中国全土で展開されている。その発展の要因は、すでに見たように、観光産業による民族地域の経済社会的発展と、各民族文化の認可と宣伝、そして民族間交流の強化、国内の政治宣伝と安定にある。民族観光の発展は国家政策に基づいて変化しているため、「民族観光の現状をよりよく理解するために過去から現在までの変遷の過程を把握しておくことが必要」[兼重 2008a:134]だと言える。

そこで、次に、民族観光と国家の政策、特に少数民族政策との関係について見ていこう。

第4節 民族観光と民族政策

兼重（2008b）によれば、建国後の中国は多民族国家を標榜し、共産党のかかげるマルクス主義的な民族観と民族政策にもとづき、改革解放以前の民族観や政府の民族政策を批判し、また、現在中国共産党のかかげる民族政策についても、以下のように要約することができるという。すなわち、1) 民族平等と民族団結の堅持、2) 民族区域自治の実施、3) 少数民族地区の経済文化事業の発展、4) 少数民族幹部の養成、5) 少数民族の言語文字の尊重と発展、6) 少数民族の風俗習慣と宗教信仰の自由の尊重である[兼重 2008b:92-93]。

そのなかで、2) 民族区域自治は、中国の民族政策の中心的なもので、1982年憲法（1982年制定、88年・93年・99年改正）における民族自治地方の諸規定では、国家の一定の制限のもとに条例制定権や少数民族採用優先権、公安部隊組織権、資源の所有権と使用権さらに優先開発権、地方財政管理権、国境貿易権、民族教育権などを有し、少数民族に対する政治・経済面での優遇と、文化面での言語、教育などの尊重が謳われている[佐々木 2001b:11-12]。しかし、毛里（1998）は、「民族区域自治制度」について、「辺境には戦略資源が集中している。資源を誰が管理し誰がその恩恵に浴するのかをめぐって民族紛争が生じることは50年代の新疆のケースが示すとおりである。区域自治法で民族地区の『資源ナショナルズム』に配慮した点は評価できるが、市場経済が浸透し民族地域の資源は相変わらず中央政府、漢族によって利用され、たくさんの漢族が金儲けのチャンスを求めて辺境に動いており、実態はそ

れほど変わっていない」[毛里 1998:126]と指摘する。

6) の国策としての「少数民族の風俗習慣の尊重」については、近年の民族観光の発展要因の1つとしてアピールされている。すなわち、少数民族の風俗習慣は、民族観光の重要な観光資源として利用されている一方、民族観光の発展は、国家の民族政策の成果であることを表象する方法の1つとしても利用されている。また、この民族観光の発展政策は、多民族国家中国にとって、国家の政治的安定を維持する上でも重要な前提となっている。

前述したように、中国の民族観光は、1978年以降の「改革開放」以降に始まり、この路線は、中国の歴史文化と愛国主義を新しい局面へと導いた。この時期、国家は民族観光を政治の対外宣伝手段として利用したが、その民族観光はすべての少数民族地域においてというわけではなく、最初は雲南省と貴州省のいくつかの村など特定の辺境の少数民族地域で始まり、そのまま民族観光村として観光開発されていった。そして、中国の全国的な民族観光の展開は1995年から始まると言われるが、国家旅遊局は1992年から毎年、「1つのテーマを定め、世界に特色のある観光商品を作り出すべく大規模な観光プロモーションを展開し」[王文亮 2008:82]、1995年には少数民族観光を中心として行い、その年の観光テーマとキャッチフレーズを「民族風情遊（民族文化観光）」、「中国:56個民族的家（中国は56の民族がある民族国家）」、「衆多的民族、特異的風情（多様な民族、独特な民族文化）」として打ち出し、全国的な民族観光を展開した（表2-1参照）。

また、中国の民族観光では、「地域格差の縮小と国民形成の促進」が意図されたことや、少数民族の人々の収入の増加や生活環境の改善が期待できる上に、自文化に対する再認識ができ、民族アイデンティティの強化や高揚につながり、民族文化の保護や伝承という面でも効果があると考えられている[曾 2001:88]。すなわち、中国少数民族観光の発展は、国家政策に基づいて、漢族などの観光需要の高まりと国家の政治的安定および民族融合の促進、さらに少数民族自身の発展の必要性に基づいている。

すでに見たように、中国の少数民族観光の先進地としてあげられるのは、1980年代後半から少数民族観光を展開してきた辺境部に位置する雲南省と貴州省であるが、当時の雲南省は、白（ペイ）族、彝（イ）族、納西（ナシ）族、傣（タイ）族など約25の少数民族が分布し、民族文化が多様であること、また、それらの地域の少数民族は漢族からの影響が他の地域よりも小さく、少数民族文化が比較的良好に保持されていること、さらに、中心都市の昆明市には既に国際空港が存在することから、国内外から多くの観光客を集めている。その上、「雲南省の観光開発においては、亜熱帯の風物や少数民族の伝統文化など、雲南省の『風景』を構成する諸要素にそれぞれ付加価値をみとめ、最大限に活用しようとしている」[曾ほか 1995:300]という。一方、近年のユネスコによる世界遺産観光ブームの中で、雲南省には世界文化遺産の「麗江古城」（1997年認定）や「哈尼梯田」（2013年認定）、世界自然遺産の「三江并流」（2003年認定）と「雲南石林」（2007年認定）など雲南省独自の自然観光資源に恵まれ、地域政府は民族観光と一緒に雲南観光の特徴としてアピールしている。

また、貴州省の観光の特徴については、雲南省と同じく少数民族が数多く分布することと、少数民族文化の多様性と純粋性の上に、少数民族が住んでいる村をそのまま開発しているケースが多く、少数民族が実際に生活する村や祭りの場所が観光スポットになっているという[曾 2001:90]。これまで、多くの少数民族地域は、この貴州省の「民族観光村」を観光の見本として観光活動を展開してきた。また、貴州省の民族観光は雲南省と同じく、自然観光と一緒に展開されている場合が多い。さらに、貴州省の

民族観光開発では、「民族エリートが観光開発において重要な役割を果たして、貴州及び少数民族の地位向上に貢献している」[曾 2001:102] という。後述するように、本論の研究対象である土家族の場合は、近年民族観光開発が始まったばかりの湖北省のような後発地域において、雲南省や貴州省など民族観光の先進地域の観光開発の経験を参考にしつつ、少数民族観光の新しい試みが行われている。

建国以来、民族地域と緊密な関連がある国家政策のなかで、「西部大開発」が最も影響力があると考えられていて、実際、多くの民族地域において観光の発展は、「西部大開発」から始まった。1999年6月、中国西北部を視察した当時の江沢民総書記は、西部を開発する戦略を決定し、同年11月に開かれた中央経済活動会議において「西部大開発の戦略の実施」を決定した。そして、この会議の中で、西部地区は20数年の「改革開放」路線の結果、今後更なる発展条件を十分に備え、東西格差解消のための条件と能力を持っていると判断された。また、この大開発で特筆すべきは、西部を大いに開発し、観光業を大いに発展させるという目標をその中核に据えていることであるという[国松・鈴木編 2006:114-115]。

こうした中央政府の号令のもと、国家旅遊局は、西部大開発で、まず自然生態や歴史遺産の観光商品を開発し、また、特色ある観光コースを造成し、さらに、内外からの観光客のさまざまな要求を満たさなければならないとした。具体的には「世界遺産観光コース」、「自然生態系観光商品」、「特定観光商品」を打ち出し、西部観光のイメージアップに努め、各省および市と協力して観光促進を積極的に強化している[国松・鈴木編 2006:115]。こうして、西部地域は民族地域を中心に発展し、民族観光も「西部大開発」以来、各地で「産業資源に恵まれない民族地区の貧困脱出法」[松岡 2012:134]として推進されている。

「西部大開発」¹⁵に基づいて、「国家発展・改革委員会」は2006年12月から「西部大開発『十一五』規劃（西部大開発第11次5ヵ年計画）」を実施し、西部地域の観光化を促進するため、「西部地区重点観光開発10大地帯」を指定した。その中には「黔東南-湘鄂西民族風情と生態観光地域」が含まれ、貴陽・凱裏・榕江・從江・黎平苗侗少数民族風情、湘西・恩施土家族・苗族民族風情、湘西鳳凰古城の民族観光と自然観光の開発が推進されてきた。この政策は西部地域の民族観光を促進することを目的とし、またこれら地域は、本論で取り上げる土家族の分布地域であり、土家族の民族観光の発展においても重要な政策である。さらに2012年12月から「西部大開発『十二五』規劃（西部大開発第12次5ヵ年計画）」が始まり、民族文化資源の発掘や優秀な民族文化の伝承、革新、発展が推進されてきた。また、2017年1月からの「西部大開発『十三五』規劃（西部大開発第13次5ヵ年計画）」においても、民族色のある文化産業基地を建設することや、観光インフラ施設などの建設など多くの方面から西部地域の観光業の発展を促進している（この中には本論と関連する武陵山観光区も所属している）¹⁶。

また、その他の国家政策においても、観光産業が国家の重要産業として位置づけられた。たとえば、「中部崛起」¹⁷、「振興東北」¹⁸、最近の「一帯一路」¹⁹などの一連の政策では、各地域の観光産業に対

¹⁵ ほかに「國務院關於進一步推進西部大開發的若干意見（西部大開發を推進するに関する國務院の意見）」（国発【2004】6号）と、「中共中央國務院關於深入实施西部大開發戰略的若干意見（西部大開發の実施を促進するに関する國務院の意見）」（中発【2010】11号）などの中央政策が公布されている。

¹⁶ 中華人民共和國國家發展和改革委員會ホームページ <http://www.ndrc.gov.cn> より。2017年12月参照。

¹⁷ 2014年から実施してきた国家經濟政策である。政策實施對象地域は主に内陸部の山西省、河南省、湖北省、湖南省、安徽省、江西省の6省である。

してインフラ整備など具体的な政策を打ち出しているほか、少数民族地域についてはインフラ建設以外にも医療や教育などの特別優待政策もある。

さらに、中央政府の「5 ヶ年計画」²⁰に、「十一五計画」²¹、「十二五計画」²²と「十三五計画」²³においても、民族地域での観光開発を重視していることがわかる。「5 ヶ年計画」政策によって、国家経済を発展させるとともに、国民の生活レベルの向上と国民の消費観念の変容によって、第三次産業が国内総生産に占める割合も増加しつつあり(表 2-2 参照)、観光に関する産業値も増えている(表 2-3 参照)。

表 2-2 「改革開放」政策以降の中国国民総所得と国内総生産額

年別	国民総所得(億元)	国内総生産額(億元)	第三次産業(億元)
1978	3,650.2	3,650.2	895.8
1980	4,551.6	4,551.6	1,011.6
1990	18,824.8	18,774.3	6,079.3
2000	98,562.2	99,776.3	39,734.0
2010	407,137.8	408,903.0	180,743.4
2015	673,837.1	676,707.8	341,566.9

出典：中国国家统计局ホームページ <http://www.stats.gov.cn> (2016 年 11 月参照) より筆者作成

表 2-3 90 年代以降中国国内観光状況一覧

年別	観光総人口数(億人)	観光総消費値(億元)	人数平均消費値(元)
1995	6.29	1,375.7	218.7
2000	7.44	3,175.5	426.6
2005	12.12	5,285.9	436.1
2010	21.03	12,579.8	598.2
2015	40.00	34,195.1	857.0

出典：中華人民共和国国家旅游局ホームページ <http://www.cnta.gov.cn> (2016 年 11 月参照) より筆者作成

また、2005 年「国家による民族工作の強化と、少数民族および少数民族地域の経済・社会の発展政策」²⁴によると、中国政府は「民族地域の基盤施設の建設」と「民族地域経済構造の調整」を維持し、

¹⁸ 2004 年から中国東北地域の吉林省など 4 省や自治区に対して提出した国家経済発展政策である。

¹⁹ 「關於絲綢之路經濟帶和 21 世紀海上絲綢之路的戰略規劃」による。この政策は 2013 年から始まり、古代のシルクロード沿線の都市を発展させ、またその関係国との経済交流など外交をもっと促進することを目的とする。また、2015 年からは、中国の昔のシルクロードの関係国と貿易や文化交流など関係を復活し持続するため国家発展政策となっている。

²⁰ 「中華人民共和国国民経済和社会發展五年規劃」(2006 年以前は、「中華人民共和国五年計劃」という)である。1953 年から実施しており、国家の経済発展を重要な目標として、5 年を一段階として、発展目標を示し、発展計画を作成する。その目標のため 5 年間に様々な政策を実施する。

²¹ 「中華人民共和国国民経済和社会發展第十一年規劃綱要」の略称、2006 年～2010 年まで。第 4 篇「加快發展服務業」と第 5 篇「促進区域協調發展」により、観光産業および少数民族地域を発展させるための政策を制定した。

²² 「中華人民共和国国民経済和社会發展第十二五年規劃綱要」の略称、2011 年～2015 年まで。第 4 篇「營造環境 推動服務業大發展」と第 5 篇「優化格局 促進区域協調發展和城鎮化健康發展」には、観光産業と少数民族地域の発展に関する規定を制定した。

²³ 「中華人民共和国国民経済和社会發展第十三五年規劃綱要」の略称、2016 年～2020 年まで。第 5 篇「優化現代産業体系」、第 9 篇「推動区域協調發展」などにおいて、観光産業と少数民族地域の発展に関する政策を実施している。

²⁴ 「中共中央、國務院關於進一步加強民族工作、加快少数民族和民族地区经济社会發展的决定」(中發【2005】10 号)。

「観光産業」と「民族文化産業」を優先的かつ積極的に発展させるという。さらに、2007年「国務院辦公庁による少数民族に関する事業の『11次5ヵ年』計画の公布通知」²⁵と、2012年の「同『12次5ヵ年』計画の公布通知」²⁶には、「民族地域資源開発、民族文化観光業など有利な産業を発展させる」と、いずれも民族地域の観光文化資源の開発と産業化を謳っている。

また、2014年の中央民族工作会議では、「新しい時代の民族工作の強化と改正及び促進に関する中共中央国務院の意見」²⁷が承認され、その中で、民族地域の観光発展に関して、「産業構造の調整を促進し、民族手工業や観光産業を発展させる」としたほか、「少数民族の文化事業の発展」を目的にすることが記されている。

こうして、近年、全国の少数民族地域における経済社会的発展を促進するため、中央政府は多くの政策において観光産業を発展させる政策を実施している。他方、民族観光の発展とともに、多くの民族文化が観光資源化されてきているが、この民族文化の資源化の問題については後述する。

第5節 民族文化と観光文化

すでに見たように、中国は、1949年建国以降、国家政府が「民族識別」工作を行い、1983年に漢族を含む56の民族の存在を確定した。また、少数民族分布の中心地域に対して、「民族区域自治」の政策を行った。これにより、少数民族地域に5つの民族自治区、30の民族自治州、120の民族自治県（旗）、合計155の民族自治体が設置された。また、現在、「少数民族は主に内モンゴル、新疆、チベット、広西、寧夏、黒龍江、吉林、遼寧、甘肅、青海、四川、雲南、貴州、湖南、湖北等に分布している」[杜2009:107]。

各少数民族は独自の民族文化を持っている一方、歴史的には同じ地域に多くの民族が雑居してきたため、少数民族の間でも互いに影響し合い、同じ文化要素を共有するケースもみられる。例えば、本論で事例とする土家族の場合、歴史的には長期間苗族と一緒に居住してきたため、その住宅様式の「吊脚楼」（チョウキヤクロウ）は苗族の代表的建築文化と考えられているが、土家族や苗族地域の観光地では、「吊脚楼」についての紹介は混乱している。

また、同じ民族でも、地域によって代表的な民族文化要素に違いがある場合もある。例えば、土家族は、主に中国内陸部の4つの地域に分布しており、この4つ地域は隣接しているが、それぞれが取り上げる代表的文化要素は異なっている。例えば重慶市の土家族は踊りの「摆手舞」（バイショウウ）、貴州省の土家族は宗教の「儺」（ナ）文化、湖南省の土家族は民族工芸の「西蘭卡普」（シランカープ）や土家語、そして湖北省の土家族はその民族踊りの「摆手舞」や民族歌の「山歌」を代表文化として強調しアピー

中華人民共和国国家民族事務委員会ホームページ：http://www.seac.gov.cn/art/2012/8/31/art_6081_164887.html より。2018年9月参照。

²⁵ 「国務院辦公庁關於印發少数民族事業『十二五』的通知」（国辦發【2012】38号）。中華人民共和国中央人民政府ホームページ：http://www.gov.cn/zhengce/content/2008-03/28/content_6698.htm より。2016年12月参照。

²⁶ 「国務院辦公庁關於印發少数民族事業『十二五』的通知」（国辦發【2012】38号）。中華人民共和国中央人民政府ホームページ：http://www.gov.cn/zhengce/content/2012-07/20/content_6657.htm より。2016年12月参照。

²⁷ 「中共中央国務院關於加強和改進新形勢下民族工作的意見」（中發【2014】9号）。中華人民共和国中央人民政府ホームページ：http://www.gov.cn/zhengce/2014-12/22/content_2795307.htm より。2016年12月参照。

ルしている。これら地域では、土家族という同じ民族でありながらも、地域性が見られる。

さらに、近年、多くの少数民族は、漢族とのつながりが深くなっていて、少数民族文化も「漢化」または「漢族化」されている。周（2001b）は、「漢化」と「漢族化」について次のように説明している。すなわち、「漢化」とは、中国少数民族において普遍的に見られる現象であり、文化接触や同化などにより漢文化を受容することを指すが、自民族への共通認識や帰属意識を放棄したわけでもなく、漢族になったわけでもない。一方、「漢族化」とは、歴史的に漢化・通婚・改姓・入籍などにより、漢族でない人々が漢族になる過程である〔周 2001b:32〕。

前述したように、民族文化は「民族風情」ともいわれ、各民族の伝統習慣や民族建築、生活様式などを意味し、一般的には漢族以外の少数民族文化を指す。

馬（2003）は、民族地区の観光資源を自然観光資源と人文観光資源に分け、その中には、人文観光資源について、6種類、すなわち、「古人類遺跡」、「古代大規模事業」、「歴史文化名城と歴史的建造物」、「宗教」、「陵墓」、「民族習俗」があるという〔馬 2003:123〕。また、民族習俗について次のように述べる。

少数民族は長い歴史の変化の中で、様々な風俗と習慣を形成している。その中で最も代表的なのが、熱帯密林にすむタイ族の竹楼と潑水節、内モンゴル大草原モンゴル族の蒙古包と「那達慕」、四川省彝族の火把節、広西チワン族の銅鼓文化と対山歌、雲南省ナシ族の「東巴文化」、納西古楽、摩梭人の「阿夏婚」、貴州省苗族の「闘牛会」と「龍舟節」、海南省黎族の「三月三」と竹竿舞、リス族の「上刀山」と「下火海」、ヤオ族の「盤王節」と「腰紗妹」、回族の「開齋節」と「古爾邦節」、チベット族の哈達、青稞酒、蘇油茶、沐浴節と雪頓節、新疆トルファンの高温で乾燥した気候とウイグル族のブドウがふさふさと実った中庭、チノー族の「成人礼」、オロチョン族の狩りと雪ソリ等で、民族地区で最も観光客を引きつける人文観光景観となっている。〔馬 2003:126〕

ここでは、中国の民族文化を、1) 中国建国以降から「改革開放」まで、2) 「改革開放」から民族観光まで、3) 民族観光以降の3つの時期に区分し、それぞれの時期においてどのような民族文化を観光文化として資源化してきたのか見ていこう。

1) 中国建国以降から「改革開放」まで

1949年の建国初期には、早くも文化に関する保護政策が始まった。1961年には国務院が「文物保護管理暫行条例」を発し、いわゆる「物質文化遺産（有形文化財）」の保護を行っている。しかし、その保護に関する法規は文革期には機能しなくなり、多くの文物が破壊された。文革収束後の1982年に、ようやく「中華人民共和国文物保護法」が制定され、歴史的、芸術的および科学的に価値のある文物が法的に保護された〔菅 2015:274〕。この時期には、既に国家の民族政策が実施されていたが、「民族識別工作」はまだ終わっておらず、各民族文化についての整理などもまだ始まっていなかった。また、1950年代後期から、漢族の伝統文化の多くが「封建的」、「迷信的」、「落後的」と否定されたように、全国の少数民族文化もその多くが部分的に禁止され、破壊されていった。特に、1958年の大躍進から1976年の文革終息まで間は、過度の民族融合政策がとられ、少数民族の言語や文化が否定された〔曾 1998:64〕。

なかでも、宗教や信仰などに関する民族文化はかなり厳しく管理され、あるいは全面的に禁止された。文革終了後、共産党の「11回3中全会」以降に、ようやく、文化財保護政策が復活したのである〔兼重 1998:141〕。その後、経済の発展とともに文化も徐々に重視されるようになった。この背景には、各地域や各民族の習俗や文化に対する禁止や破壊が中止されことや、部分的に文化や習俗の回復が行われるようになったことがあげられる。

以上のように、建国以降から「改革開放」まで、少数民族文化は全国的な政治的文化運動により批判され禁止され、この時期、少数民族の「民族識別」や「民族区域自治」などはまだ始まったばかりで、全国的な文革運動により少数民族文化に対する正確な認識はなされていなかった。また国内の政治運動により社会は不安定化し、経済や社会の発展も停滞状態にあった。さらに国家は対外的にも開放されていなかったため、観光化も進まず、少数民族地域における観光開発もみられなかった。

2) 「改革開放」から民族観光まで

1978年の「改革開放」政策の実施以来、中国政府は漢族の伝統文化や少数民族文化に対して再評価を行い、その中の一部は文化の回復がなされ、さらに伝統文化と少数民族文化の保護や伝承が始まった。すなわち、「改革開放政策の時代は、少数民族地域を含めた全国の地方政府の自主裁量権を高めるとともに、『伝統文化』や『旧慣習』への否定的態度を大幅に後退させることにより、少数民族地域のエスニック観光開発への基盤を拓いた」〔瀬川 2003a:168〕のである。

また、1978年以後の「改革開放政策」によって、中国はイデオロギーから脱却し、経済主導による国家形成の道を歩み始め、この転換による劇的な変化は中国政府の少数民族政策にまで及んだ。自治地方となった少数民族地域は、政府から優遇される対象としての権利を獲得するために、自分たちの特徴を強くアピールするようになった〔張 2009:131-134〕。なかでも、少数民族文化は民族地域の宣伝効果のほかに、多民族地域における民族間の安定や相互理解、所属地域への意識の高揚に対する効果的な手段となった。例えば、本論の湖北省恩施土家族苗族自治州では、1983年8月19日の建州以来、この日を「州慶日」と定め、毎年その日に全州の政府部門や学校などが休日となり、恩施自治州政府と恩施市政府が主催して、恩施市内で民族歌や踊りなどを公演し、民族文化の表象や国家の少数民族政策の宣伝につながっている。また、広西壮族自治区における羌（チワン）族の「三月三歌節」は、自治区政府と南寧市政府により民族文化資源として観光開発され、1984年4月3日の南寧市での開催以来、政府指定の「広西民族文化芸術節」として毎年開催されている。塚田（2001）によれば、『三月三歌節』はチワン族という1つの民族の行事ではなく、広西という行政範囲における諸民族の文化の高揚と民族の団結、経済活動の促進や観光の発展も重要な目的となったのである〔塚田 2001:98〕。

1980年代前半は、各少数民族の独自性を尊重する方向に相当なエネルギーが注がれ、各民族の歴史、言語、風俗習慣などに関する研究が盛んになったが、90年代に入ると、民主化運動への反動から愛国主義運動の強化に伴ってそれらの事業は一時期低迷した〔毛里 2001:103〕。しかしながら、90年代以降、国家は観光業を促進するため、1995年に全国の少数民族地域において民族観光を推進し、多くの少数民族地域政府も民族文化を観光資源として利用した観光開発を推進したのである。

こうして、「改革開放」以降の国家の経済と社会の急激な発展により、漢族の伝統文化と少数民族文化の再評価がなされ、伝承や保護、再興されると共に、文化資源として観光開発されてきている。

3) 民族観光以降

1990年代になると、1992年の「中国友好観光年」において、西南少数民族風情旅行などにより少数民族村落が重要な観光地に認定され、民族文化の商品化が進展した[張 2009:133]。さらに1995年の全国的な民族観光の展開により、民族文化の大規模な観光開発が始まった。その時期に、いくつかの都市部の郊外に各少数民族の踊りや歌、建築、イベント、服装など文化の展示をベースにした民族テーマパークが建設され、また、都市の中に少数民族の食文化や服飾文化を利用したエスニック・レストランが出来るなどの形で民族観光が展開された。また、各少数民族地域においても、それぞれの地域政府により独自の民族観光が展開された。特にこの時期、少数民族地域においては、地域政府が民族観光を地域の経済発展の重要な機会として認識し、地域の少数民族文化を整理あるいは再発見した後に、民族イベントや祭り、祝日などを観光の目玉に据えて展開するようになった。例えば、その代表的な少数民族イベントに、雲南省傣(タイ)族の「潑水節」²⁸、貴州省苗(ミャオ)族の「苗年」²⁹、内モンゴル自治区モンゴル族の「那達慕」³⁰(ナダム)などがある。これらの民族イベントや祭りは、少数民族や地域の文化を展示し、宣伝する上で大きな力を発揮した。また、多くの民族地域政府がイベントの集会機能を利用して、イベント期間中に国家の民族政策などの政治的な宣伝を行ったりした。また、地元の少数民族の人々の民族アイデンティティと地域アイデンティティの強化に利用されている一方、各民族間の文化交流と民族融合にも効果が期待された。さらにこういう地域また民族のイベントや祭りには「経済交流会」つまり地域特産品などの販売会が付随して行われることが多く、地域の経済発展の有効な手段にもなっている。

上述のように、「観光化が伝統文化の存続に繋がる効果」[緒川 2010:194]があることから、90年代の全国的な民族観光ブーム以来、少数民族文化は観光資源として利用されるようになり、そのことが民族文化の存続にもつながっている。また、少数民族地域政府は少数民族優待政策を獲得するために、民族文化を利用している面もある。

第6節 民族文化とその資源化

前述したように、中国においては1980年代後半から、民族や地域の文化資源を掘り起こし、「民族風情」を主題とする民族観光が次々と現れてきた。これまで社会主義国家建設への障害とみなされた民族の伝統文化は、再評価の方向へと転換され、各地で少数民族文化の復興が動き始めた。

では文化資源とは何か。武内(2014)によれば、明確な定義はないが、さしあたり「文字による記録・

²⁸ 「浴仏節」、傣(タイ)族語では「ピマイ(比邁)」と呼ばれ、毎年4月13日～15日まで開催されてタイ族のお正月である。祝日には互いに水をかけて(「潑水」、タイ族の踊りを踊る。

²⁹ 苗族語で「ノウヤアン(能央)」と呼び、苗族の一番盛大な祝日である。祝日期間中に、豚を殺し、お餅をつき、祖先を祭祀する。また「闘牛」や「闘鳥」をしたり、苗族の踊り「蘆笙舞」を踊ったり、苗歌の歌壇などを行う。またその期間は毎年旧暦の9月から正月までで、地域によって違いがあるが、一般的には、3日間、5日間や10日間である。2008年には、貴州省黔东南自治州丹寨県と雷山県の「苗年」は国家級非物質文化遺産になっている。

³⁰ モンゴル語の中国語への音訳で「娯楽」という意味である。今日の「那達慕」は、主に毎年夏から秋へ移り代わる時期に開催されている。「那達慕」期間中、相撲や競馬以外に、民族歌や踊りなどの演出、陸上競技、祭祀活動と物質交流大会なども行っている。

モニュメント、衣装や技術、写真・映像等の有形無形の表象形式など、民族の過去の記憶や自らの同時代的経験を文化として継承し発信することを可能とする資料の総体」[武内 2014:2] としている。本論でも、武内の「文化資源」の解釈を踏まえて、「各民族の有形無形の表象形式と、自民族に関する過去、現在さらに文化伝承や文化変容を可能とする資料の総体」とする。

では、民族観光の「文化資源」となる少数民族の文化とは何か。それは、観光開発により商業イベント化された民族祝日であり、舞台演出化された民族歌舞であり、商品化された少数民族の食（料理や飲料）、それに服飾などである。

少数民族観光における民族文化と観光化の関係について、長谷（2007）は、「1980年代以降、改革開放政策が進むにつれて、不遇な少数民族に富をもたらす手段としての観光業が脚光を浴びようになり、少数民族の生活のある部分の『文化』化、とりわけ『観光文化』化が急速に進んだ」[長谷 2007:25] と指摘し、また、瀬川（2003a）は、「『伝統文化』の復権、再編そして創出は、国家の政策の枠内である程度まで意図的・選択的に行われきた」[瀬川 2003a:154] と述べる。また、民族文化の資源化を国家政府が促進していることについて、曾（1995）は、「中国政府は、少数民族の多様な文化を観光資源として活用することを奨励している。そのため、少数民族地域の各地で『民族文化村』ができています」[曾ほか 1995:300] と指摘する。すなわち、民族観光において資源となる民族文化は、地域政府が意図的に選択しているものであり、「現在、いくつかの『少数民族』に対して特定の文化要素が特に強く結び付けられて連想されている」[兼重 1998:134] のである。

たとえば、兼重（1998）は広西壮族自治区の民族観光において、広西トン族の文化は、地域政府により「鼓楼」と「風雨橋」がその代表的な文化要素として選択され、トン族のエスニック・シンボルになっていると指摘する。また、孫（2012）によると、雲南省のハニ族の民族観光においては、ハニ族の静止的・物質的な記号として伝統的な建築の「蘑菇房」と、動的な伝統文化としての歌や踊りなどが代表的な民族文化を観光資源として観光化されているという [孫 2012:56-59]。

このように、民族文化や地域文化は行政や観光関連企業などにより意図的に選択され、民族や地域の代表的文化要素として観光資源化されることが多い。

第7節 小括

以上、本章では、まず、中国の観光化の歴史を辿り、次に、中国における民族観光の現状について概観した。そして、民族観光と民族政策の関係および民族文化と観光文化の関係について述べ、さらに民族観光における民族文化の資源化の問題に言及した。こうして、中国における民族観光誕生の背景を探った。

1949年の中国建国以降に始まった観光は、中央政府の管轄下にあり、国家の政治宣伝と国際交流の手段として、雲南省や貴州省など政府指定の限られた辺境部の少数民族地域だけで行われた。1978年の「改革開放」以降の急激な経済発展に合わせて、観光業も急速な発展をとげた。この根本的要因として重要なのが中国政府の観光政策であった。中国政府は、国家の経済発展を推進する資金調達的手段として国際観光の振興を図り、包括的な観光開発を推進した。また、中国国家旅遊局（観光局）は 1992

年以降、全国の観光化に着手し、1995年に少数民族を中心とした民族観光を展開する観光政策を打ち出した。この民族観光は、民族地域と少数民族の人々にとって、経済発展や地域振興の有効な手段となった。

中国の民族観光には、大きく2つの形態があり、1つは辺境の民族村を舞台にした「民族観光村」で、もう1つは都市近郊に建設された「民族テーマパーク」や「エスニック・レストラン」である。中国の民族観光は、少数民族の文化や彼ら自身を観光対象として民族テーマパークと民族観光村を中心に中国全土で展開されている。

多くの民族地域において観光の発展は、「西部大開発」から始まった。1999年11月に開かれた中央経済活動会議において「西部大開発の戦略の実施」が決定され、観光業の発展という目標がその中核に据えられた。国家発展・改革委員会は2006年12月に「西部大開発第11次5ヵ年計画」に着手し、西部地域の観光化を促進するため、「西部地区重点観光開発10大地帯」を指定した。これら地域の大半は少数民族地域で、後述する土家族の分布地域でもあり、土家族の民族観光の発展においても重要な政策であった。

民族文化は「民族風情」ともいわれ、各民族の伝統習慣や民族建築、生活様式などを意味し、一般的には漢族以外の少数民族文化を指す。ここでは、中国の民族文化を、1) 中国建国以降から「改革開放」まで、2) 「改革開放」から民族観光まで、3) 民族観光以降の3つの時期に区分し、それぞれの時期においてどのような民族文化を観光文化として資源化してきたのかを見ていった。

建国以降から「改革開放」まで、少数民族文化は全国的な政治的文化運動により批判・禁止され、少数民族文化に対する正確な認識はなされていなかった。また国内の政治運動により社会は不安定化し、経済や社会の発展も停滞状態にあり、国家は対外的にも開放されていなかったため、少数民族地域における観光開発もみられなかった。

「改革開放」以降、国家は観光業を促進するため、1995年に全国の少数民族地域において民族観光を推進し、多くの少数民族地域政府も民族文化を観光資源として利用した観光開発を推進した。こうして、漢族の伝統文化と少数民族文化の再評価がなされ、伝承や保護、再興されると共に、文化資源として観光開発された。

1995年の全国的な「民族観光」の展開により、民族文化の大規模な観光開発が始まった。その時期に、都市部の郊外に民族テーマパークが建設され、都市の中にもエスニック・レストランが出来た。特に少数民族地域においては、地域政府が民族観光を地域の経済発展の重要な機会と捉え、地域の少数民族文化を整理・再発見した後に、民族イベントや祭り、祝日などを観光の目玉に据えて展開するようになった。こうして、少数民族地域政府は少数民族文化を観光資源としてばかりでなく、少数民族優待政策を獲得するためにも民族文化を利用したのである。

民族観光の「文化資源」となる少数民族の文化は、観光開発により商業イベント化された民族祝日、舞台演出化された民族歌舞、商品化された少数民族の飲食や服飾などであった。1980年代以降、「改革開放」政策が進むにつれて、観光業は少数民族に富をもたらす手段として注目されるようになり、少数民族の生活のある部分の「観光文化」化（長谷 2007）が急速に進んだ。中国政府は、少数民族の多様な文化を観光資源として活用することを奨励したため、少数民族地域の各地で「民族文化村」ができていく。

以上、中国における観光業の変遷は「改革開放」以降の中国の経済発展と中央政府の観光政策と共にあり、辺境に位置する多くの少数民族地域の貧困打開策として国家主導で推進されてきた。その結果、少数民族の多様な文化が観光資源として商品化され、「民族文化」として「観光文化」化されていったのである。

第3章 民族文化の表象の諸形態

第1節 はじめに

すでに見たように、中国民族観光について大別すると、2つの類型がある。つまり、民族テーマパークと民族観光村である（曾 1998、兼重 2008a など）。曾（2009）によれば、中国で観光産業はしばしば「煙のでない産業」と言われるように、そこには、環境にもやさしく、貧困救済というもくろみがあるという。そして、「少数民族村型」の観光については、辺境地域の貧困地帯において、少数民族自身を観光資源にして少ない投資で立ち上げることでできる産業として着目され、また、「テーマパーク型」観光は、広場でいろんな民族衣装を着た人々が一緒に踊り、ナレーションが入るとというのが一般的だという [曾 2009:287]。

そのほか、曾（1998）によれば、「エスニック・レストラン」も中国民族観光の1つの類型として多く利用されているという。すなわち、「国家のもとで始まった少数民族地区での民族観光はその後すそ野を広げ、大小の都市におけるテーマパークとしての民族村・民族園や、少数民族の料理と踊りや歌のショーがセットになったエスニック・レストランなど多様化してきている」 [曾 1998:44] のである。

2018年現在、中国民族観光の内容はさらに多様化している。例えば、多くの大都市や少数民族地域に広がりつつあるエスニック・レストランのほかに、少数民族地域や漢族地域の都市部の劇場で公演される少数民族の舞台劇や、一部の民族地域では民族建築などを利用した民族都市観光も展開されている。こういう現象は、都市部の民族観光に対する高いニーズを反映している。また、国家や地域政策が民族観光の発展にも関わっている一方、民族観光それ自体も市場のニーズに対応して多様化していると言える。言い換えると、中国の民族観光形態は、国家や民族地域政策の下に、少数民族文化の観光開発などの結果、多様化しつつあると言える。

他方、少数民族文化が「漢化」や都市化などにより消失しつつあるところにおいても、現在、国家の民族政策と文化政策により、多くの民族文化が「文化保護単位（文化財）」や「非物質文化遺産（無形文化財）」などの形で重視されている。その中で、民族博物館は民族文化の伝承に重要な役割を果たしており、多くの少数民族地域では、民族博物館が建設され、民族文化を重要な観光資源として保護、展示、伝承している。

馬（2003）は、中国の民族観光業に6つの類型があると指摘する。即ち、(1) 民族文化村を振興し、民族風情を展示するもの、(2) 土着文化を開発し、民族集住区に民族風情観光活動区を設置するもの、(3) 自然景観を活用し、民族風情観光のコースを作るもの、(4) 代表的な民族の祭りを選び、その観光活動を通じて地元の民族風情を披露し、観光以外の産業にもビジネスの場を提供し、民族地区のその他の産業の発展も促進するもの、(5) 民族博物館を建設するもの、(6) 民族観光商品市場の開発である [馬 2003:126-129]。これまで多くの民族観光は民族テーマパークや民族観光村を中心に議論されてきたが、馬（2003）が指摘したように、民族イベント観光や民族博物館観光が近年の民族観光の主な観光内容になっている。特に都市部における民族観光の展開とともに、エスニック・レストランなどの形で民族観光が推進されているが、馬の分類にはこれら民族観光様式については触れられていないので、

以下では、中国における民族文化の表象の諸形態として、6 つに分類する。すなわち、1) 民族テーマパーク、2) 民族観光村、3) エスニック・レストラン、4) 民族博物館、5) 民族地域の都市観光、6) 民族イベントと民族商品である。そして、この分類をもとに、土家族における観光類型の特徴について見ていきたい。

第2節 中国における民族文化の表象の諸形態

2.1 民族テーマパーク

稲垣（2011）によれば、テーマパークとはテーマ性を強調した遊園地を意味し、都市近郊に発生した行楽地におけるリゾートの性格がある [稲垣 2011:76-77]。中国の民族テーマパークは少数民族をテーマとしたリゾートである。大都市郊外と少数民族地域の中心都市内に新しく建設しているや、民族集住地域の村をそのまま開発してテーマパークにしている。また、民族テーマパークは少数民族の文化や人々を対象として多様な観光活動を展開している。

中央政府は1980年代末から民族のテーマパークを計画し、さまざまな出資形態により、91年に貴州省貴陽市郊外の「紅楓湖侗苗沖民族旅遊村」、広東省深圳市の「中国民俗文化村」、92年に雲南省昆明市の「雲南民族村」、94年に北京市の「中華民族園」を開園した。曾（2001）によれば、これらのテーマパークに共通していることは、中華民族としての多様性と一体性をいかに見せるかという点である。ここでの「多様性」とは、漢族文化が主流となっている中で、各少数民族にもそれぞれ独自の文化や民族アイデンティティがあることが国家により認可されていることを意味する。また、「一体性」というのは、少数民族の人々が少数民族としてのアイデンティティを持ちながら、漢族と同じく、中国人としての中華民族のアイデンティティも持っているということを指す [曾 2001:91-92]。民族テーマパークを通じて、「中華民族としてのアイデンティティの喚起に加えて、辺境における観光事業推進の牽引役として機能することへの期待が込められている」 [曾 2001:92] のである。

高山（2006）は、民族テーマパークには2つの種類があり、「敷地内に複数の『民族』の村を建てたものと、1つの『民族』だけからなるものがある」 [高山 2006:267] と指摘する。つまり、民族テーマパークには、単一の民族文化と多数の民族文化を対象にしたものがあるということだ。

また、曾（1998）によると、民族テーマパークは国家が出資し、地域政府もその管理に参加している国家企業の形態と、観光関連会社が自前で建設し営業している私有企業の形態があるという [曾 1998:50-56]。いずれにしても、その民族テーマパークでは、「各民族の伝承家屋や典型的な建築群を再現し、少数民族の若者たちが民族衣装に身をまとい、ショータイムに歌や踊りを披露するなどして観光客をもてなし、売店で工芸細工を販売するというのが共通して見られる」 [曾 2001:93] という。また、民族衣装体験や屋台あるいはレストランでのエスニック料理の飲食といった観光内容が現在の多くの民族テーマパークの定番になっている。

前章で述べたように、現在、中国の多くの民族テーマパークは深圳市の「中国民俗文化村」³¹と北京

³¹ 1991年10月に香港中国旅行社と中国華僑城経済発展総公司により建設された。中にはモンゴル族、彝（イ）族、苗

市の「中華民族園」³²をモデルにして、建設と運営がなされている。また、それらの民族テーマパークでは、少数民族の人々自身が観光展示されているほか、多く利用されている少数民族の文化要素としては、民族建築、民族祝日、民族衣装、民族飲食のほか、民族の歌や踊りと、民族の神話や歴史に基づいて演出された舞台劇による「民族公演」などがある。

深圳市に位置する中国の代表的な民族テーマパーク「中国民俗文化村」は中国国内の各民族の民俗や芸術をテーマに、1991年10月1日にオープンした中国で初めてのアミューズメントパークで、その20万平方メートルの敷地内には21の民族の24の村、65棟の民家が点在している。また、雲南の石林やチベットの仏教寺院など各地の代表的な20の景観も再現しているほか、雑技・武術や民族歌舞を上演する中央劇場、スタッフ総出演の民族芸術パレードが上演される民族文化広場、音楽に合わせて噴水と照明が変わる民族音楽噴泉、レストラン、屋台風の食堂街などの施設がある [曾 1998:50]。

北京にある「中華民族園」では、各風景区の伝統的家屋や村の景観が再現され、定時の上演が見学できる。また、8月の彝族の火把節、9月のワ族の新米節というように毎月のテーマが決められて、1ヵ月間その民族の伝統行事が催される [曾 1998:51-52]。現在、中国各地のテーマパークでも、民族の祭りやイベントを利用して、「民族風情」のあるテーマパークが建設され、観光活動が行われている。このように、「中華民族園」は毎月異なる民族の祭りやイベントが開催されているが、そのほかの多くの民族テーマパークでは、1つの民族のイベントを中心に観光活動が行なわれている。

「中国民俗文化村」と「中華民族園」の事例から、一般的に、多民族文化をテーマにした民族テーマパークで展示された少数民族文化は、各民族の日常生活様式や建築、宗教などの文化要素が中心である一方、民族テーマパークは民族文化の保護や伝承、さらには民族文化交流ができる場所にもなっている。また、各地の民族テーマパークは、例えば、上海市の「上海民族村」や海南省の「中華民族文化村」などのように、「〇〇民族村」という名称を使う場合が多くなっている。その理由として、「民族村」という表現が少数民族風情を深め、少数民族の村落とその民族文化がそのままの形で都市部にあるテーマパークへ移設されているという臨場感を観光客にもたせるためではないかと思われる。

例えば、雲南省の中心都市昆明市の郊外に位置する民族テーマパーク「雲南民族村」³³は、1992年か

(ミャオ)族など21民族と「土家族水上街市」、「苗寨」、「彝寨」など24の民族村がある。彝族、苗族など9の民族村では毎日民族公演が行なわれ、例えば、「彝寨」では毎日13時と16:20に「阿詩瑪的故郷」という舞台劇が公演されている。また、例えば、2018年5月1日から3日まではモンゴル族の伝統的祭り「那達慕(ナダム)大会」というように、1年間で多くの民族イベントが行われている。出典：錦秀中華・中国民俗文化村ホームページ：<http://www.cn5000.com.cn>より。2018年8月参照。

³² 「中華民族博物館」とも呼ばれる。1994年6月から営業が始まり、総面積は約50万平方メートルで、「北園」と「南園」からなる。「北園」には藏(ザン)またチベット)族、苗族、彝族など16の少数民族村があり、また「祖宗堂」、「車船驛駅」、「繡房」など14の各種民俗文化展示館がある。一方、「南園」にも約20の少数民族村があり、さらに、56の民族博物館の分館が設置されている。各民族博物館はその民族の住宅、宗教など伝統建築を参照して建設され、なかにはその民族の伝統的な文化が展示されている。例えば、土家族博物館は総面積3,158平方メートルで、2001年から運営されている。湖南省湘西自治州永順県地域の土家族伝統住宅を復原した建築であり、当地の土家族建築職人も建設工事に参加した。その博物館には住宅の「吊脚楼」以外に、祭祀施設の「擺手堂」、生産施設の「榨油坊(油を作る所)」などがある。また、博物館周辺には、湘西土家族の生活環境にある植物や農産物などが植えられている。こうして、土家族の伝統的な生産様式や生活様式が展示されている。出典：中華民俗園ホームページ：<http://www.emuseum.org.cn>より。2018年8月参照。

³³ 出典：雲南民族村ホームページ <http://www.ynmzc.cc>より。2018年7月参照。また筆者が2018年5月に現地を訪れた時の見聞と、ガイドの張氏へのインタビュー資料にも基づいている。

ら営業が始まった AAAA 級³⁴観光地（2001 年）である（写真 1、写真 2、写真 3、写真 4 参照）。



（上左）写真 1 「雲南民族村」における民族歌や踊りなど演出

（上右）写真 2 「雲南民族村」における民族服装体験

（下左）写真 3 「雲南民族村」における民族食店舗

（下右）写真 4 「雲南民族村」のガイド張さんと筆者

³⁴ これは中国の国家旅遊局の審査委員会による一種の観光地評価基準である。つまり、観光地は、観光資源の等級、安全性、交通利便性など方面から評価された後、「A、AA、AAA、AAAA、AAAAA」の 5 つの等級に分けられている。

園内には省内で暮らしている傣（タイ）族、白（ペー）族、彝（イ）族、納西（ナシ）族など 25 の少数民族の村が再現され、それぞれの民族衣装を身に着けたスタッフが対応し、定期的に歌や踊りのショーも開催される[板垣・ほか 2018:106]。また、2010 年 10 月には「雲南民族村民俗博物館」も開館し、省内の 25 の民族について、例えば、傣（タイ）族は民族踊りの「孔雀舞」とイベントの「潑水節」、彝（イ）族は民族歌の「海棠腔」や刺繍の技術と、白（ペー）族の建築と工芸品、納西（ナシ）族の宗教と文字などが展示されている。さらに、「雲南民族村」では 1996 年に「芸術培訓中心（民族芸術研修センター）」が創設され、少数民族のスタッフや年配者、技術をもつ人たちが若者に歌や工芸品の製造・販売などを教えるほか、これら技術の展示や民族舞踊、舞台劇などの上演は、観光客や地域少数民族の人々にとっても、民族文化の理解と伝承の場になっている。「雲南民族村」は、1999 年に国家民族宗教委員会により「国家民委文化宣伝司文化生産基地」に、また雲南省民族宗教委員会から「雲南省民委民族文化基地」に指定され、2009 年には雲南省政府により「雲南省非物質文化遺産保護伝承基地」として認証された。その他、「雲南民族村」の少数民族スタッフにより構成された「高原芸術団」は文化交流のため 1998 年に来日したり、2010 年には台湾原住民の「多元文化芸術団」が「雲南民族村」を訪問したこともあり、「雲南民族村」は民族文化交流活動の拠点になっている。

さらに、民族テーマパークは政治的宣伝の機能も有している。1999 年 4 月、当時の国家総書記江沢民氏が「雲南民族村」を視察し、少数民族の代表者と接見して民族団結に関する重要な談話を発表した。また、「雲南民族村」は、2007 年 12 月に、国家旅遊局により「国家旅遊名片（国家観光ブランド）」に指定され、さらに 2010 年 10 月には、ドイツの元首相も「雲南民族村」を視察し、雲南省の少数民族文化を体験した。

また、辺境に位置する多くのテーマパークは、その自然環境を利用して民族観光と自然観光を一体的に展開している。貴州省貴陽市の中国最初の辺境テーマパーク「紅楓湖侗苗沖民族旅遊村」の特徴は、「民族観光と環境観光とを一体化させた点」と「展示物で民族を紹介するのではなく、『村』が宿舎やレストランになっており、広場でのアトラクションや週末のイベントを楽しむことができる点」[曾 2001:92]にある。また、雲南省西双版纳自治州景洪市曼弄楓村における「西双版纳古納卡傣族文化園」³⁵は「傣族仏寺」、「傣族文字伝承課堂（タイ族文字の伝承場）」など傣（タイ）族の民族文化と村周辺の森林風景が一緒に観光開発されている。

現在、都市部に位置する民族テーマパーク、とりわけ観光会社私有の民族テーマパークは、都市郊外にあることが多いため交通が不便、展示された民族文化の内容の単一化や、観光宣伝不足などにより倒産や閉園に追い込まれるケースが見られる。例えば、上海の「上海民族文化村」³⁶は、1996 年に営業が

³⁵ 2008 年に営業が始まり、総面積 27,000 平方メートル。観覧は無料で、中には「傣家工芸伝承」、「古寺廟」、「傣文字伝承」などの観光施設がある。

³⁶ 上海市青浦区に位置し、隣にもう 1 つ有名なテーマパーク「上海大観園」がある。上海園林集団会社により投資され、その営業目標は「建築民族化、環境生態化、活動風情化、餐飲郷土化（建築は民族デザイン、環境はエコ、イベントは民族風情があり、飲食は郷土的）」であった。宣伝文句は「展示民族風情、弘揚民族精神（少数民族文化を展示またアピールしよう）」で、総面積は約 200,000 平方メートルである。なかには傣（タイ）族、白（ペー）族、佤（ワ）族、モン

始まり、1997年には「上海優美新景点（上海の優美な新しい観光地）」になったが、その後観光客が減少したため、2009年に閉園になった。筆者は2016年8月に上海の住民から聞き取り調査を行ったが、それによると、「小学生の時、そこに修学旅行で訪れた後は、一度も行ってない」（上海出身者、女、25歳）、「2010年に会社による週末社員旅行の一環として、そこでバーベキューをしたことがあった」（上海のIT関係会社員、男、37歳）、「開園するときに、あそこに行ったが、市内からすごく遠く、またその観光内容に興味を持ってなかったの、あれで最後」（上海出身者、男、30歳）、「開園すると、周りの人々が皆『少数民族』に興味をもって行ったが、歌や踊りなどの民族演出と民族建築のほかには何も見るものがなかった。今の人は、ほんとうに少数民族文化を体験したければ、少数民族地域に行く」（上海出身者、男、53歳）といった声が聞かれた。また湖北省の「武漢民族文化村」³⁷や海南省の「中華民族文化村」³⁸なども盛大に開園して始まったが、結局閉園になってしまった。これらの事例から、都市部の民族テーマパーク、特に私有民族テーマパークは、今日の中国の少数民族観光ブームに乗り切れておらず、多くの問題があると言える。

2.2 民族観光村

1980年代の民族観光開始の初期に、雲南省や貴州省など辺境地域にいくつかの特定の少数民族村が観光スポットとして国家により観光開発されたことが、「民族観光村」という民族観光の始まりと言える。また、近年、多くの民族地域では、民族観光村という方法を観光開発に利用するケースが多い。これら民族観光村は一般的には、交通が不便で、経済社会的発展が比較的遅れている民族地域に分布しているが、その一方で、これらの地域の民族文化は比較的よく保存されていることが多い。また、観光開発によりインフラ整備が促進され、地域や地元住民の収入増加にもつながっているケースもある。少数民族地域政府にとっても、地域や少数民族の文化資源と自然風景を観光資源としたこのような観光開発は、「低投入、高産出」という理由で、地域発展の1つの有効な選択肢となっている。

近年、民族村落の観光を促進するため、国家民族事務委員会によって「国家民委關於印發開展中国少数民族特色村寨命名掛牌工作意見的通知（中国少数民族村寨の命名工作に関する通知）」政策が実施され、2013年に全国から340カ村の「中国少数民族特色村寨」（湖北省からは21カ村）が選ばれ、また2017年に717カ村（湖北省からは28カ村）が選ばれた。

民族観光村では、「そこに居住する人たちの伝統文化や民族文化、あるいは彼ら自身や日常の生活空間そのものが、観光の対象となりうる」[兼重2008a:133]。また、民族観光村は文化展示、交流などの機能があるので、「野外博物館」ともいわれる[曾2001:96]（写真5と写真6参照）。

ゴル族など約10民族の文化が展示され、例えば傣族の竹楼や寺、佤族の鼓房などがあつた。また「食品街（民族食の商店街）」と「総合表演場（民族踊りや歌の演出場）」などが設置されていた。

³⁷ 中日合資企業であり、武漢市江夏区に位置する。苗族の「攔門酒」、「竹竿舞」と維吾爾（ウィウエル）族の「十二木卡姆」踊り、「楼蘭風情表演」など民族風情演出と、傣族など家屋の民族建築展示、土家族やモンゴル族などのエスニック・レストランと屋台、苗族の「蘆笙節」や傣族の「潑水節」などの民族祭りが観光内容になっていた。総面積は約140,000平方メートルで、なかには「水上世界」、「少年野営場」など観光施設がある。

³⁸ 通什国際康楽中心により1995年建立され、1997年4月から営業始まった。海南省通什市郊外に位置し、総面積は約400,000平方メートル、総投資金額は1.2億元である。約20の民族文化を展示し、また少数民族の代表建築の「鼓楼」、「太陽曆柱」、「長城」、「三塔」などが建設され、また民族踊りの「鍋莊舞」、「孔雀舞」、「霸王鞭」などの演出も行われた。出典：海南省政府ホームページ http://www.hainan.gov.cn/data/lyxx_jd/2003/12/64/より。2018年6月参照。



(左) 写真 5 貴州省「西江千戸苗寨景区」の「苗族古歌」の演出
(右) 写真 6 貴州省「西江千戸苗寨景区」の「西江苗族博物館」

例えば、前述のように、民族観光村が多く利用されている貴州省の民族観光の特徴は、「少数民族が実際に生活する村や祭りをする場所が観光スポットになっている点である」[曾 2001:87]。なかでも、1985 年に観光開発された黔东南自治州雷山県の「郎徳上寨」は中国の代表的な民族観光村としてよく挙げられている。また、民族観光村には一定のスタイルがあり、例えば、貴州省黔东南自治州の民族観光村では、「観光団がミャオ族の村を訪れると、村人たちは晴着を着て村の門の前で出迎え、男は蘆笙を吹き、女は歌を唄い、水牛の角の杯で酒を勧める。この村入りの儀式がすむと、広場でさらに歌と踊りを披露する。時間に余裕がある観光団は村内を自由に見学する」[曾 2001:100]という。「郎徳上寨」は、苗語から漢語への音訳で、意味は「徳川下流域に暮らしている村」で、約 5,000 人の苗族が暮らす。村では、毎日午前 10 時と午後 4 時に、「攔路酒歌」、「盛装苗舞」、「蘆笙舞」など苗族の歌や踊りが観光資源として披露されている。また、村には「銅鼓場」や「蘆笙場」など民族演芸の施設も建設され、「民族文物展示室」も設置されている。さらに、村人の住宅や日常の生産活動の全てを、観光客が自由に観光できるようになっている。「盛装苗舞」や「蘆笙舞」の公演に参加する人々は村人であり、また村内の各家から必ず 1 人は参加することになっている。

このような民族観光村スタイルは貴州省や雲南省など民族観光先進地域から全国各地の少数民族地域に至るまで広くみられ、各地の民族観光村でも自民族の民族衣装を身に着け、自民族の歌や踊りを披露することで観光客を歓待している。

しかしながら、観光の収入が不安定であること、若者の都市部への出稼ぎなどによる人手不足の問題が生じていることから、民族歌や踊りなどの上演も少なくなってきた。また、既に観光開発された民族村では、伝統的な生業も観光化などの理由で変化した上に、住民の減少といった理由から、伝統的建築物の展示だけで観光活動を展開しているケースもある。さらに、多くの民族観光村の管理運営は、

所属する地域政府や村の委員会によって行われていることが多く、管理や宣伝などには多くの問題がある。例えば、湖北省恩施自治州宣恩県沙道溝鎮彭家寨村では、村の演出隊に参加する人は村の「旅遊管理処（観光管理課）」との関係がいい人が選ばれている。また、村では「農家楽」³⁹が9軒営業しているが、政府の接待場所も、そのなかで村の「旅遊管理処」と関係のいい店に決められるといった不公平な問題がある。とはいえ、入村チケットや地域特産品の販売利益、民族舞踊の公演料などにより、民族観光村の観光開発は少数民族の人々が最も直接的に経済的収入が得られる観光形態となっている。

一方、すべての少数民族村が観光地になりうるわけではない。「少数民族らしさを失った村々は、エスニック観光開発ブームの最中にも、少数民族村としての観光スポット建設の選択をすることはなかった」[瀬川 2003a:142]。また一般的には、民族風情のある少数民族村の多くは交通が不便で辺鄙な地域に位置しており、民族観光スポットとしての経済利益を最も重視する観光開発業者にとっては選択の範囲外にある。

さらに、自然保護区や世界遺産保護区に位置する少数民族の村落は、自然環境や世界遺産を保護するため、民族観光村としての開発ができなかった。例えば、筆者が調査した湖北省恩施州咸豊県唐崖鎮の唐崖寺村には「唐崖土司城遺跡」があり、地域政府は2014年に世界文化遺産登録に向けた準備を始め、2016年に世界文化遺産地に登録されると観光整備を行った。この村は土家族の村で、家屋の多くは保存状態のいい「吊脚楼」であったが、村の「唐崖土司城遺跡」が世界文化遺産に登録されたことにより、政府はその遺跡を保護するため、多くの住民の家屋を買収後にとり壊し、一部は遺跡管理事務所として改造したのである。こうして、この村では世界遺産の保護を理由に、遺跡内に住民の個人的な観光活動が一切禁止されたのであった。

他方、前述の観光開発の条件を満たしていたとしても、すべての少数民族村が民族観光に熱心であったわけではない。特に都市部へ出稼ぎに行く若者にとっては、都市の近代的な生活の方が、村で農業などの伝統的な生活を続けるよりも魅力的だった。村が全国的に有名になる一方、外地の観光客が多くなり、一部の観光客が民家に勝手に入ってきて写真を取るといった苦情も聞かれた⁴⁰。

また、観光開発により地域の人々の経済利益が増加している反面、それは一部分の人々に限られることも多い。例えば、民族また地域の歌や踊り、楽器など演芸ができる者や民族文化伝承人、さらに、いわゆる村の有力者などは民族観光開発による経済的メリットに浴しているが、一般の村民の中にはそうした恩恵に預かれない場合もある。また、観光地になった少数民族

族村においては、村の参観料やお土産の販売、伝統的民族歌舞の上演等の観光活動により経済利益に浴することが多いが、「少数民族としての『文化的資本』を活用して、観光事業に参入しようとした人々

³⁹ 長谷 (2014) によると、「農家楽」とは、1990年代後半から四川省を発端として中国各地で流行した一種のアグロツーリズムで、田舎の暮らしを楽しみたい都市の旅行者に田舎風の民家で、手作りの田舎料理でもてなし、作物の収穫や魚釣りなどの体験もさせてくれる [長谷 2014:322]。本論の恩施州土家族地域における「農家楽」は、土家族伝統家屋「吊脚楼」を利用して、郷土料理を中心に営業している。

⁴⁰ 2017年2月湖北省恩施自治州宣恩県椒園鎮慶陽壩村の慶陽涼亭街の雑貨屋32歳のオーナーから聞き取り調査より。慶陽壩村は恩施州宣恩県椒園鎮西北部に位置し、村の人口は460戸、1,706人である。慶陽壩村の慶陽涼亭街は土家族のかつての市場で、全長561メートル、65棟の建物からなり、2008年に湖北省文物保護単位に指定された。また、慶陽壩村は2010年に「中国歴史文化名村」に指定され、2012年に「中国伝統村落」リストに登録され、さらに2017年には「中国少数民族特色村寨」リストに登録された (出典: 筆者の2017年2月宣恩県での現地調査時に、椒園鎮政府宣伝部門より入手)。

が全て成功しているわけではない」[瀬川 2003a:144] ののである。

2.3 エスニック・レストラン

エスニック・レストランは現在、中国少数民族地域および少数民族が関係する観光地に分布しているだけでなく、都市部の商店街などにも多く見られる。また、その利用者は都市に住んでいる少数民族の人々と都市の一般住民である。エスニック・レストランのオーナーは、その地域の少数民族出身者が多いが、近年、都市の漢族の住民がエスニック・レストランを営業するケースも増えつつある。エスニック・レストランの多くは、少数民族の料理とショーがセットになっており、エスニックな気分を満喫できるようになっている [曾 2002:32]。

北京の例をあげると、北京市民族事務委員会の統計によれば、1995年初頭に1,123軒のエスニック・レストラン（「民族餐館」という）が営業していた。大半はイスラム教徒のために以前から開かれていた清真餐館であるが、1995年頃から一般客をターゲットにした民族料理店が急速に増えて、モンゴル族、チベット族、朝鮮族、満族、オロチョン族、ウイグル族、カザフ族、タイ族、ミャオ族などの芸能と料理を味わうことができるという [曾 2002:53]。

エスニック・レストラン流行の要因について、曾（1996）は需要側と供給側の2つの立場から分析している。需要側の要因としては、豊かになった市民生活と民俗ブームが、また、供給側の要因としては、少数民族の人々にとっても都市の観光・娯楽産業や外食産業は有望な働き口になっていることが挙げられる [曾 1996:3-4]。

また、エスニック・レストランを大別すると、2つの種類がある。1つは、1つの民族の飲食専門店であり、もう1つは、地域の代表的な民族料理を出しているレストランである。たとえば、前者の例として、都市部の商店街には蒙古族や苗族など個々の民族をテーマにした「蒙餐厅」や「苗餐厅」が流行っている。後者の例として、「雲南民族村」では民族料理の他にも地域の郷土料理「過橋米線（素麺）」や「竹筒飯（竹飯）」などが提供されている。また、「当地的、原生态（原産地）、健康的」は、多くのエスニック・レストランが食材と少数民族文化を表す宣伝文句として使っている言葉でもある [曾 2002:32-33]。

エスニック・レストランには、民族料理と民族歌などのショーの上演のほか、飲食店の外観やその室内装飾についても、その民族の代表的模様（織物模様やトーテムなど）の壁紙を使ったり、民族宗教などに関する絵や彫像を利用したり、さらには、民族神話や独特の民族習俗を壁に描いて宣伝や広告として使うこともある。飲食メニューには、民族言語と漢語の両方を利用したものがよく見られる。さらに、従業員は全員民族衣装を着用し、客に民族飲食に関する食事作法を説明したり、民族言語で挨拶したりする。また、近年、中国各地で「勸酒歌（または進酒歌）」と呼ばれる民族歌を歌って、少数民族の従業員が客にお酒や料理を勧めるといったケースも多くなっている（写真7と写真8参照）。



(左) 写真7 湖北省恩施自治州恩施市土家族のエスニック・レストランの「巴人堂」

(右) 写真8「巴人堂」の店内

漢族や他の少数民族の人々は、このようなエスニック・レストランの雰囲気を経験することで、民族食に対する好奇心を満足させることもあれば、この民族の食事作法を含む食文化を理解することができず、味覚もあまり合わないこともある。こうして、都市部のエスニック・レストランの常連客には、この民族出身者が多く占めることになる。また、エスニック・レストランはその民族出身者にとっては、「大都市にはこういう故郷と関わりがある所があると安心でき、ホームシックになったらここに来ればよい」(20代、大学生、男性)、「ここに住んでいる故郷の知り合いや友達は飲み会がある時はここを利用し、オーナーも同郷人なので、ここを利用するのは安心」(20代、会社員、女性)、「いつも民族の味を食べたくないと、家族を連れてここに来る」(50代、会社員、男性)、「ここでよく家族の誕生日など宴会を開催する」(30代、公務員、男性)といった声から、エスニック・レストランは、都市に暮らす異郷の少数民族の人々の第二故郷となっていて、民族料理の習俗はこれら都市部のエスニック・レストランで継承されている一方、その同じ民族出身者の集会や民族儀礼などの開催場所としても機能していると言えるだろう。

2.4 民族博物館

民族博物館は、近年、ますます盛んな民族観光様式の1つとなっている。多くの民族地域や民族観光地では民族博物館が建てられ、それらの地域や民族に関する観光の重要な拠点となっているほか、文化交流や教育活動の場としても機能する。

中国の民族博物館は、多様な少数民族文化を一同に展示するものもあれば、また、1つ民族を専門に扱ったものもあるが、大まかに分かれば以下の2つのタイプがある。1つは、公立民族博物館で、国や市、県郷などの地域政府により建設運営されているものや、中国の民族大学に設置・運営されているもの(例えば、中央民族大学、中南民族大学、西南民族大学などの民族博物館など)もある。その中で、北京市の中国民族博物館は唯一国家の民族博物館であり、1995年から運営されている。中国民族博物

館は中国民族宗教委員会に所属し、館内では56の民族に関して、各民族の代表的な文化要素（服飾、生産道具、宗教儀礼、民族の有名人など）が展示されていて、一年を通して様々な民族の特別展も行われているほか、他の教育研究機関と合同で展示会を開催したりしている。例えば、2018年8月16日から10月22日まで、中央民族幹部学院と合同で、土家族に関する「西蘭卡普—中国土家族織錦文化展」が中央民族幹部学院1号楼で開催された。この展示会には、土家族の織物の「西蘭卡普」約80枚が展示されたほか、土家族風情の写真も100枚ほど展示され、21分間の「西蘭卡普」のビデオも繰り返し放映された⁴¹。また、現在、少数民族地区に建てられた公立民族博物館には、雲南民族博物館⁴²や海南民族博物館、貴州民族博物館、広西民族博物館の他に、一部の自治州や県の民族博物館がある。その中でも雲南民族博物館が、最も規模が大きいことで知られる。この博物館は1995年に落成し、敷地は約133,300㎡、総投資額は1億人民元に達する。特定のテーマが設定されていて、雲南省の少数民族の社会形態、民族衣装、工芸、年中行事や民族楽器などが展示され、民族観光の発展に補助的な役割を果たしている[馬2003:129]。また、貴州省の民族博物館は、1958年に設立された総合博物館である。特に少数民族の文化財や芸術品の収蔵と保存、伝承が、その重要な役割である[張勝蘭2009:136]。これらの民族博物館は、行政的文化施設として運営され、民族文化の展示や交流、伝承、保護、研究といった機能をあわせもつほか、地域の観光施設としてや、地域政府による観光宣伝との場としても重要な役割を果たしている。

もう1つのタイプは、民間の民族博物館で、観光会社や個人による観光施設として存在する。特に、民族観光村には観光スポットとして「〇〇民族博物館」という観光施設がよく見られる。例えば、貴州省西江千戸苗寨には観光会社により設置・運営されている「西江苗族博物館」があり、地域の苗族の歴史や神話、服飾、薬、イベントなどについて展示、紹介されている。また、後述する湖北省恩施の事例では、恩施市内に「土家女兒城」という土家族テーマパークが建立され、この中に「土家族民俗博物館」があり、主に、土家族の農業用刃物、服飾以外、特に婚姻習俗に関する嫁入り道具などが展示されている。こういう観光地内に設置されている私設の民族博物館は、一般的に3~5つの展示室があり、中の展示品は観光会社や博物館所有者によって決められている一方、入館料が入園料に含まれており、少数民族と地域の歴史、宗教信仰、服装や婚姻習俗、食文化などが紹介されている(写真9と写真10参照)。

⁴¹ 出典：中国民族博物館ホームページ <http://www.cnmuseum.com> より。2018年9月参照。

⁴² 中国において規模が一番大きい民族博物館であり、国家級の「全国科普教育基地」と「民族団結教育基地」、雲南省の「愛国主義教育基地」、省内の約40の小中学校、高校と大学の「教学、教研、実習基地」でなっている。館内には、主に雲南省内の少数民族のほか、55の各少数民族の「民族服飾与製造工芸」、「民族楽器」、「伝統生産生活技術」などの民族文化に関する展示もあり、特に、中国民族服飾に関する収集は中国国内博物館で最もよく整備されている。出典：雲南省民族博物館ホームページ <http://www.ynnmuseum.com/abouts.html> より。2018年9月参照。



(左) 写真9 「土家族民俗博物館」の外観

(右) 写真10 「土家族民俗博物館」の家具の展示

この2つのタイプの民族博物館は民族地域や観光地にとって、経済発展の1つ手段でもある。武内(2014)は、貴州省の西部六枝特区梭戛(ソカ)郷高興村の民族博物館設立の事例について、地元側にとっては「多くの観光客が訪ねることで現金収入がもたらされるなど、貧困脱却の手段として受けとめられたという一面もある」[武内2014:416]と述べている。

博物館は来館者が目的地の歴史や文化を短時間で概観できるため、観光の対象として選定されやすいことも、博物館と観光を強く結びつける一因となっている[鄒2018:206]。また、博物館は、収集・保存・調査研究という機能のほか、大衆に娯楽と教育を提供する役割を担い、あらゆる人に開放される施設である。そして、観光における博物館の役割は、外地からの観光客が地域文化を認識するきっかけとなることであり、また市民にとっては地域の歴史・文化を再認識し、アイデンティティを再確立することにあると考えられ、そのための場所として必要な存在だと言える[鄒2018:208]。

このように、この2つのタイプの民族博物館は、民族文化の展示や交流といった機能を果たしている一方、公立の民族博物館は民族文化の伝承や保護という機能があるのに対し、私設の民族博物館は少数民族の人々や観光業者にとってはその経済効果という機能が重要になっている。また、これら2つのタイプの民族博物館は、少数民族の人々の民族アイデンティティの再確立や強化という面でも機能している。

地域外の人々に対して、展示を通じて地域の歴史と文化を提示するだけでなく、博物館を観光資源として利用するためには、来館者に「ここでしかできない体験」を提供することも必要である[鄒2018:211(山浦2008)]。つまり、民族博物館は民族地域にとって、地域観光の多様化という点でも重要である。

貴州省では、近年、観光を経済の中心政策の1つとして位置づけ、観光産業の国際競争力を高めるために、人材の育成、観光地の環境整備などに力を入れている[鄒2018:215]。なかでも民族博物館の持つ独特な民族文化体験の効果を重視し、地域観光の重要な一環と位置づけている。

こうして、民族博物館は民族文化の伝承や保護に重要な役割を果たしているほか、経済効果も期待されている。しかし、注意しなければならないのは、観光会社や個人による私設の民族博物館における民

族文化の展示は、その正確性や信憑性といった点で多くの問題があることだ。例えば、筆者は2017年8月に恩施市で現地調査を行った際、地域民族幹部から、土家族テーマパーク「土家女兒城」の「土家民俗博物館」の展示に関して、歴史的に土家族の婚姻習俗では恩施地域の「土司（土王）」が「初夜権」を持っているという説明がなされているが、これは一部のごく限られた地域の習俗であり、また、恩施「土司」に関する歴史資料も不明だとの説明を受けたことがある。

2.5 民族地域の都市観光

民族地域の都市の観光は、当初は、雲南省昆明市のような辺境地域の少数民族都市などで始まった。当時、少数民族地域の都市は、民族風建築を利用して民族の雰囲気を出し出す場合が多い。この民族風建築は、町の役所や学校などの公共施設にも利用された。また少数民族の人々が住んでいた都市の古い街の景観をそのまま残して利用する観光開発も行われた。近年、内陸部の民族地域では、都市化による「漢化」の影響の進展に伴い、少数民族地域の従来の伝統的な建築群や街が消滅しつつある。そこで、少数民族の代表的な建築などが市内や都市郊外に建設され、これを地域の代表的建築とした民族観光が行われている。

また、多くの民族地域では、都市の中や郊外に伝統的建築群を移築あるいは再建・保存し、「歴史文化名城」、「文化古鎮」、「国家文物保護単位」などとして国家文化保護機関により認定された後、民族観光が展開されたりしている。

中国の歴史的市街地の保全は、「歴史文化名城保護制度」に基づき、「中華人民共和国文物保護法」や「中華人民共和国城市規劃法」により法的な位置づけがなされている。中華人民共和国文物保護法では、歴史的価値を有する都市を國務院の承認の下で「歴史文化名城」に指定できる〔落合2018:158〕。こうして近年の「歴史文化名城」観光が全国的に展開されている一方、民族地域の都市部でも、少数民族が住んでいる町を「古鎮」や「古城」などとして観光開発がなされている。中国の多くの地域では旧市街地を「古鎮」や「古城」と呼び、またその場合の「鎮」や「城」は「街」を意味する。

雲南省麗江古城の事例では、麗江は1986年に「歴史文化名城」に指定され、1994年には「雲南省麗江歴史文化名城保護管理条例」が雲南省の地方法規として成立し、地方行政における法的根拠が示された。また、1995年には「麗江城市総体規画修編」が策定され、「麗江歴史文化名城保護規画」が雲南省人民政府により批准された〔落合2018:158〕。当時の麗江古城では、「四方街」、「木府」、「五鳳楼」など古い街や建物を旧市街や建築文化として展示する一方、ここの住民である納西（ナシ）族などの少数民族の人々の日常習俗が観光対象とされた。

地域の古い街と民族文化を組み合わせた展示という観光類型、すなわち、現有の地域資源は辺境民族地域にとって一番有利な選択であるため、この観光類型は多くの民族地域で流行っている。90年代初期から観光開発された雲南省の場合は、自然風景、少数民族風情、さらに地域の歴史的街並などが観光開発されている。1990年代中期から観光開発された麗江古城観光の成功は、中国国内のほかの民族地域にとっても、「古城観光」の重要な観光モデルになっている。

しかしながら、「歴史文化名城」観光は、地域に対して負の面も併せ持つ。2007年の第31回世界遺産委員会では、過度な観光商業化が歴史的町並みの保存と少数民族の伝統文化の継承に負の影響を及ぼしているとして、中国政府に対して改善要求が出され、現在に至っている〔落合2018:160〕。また、町並

み保存により、現代的な住宅を建てることができないことや、大量の観光客が生活空間に流入して生活環境が悪化したため、旧市街地住民が現代的で便利な住宅や観光客に邪魔されない環境を求めて新市街に転出してしまったことにより、旧住民の減少が顕著となってしまうといった事態も生じている [落合 2018:160]。

また、地域の少数民族住民にとって、観光開発は彼らの生活様式を変える一方、「古城」や「古鎮」で展示されている民族文化はすでに建築しかないといった状況も出てきている。例えば、須藤 (2013) によれば、納西族の居住地域であるはずの古城の人通りの多い地区に、納西族の人々はほとんど住んでおらず、観光客があまり行かない古城地区の奥の方まで行ってみると、その四合院作りの伝統家屋にもテナント募集の張り紙が貼られていて、結局、古城地区 (四方街) に住んでいた納西族の住民の多くは、今では古城には住んでいないという。彼らは、自分の家を外から来た漢族 (一部は他の少数民族や他の地域の納西族) 業者に貸し、一家は古城地区から離れたマンション等に住んでいるが、自分たちのコミュニティーが懐かしくて昼間は毎日のように古城地区に通っている納西族の姿が見かけられるという [須藤 2013:51-52]。

さらに須藤 (2013) は納西族の古城地区の観光化を次のように分析する。すなわち、観光化の圧倒的な力によって、納西族の「生活」の文脈は「観光」の文脈に置き換えられて、故城内には観光客のための劇場があり、納西族の踊りがプロの役者によって演じられ披露されているが、観光客に示す文化は彼らの「生活」の残り香のある建物だけであり、「生活」そのものではない。彼らの「生活」は彼らの住居から「排除」されているのだ [須藤 2013:52]。

しかしながら、すべての民族地域で都市観光が展開可能とは限らない。一般的には、交通などの観光インフラの整備と、その地域の民族風情が観光客にとって興味が持てるものであるかどうかで都市の観光開発の可能性が決まってくるだろう。

2.6 民族イベントと民族商品

民族観光においては、代表的な民族の祭が選ばれ、その観光活動を通じて地元の民族文化を披露し、観光以外の産業にもビジネスの場が提供され、民族地区のその他の産業の発展も促進される [馬 2003:129]。また、民族イベントは民族や地域のアイデンティティを強化する効果もあり、どの民族もそれぞれの民族イベントを持っている。そして、その民族イベントに利用される文化要素もその民族の代表的あるいは核心的文化であることが多い。

例えば、鈴木 (1998) によると、「蘆笙」(ロショウ) はミャオ族のどの祭りでも使われることから、郷政府は男女、村、村連合、郷という各単位を結びつける社会的機能に着目して、ミャオ族の核心的文化的要素として徹底して利用した。その結果、祭りがこれまでの地域圏を越えた広域での人々の交流を作り出し、均質化をもたらし、ミャオ族らしさや民族性が「蘆笙」と結びついて民族文化を再構成する方向へ進んでいるという。このように「民族意識」を形成していく要因として、行政の働きかけは大きいと指摘する [鈴木 1998:180]。

また、トン族の事例では、黄金週のイベントは、地元でその時期に行われる年中行事や日常生活の作業を観光資源として活用するために、それを観光イベントに仕立て上げ、観光客もその一部に参加できるように工夫をこらしている。また、年中行事の観光イベント化は、地元の年中行事の開催日を週末の

休日など集客しやすい日に移す傾向がみられる [兼重 2008a:147]。

さらに、多くの民族地域では、観光開発とともに民族の祭りやイベントがその地域の代表的なイベントや祭りになる傾向があり、第5章で取り上げる「女兒会」も土家族のイベントから恩施地域の祝日とになっている。

また、多くの民族イベントには経済効果もあるため、現在多くの民族地域においてイベント期間中に、主に外来の観光客を対象に地域特産品を販売していて、観光商品にもなっている。観光商品には、美術工芸品や記念品、收藏品、食品などがあり、どの民族省区にも、観光商品を開発する企業がある。商品は多種多様で、それぞれ特色がある [馬 2003:129]。例えば、民族観光商品の主なものとしては民族工芸品（織物等）や地域特産品（郷土食や漢方薬等）などがある。それら民族観光商品はいずれも各民族の特色を出す工夫が見られる。なかでも、民族服飾は民族観光に最も利用されている文化資源の1つである。伝統的に受け継がれてきた民族衣装は、その民族の有する工芸技術の水準や民族の記憶や思想、社会性を映し出す鏡であり貴重な文化遺産でもある [山村・北川 2007:110]。例えば、雲南省のトンバ族には、トンバ画という有名な民族観光商品があり、1996年前後に麗江が世界的な観光地として認知され観光客数が急増したことに伴い、トンバ画は観光土産品としてアレンジされ始めたという [山村 2007b:160]。

また、2017年8月30日と31日の2日間、内モンゴル自治区包頭市で第一回「中国特色旅遊商品大賽（中国特色観光土産大会）」が中国旅遊協会により開催され、全国各地の観光土産品として食品、酒類、化粧品、おもちゃ、工芸品など約20種類、合計15,000点が展示販売された。その中には、土家族と関係がある工芸品として、重慶市の「秀山竹編」、湖北省の「龍船調刺繡養生枕」と『世界文化遺産』唐崖土司城系列文化創意產品設計」などがあった⁴³。民族観光商品の開拓は、伝統的民族手工業を近代的な企業に発展させることにもつながったのである [馬 2003:130]。

第3節 土家族における観光の諸形態

上述したように、土家族観光にも多くの観光形態がある。まず、民族テーマパークの場合は、「中華民族園」などのような多くの民族テーマパークの中の1つとして観光展示される一方、土家族文化を唯一のテーマにした民族テーマパークの観光も展開されている。後者が出現するのは、1990年代中旬以降で、これら土家族のテーマパークは、主に土家族地域に分布しており、それらの地域にとっては重要な観光施設であり、地域や民族文化の宣伝や伝承の施設にもなっている。例えば、湖北省の「恩施土司城」（第4章で詳述する）や湖南省の「土家風情園（張家界土家風情園）」などがある。ここでは、湖南省に位置する「土家風情園」の事例を取り上げる⁴⁴。

湖南省の「土家風情園」はAAAA級景区（2003年）で、張家界市内永定区南莊坪五子坡にあり、1999

⁴³ 出典：中国経済ホームページ http://travel.ce.cn/gdtj/201709/04/t20170904_5627959.shtml より。2018年7月参照。また、第2回の「中国特色旅遊商品大賽（中国観光商品大会）」は2018年9月4日～7日まで四川省樂山市で開催され、約2万件の観光土産が展示販売された。

⁴⁴ 出典：張家界旅遊景點在線ホームページ <http://www.zjjto.com> と、張家界中信国際旅遊有限公司ホームページ <http://www.china-zhangjiajie.com/zt/jq/tjfq/> より。2018年8月参照。

年に営業が始まった。総面積は約 53,000 m²、総投資額は 7,500 万元である。「土家風情園」（当地の人々は「土司城」とも呼ぶ）は、土家族の歴史、建築、宗教、食文化などが観光資源として展示されている土家族テーマパークである。また園内の土家族民族文化の展示は、張家界市政府が湖南省内または他地域の専職の演者（そのなかで湖南省民族歌舞団が一番多い）を募集し、土家族の婚姻習俗「哭嫁」（クジャ）の歌と踊りである「毛古斯」（マオグス）などを演出する。さらに土家族と苗族の文化に基づく民族舞台劇「土苗風韻」が、園内の「畢茲卡聖火堂」で上演されている。

表 3-1 「土家風情園」の活動劇目表

時間帯	観光活動内容
8:00～19:00（終日）	土家攔門酒
8:00～10:00	擺手場民俗風情活動
10:00～10:20	擺手場百人擺手活動
10:20～16:00	擺手場民俗風情活動
16:00～16:30	土家族百人大祭祖活動
16:30～18:30	擺手場民俗風情活動
20:00～最後まで（24 時頃迄）	社巴節（篝火晚會） （毎年 3 月 8 日～10 月 31 日まで期間限定）

出典：張家界中信国際旅遊有限公司ホームページ <http://www.china-zhangjiajie.com/zt/jq/tjfqy/>
（2018 年 6 月参照）より筆者作成。

表 3-1 から、「土家風情園」で利用されている土家族の文化要素は、踊りの「擺手舞」である。また、土家族テーマパークでも、特に苗族観光村の「攔門酒（お酒を飲まないと言には入れない）」という文化要素が利用されている。これは、中国の他の民族テーマパークにもよくあることである。他方、石牌坊の「東南第一功」⁴⁵、土家族料理を中心にしたエスニック・レストランの「土司宴会」や民族歌や踊りなどの上演場所「大擺手場」と「畢茲卡聖火堂」、祭祀場所の「擺手堂」、吊脚楼建築の「九重天世襲堂」、「土司王宮」、「綉女楼」などがある。また、テーマパークでは、民族衣装を着けた少数民族のスタッフたちが歌や踊りを披露する。

こうして、土家族テーマパークは、土家族の伝統建築様式「吊脚楼」を観光のメインにして、土家族地域のかつて統治者「土司」の歴史文化にもとづいた彫刻や宗教儀式、民族風情の演出、エスニック・レストランなどを通して、土家族という 1 つの少数民族文化を展示する。さらに、テーマパーク内にはがあり、土家族の食文化が体験できる。

また、これまで、多くの土家族地域では、土家族村寨の民族観光村が利用される場合が多い。これについては、前述した理由のほか、土家族の代表的文化要素である伝統家屋の「吊脚楼」建築を利用することができ、また「漢化」の程度が大きい土家族にとって、観光客に自民族の「少数民族風情」を体験

⁴⁵ 歴史上、明朝の嘉靖皇帝より土家族祖先に対して、対外戦争への勝利に対する表彰であった（園内の観光紹介より）。現在「土家風情園」はその歴史を利用して、園内の土家族歴史の一部として展示している。

させるため、都市部から離れた「原生態」がある土家族村落は最適の選択になるであろう。これらの民族村は、よく「土家族寨子」という名称が使われ、主に、村落内の「吊脚楼」建築群を観光アイテムにしている。例えば、湖南省湘西州永順県双鳳村⁴⁶は「中国土家第一村」と呼ばれ、村の中には「摆手舞」の場所「摆手堂」が設置され、「摆手堂」のそば案内板には「摆手舞演繹刀耕火種、毛古斯⁴⁷再現洪荒狩獵（『摆手舞』は土家族の生産活動を表現している一方、『毛古斯』は土家族の歴史話を表している）」と記されている。村に入る際には、「攔門酒」の歓迎式があり、その後、「摆手堂」で村民の「摆手舞」や「毛古斯」の演舞が披露される。また、村には村民が営業する「農家楽」があり、当地土家族の民族料理が食べられる（料理は「土家臘肉」、「土家咂酒」と「米粉」などがあり、食事代は料理によって1人25～100元）。また、近年「中国土家第一村」という名称は、多くの土家族地域村落で利用されている。例えば、現在、湖南省龍山県苗児灘鎮撈車河村⁴⁸や貴州省銅仁市江口県太平郷雲舍村⁴⁹などの土家族村落では観光宣伝のため、この名称が利用されている。

近年、土家族地域においては、主に自然風景区で民族文化を利用した観光開発が促進されている。中国の多くの少数民族地域にとっても、いい自然環境と独特な民族文化は地域観光の「売り」となっているため、自然観光と民族観光が一緒に展開される場合が多い。土家族の多くは、山地部に分布し、それらの地域はカルスト地形が多いため、鐘乳洞や石林を開発して自然観光地としている。また、こういう自然観光地には、土家族文化も展示されている。この代表的な例として、湖南省に位置し、1992年に世界自然遺産地に登録された「武陵源風景名勝区」がある。

「武陵源風景名勝区」は、主に「張家界国家森林公園」、「索溪峪自然保護区」、「天子山自然保護区」、「楊家界風景区」からなっていて、総面積は約500平方キロメートルである。2004年には国家レベルの世界地質公園に指定され、また2007年にAAAAA級観光地になっている。土家族の民族文化は「武陵源風景名勝区」の中では展示ができなくなったが、地元のガイドなど観光スタッフが土家族風の衣装を身につけ、土家族の文化を紹介し、土家族の歌や土家語で祝福の言葉をかけることなどを通して観光活動を行っている。そのほか、土家族や地域の文化をテーマに創出された舞台劇「梯瑪神歌」、「魅力湘西」、「煙雨張家界」、「聖歌武陵」があり、なかには「魅力湘西」が「中国首部・原生態民俗文化全景呈現（中国第一部原生態民族文化全景表現の舞台劇）」を宣伝文句にし、その演出内容には地域独特の文化「趕屍（死体を運ぶ）」⁵⁰と土家族文化の「毛古斯」、「哭嫁」、「女兒会」などが観光地周辺の劇院で上演されている。

また、民族イベントを観光の目玉にした民族観光も展開されている。例えば重慶市石柱土家族自治県の「毕滋卡節」（毎年の6月9日～12日まで）、湖北省恩施土家族苗族自治州の「女兒会」などがある。

⁴⁶ 土家族に関して民族識別際には、潘光旦はここで現地調査を行い、この村の土家族を事例として「土家族は1つの単一民族である」の観点を証明した。また、土家族の代表文化の「摆手舞」と「毛古斯」などは、村での「摆手舞」と「毛古斯」を原型にして整理されたあと、現在には、全村総人口数は325人、全員土家族であり、またほぼ全員土家語を話すことができる。村には、国家級非物質文化伝承人：田仁信（「摆手舞」）、彭英威（「毛古斯」）がいる。

⁴⁷ 第4章を参照する。

⁴⁸ 村総面積29.23平方キロメートルであり、総人口数は1,908人である。「武陵土家第一寨」とも呼ばれるように、近年には、村において観光開発が進んでいる。また「中国歴史文化名村」、「全国特色景観旅遊名村」、「中国伝統村落」、「中国土家織錦之郷」、「国家級非物質文化遺産項目土家織錦生産性保護示範基地」、「湖南省十大特色村寨」、「美麗示範鄉村」である（2017年筆者現地調査でもらえる資料より）。

⁴⁹ 村に関して詳細な記述については、第4章を参照する。

⁵⁰ 出典：張家界魅力文旅發展会社ホームページ <http://www.meilixiangxi.cn> より。2018年6月参照。

筆者は2016年8月、湖北省恩施自治州で調査を行った際、恩施市旅遊局（観光局）のインフォーマントの1人に対し、恩施州の土家族観光の特徴について尋ねたところ、彼は、「恩施地域土家族観光は『女兒会』というイベントを観光の中心にして、土家族テーマパークと土家族伝統村落の観光、さらに、自然観光の地域で土家族の文化も展示するという方法で展開されている」と説明してくれた。

こうして、土家族の民族観光では、民族テーマパークが多く利用されている一方、民族観光村や自然観光などほかの観光形式と一緒に展開される場合も多い。また、近年、後述する「女兒会」などの民族イベントを土家族地域の重要な観光形式にした民族観光も展開されている。

第4節 小括

本章では、中国における民族文化の表象の諸形態として1) 民族テーマパーク、2) 民族観光村、3) エスニック・レストラン、4) 民族博物館、5) 民族地域の都市観光、6) 民族イベントと民族商品の6つに分類し、それぞれについて詳しく見ていった。

現在、中国の多くの民族テーマパークは深圳市の「中国民俗文化村」と北京市の「中華民族園」をモデルにして建設と運営がなされ、少数民族の人々自身が観光展示されているほか、民族建築、民族祝日、民族衣装、民族飲食のほかに、民族の歌や踊りと、民族の神話や歴史に基づいて演出された舞台劇による「民族公演」などが少数民族の文化要素として多く利用されている。民族テーマパークは民族文化の保護や伝承、民族文化交流、さらに、政治的宣伝の機能も有している。

「民族観光村」という民族観光の始まりは、1980年代初期、雲南省や貴州省にいくつかの少数民族村が観光スポットとして国家により観光開発されたことにある。民族観光村では、そこに居住する人たちの伝統文化や民族文化、彼ら自身や日常の生活空間そのものが、観光の対象となり、文化展示、交流などの機能があるので、「野外博物館」ともいわれる。近年、多くの民族地域で、民族観光村という方法が観光開発に利用され、インフラ整備が促進と地域や地元住民の収入増加につながり、少数民族地域政府にとっても、「低投入、高産出」という理由で、地域発展の有効な選択肢となっている。

エスニック・レストランは現在、中国少数民族地域ばかりでなく都市部の商店街などにも多く見られ、少数民族の料理とショーがセットになっていることが多い。エスニック・レストランには、民族の飲食専門店と地域の郷土料理レストランがある。エスニック・レストランは、都市に暮らす異郷の少数民族の人々の第二故郷となっていて、その同じ民族出身者の集会や民族儀礼などの開催場所としても機能している。

多くの民族地域や民族観光地では博物館が建てられ、それらの地域や民族に関する観光の重要な拠点となっているほか、文化交流や教育活動の場としても機能する。公立民族博物館と私有の民族博物館が存在し、公立の民族博物館は民族文化の伝承や保護という機能があるのに対し、私有の民族博物館はその経済効果という機能が重要になっている。しかし、私有の民族博物館は、その民族文化の展示の正確性や信憑性といったことが問題となる場合もある。

民族地域の都市の観光は、雲南省昆明市のような辺境の少数民族都市で民族風建築を利用して始まった。また少数民族の人々が住んでいた都市の古い街の景観をそのまま残して利用する観光開発も行われ

た。さらに、多くの民族地域では、都市の中や郊外に伝統的建築群を移築あるいは再建・保存し、「歴史文化名城」、「文化古鎮」、「国家文物保護単位」などとして国家文化保護機関により認定された後、民族観光が展開されたりしている一方、民族地域の都市部でも、少数民族が住んでいる町を「古鎮」や「古城」などとして観光開発がなされているが、観光開発は彼らの生活様式を変える一方、「古城」や「古鎮」で展示されている民族文化はすでに建築しかないといった状況も出てきている。

民族観光においては、代表的な民族の祭が選ばれ、その観光活動を通じて地元の民族文化を披露し、観光以外の産業にもビジネスの場が提供され、民族地区のその他の産業の発展も促進される。現在多くの民族地域においてイベント期間中に、地域特産品を販売していて、観光商品にもなっている。

本章の最後に、土家族の観光形態についてみた。まず、土家族の民族テーマパークは、土家族文化を唯一のテーマにした観光が展開されている。特に土家族の伝統建築様式「吊脚楼」を観光のメインにして、土家族地域のかつて統治者「土司」の歴史文化にもとづいた彫刻や宗教儀式、民族風情の演出を通して、土家族という1つの少数民族文化を展示しているものや、民族衣装を着けた少数民族のスタッフたちが歌や踊りを披露するもの、さらに、エスニック・レストランで土家族の食文化が体験できるものなどがある。また、恩施地域土家族の観光は「女兒会」というイベントを観光の中心にして展開されている。

以上、土家族観光には、民族テーマパークと民族観光村を中心にして観光活動を展開しているほか、自然観光などと一緒に展開している場合が多い。

次章では、湖北省で土家族の人口が最も多い恩施州の民族観光を事例にして、恩施地域や土家族の人々がどのようにして自民族の文化を観光資源として観光開発してきたのかを見ていきたい。

第4章 湖北省の土家族と民族観光

第1節 はじめに

日本における土家族民族観光に関する先行研究として、高山（2007）と瀬川（2005）などがある。高山（2007）は、土家族の民族認定の歴史を踏まえ、特に湖南省土家族観光の発展経緯と状況について述べている。瀬川（2005）も、土家族の成立とその後展開された民族の歴史と文化の急激な復興・創出運動について、現代中国の国家制度がもたらした新たな「民族」概念とそれに基づいて形成された民族単位「土家族」を、人々がひとまず所与のものとして受け入れた上で、新たな社会秩序の中に自らの地歩を築いてゆこうとする模索の一コマを表すものに他ならないと述べる〔瀬川 2005:358〕。

そこで、本章では、まず土家族の概要について説明し、次に、土家族の観光開発のなかでよく取り上げられるいくつかの文化要素について見ていく。さらに、湖北省の土家族の民族観光を事例に、現在の土家族の民族観光の実態と、土家族人々がどのようにして自文化を観光資源として観光開発してきたのかということについて見ていく。

第2節 土家族とは

中国の少数民族のうちの1つである土家(トゥチャ)族は、人口約835万⁵¹（2010年の統計）である。「民族識別」⁵²によって、1956年10月に単一の民族として認可された⁵³。土家族の存在が国家によって承認されるまでには、複雑な手続きが求められ、正式決定に至るまで長い道のりを要した〔山路 2002:42〕。その後の中国の「民族地域自治」により、土家族の居住地域としては、1957年に成立した湖南省湘西土家族苗族自治州と、1983年に成立した湖北省鄂西土家族苗族自治州（現在の湖北省恩施土家族苗族自治州）の2つ自治州の他に、湖北省、湖南省、貴州省と重慶市に8つの土家族自治県（うちの4つは土家族苗族自治州）がある（図1参照）。土家族は分布地域によって、ほぼ「北支」⁵⁴と「南支」⁵⁵に区別される。「北支」の土家族は土地の人を意味する「bizika」（ビズィカ）⁵⁶と称され、「南支」の土家族は巴人を意味する「mozihei」（モズィヘイ）⁵⁷と自称している。

⁵¹ 中国国家统计局のホームページ：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm> より。2016年8月参照。

⁵² 中国政府が1950年から始まった民族政策であり、各民族の身分の確認が目的である。1983年に、中国が55の少数民族と漢族を確認でき、それ以降、中国には56の民族が存在することになっている。

⁵³ 土家族が1つの民族として認可された一番重要な理由は、独自の言語を持っているということであった。

⁵⁴ 湖南省の湘西土家族苗族自治州と張家界市、湖北省の恩施土家族苗族自治州と宜昌市の土家族。

⁵⁵ 重慶市の渝東南地方、貴州省の黔東北地方と、湖南省湘西土家族苗族自治州鳳凰県の土家族。

⁵⁶ 土家族言語での意味は、ここの人。

⁵⁷ 土家族言語での意味は、巴国の子孫、巴人。

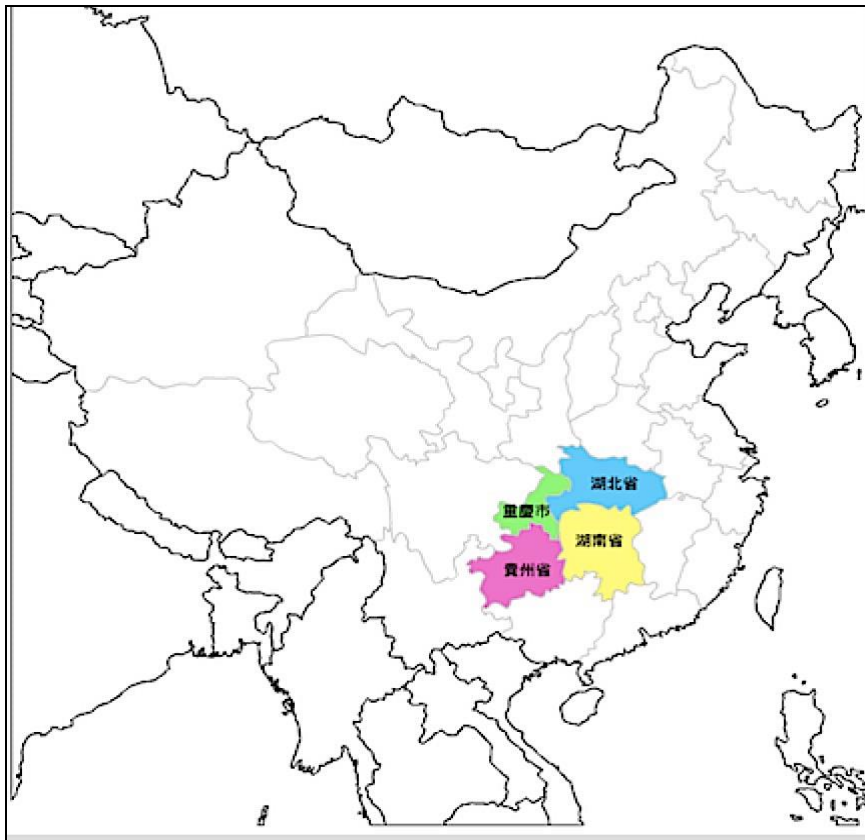


図1 土家族の主要分布地域

出典：筆者作成

これまで、日本の土家族に関する多くの先行研究では、土家族を漢字として表記する以外には、トゥチア、トゥチャ、またトゥチャなどのカタカナ表記が用いられてきた。本稿では、引用文以外の場合、土家族を漢字で表記し、またその発音はトゥチャを使うことにする。

土家族の民族識別ならびに民族自治単位の設立は、他の多くの少数民族と比べてやや後発的であった。民族識別よりも前の時代、すなわち歴代の王朝国家時代から民国期までの土家族の前史に当たる時代には、自称としての「トゥチア族」も存在せず、また他称としての「土家」が定着していたわけではなかった〔瀬川 2005:338〕。

宋代以前に武陵山区に住んでいた土家族の人々には「武陵蛮」や「五溪蛮」という蔑称があったが、宋代以降の土家族は「土丁」、「土人」、「土蛮」などの名称になっていた。岡田（2001）によれば、『土家』という民族呼称の起源は、中国側の漢語の文献資料から辿ると、北宋時代に現れる『土人』『土兵』『土丁』『土軍』などからきているとされるが、『土家』という名称そのものは、明末清初以降に『客家』の『外来人』という意味に対して、『当地人』の意味として使用されるようになった〔岡田 2001:4〕という。

土家族には独自の民族言語があるが文字はなく、文字を使う時には漢文を利用した。また、その言語は土家族地域の人々から「土家話」また「土話」と呼ばれていた。また、「土家話」を話すことできるのは主に湖南省湘西自治州と湖北省恩施自治州に分布している土家族の人々であった。しかし、現在で

は、湖南省永順県や龍山県、湖北省来鳳県に分布している一部の土家族の人々しか「土家話」を話すことができないのが現状である。

建国以降、土家族は複雑な「民族識別」の経過を通して、1950年代に1つの少数民族として認定されたが、文化大革命は少数民族の間に深く浸透している古い思想や文化、風俗、習慣の「四旧」の根絶を意図した。「遅れた文化」「淘汰されるもの」と見なされていた少数民族の文化は、改革開放以降に、民族学復興を通し民族文化として学術的な評価を得た。そして、かつては他者として語られるだけの存在であった少数民族は、1980年代から90年代にかけて自己を語るようになり、その際、彼らが最初に必要としたのは自己の歴史だった。古ければ古いほど歴史としての正統性があるという認識から、各民族は、神話上の人物に自身の起源を求めた [高山 2007:112]。

今日、土家族について書かれた本の多くは、その文化的民族的起源を古代まで遡ろうとするが、土家族の民族起源については諸説あり、近年の土家族関連の書物はいずれも、土家族が悠久の昔から持続してきた歴史のある民族であることを強調している [瀬川 2005:349-350]。

1990年代に入ると、土家族地域の政府や中央政府の民族研究機構、民族知識人などの民族エリートにより、土家族に関する研究が多く発表され、その中には『土家族研究叢書』や『土家族問題研究叢書』などがある。『土家族研究叢書』は1999年に中央民族大学から出版された叢書で、『土家族区域的考古文化』、『土家族民間文学』、『鄂西土家族伝統情歌』、『土家族革命闘争史略』など9冊からなる。また、『土家族問題研究叢書』は2000年から民族出版社による出版され、『転型与発展：当代土家族社会文化変遷研究』、『道教与土家族文化』、『土家族文化史』、『土家族地区教育問題研究』、『土家族民間信仰与文化』などがある。これらの書籍群は、土家族の文化について整理、紹介したもので、土家族の言語、信仰、歴史、家庭、風俗習慣、神話人物などについてまとめられていて、さらに土家族社会、教育、文化変遷など問題についても討論していて、中国の土家族に関する優れた研究成果となっている。また、民族エリートたちによ土家族の民族文化に関する整理も行われてきた。例えば湖南省土家族出身の民族エリート田荊貴氏（彼は湖南省の土家族の民族識別工作に参加し、また1957年から1968年まで、湖南省湘西自治州の副州長の地位にあった）により2冊の編著『中国土家族習俗』（1991）と『中国土家族歴史人物』（1993）が完成された。これらの土家族研究は、中国土家族に関する重要な情報源として国内外の研究者や土家族地域政府、土家族の地域エリートなどによって注目され参照されてきた。また、土家族地域の行政と民間組織も土家族に関して歴史など文化を収集、整理している。恩施州の場合は、地域組織の「恩施州民族文化保護与発展促进会」と「恩施州民間文芸家協会」により2009年に『恩施市民族文化叢書』が出版された。この叢書は、恩施の地域や民族文化の紹介書で、その中には『恩施市土家女兒会演變揭秘』や『恩施灯戯』などが含まれている。他方、地域の観光業者もこれらの書籍群を参照して土家族の代表的な民族文化要素を選び、これに基づいて創造された観光文化を土家族の観光資源として活用している。

上述したように、土家族の起源には諸説あるなかで、「巴人説」が最も有力視されている。「巴人」とは、『土家族簡史』によると、夏殷周の時代に内陸部西南地域に住んでいた人々である [土家族簡史編写組 1986:16]。1950年代に土家族の民族識別調査に参加した民族学者の潘光旦氏は、「巴人説」を土家族の起源として提出した。つまり、土家族は「巴人」の後裔という言説である。中国国内の土家族に関する研究には、この説を認める立場のものが多く。本論も、潘光旦氏の「巴人説」を踏襲する。

土家族は、その文化や習俗は漢族からの影響を強く受けているが、『中国少数民族の信仰と習俗・下巻』によると、長期にわたり漢族と雑居してきたため、社会経済の発展レベルも漢族に近く、加えて両族間の各領域にわたる交流も無視できないと指摘する [覃光広編 1993:714]。現在でも、多くの土家族地域では、漢族やその他の民族と土家族との混住が多く見られ、日常生活と文化習俗の面で、相互の交流による影響が色濃く見られる。しかしながら、漢族文化を広く受容したとはいえ、漢族との出会いのなかで、各地の土家族はこうした漢族文化を一様に受け止めたのではない。地域によって、漢族文化から受けた影響の度合いに違いが見られる [山路 2002:46]。また、土家族と苗族も、同じ文化要素をもつ場合が多い。例えば、土家族文化の特徴とされる伝統家屋の「吊脚楼」は、土家族に関する観光宣伝には「土家吊脚楼」として利用されている一方、苗族の観光活動でも苗族の文化的特徴の1つとして宣伝されている。その理由として、苗族と土家族は2000年にわたって共住してきたため、相互に密接に影響し合い、生活習慣やその他の面でも多くの共通性を持つようになったのだという [高山 2007:98]。

瀬川 (2013) は、土家族の人々が周囲の漢族と異なる点として、「土家語」というチベット・ビルマ語系の言語の痕跡が見られる点と、刺繍に特徴のある民族衣装や、歌や踊りを好むとされるその民俗などをあげる [瀬川 2013:225]。また、山路(2002)は、土家族の文化の複雑性、つまり地域差が大きいことを指摘し、その理由として次のように述べる。

土家文化の起源は1つの同じ源流に遡るわけではないし、各地に居住する土家族が齊一的に自己の文化を維持してきたというわけでもない。このことは、土家族の文化を考える時、地域的変差が見られることと関連している。・・・土家族社会に地域差が生じた原因には、さらに別の原因、例えば、歴史的展開において跛行性があったことにも説明が認められるであろう。土司制度の導入によって漢族の圧力が確立すると、漢族の流入がおびたしくなり、各地で漢文化の浸潤が促進されていく。もっとも、そうした歴史的制度は各地で一様に適用されたのではなく、したがって土家族へ与えた影響も同じではなかった。 [山路 2002:45]

さらに、「改革開放」以降の急激な経済発展により中国社会が激しく変容しており、少数民族地域の土家族地域も例外ではないが、中国のことわざに「十里不同風、百里不同俗（同じ地域でも、距離によって習俗の相違ある）」とあるように、土家族でも分布地域によって文化習俗の差がみられる。その人口の多くは交通が不便な山間部に住んでいて、経済や社会の発展の程度が緩やかであるため、従来習俗に従っている部分も多く、山間部同士や都市部と山間部の地域差が文化の相違や民族観光の展開でも共通点と独自性を生む要因の1つになっていると言える。

第3節 土家族文化と民族観光

3.1 土家族文化の形成と連続性

土家族文化の形成は、一般的には、1956年に中央政府によって「土家族」として認可されたのを契機と

し、その文化の核心的内容はその後に、政府の民族・文化部門の主導のもとに、「民族識別工作」に関わった研究者や民族幹部、民族知識人（学校の先生等）などにより、民族の正当性と発展のため自文化について集成し、回復する活動が行われてきた。

瀬川（2005）は、こうした動向が多く中国少数民族において生じつつあるのは、かつて文革時代に抑圧されていた民族文化が現在の改革開放政策の下で再評価や再興の機会を与えられたというだけでなく、国家により形式的に作り出された「民族」という単位に、それに見合った文化的、自己認識的内実を新たに作り出してゆくことが政治的にも人々の自己意識の上でも必然的なものであり、人々は自分の民族を語り、それについて誇りをもつための明確で新たな表象を必要としていると指摘する〔瀬川 2005:351-352〕。

そして、1980年代末から1990年代初期にかけて、土家族に関する全般的な学術調査研究が始まり、多くの土家族研究者が輩出された。例えば、1989年に劉孝瑜氏⁵⁸が、土家族の歴史、文化などについて紹介した民族誌である『土家族』を民族知識叢書の1つとして上梓し、同じく彭官章氏⁵⁹の『土家族文化』（1991年）も公刊された。

3.2 土家族文化の観光化

土家族の民族観光開始以来、多くの土家族テーマパークや土家族地域の観光地で展示されている土家族文化は、意図的に選択された民族文化である。その原因について、高山（2007）は、「漢化」エスニック・イメージを「民族風情」という資源と見なす民族観光においては、吊脚楼・山歌・マオグス・摆手舞などを「民族風情」として売る必要があると指摘する〔高山 2007:194〕。また、土家族自身の文化イメージを強化してその民族アイデンティティの確立を図るための手段として利用されたこともその理由として挙げられるであろう。

土家族の「特徴」とされる文化要素について、瀬川（2005）は、「刺繍をほどこうした民族衣装、哭嫁などの歌謡、摆手舞に代表される舞踊、土王信仰⁶⁰、それに巫者・梯瑪⁶¹など」〔瀬川 2005:353〕を挙げる。

表 4-1 土家族代表文化要素

文化分類	文化名称
建築文化	吊脚楼

⁵⁸ 中南民族大学元教授。漢族、重慶市榮昌区出身、1923年12月14日生まれ。土家族研究初期においても、重要研究者として研究活動に参加した。例えば、彼は『土家族簡史簡誌合編』（1963年、劉孝瑜・王炬宝編著、中国科学院民族研究所出版）、『土家族簡史』（1989年、劉孝瑜・王炬宝編著、湖南人民出版社）などの編集にも参加した。

⁵⁹ 元九三学社中央宣伝部副部長。1955年2月生まれ、湖南省龍山県の土家族出身。土家族の起源について「古羌人」説を提唱した。

⁶⁰ 「トウチャ族はかつてひろく土王を信仰してきた。各村落にはみな『土王廟』（摆手堂とも呼ぶ）が設けられ、多くの地方で土王廟は土司祠でもあった。」また、「トウチャ族の村落が毎年春行なう最も盛大な共同祭祀が『土王祭』である。その時には巫師が牛を打ち殺して供え、毎晩男女が土王廟の前に集まり、神歌を盛んに歌い、太鼓や鐘を打ち鳴らし、摆手舞を踊る。」〔覃光広等編 1993:715-716〕。

⁶¹ 「梯瑪（土老師）『巫師』はその土地の首領で、役人でも何でもなかったが、大きな権限を握っていた。およそ祭祀や婚礼の挙行、病氣平癒を祈り訴訟を起こすといった事々はすべて梯瑪により司られた。トウチャ内部の出来事については、同じ宗族内で起こったものならば族長が解決するが、宗族が異なると当該宗族の梯瑪の所に行って処置をあおいだ。梯瑪は労働に携わらず、結婚することができ、そして世襲である。」〔彭 1996:226-227〕。

飲食文化	合渣、臘肉、咂酒、油茶湯など
服装文化	対襟、西蘭卡普
宗教文化	獵神、土地神、阿密媽媽など神祭祀、トーテム信仰（白虎信仰など）、土王崇拜、八部大神崇拜、祖先崇拜、廩君祭祀、巫師と巫術（梯瑪など）、儼文化（儼戲など）
婚姻文化	哭嫁など
歌と踊り文化	民歌（龍船調、黄四姉など）、踊り（擺手舞、毛古斯舞、八宝銅鈴舞、打蓮鄉舞など）
祝日文化	牛王節、女兒会、擺手節など

表 4-1 に示しているように、観光開発において、これらの文化要素は土家族の代表文化と考えられている。一方、それらの文化には地域性がある。以下では、その中から、観光資源として最もよく利用されている土家族文化について整理し紹介する。

3.2.1 「哭嫁」

この習俗は、結婚の1ヶ月前から哭くというもので、土家族の伝統的な婚姻儀礼の1つであり、従来の土家族の女性が結婚するために必ず習うものである。花嫁になる金持ちの娘は半年あるいは1年前から哭き、哭きながら歌を歌う。歌詞の内容は親、兄弟、友達への感謝と離れがたさ、仲人への叱りと怒り、結婚生活への不安などを描写したものである。これは花嫁1人だけが哭くのではなく、家族や友達、近隣の人々も花嫁のところへ行って、一緒に哭く場合もある（写真 11 参照）。



写真 11 咸豊県の民族文化「哭嫁」の上演

出典：咸豊県民族宗教局より筆者へ提供された写真

彭（1996）によれば、封建社会の土家族女性は、親と仲人中心の婚姻に対する不満をこの哭嫁の形式で表す。女兒はもの心ついた頃から「哭嫁歌」を習い始める。へたな者は軽蔑されるからである。嫁入りに際しては必ず土家語を用い、漢語を使つてはならず、うっかり漢語を使うと、年長者の叱責の聲が飛ぶ。哭嫁歌は「父母への思い」「兄夫婦への思い」「父方の親戚への思い」「媒酌人への思い」「抜いた眉への思い」「（既婚女性の髪型に）髪を結び直すことへの思い」「戴花」と「離娘席（生家を離れる儀式に出される食事）への思い」「祖先にいとまごいをすることへの思い」「花橋に乗ることへの思い」

を込めて哭くのであり、同時に自分のこれからの辛酸を思って哭くのである。その期間は7日から10日、長くて1ヶ月で、泣き続ける余り口は渴き、喉は潤れて、酔いつぶれ気がふれたかのようになれば利潑で有能な娘であるとみなされるが、そうでないと逆に無知蒙昧な娘とみなされる。嫁泣きの期間には一族の親戚友人がこぞって嫁入りする女兒を家に招いて宴をもよおすが、これを「送嫁飯」という。嫁泣きの時には親戚友人も女兒に付き添って悲しい胸のうちを訴え合う。これを「陪哭」という。男の方は「哭臉粑粑」を女家に届け、嫁泣きに加わった人たちみんなでお相伴をするという [彭 1996: 237-238]。

現在の「哭嫁」はよく観光地で土家族の結婚式の舞台演出の一環として演じられている。一般的には、結婚式の最初に、花嫁が床に座って、花嫁の家族と友達が彼女を取り囲み、花嫁を中心に泣きながら歌を歌うが、ほかの出演者も同じことをする。筆者は湖南省張家界市でフィールド調査をした際に、その演出された以下のような「哭嫁」の歌詞の一部を入手した。また、その「哭嫁」の歌は、湖南省地域の方言で歌われた。

『哭家人』

我的嬌娘我的叔／我今天搭了露水帕／人家老少都敢罵／我今天穿了露水衣／人家老少都敢欺
我的哥哥我的妹／往日兄妹情義深／今朝多了我一人／送給人家當賤人／難捨哥妹離別情
哥呀妹呀兄弟呀／往日喊我喊得甜／挨到哥哥十八年／竹筍跟著竹子長／哥哥疼妹十八年／如今竹子已
砍斷／哥哥不再有負擔／牽著手兒不覺得／如今你亮手亮腳走／丟下我一人好淒慘
我的爹啊我的娘／可惜我生就女兒身／養老送終不沾邊／我今是你下賤女／盤兒的恩情幾時還
我今喝了離爹酒／我今吃了離娘飯／如今父女娘兒要分散／我的爹啊我的娘／我今是您下賤女／您再打
傘傘不圓／兒今進了苦竹林／換了衣服改了姓／再想回家萬不能／我今出了娘家門／二回回門再團圓

この歌は、花嫁が結婚式の日、家族へ捧げる歌である。歌詞の意味は、まず自分の叔父さんと叔母さんに、自分がこれから結婚すると、夫の家族が全員で自分のことをいじめるという不満を表す。そして、兄弟たちに自分が結婚したら、ほかの家族の人になるが、兄弟との感情が深く分かれがたいこと、また自分のこれからの結婚生活に対する不安の感情を表す。最後に親の養育に感謝の気持ちを表して、また自分が結婚したら他の家族の人になり、親孝行ができなく、またあまり実家に戻ることもできなくなるので、その悲しい感情も表している。

3.2.2 「擺手舞」

「擺手舞」とは土家族の伝統的な宗教踊りで、毎年正月3日から17日まで、土家族の王様でもあり先祖でもある「土王」のために行われる祭祀踊りである。主に中国の湖北省恩施地域や湖南省湘西地域、重慶市酉水川流域で行われている（写真12参照）。



写真 12 恩施土家族テーマパーク「土家女兒城」の「摆手舞」

『摆手』を土家族語では『ショバ（社巴）』といい、土家族特有の祭祀であり娯楽である。摆手舞には、狩獵摆手、農事摆手、生活摆手、戦争を現わす軍事摆手などの舞がある。また、『大摆手舞』と『小摆手舞』の2種に分けられる。[覃光広等編著 1993:717]。「摆手舞はトウチャ族の古くからの歌舞であり、祭祀儀礼において早くから重要な位置を占めてきた。年の初め、春耕の前に重要な宗教行為を行なうのは道理のないことではない。トウチャ族の祖先-巴人の時代にはすでに田の神を祭って豊作を祈る活動が行なわれた。[同上:718]。

2016年8月の現地調査の際、湖北民族学院の民族資料館で入手した文献資料によると、清朝乾隆帝の時期(1736-1795年)の『永順県志』の第10巻に「摆手舞」と「摆手堂」について次のような記載がある。「各寨有摆手堂、又名鬼堂。谓是已故土官阴署。每岁正月初三至十七日止。夜间鸣锣击鼓、男女聚集、跳舞长歌、名曰摆手」。つまり、各村には「摆手堂」があり、「鬼堂」とも呼ばれ、その土地で亡くなった「土官」の祭祀場所である。毎年旧暦正月3日から17日まで、夜に村の男女がこの場所に集まり、踊りながら歌を歌う。これが「摆手」と呼ばれるという。また、恩施州来鳳県百福司鎮舍米湖村には清朝時代から建られている「摆手堂」が現存していて、村民は毎年のお正月にここで「摆手舞」を踊り、豚を殺して神明に捧げて、来る年の無病息災と豊穰を祈願する。

3.2.3 「毛古斯」

「毛古斯」も土家族の宗教的な踊りで、特に湖南省の多くの観光地で土家族の代表文化として展示されている。「毛古斯」とは湖南省土家族の祖先であり、子孫の家族や人々の平安、農事の興隆と保護を祈願して、土家族人々がお正月の「舍巴日」に踊る儀礼的踊りである。歴史的には、湖南省湘西州龍山県卸甲村の「舍巴堂」の碑文に、「男女齊集神堂、擊鼓鳴鐘歌舞之、以為神之歡也、人之愛也」とあり、これは、男女が神堂に集まり、鼓を打ちながら踊りや歌で神様を喜ばせ、人々もこのイベントを楽しん

でいるというものである。

現在、よく上演されている「毛古斯」は、観光地のスタッフが男女をとわず、草製の衣装を着けて、円の中心に炊かれた火のまわりを回りながら踊る踊りである。また、観光案内の資料によると、土家族の間には自然崇拜と生殖崇拜に関する話が多く聞かれ、かつて、土家族女性たちが性的に自由であったと記されている。筆者は恩施地域で調査した際、恩施州政府の元文化関連部門の民族幹部（男性、土家族出身、60代）が「こういう踊りは野蛮人的な感じがし、また生殖崇拜の踊りであるため、土家族文化対して観光客の誤解を招きやすく、あまりいい観光資源ではない」と語るのを聞いたことがある。

3.2.4 「吊脚楼」

「吊脚楼」は、四川省重慶周辺の山地一帯に多く見られる伝統的な建築様式で、斜面の多い地形に柱を長く突き立てて高低差を処理したもので、その外観から「吊脚楼」と呼ばれている（写真13と写真14参照）。



（左）写真13 恩施州来鳳県百福鎮舍米湖村村民住宅の「吊脚楼」



（右）写真14 テーマパークでの「吊脚楼」建築

「山地であるため、湿気の防止と虫や獣からの保護に適した造りで、2階建てが多く、1階は家畜の飼養と雑貨の倉庫、その上は寝室などの部屋になっている」[田敏・呉永章 2007:267]。土田（1998）の湖南省土家族民家の研究によれば、「もともと吊脚楼は急な斜面や川岸といった立地条件の厳しい場において建設が可能であり、キャンチレバーにより広い空間を得ることができるという機能面での利点から生じたもの」と[土田・他 1998:178]考えられている。

3.2.5 「山歌」

「山歌」は、山地に住んでいる人々が農業などの生産活動時に疲れを解消するための歌謡や、求愛、恋愛中の男女が互いに愛情を表す情歌を民歌または「山歌」と呼ばれる。また、土家族の「山歌」の中

で「太陽出来喜洋洋」⁶²や「龍船調」⁶³などが代表作品である。筆者が調査した湖北省恩施地域の各観光地では、愛情歌謡の「六口茶」⁶⁴が土家族の「山歌」として知られる。その歌詞は以下の通りである（歌詞は土家語から普通語へ翻訳したものである。また、歌詞の発音は土家語ではなく、恩施地域の方言である）。

（男）喝你一口茶呀問你一句話/你的那個爹媽（嚟）在家不在家

（男：あなたのお茶を飲みながら、1つ質問をします。あなたの親は今家にいますか？）

（女）你喝茶就喝茶呀哪來這多話/我的那個爹媽（嚟）已經八十八

（女：あなたにお茶をごちそうしてもまだ不満足ですか？私の親はもう88歳です。）

（男）喝你二口茶呀問你二句話/你的那個哥嫂（嚟）在家不在家

（男：あなたのお茶を飲みながら、第2の質問をします。あなたの兄と兄嫁は今家にいますか？）

（女）你喝茶就喝茶呀哪來這多話/我的那個哥嫂（嚟）已經分了家

（女：あなたにお茶をごちそうしてもまだ不満足ですか？私の兄と兄嫁はもう実家から自立しました。）

（男）喝你三口茶呀問你三句話/你的那個姐姐（嚟）在家不在家

（男：あなたのお茶を飲みながら、第3の質問をします。あなたの姉は今家にいますか？）

（女）你喝茶就喝茶呀哪來這多話/我的那個姐姐（嚟）已經出了嫁

（女：あなたにお茶をごちそうしてもまだ不満足ですか？私の姉もう他人の嫁になりました。）

（男）喝你四口茶呀問你四句話/你的那個妹妹（嚟）在家不在家

（男：あなたのお茶を飲みながら、第4の質問をします。あなたの妹は今家にいますか？）

（女）你喝茶就喝茶呀哪來這多話/我的那個妹妹（嚟）已經上學嘍

（女：あなたにお茶をごちそうしてもまだ不満足ですか？私の妹はもう学校に行きました。）

（男）喝你五口茶呀問你五句話/你的那個弟弟（嚟）在家不在家

（男：あなたのお茶を飲みながら、第5の質問をします。あなたの弟は今家にいますか？）

（女）你喝茶就喝茶呀哪來這多話/我的那個弟弟（嚟）還是個奶娃娃

（女：あなたにお茶をごちそうしてもまだ不満足ですか？私の弟はまだ赤ちゃんです。）

（男）喝你六口茶呀問你六句話/眼前這個妹子（嚟）今年有多大

（男：あなたのお茶を飲みながら、第6の質問をします。あなたは今年何歳ですか？）

（女）你喝茶就喝茶呀哪來這多話/眼前這個妹子（嚟）今年一十八

（女：あなたにお茶をごちそうしてもまだ不満足ですか？私は今年18歳です。）

（女）呦耶呦耶嚟呦呦耶/眼前這個妹子（嚟）今年一十八（耶）

（女：yoyeyoyiyoyoye 今年は18歳になりました。）

⁶² 重慶市石柱県土家族代表民謡の「囉兒調」の1つと考えられている。歌の作詞と作曲は重慶市の金鼓氏によるもので、1942年に完成した。2007年にはユネスコにより「世界經典民謡」に登録された。

⁶³ 一般的には、中国の有名な歌手宋祖英氏の代表作品と思われる。また「種瓜調」とも言い、1958年に作られ、湖北省恩施州利川市土家族の代表民謡「利川灯歌」の1つと考えられている。

⁶⁴ 湖北省人民政府ホームページ：http://www.hubei.gov.cn/mlhb/mgmq/201111/t20111121_152974_mob.shtml より。2018年6月参照。

このように、恩施地域の土家族の男女は歌垣の形を通して、互いの個人情報（年齢、家庭成員状況など）を交換し合い、好意を表す。一般的に、このような歌の曲は明るく、歌詞も日常生活との関わりが多く、愉快的雰囲気を作ることができるため、恩施地域内の多くの観光地で民族風情を表現するための定番になっている。

3.2.6 「西蘭卡普」

織り物や民族衣装も土家族の観光活動において重要な文化資源である。土家族の代表的な織物として知られるのが「西蘭卡普」である。「西蘭卡普」は土家語から標準語への音訳であり、「花鋪蓋（華やかな布団カバー）」を意味する。なかでも、湖南省の龍山県周辺地域と湖北省来鳳県の「西蘭卡普」が有名であり、多くの土家族観光地で「西蘭卡普」が販売されている。また、多くの土家族地域では「西蘭卡普」の模様が、政府の建物や民族博物館などの装飾に利用されている。観光地では、現場で実際に「西蘭卡普」を織物の実演をして見せたり展示販売が行われているほか、土家族地域の観光ホテルの部屋（写真15と写真16参照）またエスニック・レストランの内装にも利用されたりしている。



（左）写真15 「西蘭卡普」



（右）写真16 恩施土家族テーマパーク内の「西蘭卡普」の作成現場

以上、土家族は、学術的に見ると、漢族の影響を強く受け、言語や生活習慣の上で周辺の漢族とほとんど変わらない「漢化」した民族であると語られる点では、ミャオ（苗）族やトン族と異なる特徴を持つが、民族観光においては、西南少数民族の様々な風俗習慣がミックスされたアトラクションが土家族のものとして披露されている [高山 2007:194]。

「鳳凰古城」の観光事例において、湖南省湘西州地域の土家族とミャオ族が長期にわたって一緒に住んできたため、文化的に相互に影響しあっている。また、筆者の調査でも、観光内容の1つとして観光

客向けの民族服試着体験の際、地元人々がミャオ族の服装を土家族の服装として紹介することがあった。観光会社のガイドたちによる「吊脚楼」の説明でも、土家族とミャオ族のどちらも自分たちの伝統的民族家屋として紹介していた。

このように、土家族とミャオ族などからなる多くの地域では、土家族文化と他の少数民族、特にミャオ族の文化が観光資源として一緒に開発・利用されていることが多い。

3.3 土家族地域の観光展開

上述したように、土家族の民族観光は1990年代以降に始まり、中国の民族観光においては後発地域であるが、観光ブームに合わせて民族観光を積極的に推進してきた。また、民族観光は土家族の人々の経済状況の改善や地域発展の重要な手段として利用されている一方、土家族を漢族から区別し、民族文化をアピールすることによって民族意識の強化にも結びついている〔薛ほか2012〕。土家族の民族観光は、「漢化」された「土家族文化」の中から漢族との違いを意識的に選び取り、少数民族土家族の文化として確定する重要な方法の1つなのである。また、土家族は、学問的には、言語や生活習慣の上で周辺の漢族とほとんど区別がないほど「漢化」していると語られるが、民族観光においては西南少数民族の様々な風俗習慣がミックスされたアトラクションが土家族のものとして披露されているという〔高山2007:194〕。

土家族の民族観光は、主に、湖北省、重慶市、貴州省、湖南省の4つの地域で展開されている。本論では湖北省の民族観光の事例に焦点を当てて論じるが、その前に、以下では他の3つの地域の民族観光についても触れておきたい。

3.3.1 重慶市

重慶市（渝）には54の少数民族、合わせて約197万人が存在し、総人口の6.4%を占める。そのうち、重慶市の土家族の人口は約142万人で、主に重慶市東南部、つまり渝東南地域の石柱土家族自治县（以下、石柱県と略称）、秀山土家族苗族自治县、酉陽土家族苗族自治县（以下、酉陽県と略称）、彭水苗族土家族自治县と黔江区、その他東北部の巫山県、巫溪県、雲陽県、奉節県、萬州区にも少数分布している⁶⁵。また、これらの地域の土家族文化は、「国家級非物質文化遺産（国家レベル）」になっているものも多い（表4-2参照）。

2000年代に入ると、重慶市は少数民族文化を重視するようになり、2004年には、黔江区に重慶市民族博物館⁶⁶を設置した。また、重慶市民族宗教事務委員会は、2009年から2010年にかけて「渝東南少数民族保護工程」政策により「重慶民族文化典藏」⁶⁷など少数民族文化保護政策を行った。さらに、2010年には、重慶市政府の「重慶市人民政府関与進一步繁荣發展少数民族文化事業的通知（少数民族文化の

⁶⁵ 重慶市民族宗教事務委員会ホームページ：<http://www.cqsmzw.gov.cn/mzzjgk/8015.htm>より。2018年9月参照。

⁶⁶ 2004年9月から運営をはじめている。総面積は1,200平方メートルで、博物館は土家族風の建築様式になっていて、中には「歴史庁」、「民居庁」、「服飾庁」、「礼儀庁」、「芸術庁」、「文物庁」、「書画庁」の7つ展示室がある。2007年に重慶市政府より「重慶市愛国教育基地」に指定された。

⁶⁷ 重慶市渝東南地域の民族文化（民族歌曲、民族舞踊、戯劇と曲芸、村落建築と文化古鎮、民族樂器の6つ内容）を調査、整理した後に『重慶民族文化典藏』（2009年、重慶出版社）という民族文化教育宣伝本が編集され電子化された後に、重慶市民族博物館と重慶三峡博物館で展示されている。

繁栄発展の促進に関する重慶市政府の通知」(渝府発【2010】64号)に基づく少数民族文化産業の発展政策により、少数民族の文化資源を重視し、少数民族文化産業の発展を推進したとされる。

重慶における民族観光の前身は、90年代の三峡ダム観光ツアーの発展とともに、その沿線地域で開始された「民族風情遊」で、重慶の長江流域の自然風景と民族文化、とりわけ土家族やミャオ族などの少数民族文化を利用した民族観光が推進された。また、重慶地域の民族観光が正式に始まったのは2000年以降と言われ、現在、重慶市では少数民族文化の保護や伝承を重視するとともに、地域の少数民族文化、とりわけ土家族とミャオ族の文化を利用した民族観光産業の発展に努めている。

2005年7月から2006年4月にかけて、国務院が「第一次国家非物質文化遺産リスト」の選定を行い、全国31の省、自治区、直轄市、香港、マカオから1,300件以上の申請があり、2006年5月20日発表のリストでは計518件が認定され、中国国内のリストだけでなく、ユネスコの代表一覧表にも多数の記載が見られる[落合2018:164]。また、その後、2008年6月14日の「第二次国家非物質文化遺産リスト」に計510件、2011年6月10日の「第三次国家非物質文化遺産リスト」に計191件、そして2014年7月16日の「第四次国家非物質文化遺産リスト」に計153件が認定された。以下の表4-2は重慶市における土家族関係の国家級非物質文化遺産である⁶⁸。

表4-2 重慶市土家族関係の「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」

年別	項目名称	所在地
2006年第一回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	秀山花灯	秀山土家族苗族自治县
	土家囉兒調	石柱土家族自治县
2008年第二回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	秀山民歌	秀山土家族苗族自治县
	酉陽民歌	酉陽土家族苗族自治县
	江河号子(長江峡河号子、酉水船工号子)	重慶市(酉陽土家族苗族自治县)・湖北省・湖南省
2011年第三回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	酉陽古歌	酉陽土家族苗族自治县
	土家族吊脚楼营造技艺	重慶市(石柱土家族自治县)・湖北省・湖南省
2014年第四回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	玩牛	石柱土家族自治县

出典：第一回～第四回の中華人民共和国「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」より

表4-2からわかるように、重慶市の土家族関係の国家級非物質文化遺産は、主に渝東南地域に分布しており、重慶市の民族観光も渝東南地域を中心に展開されている。また、これらの民族文化は重慶地域の観光開発においても重要な観光資源として利用されている。たとえば、石柱県の場合は、「土家囉兒調」の代表作「太陽出来喜洋洋」が県内の観光地で民族歌として上演され、また「玩牛」も県の観光イ

⁶⁸ 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館ホームページ <http://www.ihchina.cn> より。2018年9月参照。

ベントの重要なものとして展開されている。

重慶市の土家族民族観光は他の民族観光と同じく、民族テーマパークと民族村で展開されている。重慶土家族テーマパークの観光事例としては、石柱県の土家族風情園の「毕兹卡绿宫」があり（後述する）、土家族の民族村観光については、石柱県冷水鎮八龍山寨、秀山県海洋郷岩院古寨、酉陽県酉水河鎮河湾山寨などの土家族村があり、特に、近年、黔江区に位置する「土家十三寨」⁶⁹はその中の代表的なものである。「土家十三寨」は小南海鎮板夾溪十三寨に位置する土家族観光村で、そこには数多く、保存状況のいい「吊脚楼」があり、また、近くには黔江区地震遺跡観光地「小南海」もある。黔江区市政府はこの村を土家族村として観光開発を行い、「山歌発源地」として観光宣伝し、土家族の歌を民族演芸として利用しているほか、村の民家を民宿、特産品売り店、「農家楽」、民族博物館などとして観光開発して、村の経済発展に努めている。

また、酉陽県の「桃花源民俗旅遊体験区」⁷⁰という観光地では、自然風景を利用して「世外桃源」、「太古洞」、「桃花源国家森林公园」として観光開発しているほか、「吊脚楼」を利用した「酉州古城（武陵古州ともいう）」が建立された。総面積 30,000 平方メートルで、2012 年から営業が始まった。「酉州古城」はガイドによって「土家建築博物館、民族文化清明上河図（土家族建築など土家族文化の観光地）」と紹介されている。古城の中には「民族風情街」、「桃花源広場」、「八部大王廟」、「土家映像彫塑館」、「土家生活体験館」、「土家凶騰壁」、「土家儺戲樓」などが観光スポットある。「民族風情街」は土家族の建築と飲食などの文化を展示しており、また毎日午後 5 時半から土家族の衣装を着た観光地スタッフが観光客と一緒に「桃花源広場」で「摆手舞」を踊る。

近年、全国的に盛んな「古鎮遊」は、重慶市内の各地でも観光開発の一部として展開されている。重慶市の「古鎮観光」は一般的には、都市中心部から少し離れた地域に、伝統的民家と通路などの原有建築がある程度保存され、古い街並み「古鎮」が作られている。とくに重慶市で少数民族が集中している渝東南地域では、この「古鎮観光」による民族文化の利用が多く見られる。下記表 4-3 によれば、重慶市の渝東南地域に多く分布する古鎮では土家族などの民族文化が観光文化資源として利用されていることがわかる。例えば、酉陽県に位置する「中国歴史文化名鎮」や「重慶第一歴史文化名鎮」として知られる「龔灘古鎮」は、歴史的には四川省の塩と綿をほかの地域へ輸出する貿易の中継地として多くの貿易商人が往来し、また烏江と阿蓬江の合流点に位置しているため、「烏江画廊核心区和璀璨明珠（烏江流域第一の観光地）」と呼ばれている。1700 年余りの歴史がある「龔灘古鎮」では、「吊脚楼」の建築群を主要観光資源として観光が展開されているほか、秦代光諸年間に建設された塩商人の集会所「西秦会館」と、清朝道光 5 年に建設された水運・塩の神の李冰父子が祀られている「川主廟」なども

⁶⁹ 黔江区の中心から 30 キロメートルの距離にあり、総面積は 6.5 平方キロメートルである。「山歌発源地」を観光宣伝用語としてアピールしている。その村は、「吊脚楼」の保存状況がよく、「学堂寨」、「熊家寨」、「瓦房寨」、「女兒寨」、「摆手寨」、「何家寨」、「老熊寨」、「張家寨」、「大湾寨」、「周家寨」、「龍須寨」、「向家寨」、「談家寨」の 13 ヲ所である。また、村と黔江区はもう 1 つの地震遺跡観光地「小南海」と近く、黔江区の政府によりこの村の観光開発がなされている。土家族村として各寨では土家族服飾の「土家繡花鞋墊（刺繡付き靴敷）」と「土家布鞋（布製靴）」が販売され、また、「何家寨」の「土家山歌対唱廊亭」では「土家山歌」、「摆手寨」では「摆手舞」が上演されている。さらに、「土家族生態博物館」も設置されていて、土家族の婚姻や生産生活様式など多くの土家族文化が展示されている。また、村では民宿や「農家楽」も整備して、地域観光と経済発展に力を注いでいる。

⁷⁰ 1999 年に「酉陽桃花源」として営業が始まった。「桃花源国家森林公园」ともいう。AAAAA 級風景区であり、総面積は 50 平方キロメートルである。

歴史的建造物として観光開発されている。また、町には文化展示施設を設置し、町の歴史や地域の土家族と苗族の文化についても紹介しているほか、土家族の民歌や「摆手舞」も上演されている。

表 4-3 重慶市における「古鎮」観光

古鎮名称	所在地
磁器口古鎮	重慶市沙坪壩区
豊盛古鎮	重慶市巴南区
安居古鎮	重慶市銅梁区
万霊古鎮、路孔古鎮	重慶市榮昌区
龍興古鎮景区	重慶市渝北区
偏岩古鎮	重慶市北碚区
走馬古鎮	重慶市九龍坡区
塘河古鎮	重慶市南岸区
東溪古鎮	重慶市綦江区
双江古鎮	潼南県
寧廠古鎮	巫溪県
蘭市古鎮	涪陵区
松溉古鎮	永川区
涪灘古鎮、釣魚城	合川区
菩提古鎮文化旅遊区	長寿区
石蟆古鎮、中山古鎮、白沙古鎮	江津区
龔灘古鎮、後溪古鎮、清泉古鎮、龍潭古鎮	酉陽県
濯水古鎮	黔江区
西沱古鎮	石柱県
郁山古鎮	彭水県
洪安古鎮、石堤古鎮	秀山県

出典:重慶市観光局ホームページ : <http://www.cqta.gov.cn> より作成 (2018年10月参照)

ここで、特に重慶市の土家族民族観光事例として挙げたいのは、石柱県(1983年に土家族自治県になった)である。石柱県は人口484,876人で、29の少数民族が存在し、その中で土家族が最も多く、県の総人口の53%を占める。近年、石柱県は、主に土家族の文化を利用して、地域観光を促進している。「風情土家・養生石柱(土家族文化と心身健康の旅)」や「風情土家喜見美景満目・養生石柱笑迎八方賓客(土家族文化、美しい自然風景がある石柱県にいらっしゃい)」といった石柱土家族自治県の観光宣伝文句に謳われているように、土家族の民族文化と美しい景色が地域の重要な観光資源となってい

る⁷¹。

石柱県の代表的な民族観光地として知られるのは、土家族テーマパーク「毕兹卡緑宮」である。「緑色氧吧、天然空調、土家樂園（いい気候環境の土家族風情園）」は「毕兹卡緑宮」の宣伝文句である。

「毕兹卡緑宮」には、「土家樂園」、「摆手堂」など土家族文化の展示所が設置され、また、「樹屋」や「森林迷宮」など森の自然資源を利用した観光施設も作られている。

さらに、2017年には、石柱県旅遊局により「天上黄水」という舞台劇の上演が始まった。それは、土家族の歌と舞踊を中心とした舞台劇であり、その内容は、「石柱伝説」、「風情土家」、「巾幗擎天」、「西蘭卡普」、「天上黄水」の5つの部分からなり、石柱土家族自治県の民族観光ブランドになっている。また、「天上黄水」は中国の『『美麗中国』シリーズ 300 本微映画』と『『大地飛歌』シリーズ音楽風景微映画（石柱編）』の中にも入っていて、2018年6月から毎晩8時に石柱県の「天上黄水大劇院」で上演されている。

また、湖北省恩施土家族に特徴的な民族イベントである「女兒会」（第5章で詳述する）は、重慶市奉節県雲霧郷⁷²においても2012年から開催されている。例えば、2017年の重慶市奉節県雲霧郷での「女兒会」は以下のようなになる。

2017年8月8日から28日まで、重慶市奉節県委員会と奉節県人民政府により、県内の雲霧郷で「奉節県第5届土家女兒会暨康養雲霧避暑休閑活動（奉節県第5回土家女兒会と雲霧郷での避暑休閑活動）」が開催された。その日程表が以下の表4-4である。

表4-4 2017年重慶市奉節県第5回「女兒会」のスケジュール

日時	活動内容
8月5日～6日	奉節屋脊太極争覇賽（太極拳試合大会）
8月8日	開幕式
8月11日～13日	瑜伽養生季暨土家瑜伽形象大使評選（土家ヨガ大使コンテスト）
8月19日	奉節屋脊大型經典詩歌朗誦活動（奉節屋脊地域での詩の朗誦会）
8月25日	「康養雲霧、土家原郷」大型采風活動（「健康的な雲霧郷、土家族地域」での撮影会）
8月28日	七夕相親会（七夕節お見合い大会）、土家対歌活動（土家族うたがき）、土家幺妹評選（土家族女子の美人コンテスト）、閉幕式

出典：奉節微贊網 <https://vzan.com/live/livedetail-14798> より筆者作成（2018年6月参照）

特に、開幕式では奉節県人民大会副主任李忠夔氏が「女兒会」（開催され目的、地元扶助政策の成果と地域観光資源に関するアピールなど）について発表した後、「土家迎客舞」、「逮嘎嘎」、「田间」、「打喜」など地域の土家族文化に基づいて編成された踊りや歌が上演され、地元歌手曹蓉氏と、中国の有名なロック歌手の雪岩氏と周曉鷗氏も公演し、また、土家族家庭の話しをテーマにした「分媽老漢（どの

⁷¹ 重慶市石柱県ホームページ：<http://www.zgsz.gov.cn> より。2018年9月参照。

⁷² 奉節県の最南部に位置し、自然環境がいいことから、近年、郷内の「屏風石林」、「猫兒梁」などの地域が自然観光地として観光開発されている。また郷内の土家族村の碼頭村は2017年に「中国少数民族特色村寨」の名簿に登録された。

ように親孝行する)」のエッセイのトーク、さらに夜の「土家篝火晚会（夜の篝火パーティー）」で詩の朗読会が行われた。

また、第5回重慶市奉節県雲霧郷の「女兒会」は「相約七夕佳節、牽手仙山雲霧（『七夕節』に会って、雲霧山で恋愛しましょう）」が宣伝テーマで、そのイベントの目的は「弘揚民族文化、打造最美郷村（民族文化を高揚し、美しい村を作る）」と「文化伝承、民族交流、旅遊推介（観光宣伝）」であった。奉節県雲霧郷での「女兒会」も恩施「女兒会」と同じく、土家族の民族文化を展示し、地域の観光宣伝等を通して民族観光と自然観光の発展に努めている。また、第5回重慶市奉節県の「女兒会」では、奉節県の地域政策である「六項專項治理政策」と「扶貧政策」の行政宣伝にも努めるほか、イベント期間中、「天麻」や「黨參」などの地元特産品の販売会も開催し、地域経済に貢献した。その観光客は、主に重慶市内また奉節県周辺地域から来ている。

以上のように、重慶市の土家族観光は「歴史名城」や「歴史名鎮」、「古鎮遊」など歴史観光のほかに、石柱県を代表とする民族観光も自然観光と共に推進されている。また重慶市は、近年の民族舞台劇のブームに乗って、土家族の民族観光にも一層力を入れているように思われる。

3.3.2 貴州省

貴州省（黔）には、中国の多くの少数民族が分布しているため、別名「中国少数民族の博物館」とも称される。貴州省の土家族はそのわずかな一部に過ぎないが、その多くは、黔東北地域の銅仁市沿河土家族自治県や印江土家族苗族自治県、思南県、江口県、徳江県などに分布している。

貴州省における民族観光の特徴は、少数民族が実際に生活する村や祭りをする場所が観光スポットになっている点である [曾 2001:90]。民族観光の先進地として貴州省の土家族民族観光は、既に80年代から始まった。またこの時期の土家族観光は、主に民族テーマパークなど観光地で他の民族と一緒に展示されている。土家族村が「観光民族村」として観光開発されたのは近年のことであり、その代表的なものとして貴州省銅仁市江口県太平郷雲舎村がある。

雲舎村は江口県内から6km、貴州省の世界自然遺産「梵淨山」から23kmの距離にある。村の人口は1,771人、面積は4平方メートルで、貴州省で最初の土家族の民族文化村であるため、省政府はその観光宣伝を「中国土家第一村」として打ち出している。村民はほぼ土家族出身者、また村民には楊という姓が多い（93.7%）。現在、村の入村料は1人98元、遊覧車は片道5元、往復10元である。村は、「入口区」、「生態湿地区」、「水上楽园区」、「民俗文化表演区」、「体験区」の5つ区域に分かれ、そのなかに「神龍潭」、「雲舎風雨橋」、「造紙作坊」などの観光施設が設置されている。また、村には民家「桶子屋」を改造した「農家楽」（「龍潭居」や「玖玖驛站」などがあり、主に「社飯」や「油茶」など地元土家族の飲食を提供し、宿泊もできる）が営業している。また村では、村民による不定期の「攔門酒」などの公演が見られる（2018年5月の貴州省での現地調査より）。

また、貴州省の民族観光で多く利用されている土家族の民族文化要素は、土家族民歌の「山歌」と宗教習俗の「灘」である。貴州省銅仁市沿河土家族自治県の「山歌」は、貴州省にしかない貴州省土家族民族の代表的文化である。その歌の中で、観光でよく利用されているものに、「太陽出来照北岩」がある。このような「山歌」は、沿河県の「烏江画廊」などの自然観光地でも上演されている。2017年11

月7日に、銅仁市及び沿河県の観光イベント「銅仁市第六屆旅遊産業發展大會暨2017貴州沿河第八屆烏江山峽百里画廊文化觀光節」が沿河県の「思州広場」で開催され、その宣伝テーマ「梵天淨土・桃源銅仁、画廊烏江・山歌沿河」の中に「山歌」が含まれていた。また、2010年10月、中国民間文芸協会は沿河土家族自治州に対し「中国土家山歌之郷」に称号を与え、2011年と2014年には、国家文化部が「民間文化芸術之郷」という称号を与えた。また、2014年には、沿河土家族自治県の土家族民歌は国の第4回「非物質文化遺産リスト」に登録され、「沿河土家族高腔山歌非物質文化遺産」となった⁷³。

また、「儺」は土家族の代表的な文化であり、「儺」の祭祀儀礼の「儺戲」や「儺」に関する面具や衣装の展示も貴州省の観光地で多く見られる。「徳江儺戲」は2006年に国家級非物質文化遺産に指定され、「中国戲劇活化石」とも呼ばれようになった。徳江県はこの「儺」を最も重要な観光項目と位置づけて地域の観光活動を展開している。徳江地域は、地域の「儺戲」を「世界的儺戲在中國、中國的儺戲在貴州、貴州的儺戲在徳江（世界で最高の儺戲が中国にあり、中国で最高の儺戲が貴州省にあり、貴州省で最高の儺戲が徳江にある）」と宣伝している。「徳江儺戲」には22本の法事と「関公斬蔡陽」や「鍾馗捉鬼」など24本の戯劇があり、そのほかにも、「上刀山」と「下火海」といった儺技がある。

このように、民族観光で知られる貴州省の土家族観光は、省内の土家族地域が近年、観光ブームになり、主に「山歌」と「儺」などいわゆる貴州省の土家族に独特の文化を中心に自然観光地や民族観光村で展開されている。

3.3.3 湖南省

湖南省（湘）の土家族は、主に湘西土家族苗族自治州の永順県や龍山県と、張家界市の慈利県、桑植県などの地域に分布している。湘西土家族苗族自治州瀘溪県潭溪郷の土家族は南部方言を使っているが、他の地域の土家族は北部方言を使っている。

土家族の民族観光は、主に張家界市と湘西土家族苗族自治州で展開されている。湘西州は、中国の有名作家、沈從文氏の故郷であり、代表作の『辺城』の舞台「鳳凰古城」（沱江鎮）と、中国の有名な映画の1つ「芙蓉鎮」の撮影地「芙蓉古鎮」（芙蓉鎮）がある。さらに、世界自然遺産地「武陵源」のAAAAA級「張家界武陵源-天門山旅遊区」観光地が位置する張家界市も、土家族の代表的な民族観光地である。

「鳳凰古城」と「芙蓉古鎮」は、「吊脚楼」建築群を観光地の最重要観光資源として90年代に観光開発され、さらに地元住民の日常生活様式や民族舞踊と歌の公演を通して少数民族の伝統的な町として観光商品化された。しかしながら、近年は中国の他の「古鎮観光」と同様、地元住民が家屋を利用して民宿やレストラン、バー、特産品の店舗を営業している。また、古鎮の部屋を外来の人々にレンタルして古鎮の周辺に住むケースが多くなっている。このように、現在、町の多くの地元住民がオーナーとして観光開発に参加している一方、民族観光のアイテムは、建築の展示、古鎮内の土家族や苗族などのエスニック・レストラン、民族風情工芸品の販売、民族服飾の体験などになっている。

高山（2007）の張家界市の土家族民族観光に関する研究によれば、張家界市では、1990年代後期に土家族のテーマパーク「土家風情園」（第3章を参照）と民族博物館「秀華山館」が建設された。また、

⁷³ 沿河県ホームページ中国沿河網 <http://www.zgyh.gov.cn> より。2018年5月参照。また、現在、沿河が土家族文化を地域発展の重要文化資源として開発され、県内には「土家美食特色一条街（土家族飲食の商店街）」が建設されている。

自然観光地「武陵源」のエコツーリズムには、土家族出身者たちが観光ガイドや、観光地の民歌などの上演者として参加している。

「秀華山館」は、土家族出身の夫婦2人が営業している民営博物館で、その中には、夫婦2人で集めた約20年間の収蔵品が展示されている。「主な展示品は明清代の家具や収蔵品、織物、民具などであり、特に有名なのは滴水床と呼ばれる繊細なレリーフを施したベッドである」[高山2007:192]という。また、「土家風情園」については、園の中に入ると広場にトーテムポールが立っているのが見え、その向こうに廟や九階建ての吊脚楼があり、吊脚楼の内部に装飾品や農具などが展示されているという[高山2007:193]。

さらに、「武陵源」の観光では、当地の土家族の人々が土家族の歌や踊りのショーを披露する仕事に従事することは少なく、住民の多くは、ガイドや運転手、ホテルやレストラン・商店などに従事しているという[高山2005:56]。

こうして湖南省張家界市土家族の民族観光について、高山(2005)は「張家界市のトゥチャ族は、『住民』としてツーリズム産業には関わる機会を獲得することができなかったが、『先住民』としては張家界市においてトゥチャ族のエスニック・ツーリズムという新しい分野を切り開いた。そこで表象されるトゥチャ族は、『先住者』として武陵源になくてもはならない存在と認められた」[高山2005:58]と述べる。

第4節 湖北省の土家族観光

上述したように、重慶、貴州、湖南地域の土家族はそれぞれの分布地域によって、文化に違いがあり、民族観光の展開もそれぞれの地域により異なる。例えば、湖北省と湖南省の土家族には織物の「西蘭卡普」があるが、貴州省や重慶市地域の土家族にはない。

湖北省の土家族の多くは、省の南部の恩施州と、宜昌市長陽土家族自治県、宜昌市五峰土家族自治県に分布しており、それらの地域で漢族や苗族などの他の民族と一緒に生活してきたので、その文化は特に漢族や苗族などの影響を強く受けている。また、湖北省と他の地域の土家族の文化の間には、祝祭日や儀礼、物質文化などにおいて多少の違いがある。湖北省の土家族地域は、恩施州地域のほかは、長陽県と五峰県であるが、土家族観光の代表的な地域は恩施州である。そこで本章では、主に恩施地域の土家族を中心に、湖北省の土家族観光について分析する。

4.1 湖北省における民族観光の展開

上述したように、中国国家旅遊局は、1995年に、「民族風情遊」つまり、少数民族を中心とした民族観光を展開する観光政策を打ち出した。湖北省は、その全国的な民族観光ブームのなかで、国家の観光政策に沿って省内の民族観光を推進し、特に省内の少数民族地域である恩施地域の経済発展を促進するため、その地域の民族文化の観光開発に力を入れてきた。当時、湖北省は「1995年中国湖北民俗風情遊暨恩施土家族女兒会活動」をテーマに、全省の民族観光を、恩施地域と「女兒会」を中心に展開していったのである。

表 4-5 第 1 回中国少数民族特色村寨名簿リスト（湖北省関連）（2013 年）

所在地	村の名称
襄陽市（1 箇所）	宜城市板橋店鎮王台回族村
宜昌市（3 箇所）	点軍区土城郷車溪村、宜都市潘家湾土家族郷潘家湾村、長陽土家族自治県武落鍾離山莊溪村
神農架林区（2 箇所）	下谷坪土家族郷金甲坪村、下谷坪土家族郷興隆寺村
恩施自治州（14 箇所）	恩施市（5 箇所）：白楊坪郷熊家岩村、白楊坪郷麴子渡村、三岔村蓮花池村、芭蕉侗族郷屏口村、芭蕉侗族郷高拱橋村
	建始県（1 箇所）：高坪鎮大店子村
	巴東県（2 箇所）：水布垭鎮圍龍壩村、野三関鎮石橋坪村
	宣恩県（1 箇所）：彭家寨
	咸豊県（1 箇所）：黄金洞郷麻柳溪村
	来鳳県（3 箇所）：三湖郷黄柏村、百福司鎮南河村
	鶴峰県（3 箇所）：中營鎮大路坪村、五里郷南村村、鄖陽郷斑竹村

出典「第一回中国少数民族特色村寨名簿リスト」人民網ホームページ：

<http://politics.people.com.cn/n/2014/0926/c1001-25745084.html> より筆者作成（2018 年 2 月参照）。

表 4-6 第 2 回中国少数民族特色村寨名簿リスト（湖北省関連）（2017 年）

所在地	村の名称
宜昌市（4 箇所）	秭帰県九畹溪鎮石柱土家村、五峰県采花郷栗子坪村、五峰県楽坪鎮腰牌村、枝江市安福寺鎮秦家塆村
神農架林区（1 箇所）	下谷坪土家族郷板橋
恩施自治州（22 箇所）	恩施市（4 箇所）：白果郷金龍壩村、龍鳳鎮龍馬村、龍鳳鎮青堡村、沐撫辦事処營上村
	利川市（3 箇所）：柏楊鎮水井村、沙溪郷荷花村張高寨、団堡鎮野猫水村
	建始県（1 箇所）：茅田郷耍操門村
	巴東県（2 箇所）：東瀼口鎮牛洞坪村、沿渡河鎮石板坪村
	宣恩県（4 箇所）：高羅郷小茅坡營村、高羅鎮板寮村、椒園鎮慶陽壩村、万寨郷五家台村
	咸豊県（2 箇所）：大路壩区蛇盤溪村、高樂山鎮沙壩村
	来鳳県（3 箇所）：百福司鎮舍米湖村、百福司鎮興安村、三胡郷石橋村
	鶴峰県（4 箇所）：鐵爐白族郷細杉村、下坪郷岩門村、燕子郷董家村、走馬鎮官倉村

出典「第二回中国少数民族特色村寨名簿リスト」中華人民共和国国家民族事務委員会ホームページ：

<http://www.seac.gov.cn> より筆者作成（2018 年 2 月参照）。

表 4-5 と表 4-6 によると、湖北省の少数民族村寨は主に恩施地域を中心にして分布している。近年、恩施地域は、地域の多く民族村寨を利用して、郷村旅遊（農村観光）や民族観光を展開している。

現在、恩施地域には、世界文化遺産の「唐崖土司城遺跡」、AAAAA 級観光地の自然観光地の「恩施大峽谷」と「巴東神農溪」があり、さらに、自然観光地「建始野三峡」や歴史町「来鳳楊梅古寨」、地域名物のお茶の栽培地「伍家台貢茶文化旅游区」など 18 箇所の AAAA 級観光地がある。

表 4-7 湖北省土家族関係の「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」

年別	項目名称	所在地
2006 年第一回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	土家族撒葉兒疍	長陽土家族苗族自治州
2008 年第二回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	都鎮湾故事	長陽土家族苗族自治州
2011 年第三回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	利川灯歌	利川市
	土家族吊脚楼营造技艺	湖北省（咸豊県）・重慶市・湖南省
2014 年第四回「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」	土家族撒葉兒疍	湖北省（五峰土家族自治州と巴東県）・湖南省

出典：第一回～第四回の中華人民共和国「国家級非物質文化遺産代表性項目名録」⁷⁴より筆者作成。

恩施地域の民族観光は、自然観光や歴史観光との繋がりが強く[陳ほか 2014:30]、その土家族観光は、住宅、服装、飲食、祝祭日などの習俗がメインとなっている[李ほか 2011:29]。表 4-7 に示しているように、省内の少数民族文化に対する保護が重視される一方、これら民族文化が民族地域の重要な観光資源として提供されている。

恩施土家族の観光文化資源として、主に食文化、つまり政府により選ばれた「十大新派土家菜（土家族料理）」としては、例えば、「特色鶏（鶏鍋料理）」、「土家臘肉（ベーコン）」、「土家蒸肉（蒸し肉）」など、また、恩施地域の一般的な土家族料理として「土家臘排火鍋（土家ベーコン火鍋）」、「土家豆皮（豆製品）」、「土家焼餅（焼き餅）」などがある。また土家族の民族工芸品には、「土家織錦（土家織物）」、「土家繡花鞋墊（花つけ靴用品）」などがあり、さらに土家族建築の「吊脚楼」が観光開発されている（表 4-7 参照）。

また地域や民族の「特色菜品（特色料理）」としては、「張関合渣（張関地域の豆製品）」「社飯（社日のご飯）」、「金牌豚手（豚足）」、「秘制柏楊豆干（豆製品）」、「油香（揚げ餅）」、「神豆腐（ハーブゼリー）」などがある。さらに、恩施地域の観光は、当初は郊外の自然観光地や恩施市内での民族文化の展示が主であったが、近年は、民族イベントと民族テーマパークがその中心になっている。

⁷⁴ 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館ホームページ <http://www.ihchina.cn> より。2018 年 9 月参照。

表 4-8 恩施地域土家族の民族観光内容

観光項目	観光内容	観光地
建築観光	「吊脚楼」など	村落、自然観光地、テーマパーク
服装観光	「対襟」などの服装、「西蘭卡普」などの織物	自然観光地、テーマパーク
飲食観光	「咂酒」などのお酒、「茶葉湯」などの食べ物	自然観光地、テーマパーク
儀礼観光	伝統的結婚式など	自然観光地、テーマパーク
歌と踊り観光	「龍船調」と「黄四姉」などの民歌、「摆手舞」と「毛古斯」などの宗教的な踊り	村落、自然観光地、テーマパーク
イベント観光	「女兒会」、「牛王節」など	村落、都市市内、自然観光地、テーマパーク

出典：2016年9月の恩施市観光局での聞き取り調査資料をもとに筆者作成。

また、表 4-8 に見るように、恩施土家族の民族観光は、自然観光地とテーマパークでの展開が主で、そこで披露される土家族の婚姻習俗や民族歌と踊りは、特に「少数民族的」または「民族風情」がある民族文化として土家族の民族観光によく利用されている。特に、「女兒会」は、後述するように、漢族にはない祝祭日であり、また漢族の伝統的な恋愛活動とも異なる。また、民族観光では、イベントが多く民族地域の重要な観光資源として取り入れられているほか、恋愛や婚姻に関する習俗もよく利用されているため、「女兒会」はその両方の特質を合わせ持つ観光資源として注目されている。さらに、「女兒会」は湖北省以外の他の土家族地域にないことから、同地域の中心的な観光資源として観光開発され、湖北省恩施地域土家族の民族観光を大きく特徴づけるものとなっている。

4.2 湖北省の観光政策の展開

2010年の「湖北省旅遊工作會議」により、「湖北省『十一五』旅遊業發展計畫綱要」（「湖北省第11次5ヵ年計畫」）が提示された。この計畫によると、11次5ヵ年計畫の期間内に、「一江（長江三峡）兩山（武当山、神農架）」の生態文化観光と武漢の都市観光を持続發展させ、宜昌市と襄樊市の観光化を推進し、全省内に十堰市武当山鎮など10ヵ所の観光町を創設することになった。また、計畫は、「紅色観光」（中国共産黨の戦争遺跡などの観光）と恩施州の民族生態観光に着目し、恩施州内の自然環境と少数民族文化を観光開發することになった⁷⁵。

2014年の「湖北省旅遊業發展『十二五』計畫綱要」（「湖北省観光業發展の第12次5ヵ年計畫」）の「第3章 旅遊空間布局」では、第12次5ヵ年計畫期間内の「二四六八十」⁷⁶の観光計畫を提出した。

⁷⁵ 湖北省文化与旅遊庁（旅遊）ホームページ <http://lyw.hubei.gov.cn> より。2016年12月参照。

⁷⁶ 二：「兩大旅遊圈：2つの観光集中地（武漢城市旅遊圈と鄂西生態文化旅遊圈）。四：「四大旅遊集散中心：4つの交通の要所（武漢、宜昌、十堰と襄陽、恩施と利川）。六：「六大旅遊板塊：6つの観光發展の方向（武漢都市旅遊板塊、『一江兩山』旅遊板塊、清江民俗生態旅遊板塊、温泉休閒度假旅遊板塊、荆楚文化旅遊板塊、大別山紅色旅遊板塊）。八：「八大旅遊產業發展示範区：8つの観光發展のモデル地区（武漢華中大型旅遊港示範区、宜昌西陵峡—平湖半島示範区、咸寧國際温泉城示範区、十堰武当山—太極湖示範区、鄂州梁子湖—紅蓮湖示範区、襄陽漢江風光帶示範区、荊州海子湖旅遊新城示範区、明頭陵—漳河示範区）。十：「10の観光ルート（江城武漢都市風情旅遊線、峡江神山休閒度假旅遊線、

特に、その中には、「武漢都市観光圏と鄂⁷⁷西生態文化観光圏」⁷⁸を観光の中心として発展させ、他の観光地の観光開発も努力すること、また、「土苗清江民俗風情旅遊線（土家族と苗族に分布している清江地域民俗観光コース）」には、「恩施州の土家族と苗族の観光資源を利用して、鄂西⁷⁹地域の民俗生態文化観光を促進する」という政策が示され、実施に移されている⁸⁰。

さらに、2016年「湖北省旅遊業發展『十三五』計画綱要」（「湖北省観光業發展の第13次5ヵ年計画」）によると、恩施地域の民族観光と関係する内容については「第3章 旅遊發展布局」に記載があり、「一帯兩極三廊道四板塊」⁸¹と「十大旅遊区」⁸²政策を実施することが書かれている。その中の「三廊道」の1つ「鄂西山水民俗旅遊廊道」には、武当山、神農架、十堰などの恩施地域の地域文化や民族文化と自然観光を一緒に観光開発することが強調されている。また、その「計画綱要」の「第9章 重大観光項目」において、「龍頭旅遊項目（中心観光項目）」の中に、恩施大清江国際旅遊度假区の建設計画や、「重点旅遊項目（重要観光項目）」の約100項目の中にも、恩施州咸豊県唐崖土司城遺跡民俗文化旅遊区や利川西蘭卡普民俗旅遊区、建始石門古風旅遊景区、巴東清江水布垭旅遊区など恩施地域に関する項目が挙げられている⁸³。

湖北省の観光資源は、中国全体でも多い方だと思われる。たとえば、2014年12月の時点で、全国のAAAAA級観光地は186箇所あるが、その中で湖北省のものが11箇所あり、全国第5位に位置する。同様に、湖北省には星級ホテルが569件、観光会社が1,056社ある⁸⁴。

また、湖北省旅遊發展委員会の旅遊政務網によると、湖北省内のAAAAA級観光地は、以下の表4-8の通りである。その中に、恩施州のものが2つある。また、恩施地域は中国の多くの少数民族地域と同じく、恵まれた自然環境を利用して、地域観光を展開している。

表 4-8 2014年まで湖北省内のAAAAA級観光地

観光地名称	観光地所在地
武漢黃鶴樓公園、武漢東湖生態文化観光地、武漢木蘭生態文化観光地	武漢市
武当山景区、神農架観光地	十堰市
三峡ダム、三峡人家宜昌清江画廊観光地、屈原故里文化景区	宜昌市
恩施大峡谷、巴東神農溪織夫文化観光地	恩施土家族苗族自治州

世界遺産文化經典旅遊線、土苗清江民俗風情旅遊線、養生温泉生態休閒旅遊線、水郷神韻湖泊鄉村旅遊線、浪漫荆楚文化體驗旅遊線、精彩三国文化尋蹤旅遊線、巍峨大別紅色經典旅遊線、炎帝史跡祭祖朝拜旅遊線)。

⁷⁷ 湖北省の略称。

⁷⁸ 武漢を中心としての都市観光と、恩施を中心としての少数民族文化や地域民俗文化の文化観光。

⁷⁹ かつて恩施土家族自治州の略称。

⁸⁰ 湖北省文化与旅遊庁（旅遊）ホームページ <http://lyw.hubei.gov.cn> より。2016年12月参照。

⁸¹ 一帯：1本「金帯」、湖北長江旅遊帶。兩大極点：武漢と宜昌2つの旅遊發展極点。三条廊道：「漢江国脈探秘旅遊廊道」、「鄂東紅緑旅遊廊道」、「鄂西山水民俗旅遊廊道」。四大板塊：「武漢都市旅遊板塊」（武漢、咸寧、孝咸）、「鄂西生態旅遊板塊」（宜昌、神農架、恩施、十堰）、「鄂中文化旅遊板塊」（襄陽、荊州、荊門、隨州、直管）、「鄂東人文旅遊板塊」（黃岡、黃石、鄂州）。

⁸² 武漢商貿休閒旅遊区、三峡国際度假旅遊区、神農架生態旅遊区、武當太極湖国家度假旅遊区、襄陽文化休閒旅遊区、清江生態民俗旅遊区、荊州荆楚文化旅遊区、大洪山生態休閒旅遊区、咸寧温泉養生旅遊区、大別山紅色生態旅遊区である。

⁸³ 湖北省文化与旅遊庁（旅遊）ホームページ <http://lyw.hubei.gov.cn> より。2016年12月参照。

⁸⁴ 湖北省旅遊發展委員会ホームページ <http://lyw.hubei.gov.cn> より。2016年12月22日参照。

出典：湖北省旅遊局ホームページ <http://www.hubeitour.gov.cn> (2016年11月参照) より筆者作成

湖北省の観光客数と観光収入も増えている。湖北省統計局によると、2015年に、湖北省の観光客数は約5億人、観光収入は約4,308億元であった。2014年の観光統計に比べて観光客数は12.98%、観光収入は14.84%増えている⁸⁵。また、2016年前半(1月から6月)の湖北省の観光客数は約2.6億人、観光収入は約2,181億元であった。2015年の前半の観光状況より、観光客数は13.3%、観光収入は14.2%増えている⁸⁶。

第2章に述べたように、中国は連休休暇制度の実施以来、特に「春節(お正月)」、「五一(労働節)」、「十一(国慶節)」の3つの「黄金週(ゴールデンウィーク)」期間が観光ブームになり、全国的に観光化が急激に進展した。近年、湖北省の観光もこれら「節假日旅行(祝日観光)」が大幅に発展し、2015年の春節期間中の観光客数は12.02%、観光収入は13.16%増えた⁸⁷。また、2016年の春節期間中、湖北の観光客数は約1,810万人、観光収入は約75億元で、2015年の春節期間中より、観光客数は10.07%、観光収入は11.36%増えている⁸⁸。2016年の国慶節期間中の湖北の観光客数は約3,624万人、観光収入は約258億元で、2015年の国慶節期間中より観光客数は20.1%、観光収入は22.3%増加した⁸⁹。

また、近年、湖北省は海外の華人市場と台湾市場に注目し、外国人観光客に対して観光PRを盛んに展開している。例えば、2015年1月にシンガポールで「湖北旅遊新加坡宣伝連合(湖北観光シンガポール宣伝連合)」を立ち上げ、「恩施+長江三峡」、「恩施+神農架」など1週間程度の観光プランを多数売り出した⁹⁰。また、2016年に、「知音湖北、楚楚動人(湖北省には美しい景色がある)」の宣伝用語を作り、「第12次海峡観光博覧会」で、台湾地域との観光交流を促進している。こうして、近年、湖北省の海外観光客数と観光収入がますます増えている。

湖北省旅遊發展委員会の「2015年各市州人均停留時間、人均天花費」によると、2015年の湖北省の国内旅遊(国内観光)の人均停留時間(1人当たりの平均滞在時間)は2.34日であり、人均花費(1人当たり平均消費額)は830.11元であった。一方、入境旅遊(海外観光客)の人均停留時間(平均滞在時間/人)は2.33日で、人均花費(平均消費額/人)は536.28ドルであった。また、2015年の恩施州の国内旅遊(国内観光)の人均停留時間(平均滞在時間/人)は2.88日、人均花費(平均消費額/人)は590.16元で、入境旅遊(海外観光客)の人均停留時間(平均滞在時間/人)は1.00日、人均花費(平均消費額/人)は219.77ドルという数字になっている⁹¹。

湖北省には53の少数民族があり、少数民族の人口は283万人で、同省総人口の約4.7%であり、その中で土家族は約218万人(77%)と、少数民族の中で人口が最も多い⁹²。また、湖北省には、1つの少数民族自治州(恩施土家族苗族自治州)と2つの少数民族自治県(長陽土家族自治県、五峰土家族自治県)、10個の少数民族郷(松滋市卸甲坪土家族郷、宜都市潘家湾土家族郷、神農架下谷坪土家族郷な

⁸⁵ 湖北省統計局ホームページ <http://www.hubeitour.gov.cn/a/2016/03/19743/>。2016年12月参照。

⁸⁶ 湖北省統計局ホームページ <http://www.stats-hb.gov.cn/tjbs/qstjbsyxx/113857.htm>。2016年12月参照。

⁸⁷ 湖北省統計局ホームページ <http://www.hubeitour.gov.cn/a/2016/01/19482>。2016年12月参照。

⁸⁸ 湖北省統計局ホームページ <http://www.stats-hb.gov.cn/tjbs/fztjbs/112348.htm>。2016年12月参照。

⁸⁹ 湖北省統計局ホームページ <http://www.hubeitour.gov.cn/a/2016/10/20579/>。2016年12月参照。

⁹⁰ 湖北省統計局ホームページ <http://www.hubeitour.gov.cn/a/2016/02/19622/>より。2016年12月22日参照。

⁹¹ 湖北省文化與旅遊庁(旅遊)ホームページ <http://lyw.hubei.gov.cn>より。2016年12月参照。

⁹² 湖北省政府ホームページ <http://www.hubei.gov.cn>より。2016年8月30日参照。

ど)と10個の少数民族村(鶴峰県三家台モンゴル族村など)が存在して、これら民族地域は主に省の南部に位置している。湖北省の民族自治地域の面積は30,000 km²で、全省面積の6分の1を占める。

長陽県は、1984年に土家族自治県として成立、湖北省の西南部に位置して、宜昌市の管轄下にある。面積3,430平方キロメートルで、8鎮、3郷、154村と8社区からなっている。県内には土家族、漢族、苗族など23の民族がいる。その中で、土家族は人口41万(2017年)で、少数民族全体の約65%を占める。長陽地域は「巴人故里」や「土家族発祥地」として宣伝されている一方、「歌舞之郷」としてもアピールしていて、特に「巴山舞(撒葉兒嘯)」、「長陽山歌」、「長陽南曲」の3つは「長陽文化三件宝(長陽の3つ重要文化財)」として知られる。そのほか、土家族の婚姻習俗に基づいて演出された舞台劇『土里巴人』が重要な地域観光文化資源とされている。

近年、地域や民族文化の保護や伝承活動が行われ、長陽自治県人民代表大会により2006年に「長陽土家族自治県民族民間文化保護条例(長陽土家族自治県民族民間文化に関する保護制度)」、さらに2009年には「長陽土家族自治県民族民間伝統文化伝承人認定和管理辦法(長陽土家族自治県民族民間伝統文化伝承人に関する認定と管理制度)」が定められた。そして、2009年3月から6月にかけて、県内の民族民間伝統文化伝承人に対する認定作業が始まり、約7,000枚の写真、約7,200分の録音、4,300分の録画を得た。また、伝承人の名前、年齢、住所、家庭の現状、技芸、特長、成果などについての情報が収集されている。それ以降は3年に1度、文化伝承人の認定が行われて、2009年時点で民族民間伝統文化伝承人の認定数は約3,000人となっている。また長陽県政府により伝承人に対して優待政策が実施され、例えば2009年から県レベルの伝承人でそれぞれ65歳と60歳になった男性と女性に毎年1,000元を支給している。

こうして、長陽県では、2017年12月現在の非物質文化遺産の数が、県レベルで30件、市レベルで12件、省レベルで9件、国家レベルが4件となった⁹³。特に国家レベルの非物質文化遺産には、「土家族撒葉兒嘯」、「都鎮湾故事」、「長陽山歌」、「薺草鑼鼓」があり、そのなかの2つ、「土家族撒葉兒嘯」と「薺草鑼鼓」は土家族の文化である。また、非物質文化伝承人の数は、県レベル81人、市レベル72人、省レベル23人、国家レベル6人いる⁹⁴。

また、長陽県政府は、地域や民族文化を整理するなかで、「巴土文化叢書」(このなかには、『廩君』、『長陽土司源流研究』、『巴地域研究』、『土家族撒葉兒嘯』など合計10冊の地域歴史や民族などに関する研究本がある)と『都鎮湾故事』、『長陽竹枝詞』などの「地域民俗文化叢書」を出版している。地域政府はこれら非物質文化遺産、特に土家族文化遺産を地域の重要な観光資源として利用している。例えば、長陽県は、既に1995年には「毕兹卡民俗文化村」という土家族テーマパークの営業を始め、その

⁹³ 長陽県レベルの非物質文化遺産には、土家族撒葉兒嘯、都鎮湾故事、長陽山歌、薺草鑼鼓、長陽南曲、長陽吹打楽、長陽花鼓子、抵杠、高脚馬、民間中医正骨療法、石刻技芸、緑茶製作技芸、過趕年、土家打喜、刺繡、旱農船、廩君伝説、清江号子、咚咚奎、翹早船、打陀螺、伝統中薬文化、民間器楽製作技芸、土家吊脚楼营造技芸、十碗八扣、土家婚俗、西蘭卡普織錦、長陽漁鼓などが、また、宜昌市レベルの非物質文化遺産には、土家族撒葉兒嘯、都鎮湾故事、長陽山歌、薺草鑼鼓、長陽南曲、長陽吹打楽、長陽花鼓子などがある。さらに、湖北省レベルの非物質文化遺産としては、土家族撒葉兒嘯、都鎮湾故事、長陽山歌、薺草鑼鼓、長陽南曲、長陽吹打楽、長陽花鼓子などがあげられる。長陽土家族自治県ホームページ <http://www.changyang.gov.cn> より。2018年1月参照。

⁹⁴ 例えば、資丘鎮の鮑繼橋氏(男性、1967年生まれ)と覃雄巍氏(男性、1978年生まれ)は2018年1月に「土家族撒葉兒嘯伝承人」として「長陽県民族民間伝統文化伝承人」に認定された。長陽土家族自治県ホームページ <http://www.changyang.gov.cn> より。2018年1月参照。

なかの「土家生産工芸沙龍（土家族工芸品生産処）」で土家族の織物技術や食文化が利用されている⁹⁵。

このように、長陽県の重要文化資源はおもに土家族文化に関するものであり、特に「土家族撒葉兒疍」が地域民族特色として重視されている（「撒葉兒疍」とは、土家族が死者を祭祀するため踊りであり、従来、土家族の人の葬式では死者の親友や知り合いなどが死者のため踊る）。例えば、2004年に、長陽県資丘鎮で「首届土家族撒葉兒疍大賽（第1回土家族撒葉兒疍試合大会）」が行われ、長陽県の土家族観光は「土家族撒葉兒疍」を中心に観光開発されていることが1つの特徴となっている。

一方、長陽県の南に位置している湖北省のもう1つ土家族地域である五峰土家族自治県でも土家族観光が展開されている。1984年に成立した五峰土家族自治県は、面積は2,372平方キロメートル、5鎮、3郷、97村と11社区からなっている。人口20.8万人（2018年）、人口全体に占める少数民族の割合は84.8%である。五峰県の少数民族のなかでは土家族が最も多く、2000年現在では174,546人となっている。五峰県は湖北省の少数民族地域であり、また地理的にも山奥に位置し、農業が重要な産業であったことから、省内の他の地域と比べて、経済や社会の発展が遅れている。

近年、五峰県では、地域の発展のため土家族の食文化、すなわち、「土家族臘肉（スモーク豚肉）」、「土家炕洋芋（焼きジャガイモ）」、「土家炸辣椒（豚肉とトウモロコシ粉の炒め）」、「土家抬格子（蒸し豚肉）」、「土家扣肉（高菜と豚肉の蒸し料理）」、「土家酸菜（漬物）」、「土家娃谷糖（トウモロコシなどで作ったお菓子）」などを民族観光資源として積極的に活用し、県内の民族観光商品としている。

また、五峰県は茶が特産品であり、地域政府は2015年から、茶と恩施地域土家族文化の「女兒会」を利用して、「五峰土家茶郷女兒会」を開催している。2015年8月21日には、湖北日報伝媒集団三峽晩報と五峰県委宣伝部の共催により、五峰県漁洋関鎮佳運木本油会社において、第一回「五峰土家茶郷女兒会」が開催された。活動内容としては、「土家婚俗演出（婚姻習俗の展示）」、「醉美土家民歌手大賽（民歌の試合）」、「擺手舞大賽（擺手舞の試合）」と、「打溜子（溜子鑼など民間楽器の合奏）」、「竹編（竹で生産道具を編む）」などの地域文化の展示であり、また地域の茶や臘肉（スモーク豚肉製品）が、土家族の特産品として地域特産品販売会で展示即売された。

2016年9月26日には、五峰県漁洋関鎮で湖北省旅遊発展委員会と湖北日報伝媒集団が主催し、宜昌市旅遊局や五峰県委宣伝部、湖北日報伝媒集団三峽晩報の共催のもとに第2回「五峰土家茶郷女兒会」が開催され、地元民により土家族文化に基づいて構成された民族演出の「春満山寨」と「擺手舞」が上演された。そのほかに、「少数民族情歌邀請賽（愛情に関する歌垣）」や「自行車騎行大賽（自転車の試合）」なども行われた。

また、2017年10月27日から29日まで、第3回「五峰土家茶郷女兒会」が、宜昌長楽旅遊投資開発有限公司（宜昌長楽観光会社）と湖北日報伝媒集団三峽分社（湖北日報メディア集団三峽支社）が主催し、湖北日報伝媒集団三峽晩報（湖北日報メディア集団三峽晩報）との共催により、五峰県漁洋関鎮湖北采花茶業有限公司（湖北采花という茶関係の会社）の茶博館（お茶の博物館）で開催された。その活動テーマは「五峰相親節（お見合い大会）」で、内容は、「土家民俗婚俗体験（土家婚俗体験）」、「土家風景風情体験（土家族地域の自然観光）」、「2017世界旅遊皇后湖北年度冠軍總決賽・魅力五峰専場演出（2017年世界観光美人コンテスト・湖北省会場）」、「土家文化文明体験（広場舞の演出）」、「2017宜

⁹⁵ 長陽土家族自治県ホームページ <http://www.changyang.gov.cn> より。2018年1月参照。

紅古茶道五峰半程馬拉松（宜紅古茶道でのマラソン大会）」の6つ部分からなっていた。これまでの五峰県での「五峰茶郷女兒会」は、地域観光の発展のため開催された民族イベントで、特に土家族地域と土家族文化が展示された。また観光客は主に五峰県周辺地域の人々、特に宜昌市の人々であった。また、上述したイベントは、地域政府主催ではなく、湖北日報伝媒集団など湖北省文化大手企業より主催されたものであった⁹⁶。

以上から、五峰県における土家族観光開発は2010年以降であり、まだ初期段階であるといえる。このように、湖北省の少数民族観光と言えば、それは、土家族の民族観光であるが、特に湖北省の恩施地域の少数民族観光中心にして発展しているため、土家族人口が最も多い恩施地域の民族観光はまさに湖北省の民族観光を代表するものとなっている。

表 4-9 恩施州 2009 年～2017 年の観光客数と観光収入

年別	観光客数(万人)	観光総収入(億元)
2009	663.58	29.00
2010	1,062.49	50.60
2011	1,658.26	86.40
2012	2,198.58	119.50
2013	2,650.64	147.50
2014	3,100.41	200.01
2015	3,700.50	249.39
2016	4,366.00	300.00
2017	5,132.89	367.46

出典：恩施土家族苗族自治州政府ホームページ：

<http://www.enshi.gov.cn/shuju/>より筆者作成。2018年6月参照。

表 4-9 から、2010 年以降、恩施州の観光化は、観光客数も観光収入も共に急増している。現在、湖北省と恩施地域は、少数民族文化を観光資源として開発し、地域経済の発展を目指しているところである。また、恩施州は少数民族自治州として、少数民族文化に関する保護や伝承、宣伝といったことが地域の少数民族の発展にとって重要とされる。また、恩施地域にとっても、少数民族文化は、文化的にも観光産業的にも重要であり、その地域の少数民族文化のなかで観光資源として最も多く利用されているのは、土家族の文化である。さらに、近年、恩施地域では、各地に土家族テーマパークを建設し、テーマパーク観光を中心に民族観光を展開している。

第 5 節 恩施土家族の民族観光

⁹⁶ 五峰土家族自治県ホームページ <http://www.hbwf.gov.cn> より。2018 年 1 月参照。

恩施州の観光は「改革開放」以降、80年代初期には既に恩施市内で始まっていたが、その時期の観光業は市内に幾つかのホテルと何軒かの国営レストランがあるのみだった。また、その時期の恩施観光は、山間部の土家族地域の観光インフラの整備が遅れていて、主に恩施市の周辺部の人々が市内で文化や経済の交流活動に従事するぐらいだった。また、恩施の民族観光についても、多くの内陸部の少数民族地域と同じく、90年代中期から本格的に始まったと言える。土家族の重要な分布地である恩施地域の民族観光の特徴は、観光開発に土家族の文化を多く利用していることである。恩施の民族観光は、この約20年の間に、中国内陸部の有名な民族地域として大きく発展してきた。

以下では、恩施における土家族の民族観光を、1) 民族テーマパーク観光、2) 民族村観光、3) イベント観光、4) 自然観光地観光の4つに大別して見ていく。

5.1 恩施地域民族テーマパーク観光

5.1.1 「恩施土司城」

「恩施土司城」は恩施地域の最初の民族テーマパークで、2002年から営業を始め、恩施地域の代表的な土家族観光地の1つである。その「恩施土司城」は恩施市西北部の対山湾に位置し、総面積約2,000平方キロメートルで、土家族、苗族、侗（トン）族などの建築様式と「土司（土王）」文化に基づいて、かつての「土司」の城を復元した建築群であり、AAAA級観光地である。その目的は、土家族地域の土司時代の政治、経済、文化を展示して、土家族の長い歴史と多様な文化を提示することであり、その宣伝文句は「天下無双景、華中第一城（世界に唯一、華中地域第一の城）」と「土家第一城」である⁹⁷（写真17、写真18、写真19、写真20参照）。

⁹⁷ 2017年「恩施土司城」宣伝パンフレットより。



- (上左) 写真17 「恩施土司城」の門
- (上右) 写真18 「恩施土司城」の内部
- (下左) 写真19 「恩施土司城」での土家族の踊り
- (下右) 写真20 「恩施土司城」の宣伝文句

「恩施土司城」は「民族文化展示区域」、「宗教文化展示区域」、「娛樂区域」の3つの展示区域からなり、その中に、「門楼」、「廩君殿」、「侗族風雨橋」、「土家族民居」、「土司府九進堂」、「白虎彫刻」、「民族芸苑」など約20の観光施設がある。その中で「廩君殿」、「白虎彫刻」、「土家族民居」は土家族の代表的文化とも言える。例えば「廩君殿」には「廩君開疆拓土勝跡図」という彫刻壁画が飾られ、この案内板には「廩君は土家族先民の首領であり、廩君が土家族先民を助けたので、土家族先民は彼を神様として奉仕する」という説明が添えられている。また、「民族芸苑」には土家族の生産用具や織物が展示されている。こうして観光地内の彫刻と建築物を通して土家族の宗教・信仰文化が表現されている。また、「トン族風雨橋」と「トン族鼓楼」などの施設は、恩施地域におけるほかの少数民族文化を表現する。

「恩施土司城」では、毎日2回、午前11時と午後4時に、土家族の婚姻習俗に基づいて創作された舞台劇「土司娶親」と土家族の民歌などが上演されている。

「恩施土司城」では、土家族に関する民族イベントも行われている。2007年8月18日には、湖北省民族宗教委員会、三峡大学、恩施州民族宗教委員会、宜昌市民族宗教局、五峰県民族宗教局、重慶市彭水県民族宗教局、湖南省湘西州民族宗教委員会、恩施州政協と恩施州内の地域政府部門により「2007年公祭土家族始祖廩君⁹⁸大典」の祭祀活動が行われた。これには39人の土家族出身の代表者が参加した。その日、まず恩施州民族宗教委員会副主任兼「恩施土司城」管理处主任の李氏から、土家族文化「廩君」とこの祭祀イベントの意義に関する紹介があった後、当時の恩施州政協副主席劉氏による「廩君」と「徳濟女神」の彫刻像の除幕式があり、彫刻像が披露された。その後、39人の代表者は彫刻像にお酒などを捧げて参拝した。また「儼」の民族文化传承人たちによる「儼」の祭祀儀礼では、「廩君」の彫刻像へ祭祀した後、「擺手舞」の踊りが披露された。イベントの宣伝文句は「同心同徳万民祭始祖、有徳有儀千秋奠廩君（始祖廩君を祭祀するのは重要）」というものであった。また、この祭祀イベントを契機に、それ以降毎年旧暦の7月6日に「恩施土司城」で同じ祭祀イベントを開催するようになった。イベント内容は、「廩君」への祭祀儀礼と「恩施土司城」の観光である。イベントの宣伝は「遊土司王城、拜土家始祖、稷神靈庇護（恩施土司城を観光、廩君への祭祀、神様の保護を頂く）」と決めている。その活動について、当時の地域の新聞メディアは、「国内最初回の土家族始祖廩君の祭祀式」と評した。

また、「恩施土司城」は地域の代表的な民族文化施設として、地域政府により接待場所としても利用された。2008年4月6日に、国家副総理の李克強氏と湖北省書記の羅清泉氏、省長の李鴻忠氏が恩施州へ視察に訪れた際に、恩施州書記の肖旭明氏は彼らを「恩施土司城」に案内し、恩施州の歴史や民族観光の現状などについて報告したという⁹⁹。

「恩施土司城」は、恩施州民宗局が1996年に計画し、貴州省と雲南省の民族文化村を参考に、1998年に蘇州園芸設計院が観光地の建築設計を提案した。また、2001年に著名な社会学者、費孝通氏が「恩施土司城」¹⁰⁰と命名・揮毫し、2002年に営業を始めた。当時の全国代表大会において恩施代表は費孝通に依頼してそのテーマパークを「恩施土司文化城」と命名してもらった計画だったが、その後、恩施政府はそのテーマパーク全体を、もっと「土司」との関連性を強めるため、「文化」を省略して「恩施土司城」になったという。この恩施地域政府のように、観光開発の中で意図的に民族文化による観光地を作り上げることは、中国の他の少数民族地域においてもよく見られることであった。

以下の表4-10示すように、2002年以降、恩施地域のテーマパーク「恩施土司城」の観光者数と観光収入は年々増加した。また、2016年8月の筆者の現地調査によれば、その観光客は、北京、杭州、広州などからの団体客が多く、その背景には、恩施州の観光開発の結果、鉄道や高速道路網や州内の観光インフラ施設が整備されたことも関係しているであろう。2016年、「恩施土司城」の観光チケットは50円で、学生証や現役軍人などの証明証を持つ者は半額、児童および70歳以上の人が無料である。また、恩施州の州慶などの祝日には無料になる場合もある。

⁹⁸ 土家族の祖先と考えられている。

⁹⁹ 李超 2008「国務院副総理李克強視察恩施土司城」『動態』3、p. 53。

¹⁰⁰ その原物は、恩施州博物館に保存されている。

表 4-10 「恩施土司城」の観光統計

年別	観光客総数 (万人)	観光収入 (万元)
2002 年	5	60
2003 年	6	80
2004 年	7	85
2005 年	9	90
2006 年	10	100
2007 年	11	120
2008 年	15	150
2009 年	23	170
2010 年	28	580
2011 年	32	1,095
2012 年	43	1,190
2013 年	33	1,200
2014 年	37	1,390
2015 年	49	1,824
2016 年(10月まで)	48	1,630

出典：2016 年「恩施土司城」観光管理所提供の資料より筆者作成

2000年以降、恩施の観光客数が増えている一方、観光地の経済利益もますますよくなっている。民族観光を地域観光の目玉にしている恩施州にとって、恩施市内の「恩施土司城」の観光客数と観光収入の増加も、近年の全国的な観光客数や観光消費の増加、少数民族文化に興味をもつ人の増加と関連があるように思われる。また、民族テーマパークでの観光は、少数民族の人たちにとっては、観光開発を通じた民族文化の再認識、民族文化の宣伝と高揚、民族アイデンティティの強化につながっていると思われる。

5.1.2 「土家女兒城」

「土家女兒城」は恩施州あるいは湖北省の代表的な少数民族テーマパークとして、近年の少数民族観光ブームの話題の観光地である。また、「土家女兒城」は湖北省で、土家族文化を中心に民族観光を行っている観光地である（写真21、写真22、写真23、写真24、写真25参照）。



- (上左) 写真21 「土家女儿城」の入り口
- (上右) 写真22 「土家女儿城」の民族工芸品などの商店街
- (下左) 写真23 土家族婚姻習俗の展示（花嫁さん）
- (下中) 写真24 土家族婚姻習俗の展示（嫁入り道具）
- (下右) 写真25 「土家女儿城」の土家族の日常生活の展示（餅作り）

「土家女儿城」は湖北省恩施市内から車で20分の距離にあり、総面積は約6,800平方メートルである。2012年に恩施市華碩集团会社によって建設され、2013年10月に営業が始まった。「土家女儿城」は、土家族の文化、特に恩施地域の婚姻習俗の1つ「女儿会」を核にしたテーマパークであり、国家旅游局が指定したAAAA級旅遊景区である。その観光の宣伝文句は、「相親之都、恋愛之城」（お見合いの都、恋愛の城）や、また、「世間男子不二心、天下女儿第一城（世の男子は愛情に忠実で、世界で一番大切な女性の城）」であり、そのイベントや観光活動は土家族の婚姻習俗を中心に行われている（表4-6参照）。2013年10月に営業が始まって以来、恩施州や湖北省で話題の少数民族観光地になっている。また、恩施

市政府は、「女兒会」など恩施の伝統的民族文化を保存、伝承する一方、地域の民族文化をアピールするため、地域の重要な観光施設として、「土家女兒城」の建設に協力した。

「土家女兒城」には、土家族の食文化（お餅作り、恩施玉露茶作りなど）の店が設置されているほか、土家族や苗族のエスニック・レストランも何軒かある。そのほか、建築文化（吊脚楼）の展示や民族文化の観光演劇も毎日行われている（表4-7参照）。さらに、観光地には「土家民俗博物館」が設置され、その中には土家族に関する歴史や民具などが展示されている（表4-13を参照）。また、「土家女兒城」管理会社の職員によると、テーマパークには特産品の店舗300軒とホテル（合計約500室）が建設されている。また、毎年7月と8月の「女兒会」の期間中は「土家女兒城」の観光ブーム期であり、その時期のホテルの予約は通常2、3ヵ月前には満室になるという。

「土家女兒城」は恩施市と地元の観光会社が共同して作った観光地である。つまり、観光会社が出資し、恩施市が土地などの政策面で協力するという形である。観光会社の管理人H氏と恩施市観光課のY氏の話から、「土家女兒城」は「女兒会」に基づいて建設した民族テーマパークということであり、恩施市が地域の宣伝や観光業の発展、経済発展を目的に、また、観光会社が観光地の宣伝や会社の発展を目的に、両者の利害が一致したことで、「土家女兒城」のような観光地が出現したのである。

現在、漢族と何ら変わらない生活をしている土家族の人々にとって、「土家女兒城」の「土家民俗博物館」に展示されている土家族の文化を通して、自分たちの民族文化についての再認識や新たな学び、民族アイデンティティの強化などの効果が期待される（第6章で詳述する）。また、観光地内の「恩施非物質文化遺産伝承展演基地（恩施地域の無形文化財の伝承、展示、保護施設）」、土家族の文化伝承に関してある程度の教育的効果があると思われる。

他方、恩施市地域の人々にとって、民族テーマパーク「土家女兒城」は民族文化の観光地としての利用だけでなく、市民の休暇・娯楽地、地域の文化・商業の中核地にもなっている。筆者は2014年から2018年まで「土家女兒城」で何度も調査を重ねてきたが、その際、週末や祝日だけではなく、平日にも多くの恩施市民が「土家女兒城」を訪れていた。その理由について尋ねた市民からは、「テーマパークはチケットがいらぬし、多くの観光施設と公演が無料なのと、市の中心から近く、歩いて30分で来られる。市内から直行バスもあるので便利だからなかには、料理店などが多く、演出も日開催されているので、暇つぶしのいい場所。」との答えが返ってきた。

「土家女兒城」は、2013年の営業開始以来、ちょうど5年が経過したが、毎年旧暦7月の「女兒会」は最も重要な観光イベントとなっている。「土家女兒城」の観光業者は、ほとんど恩施地域の人で占められ、周辺地域の同業者の流入が少ないという状況で、近年ますます発展している。民族テーマパークの開始が2013年というのは、中国国内でみれば遅い方であるが、これから民族観光を発展させようとしている恩施にとっては、他の既に成熟した少数民族観光の事例が参考になる。

表4-11 「土家女兒城」内の重要施設

観光施設名称	利用内容
広場	女兒会広場（「女兒会」イベントと民族舞踊などの開催場所）、婚慶広場（「女兒会」イベントと結婚式等が行われる場所）

文化創意園	盛銘戈文化傳媒会社（民族歌と舞踊の芸術団体）、好又多電子商務会社、新北辰夢工場など文化産業の会社
休閒娛樂中心	植物園、水上樂園、ジムや体育館など
女兒大劇院（1000人席）	民族劇などの公演
相親長廊（800メートル）	主に「女兒会」イベントの時に使用
展示館	土家族民俗文化博物館、恩施州晒文化と晒産品総合展示庁、恩施非物質文化遺産伝承展演基地
その他	華晒芸術ホテル（1000人席、食事用）、土家民俗風情ホテル（500人、宿泊用）、会務中心（400人、会議など）、店舗（約300軒、物販売）、レストラン（20軒、土家族料理を中心に）、屋台（30軒、地域特産の食品を中心に）

出典：2016年9月に「土家女兒城」の管理人H氏の提供資料を元に筆者作成。

表 4-12 「土家女兒城」での観光演劇

時間	演出場所	演出内容	出演者
毎日午前 10:30～11:00	広場と「土家民俗博物館」	土家族の結婚式、「哭嫁」や「山歌」の公演	観光地の民族文化演出者
毎日午後 17:30～18:00	同上	同上	同上
毎日夜 20:00～20:30	同上	民族舞踊（摆手舞）	同上（観光客も参加）
毎日夜 20:30～21:00	広場の舞台	民族舞台劇	観光地の民族文化演出者

出典：2016年9月の現地調査資料を元に筆者作成。

表 4-13 「土家民俗博物館」の施設と展示内容

施設項目	展示内容
本館	「土司」制度、農具等の生活道具、建築文化、食文化、民族歌
別館	婚姻習俗、結婚式の演劇を毎日2回上演
「西蘭卡普」展示館	織物
地域物産店	特産（農産品、織物）の展示販売

出典：2016年9月の現地調査資料を元に筆者作成。

5.2 恩施地域民族イベント観光

2000年以降、恩施地域では、「牛王節」や「摆手舞節」など土家族イベントを利用した地域の観光開発が展開されたが、なかでも土家族の「女兒会」が最も重要な地域イベントとして観光化されてきた。

「女兒会」については、第5章で詳述するが、ここでは地域祝日として恩施市内で行われている「女兒

会」について紹介する。

まず、『恩施民俗』による「女兒会」についての紹介は以下の通りである。

湖北省の「女兒会」は恩施市、宣恩県と鶴峰県との3地域の境界にあつて、毎年旧暦5月3日と7月12日に「女兒会」を行う。その日、未婚の若者は綺麗な服を着て地域の市場に行き、歌合戦で好きな相手を探す。また既婚の婦女は結婚前の恋人と会うことができ、その他の人々は土産品を持ち寄り、市場で販売活動を行う。未婚の若者は「女兒会」で好きな人を見つけた後、結婚に至る場合もある。[廖ほか 2013:30]

次に、中国建国以降の「女兒会」の観光開発過程について見ていく（表 4-14、表 4-15 参照）。

表 4-14 「女兒会」の発展過程

時期区分	行政区分	時期段階	主な活動関連事項
建国以降	紅土郷政府	建国以降～「文化大革命」 「文化大革命」 「改革開放」以降	「物資交流会」として2回開催 禁止 お見合い会、地域特産品の交流会、民族歌や舞踊、演劇会
1995年以降	湖北省政府と恩施市政府 恩施市政府と観光会社	1995年～1999年 2000年～現在	恩施市民族路で「'95湖北民俗風情遊覧恩施土家族女兒会活動」と命名され、地域特産品の交流会を中心に行い、40名の青年男女が民族衣装を着て民族舞踊や土家族の婚姻式を上演 恩施市観光地（「梭布垭石林」など）や市内で開催され、民族舞踊と民族歌を上演。また、歌垣でお見合い場面を演じ、地域の人々や観光客もお見合い活動に参加。そのほかに、地域特産品の交流会

出典：2016年8月恩施市旅遊局が提供した統計を元に筆者作成。

表 4-15 「土家女兒城」で開催された「女兒会」

開催時間	テーマ	重要活動
2014年8月3日～10日まで	東方情人節・土家女兒会（土家族女兒会は東方のバレンタインデーである）	お見合い大会、民族歌の公演、地域特産交流会など
2015年8月1日～8日まで	趕場相親女兒会（市場に行つて女兒会に参加しよう）	お見合い大会、民族歌の公演、地域特産交流会、美人コンテストなど

2016年8月9日 ～14日	恋上梭布垭・愛在女兒会（梭布垭風景 区で女兒会のお見合いに参加しよう）	お見合い大会、民族歌の公演、地域特 産交流会、美人コンテストなど
-------------------	--	-------------------------------------

出典：2014年8月、2015年8月と2016年9月の現地調査資料を元に筆者作成。

要するに、かつての「女兒会」は恩施自治州の恩施市、宣恩県と鶴峰県の農村部地域の祝日であった。表 4-14 と表 4-15 から、湖北省政府と恩施市政府は、1995 年から「女兒会」を地域発展の重要な民族文化観光資源として観光化し、「女兒会」も土家族の「民族文化」に変え、開催場所も恩施市内へ移動した。その後は、毎年恩施州内の観光地と恩施市内で開催することになった。

その後、地域の人々だけではなく、他の民族の人々や観光客も「女兒会」に参加するようになった。参加方法も、以前は直接現場でしか参加できなかったが、現在はインターネットや職場で申し込むこともできる。しかし、参加者の人数が多くなる一方、「女兒会」で恋愛または結婚に至る人はそこまで増えてはいない。

「歌垣で愛情を表すこと」は「女兒会」での特別なお見合い方法であり、また、土産品の販売も「女兒会」の重要な部分である。現在、観光地で開催される「女兒会」で、お見合いが活動内容の一部として行われている。その他、土家族の民族文化（食文化、服装文化など）の展示と地域の宣伝（自然観光など）、地域の特産品（茶、蜂蜜、織物など）の交流会などの活動内容があり、交流展示が現在の「女兒会」の大きな目的になっている。

そして、2014年8月に「土家女兒城」が「女兒会」の開催場所となって以来、これまで3回開催された。また、「女兒会」に基づいて建設されたテーマパーク「土家女兒城」は、毎年の「女兒会」の開催期間以外では、土家族の婚姻文化に関する観光も宣伝している。「女兒会」に関する宣伝も多くの方法（インターネット、舞台劇、TVなど）を通して行われている。また、「土家女兒城」では、土家族に関する文化展示も行われ、特に土家族の婚姻文化の観光開発が行われている上に、「女兒会」を最も重要な民族文化と位置付けて観光化を推進している。毎年の「女兒会」の開催期間中の観光客数も、恩施州「土家女兒城」の観光客数が最も多く、またこの期間中の売り上げも「土家女兒城」の売店が最も大きい。

5.3 恩施地域民族観光村

表4-5と表4-6で見たように、現在、湖北省の少数民族観光村の多くは恩施地域に分布している。また、恩施地域の観光村には土家族のものが多く、これらの民族観光村は、恩施州の8つ県と市に分布している。これらの民族観光村が観光開発されたのは2000年以降であり、また各観光村にはそれぞれの特徴がある。ここでは、唐崖寺村の事例として取り上げる。

5.3.1 唐崖土司城遺跡

湖北省恩施土家族苗族自治州咸丰县唐崖鎮¹⁰¹唐崖寺自然村¹⁰²（以下、唐崖寺村と略記）は、唐崖川の川

¹⁰¹ 2015年までは尖山郷であったが、地域の発展政策のため、郷から鎮になり、またその名前も唐崖になっている。

¹⁰² 人々が自然発生的に集まってできた村である。それに対して、「行政村」がある。「自然村」と「行政村」は中国の行政区分でもあり、「行政村」はいくつかの「自然村」から構成される場合もあるし、1つの「自然村」が同時に「行政

縁にあり、唐崖鎮の南部に位置する（図2と図3参照）。唐崖寺村から唐崖寺鎮まで5kmの距離がある。村の人口は760人（2014年現在）で、7つの「村民自治小組」¹⁰³に分かれている。

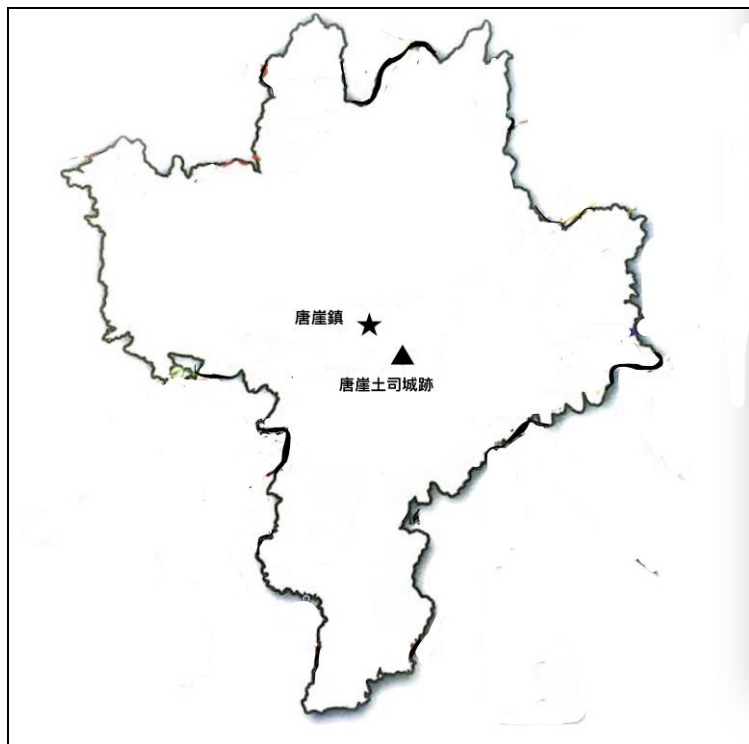


図2 咸豊県唐崖鎮において世界文化遺産地の「唐崖土司城跡」位置
出典：筆者作成



図3 唐崖鎮において唐崖寺村の位置 出典：www.baidu.comより筆者作成

村」として存在する場合もある。

¹⁰³ 村の自治的管理制度である。

村には土家族出身者が多く、他には漢族、苗族と朝鮮族など8つの民族がいる。生業は茶、畜産（子豚）、煙草の生産である。また、近年、多くの若者が武漢などの都市へ出稼ぎに行っている。

唐崖寺村には「唐崖土司城」遺跡があり、2015年7月に世界文化遺産に登録されたため、遺跡と遺跡から半径1,000mの区域は保護区に指定され、保護区内の村民（その多くは第5、6、7小組の住民）は、家や農地を売って、半ば強制的に保護区の外へ移住した。彼らの多くは「唐崖寺移民安置小区」や唐崖鎮政府の臨時の仮設住宅に移り住んだが、それでもまだ、遺跡保護区内に少数の村民が残っている。遺跡保護区内にある移住者の土地は、遺跡保護を目的に国家が買い取った。また、遺跡が登録された後、60歳未満の移住者については、遺跡保護区内で草取りや警備員など遺跡の環境保全に関する仕事に着くことができたほか、少数の若者が運転手、観光ガイドや切符の販売員などになっている。また、一部の人々が保護区の近くで観光土産店やレストランを営んでいる。

この「唐崖土司城遺跡」は咸豊県唐崖鎮の東部に位置し、唐崖鎮の中心部から3km離れている（写真26、写真27、写真28、写真29参照）。この遺跡は元代初期（1246年）に建立され、470年の歴史がある。総面積は57.75平方メートルで、3街、18巷、36院からなる。清朝雍正時期に「改土帰流」¹⁰⁴の政策が実施されたあと、「土司」¹⁰⁵（トシ）制度が廃止され、当時の唐崖土司（覃氏、18代土司）も廃された。つまり18代の覃氏がその最後の城主であった¹⁰⁶。

¹⁰⁴ 西南少数民族地域の「土司」制度は流官制度である。また、その流官は中央政府から派遣された。

¹⁰⁵ 元朝から西北、西南地域の少数民族首領制度である。首領は「土司」と呼ばれ、中央政府の下で、軍事や政治管理など方面において多くな自治権をもっている。また、「土司は現世の人間界の強力な統治者として、トゥチャ族の社会生活に重要な地位を占めてきた。トゥチャ族のもつ靈魂不滅の觀念により、生前偉大な人は死後もその靈魂は強い力を持つと考えられたので、一般にこの種の靈魂に対して恐怖と畏敬の念を持ち、その結果これに対する崇拜が生じた。」[覃光広等編著1993:716]。

¹⁰⁶ 唐崖土司城遺跡管理所の文献資料より。



- (上左) 写真 26 唐崖土司遺跡の入口
 (上右) 写真 27 唐崖土司遺跡の主要観光場所
 (下左) 写真 28 遺跡登録された前の民居
 (下右) 写真 29 村民が移住した「唐崖移民団地」

「唐崖土司城遺跡」は、1986年に咸豊県の「県級文物保護単位（県の文化財）」、1988年に恩施州の「州級文物保護単位（州の文化財）」、1992年に湖北省の「省級文物保護単位（省の文化財）」として『中国名所辞典』に登録され、2006年に中国の第6回「国家文物保護単位（国の文化財）」に指定された。さらにその後、湖北省「唐崖土司城遺跡」と湖南省「永順土司遺跡」、貴州省「播州海龍屯遺跡」の3つの土司遺跡は、2013年3月に世界文化遺産登録に申請され、2014年9月国際古跡遺跡理事会より判定され、2015年7月に「中国土司遺跡」として世界文化遺産に登録されたのである。

2013年から世界文化遺産の登録に当たって、湖北省の諸政府は、省レベルから鎮レベルまで、その実現に向けて多くの活動を展開した。以下は、遺産登録に向けた政府の重要な活動である。また、これらの活動は「申遺」または「申遺工作」と呼ばれた。

2013年2月、湖北省と恩施州において、省と州の「申遺工作領導小組」が設置された。湖北省文物局は支援のため専門家を咸豊県に派遣し、咸豊県では、県委書記と県長を組長として16人の副県長による工作小組が組織された。さらに、県には「申遺辦公室」と「申遺指揮処」が設置され、そのなかで

県委常委、県宣伝部部長、統戦部部長が「申遺指揮長」になり、県人大、県政府、県政協から1人ずつ派遣されて、「申遺副指揮長」になった。唐崖鎮にも「唐崖鎮遺跡処（唐崖鎮に位置する世界遺産に登録する専門事務課）」が設置された。

2013年3月、遺跡内の住民の移住と「土地徴用」¹⁰⁷が始まった。そして、「申遺」に関する文献資料の収集も始まった。また、同時に「土司」文化の展示館の建設場所の選定と、3D方式による遺跡の復元作業もが開始された。さらに、あらかじめ、ユネスコ対応の学者の選考も決定された。

2013年8月に、湖北省の省長は「唐崖土司城遺跡保護管理辦法（唐崖土司城遺跡に関する保護と管理制度）」という管理制度を実施に移し、2014年8月までに、唐崖鎮政府は遺跡の土地約100平方キロメートル（1,500畝）を買い取り、98戸355人の移住が完了した。

また、2014年5月31日から6月1日まで、湖北省文物局と三峡大学の共催により「唐崖土司學術研究会」¹⁰⁸というシンポジウムが開催され、多くの学者が参加し、50本の論文が発表された。こうした地域政府の努力が実って、2015年7月4日に、「唐崖土司城遺跡」は世界文化遺産に登録された。

「唐崖土司城遺跡」の観光開発は、その世界遺産登録直後から始まった。しかし、世界文化遺産資源であるため、その過度の観光開発は禁止され、また、その観光開発は政府が主導した。一般に観光開発は、行政や特定企業による観光資源（景観や遺跡、自然環境など）の保全整備と、観光施設・交通インフラの整備が中心となることが多いが[山村2007a:9]、2015年8月から、咸豊県においても、恩施市と福建省の建築会社が共同して、「唐崖土司城遺跡」の観光インフラ、すなわち、咸豊県から遺跡までの道路と遺跡内の観光施設と道路、歴史展示館などの整備が始まった（写真30、写真31、写真32、写真33参照）。

また唐崖鎮政府は、唐崖鎮の町を改造し、民家と政府の役所を含む鎮の建物を「土家族的」な建物に改修した。そして、町では、地域住民が協力してレストランやホテルなどの営業が始まった。その後、2016年6月に、「唐崖土司城遺跡」は世界文化遺産の観光地として正式に営業を開始した。また、その入園料は、大人1人80元である。

前述したように、村では、保護区からの移住者の場合、60歳以下の人だけが遺跡内の観光開発に参加することができた。中国の多くの農村部と同様、唐崖寺村においても1990年代から、多くの若者が都市部へ出稼ぎにしているため、村に残っている人の多くは老人と児童であった。また、村に残っている数少ない若者には、女性が多い。

次に、「唐崖土司城遺跡」で仕事をしている人々について見ていこう。

¹⁰⁷ 住宅用や農業用土地が国家へ売られ、国の土地になる。

¹⁰⁸ 学会は「唐崖土司城跡」、「唐崖土司と土司学」、「土司文化伝承及其他研究」3つの部分からなった。



- (上左) 写真 30 新たに建設された唐崖鎮の町と道路
- (上右) 写真 31 建設中の遺跡外の観光客接待所
- (下左) 写真 32 「唐崖団地」の計画図
- (下右) 写真 33 唐崖土司遺跡の宣伝看板

5.3.2 「唐崖土司城遺跡」での仕事

下の表 4-16 によると、「唐崖土司城遺跡」の観光開発には、村に在住する 18 歳から 60 歳までの人が参加している。一般的には、20 代と 30 代の女性は、遺跡でガイドや入園券と物産店の販売員になっている。雇用条件として、中卒以上の学歴、ガイドの場合には容姿端麗であることを要した。ガイドの給料は毎月の基本給 1,200 元と解説料 (1 回の解説は 100 元あるが、その中から 50 元を遺跡管理所に払うため、ガイドの取り分は 50 元) が収入である (毎月約 2,500 元)。また、入園券と物産店の販売員の給料は毎月 1,500 元である。ガイドは週 5 日の出勤であるが、入園券と物産店の販売員は毎日半日間の出勤で、毎月 4 日間の連続休暇がある。現在、ガイドは 8 名で、入園券 (4 人) と物産店 (2 人) の販売員は 6 名である。また、30~60 歳の女性のうち、遺跡の清掃や環境の維持の仕事をしている人が 18 人、スタッフの料理担当が 2 人で、その月給は 1,200 元であった。

表 4-16 唐崖寺村の村民の観光関係の仕事

性別	年齢層	遺跡での仕事種類	月給
女性	20～30 歳	ガイド	基本給料 1200 元＋解説料
女性	20～30 歳	入園券や物産店の販売員	1500 元
女性	30～60 歳	掃除員	1200 元または時給 10 元
女性	30～60 歳	炊事係	1200 元
男性	20～30 歳	運転手	1500 元
男性	30～60 歳	警備員	1500 元

村の 20 代と 30 代の男性は、観光車の運転手、30～60 歳までの男性は警備員をしている（写真 34 参照）。その月給はどちらも 1,500 元で、毎日半日間の出勤であり、毎月 4 日間の連続休暇がある。現在、運転手は 4 人、警備員は 20 人である。



写真 34 遺跡で働く警備員

また、遺跡での仕事は村人にとって、「安定して大変ではない」、「給料は少ないが、村での生活には十分である」、「家族と一緒に暮らすこともできる」などの意見がよく聞かれた。また村民によれば、同じ移住者であっても、皆が仕事をするわけではなく、仕事がある人の多くは「家里有銭（お金持ち）」、「有関係（政府と関係がある）」、つまり、唐崖村委會や唐崖鎮政府などの人と関係のある者あるいは金のある人だという。

次に、遺跡の外の土産店やレストランなどで働く村民について見ていこう。

表 4-17 遺跡の外の観光関連の仕事

性別	年齢層	仕事種類	月給
女性	30～50 歳	土産店やレストランの営業	約 3,000 元
女性	40～70 歳	道端での食品や特産品、織物などの販売	約 2,000 元

男性	30～50 歳	運転手	約 5,000 円
男性	30～50 歳	レストラン、ホテルなどの営業	約 5,000 円
男性	50～70 歳	道端での特産品などの販売	約 2,000 円

遺跡の外で観光関係の仕事をしている人には移住者が少ない。また、表 4-17 から、レストランや土産店などの店舗を営んでいる人は、ほぼ 30 から 50 歳の女性である。また、道端で食べ物や特産品、織物などの販売をしている女性は 40 から 70 歳、男性は 50 から 70 歳である。そして、運転手やレストランで働いている人は 30 から 50 歳の男性である。

これらの人は積極的に観光開発を支援した後、遺跡の外で商業活動をしている。彼らの収入は村の人々にとってはいい収入であるが、村民は満足していない。その理由として、「1 年のうち、観光客が多い時に収入はいいが、仕事は大変だ。また、観光客が少ない時は収入が少なく、でも観光客はいつ来るのかはわからないから仕事はしないといけないので不自由だ」というものであった。つまり収入の不安定と仕事の大変さというのが、遺跡の外で観光業をしている人に対する村人の印象であった。

最後に、文化の展示に従事している人々について見ていこう。

「土司文化」は世界遺産であるため、ここでの文化展示はほぼ「土司」に関するものである。この展示は、政府関係者が遺跡の見学に来るときと、国家祝祭日にだけ、遺跡内で展示される。また、文化展示に関する仕事は 3 種類ある。(1) 服装の展示。土司時代の服装を身につけ、「土司」夫婦を演じ、遺跡を歩く。その仕事は一般的には、男性 1 人 (30～60 歳、日給 100 円) と女性 1 人 (30～40 歳、日給 100 円) である。(2) 楽器の演奏。地元の音楽を演奏する。村と周辺地域の人から構成されたチームで、日給 400 円である。(3) 土家族の結婚式の公演。12 人ぐらい (2～3 名の女性、10 名の男性) で、日給は 100 円である。

これらの仕事は、「収入がよく、一番簡単な仕事」として村民には最も人気があるが、「こういう仕事に参加するのは、運が必要。上の政府の要人はときどき遺跡に見学に来るので仕事の機会が多いが、こういう仕事に呼ばれるかどうかは運の問題だ」。

5.3.3 観光開発前後の村人の生活の変化

観光開発により、村の人々の生活は多くの点で変容したが、最も顕著な現象はその居住環境と生業であった。ここで、村人の 1) 居住と 2) 生業について、観光開発前後の状況を比較して見ていこう。

1) 居住

移住する前は、多くの村民は伝統的な建物「吊脚楼」に住んでいた。咸豊県では、唐崖鎮のような農村部に多くの「吊脚楼」があるので、「乾欄之郷（乾欄の故郷）」である。しかし、2013 年から、遺跡の世界遺産登録のため、「唐崖寺移民安置小区」という唐崖鎮の中心部にある移民住宅団地に移住することになった。その中に 3 つのアパートと駐車場、公共の休憩娯楽区域などがある。各アパートは 6 階建てで、合計 30 室あり、1 階は全て店舗用の部屋で、2 階以上が住居用の部屋である。

この 2 種類の住宅を比較すると、以下の 3 つの違いがある。

- ① 生活費用。「吊脚楼」では山からの引用水と薪でご飯を炊くので、かかる費用はガス代と電気代だけであるが、「唐崖寺移民安置小区」では水道代から光熱費、共益費も必要となった。また、「吊脚楼」の前の庭でトマトや白菜など野菜を栽培することと、豚、鶏、魚など家畜を養殖することを通して食料品になること、農産品として販売すると少しでも貯金することができるであったが、「唐崖寺移民安置小区」での生活は野菜の栽培と家畜の養殖ができなくなるため、食費などが多くなっている。
- ② 活動面積。「吊脚楼」には庭がついているので、農産品の製造や加工などができ、活動面積が大きいのにに対し、「唐崖寺移民安置小区」は住居スペースだけで活動面積は少ない。
- ③ プライバシー。「吊脚楼」は一戸建てであるので、家庭のプライバシーの度合いが、「唐崖寺移民安置小区」の団地生活に比べて高い。

2) 生業

観光開発の前は、村の20歳から60歳までの人で外へ出稼ぎに行かなかった人の多くは農業を生業とし、少数は日用雑貨など自営業であったが、観光開発後は農業が出来なくなり、出稼ぎに行くか、前述のような観光関係の仕事につくか、あるいは失業ということになった。

つまり、観光開発により、村の人々の居住環境が大きく変化したことにより、従来の農業による生活から都市的な給与生活へと変化している。村の若者にとっては「町のアパートの方が奇麗で、現代的で便利」という理由で受け入れられやすいのに対し、年配者にとっては「町では農業もできない」ということで受け入れがたいものがある。さらに、「ここでの生活は何をするにもお金がかかる」という心配や不満を住民みんなが共有しているようである。

「唐崖土司城遺跡」は、湖北省の土家族文化の1つと考えられている。李（2014）は「唐崖土司城」の位置分布から、土家族の太陽崇拜、生殖崇拜、「靈魂不死」の宇宙観と族源意識などが見られ、また「唐崖土司城」は土家族の文化の結晶であると指摘している [李 2014:7-8]。また、範（2017）は、「唐崖土司城」の構造と建築技術に注目し、「唐崖土司城」は土家族の自然観を反映しているという [範 2017:29-31]。

現在、「唐崖土司城遺跡」の所在地である土家族の唐崖寺村では、住民の生活文化が遺跡によって影響され、遺跡の観光開発もその地域や民族と深いつながりがある。次に、「唐崖土司城遺跡」観光と土家族文化の関係についてみていく。

5.3.4 「唐崖土司城遺跡」観光と土家族文化

中国政府にとって文化遺産の保護は、古代と現代中国をつなぐ紐帯であるだけでなく、民族統合という行政機能をも補完している [加治 2008:191]。一方、地域や民族の文化は遺産観光を通して宣伝され、知名度が上がる。さらに、民族や地域は、遺産観光を通して文化意識が強化され高揚される。

唐崖寺村の世界遺産観光は、文化遺産観光であり、その地域では、以下に見るように、遺産と土家族文化を結びつけた観光開発が政府と観光業者により進められてきた。

1) 観光商品

土家族地域の酒や茶、「臘肉（スモーク豚肉）」などは、咸豊県の地域政府と地元観光業者、地元飲食業者が一緒になって、「唐崖土司茶」、「唐崖土司酒」などの特産品として開発・販売されている。こういう商品の宣伝材料としてよく使われるキーワードが、「悠久の歴史」、「唐崖土司」、「土家族先民」、「原生态」である。なかでも土家族の食文化と土司文化を結びつける代表的なものとして、「土司十大碗」（「土家臘肉」、「油茶湯」、「合渣」など恩施土家族料理を10個の碗に入れたもの）という宴会がある。

また、地域のレストランやホテルも、「唐崖土司農家楽」、「皇城餐館」、「唐崖土司酒店」など「土司」の名称を使ったものがあり、なかには地域や土家族の食べ物を提供している。また、これらレストランとホテルのデザインに土家族の伝統紋様や建築外観を利用したものもある。

2) 観光宣伝

地域政府や観光業者のホームページやパンフレットには、「唐崖土司城遺跡」に対して「土家族露天博物館」、「皇冠上最耀眼的宝石」、「湖北小故宫」などの宣伝言葉が使用され、また遺跡の宣伝ビデオでは、土家族の伝統衣装を着た地域の人々が土家語で「土司」と遺跡を宣伝する。つまり、土家族と遺跡と一緒に宣伝している場合が多い。

他方、地域政府は「土司」に関する歴史資料に基づいて、「唐崖土司夫人」（または「田氏夫人」という舞台劇を創作し、地域や民族文化の展示の舞台で公演している。この舞台劇では、「土司」の話だけではなく、土家族の婚姻習俗、宗教信仰なども披露される。

3) 町の改造

従来の唐崖鎮の町は、中国内陸部の普通の町と同じであるが、観光開発のため、鎮政府の建物を含む全ての建物が、土家族の伝統家屋「吊脚楼」の外観に改造された。また、村民の移住団地と遺跡に関する観光関連施設、トイレなども「吊脚楼」の外観と同じようなものに作られた。その他、遺跡の敷地内では、かつての村民の吊脚楼様式の家屋をいくつか残して改造し、現在の遺跡の事務室や博物館などとして利用している。こうして、町のある政府幹部は「歴史感があり、土家族地域の雰囲気がある。撮影も奇麗」という。

4) 地元民の文化教育

村の幹部は毎回の村民大会で、土司に関して簡単な歴史話と土家族の習俗などを村民に紹介する。また、村では、文芸公演や運動会が組織され、土家族の伝統衣装を着て、土家族の舞踊や民歌、伝統的婚姻習俗の「哭嫁」などが披露されている。

5.3.5 観光開発と住民意識の変容

観光開発とともに、唐崖寺村の住民は、自分の地域や民族文化に対して、新たな考えを持つようになった。以下では、筆者の現地調査資料をもとに、遺跡登録や観光開発による住民の文化意識の変容について見ていく。

(1) 事例1. 覃氏（土家族出身の50代の男性）

覃氏は「唐崖土司」の第23後代の後裔と考えられている。その証拠としては、「唐崖土司」覃氏一家の家譜を持っていて、彼の名前もその家譜に記載されている。「唐崖土司城遺跡」が世界遺産に登録される前、彼は村で農業をしながら、祖先の「唐崖土司」墓を守ってきた。ときどき、研究者や観光客が遺跡を見に来るときは、彼が遺跡を案内し、政府は毎年1,000元ぐらいを謝金として彼に渡したという。

政府の「唐崖土司城遺跡管理处」によれば、遺産登録の前後に見られる覃氏の意識の変容について、以下のように記されている。すなわち、「覃氏は遺跡の世界遺産申請時に重要な役割を果たした。彼は知っていることをすべて話し、貴重な資料になった。しかし、遺産登録後、彼は他の村民よりもっと利益をもらいたかったが、我々はそれに満足しなかったので、彼は今では遺跡に関することについて拒否する。さらに、彼は家譜を隠していることや、時々祖先の墓の門を閉め、観光客が見られないようにすることがある。彼がそういうことをやる理由を政府関係者はわかっているが、遺産に関する活動には特別な待遇がないので、私たちも仕様がなし」と。

一方、筆者の聞き取り調査で、覃氏は次のように語った。「私の祖先の財産が世界遺産になるのは、私や覃氏家族にとって光栄至極と考えたため、遺跡登録に向けて、私も無償で一生懸命出来る限り多くのことをした。国家や全世界が祖先の遺跡に注目する前に、私は何十年もただの墓守りであり、遺跡案内人であった。自分は祖先の財産の歴史と文化的価値を知っている。現在、遺跡は私の祖先の財産であり、私はその子孫としてずっと遺跡を見守ってきたが、いまここで警備員をしているほかには、お金など何もなかった。遺跡はもう世界の宝になったが、家譜や墓は私物であるので、自分はそういう権利があると思う。彼ら（政府側）はずっとこういうやり方なら、私もずっとこういうことをやる」と。

以上の記述から、政府と覃氏の間で、世界遺産となった「唐崖土司城遺跡」の観光利用に対する立場の違いが明確に読み取れる。世界遺産「唐崖土司城遺跡」は、所有者である覃氏の意に沿わない形で、土家族の観光資源に取り込まれ、土家族の歴史や民族文化として、今や盛んに観光利用されている。

(2) 事例2. 陳氏（土家族出身の20代の女性）

陳氏は「唐崖土司城遺跡」の所在地の村の住民である。遺産登録のため、多くの村民は村の外に引越し、土地を売る必要があった。当時、村民と政府の間で多くの矛盾があった。彼女はその時期に、親を説得して、最初に引越した村民であった。現在、彼女と妹、母親は遺跡のガイドの仕事をしている。

陳氏は筆者に次のように語った。「私たちにとって、唐崖土司城の存在は地域の特徴である。遺産になる前も、多くの人々が唐崖土司城をみるため遠くからやって来た。その時、みんな唐崖土司城をとっても気に入った様子だった。現在、唐崖土司城が世界遺産になることは、私たちの地域や民族の誇りであるが、私たちは家と生活を変えないといけなかったため、多くの村民は唐崖土司城に対して不満の感情を抱くようになった。しかし、私は民族と地域、国家の栄光を理由に親を説得した。政府も私たちに賠償をした。他方、子供も自分たち親の姿を見ているので、地域と民族文化が世界文化遺産になるために、私も力を出した。また、私たちもこの世界遺産をきっかけとして人生が変わった。現在、私も遺跡のガイドをして、土司と自分の民族と地域の文化について、昔より多くのことを知るようになった。これからももっと知るように本などで勉強する。現在、観光客に対して自分の民族文化などを紹介する時には、誇らしく思う」と。

以上の陳氏の語りから、唐崖土司城遺跡が世界文化遺産になったことが、陳氏や彼女の家族、村人た

ちの生活と意識にいかにも大きな変化をもたらしたかがわかる。陳氏の語りには、村の強制的な移転で生活を変えざるをえなかったことへの不満がある一方で、村の唐崖土司城遺跡が世界遺産となって世界に認められることに対する土家族の地域と民族としての誇りと、土家族の文化とアイデンティティーへの目覚めというものを読み取ることができる。

(3) 事例 3. 羅氏（土家族出身の 40 代の男性）

羅氏は遺跡登録後、遺跡内で土家族の衣装に身を包んで「土司」を演じている。彼は筆者に次のように語った。「遺産登録前は、自分の民族文化が何か、といった問題を考えたことがなかった。皆、唐崖土司城や民族文化について、先輩などから教えられたことや日常的なことだけ知っている。遺産登録後、村民大会などで初めて地域や民族と土司文化を勉強して、昔から聞いた話と日常生活の物事が一体何だったのかがやっとわかった。私はいま遺跡で土司を演じていて、多くの観光客が私に土司や土家族についてたくさんの質問をするとき、大体の質問に答えられるようになった。それに、この前から専門書で土家語を勉強している。仕事するときに時々使い、観光客から良い反応をもらえる」と。

羅氏の場合は、遺産登録後に土家族としての意識に目覚めたケースで、遺跡の中で観光客を相手に「土司」を演じて土家族の民族観光を推進していることに喜びを感じていることが読み取れる。

以上で見てきたように、「唐崖土司城遺跡」を世界文化遺産に登録にするに当たって、湖北省政府から唐崖鎮政府まで、様々な努力が払われた。特に咸豊県政府は、「申遺」（登録申請）のために、多くの県政府幹部を遺跡まで派遣し、直接的に「申遺」に参加した。これらの政府幹部からは、「申遺」に関する仕事について、「ストレスが多いが、地域にとって重要な機会なので、一生懸命頑張った」という話がよく聞かれた。また、筆者が知っている限りでは、登録された後、これらの政府幹部の多くが昇進した。つまり、「申遺」の過程で、地域政府が最も重要な役割を果たしたのである。地域に世界遺産があると、地域の知名度が上がり、観光開発にも有利に働くので、地域にとって、とてもいい発展の機会であると地域政府は考えている。

また、「申遺」の過程で、唐崖寺村の人々が直接的に関わっているのは、住宅の移動と政府による土地の買い取りであった。中国では「観光開発は行政主導で行われることが多いため、しばしば地元の人々に対する強制力を伴う」[兼重 2008a:157] ことが見られるが、現地調査で筆者が最も強く感じたのは、その移住者としての村民と政府の矛盾であった。その矛盾とは、第一に、住宅面積の問題で、移住の条件の1つとして、1世帯当たり、1人につき30坪の住宅面積をもらえるというもので、数の多い世帯はその分だけ大きな面積の家をもらえるということだったが、そのことが結果として、村民たちの間にその住宅分配に関して様々な混乱と問題を引き起こしたのである。第二に、賠償金の問題で、農地は1畝=2万元で買い取るということであったが、村民の間では、農地の地理的位置（町との距離）によっても金額に差がつくのではないかとの意見があったので、政府の提示する金額に対して疑問があった。第三に、将来の生業に関する問題で、遺跡が世界遺産になっても提供される仕事が少なく、農業をしないと収入がないが、農地は政府が買い取ることになるので、農業も出来なくなる。そして、以上のような矛盾は未解決のままとなっている。また、政府が強制的であることに対する地域の反発も強く、現在、遺跡内の3戸の村民が賠償条件に不満であるため、移住を拒否して元の住所に住み続けているという。

山村（2007a）も主張するように、地域社会にとって、世界遺産は地域振興の大きな切り札となる。特に行政と観光業を中心とした経済界にとって、地域の物件が世界遺産に登録されることは、地域の知名度を上げ、観光客数を増やし、経済的利益をもたらすことができるという点では非常に大きな魅力となる〔山村 2007a:5〕。しかし、上述したように、地元民に対して生活に大きな変化を強いることになり、同じ住民の間で明暗が分かれることが起きてくる。観光化に対応するため、当然、地元住民はこぞって観光開発への参加を希望するが、参加のチャンスが与えられるのは、唐崖寺村の場合でも、「政府関係者」や「お金持ち」など一部の人たちに限られる。また、遺跡の外で商業活動をしている村の人々にとっては、一年のうちでも観光客が多い時と少ない時の格差があり、そのため収入も不安定であるが、いつ来るかも分からない観光客相手の仕事をやめるわけにもいかないという現実があり、実際に、唐崖寺村の人々は、積極的にこの「大変」で「不安定」な観光関係の仕事をするだけが観光の利益者になれるという選択を迫られてきたのだ。また、一部の高齢者や観光開発に「行政と関係ない」人、「お金がない」人も、観光利益から排除され、都市への出稼ぎや村で失業者になる。彼らは遺産登録以降、観光活動においては利益喪失者あるいは観光開発の犠牲者と見ることもできるだろう。

5.4 恩施の自然観光地での民族観光

恩施州は自然が豊かで、美しい景観に恵まれているため、州内の多くの地域がその自然風景を「自然観光地」として観光開発してきたことから、近年は地域観光の中心になっている（表4-18を参照）。

表4-18 恩施州地域の自然観光地

観光地レベル	観光地名称と所在地
AAAAA	巴東県神農溪織夫文化観光地、恩施市恩施大峽谷景区
AAAA	恩施市梭布垭石林景区、 建始県石門河景区、建始県野三峡景区、 咸豊県坪壩営景区、咸豊県唐崖土司・黄金洞景区、 利川市騰龍洞景区、利川市龍船水郷景区、利川市仏宝山景区、 巴東県鏈子溪景区、巴東県巴人河景区
AAA	恩施市龍鱗宮景区、利川市朝陽洞景区、巴東県無源洞景区
AA	利川市蘇馬蕩景区、利川市玉龍洞景区

出典：恩施土家族苗族自治州旅遊委員会<http://lyw.enshi.gov.cn/html/zx/meijing/index.html>より筆者作成。2017年2月参照。

表4-18に示されているように、恩施地域には優れた自然観光地が数多く存在し、例えば「梭布垭石林景区」や「騰龍洞景区」は湖北省ばかりでなく国内でも有名な自然観光地であり、国内外の多くの観光客を惹きつけている。また、恩施地域政府はこれらの自然観光地において、土家族文化などの少数民族文化も合わせて利用した観光活動を展開している。そこで、以下では近年中国国内において話題の観光地になっている「恩施大峽谷」の事例を取り上げ、そこでの土家族観光の現状について見ていく。

5.4.1 恩施大峡谷

1) 自然観光

「恩施大峡谷」は恩施市内から60キロメートルの距離にある恩施市沐撫辦事処に位置し、峡谷の全長108キロメートル、面積約300平方キロメートルで、観光案内などではしばしば「中国のグランドキャニオン」と紹介されることもある。「恩施大峡谷」はその雄大な峡谷の景観を強調するため、「世界地質奇観、喀斯特地形地貌天然博物館（カルスト地形の天然博物館）」という宣伝文句も使われている。2011年に、湖北省旅遊局により「靈秀湖北十大旅遊名片（湖北省10大観光地）」の1つに選ばれ（ほかには、「神農架」、「武當山」、「長江三峽」など）、また2013年には「恩施大峡谷」の「一炷香」がアメリカのCNNテレビによって「中国最美40個景點」の1つとして紹介され、さらに2014年には「恩施大峡谷」がアメリカの世界的な地理雑誌『ナショナル・ジオグラフィック』（2014年第7号）でも紹介された。同じ年に、「第7回国家地質公園名簿」に登録され、国家旅遊局よりAAAAA級自然観光地として認定された¹⁰⁹。

「恩施大峡谷」の観光料金については、自然観光料金が「七星寨景区」110元、「雲龍地縫景区」40元、観光地内の観覧車が30元、ケーブルカーの往復料金が200元、下山のエスカレーター料金が30元である。また、「七星寨景区」と「雲龍地縫景区」には、「絶壁棧道」、「一炷香」、「雲龍地縫」、「迎客松」、「彩虹瀑布」、「一線天」など約46カ所のカルスト地形の観光名所がある。また、観光地の中には、4つ星ホテル「沐撫女兒寨度假酒店」があり、外装には土家族の建築様式である「吊脚楼」を、また、内装には土家族の服飾「西蘭卡普」のデザインを取り入れている。さらに、ホテルのレストラン「女兒寨富硒宴」では土家族宴会料理（「土家臘肉」、「合渣」、「油茶湯」など）を提供している。またホテルの名称は「相約大峡谷・情定女兒寨」という宣伝文句の中の「女兒会」にちなんで付けられたという。

2) 民族観光

① 「龍船調」

「恩施大峡谷」では2014年から恩施土家族の代表的民族歌の「龍船調」に基づいて編成された演劇「龍船調」を公演している（写真35参照）。「龍船調」は湖北恩施生態文化旅遊發展有限公司が約5億元を投資して恩施大峡谷の岩山に囲まれた面積4.9万平方メートルの広大な土地に建設された大野外劇場で、人工の池を挟んで舞台の反対側に2,000席の観客席が用意され、また、舞台背景となる「土司楼」、「牌坊」、「吊脚楼」など土家族の建築物が各所に配されている。出演者の数は500人にも上る。毎年4月から10月までの期間、毎晩午後8時から1時間上演され、チケット料金は218元から398元である。劇の内容は4部（「選瓜・定情」、「情殤・毒誓」、「重逢・犯神」、「冰積・伝奇」）からなり、土司時代の恩施地域を歴史背景として、土司の娘と庶民出身の土家族男子との恋愛物語である。また、劇の中で「女兒会」、「肉連響」、「恩施儺戲」など恩施土家族文化が多く紹介されている。

¹⁰⁹ 恩施大峡谷旅遊開發有限公司ホームページ <http://www.esdaxiagu.com> より。2017年10月参照。



写真35 「恩施大峽谷」で「龍船調」の演出

②「女兒会」

さらに、恩施地域一番重要な観光資源の1つである民族イベント「女兒会」が、「恩施大峽谷」を1つの開催場所として展開されている。例えば2015年の「女兒会」は、「走進恩施大峽谷・相約土家女兒会（恩施大峽谷での女兒会に参加しよう）」をテーマにして、8月25日と26日に「恩施大峽谷」の1号駐車場で開催された。8月25日の午前中に、「対山歌（土家族の歌の歌垣）」、土家族婚俗展示（「陪十姉妹」、「哭嫁」や結婚式など）など土家族文化が紹介され、また台湾と東ティモールの文化交流団体による文芸公演も行われた。8月25日の午後、「恩施大峽谷」なかの「一炷香」観光処で「情定一炷香」のイベントが催された。これは全国から19組の恋人同士が一同に会して行われる婚約儀礼のイベントで、それぞれが愛情の誓いを発表し、愛情の証の物を交換したあと、別れない印に鎖に施錠を行うというものだ。そして、8月25日の夜には、前述の「龍船調」劇の公演が行われた。また8月26日に「恩施市第三屆原生生態山民歌大賽（民族また地域伝統歌の試合）」、「趕場相親（お見合い大会）」などが開催された。

以上述べてきたように、「恩施大峽谷」では雄大なカルスト地形の自然景観を利用して、国内外の観光客をもてなしている。また、「恩施大峽谷」の観光会社が土家族文化を利用して大規模な民族観光を展開している一方、地域政府と共同で地域の民族イベントも開催している。2018年、恩施地域は中国の国営テレビで紹介されたことで、全国的に話題の観光地になり、「恩施大峽谷」の恩施地域は湖北省で観光客が最も多く訪れる観光地の1つとなった。筆者が2015年8月と2017年8月に「恩施大峽谷」で現地調査した際、話を聞いた外来の観光客は、この少数民族地域の雄大な自然観光にたいへん満足している様子であったが、少数民族文化に触れることによって、さらに恩施の自然に、都会にない自然らしい自然さ（「原生態」）を感じたという。例えば、2017年8月20日に「恩施大峽谷」での調査で、観光客のH氏（福建省在住、50代、男性）は次のように語った。

山ならば私の住んでいるところにもたくさんあるが、ここに来たのは、恩施大峽谷のためだけではない。恩施という少数民族地域は昨年初めて知った。ここに観光に来た故郷の友達から紹介された。彼から、ここで見た「龍船調」の演劇にとっても感動したということを知り、私と家族もこの公演を見

てとても楽しむことができた。少数民族地域で、彼らの民族劇を見たら、その地域や民族に対する理解が深まったので、ここで観光した自然風景の印象ももっと深いものになった。

このH氏の話は、外来の観光客にとっては、恩施地域において自然観光と民族観光が一体となって展開されていることが、民族観光をより効果的なものにする可能性が大きいことを教えてくれている。

第6節 小括

少数民族としての土家族は、建国以降、複雑な「民族識別工作」を通じて、1つの民族として政府から認可された。土家族地域の民族観光は1990年代後半から始まったが、それは自然観光などほかの観光様式と一緒に展開された。そして2000年代に入った頃から、民族観光村や民族テーマパークなどの観光形態が盛んになってきた。

また、同じ土家族でも地域性があり、さらに土家族観光においては、土家族文化の観光利用についても、地域の観光形態に多少の違いが見られる。土家族文化に関する観光開発は、その独自性を重視した民族の文化要素の選択を通して民族アイデンティティの強化という側面にも期待が込められている。それは、土家族が漢族および苗族など他の少数民族と長期間一緒に居住してきたため、彼らの文化の影響を強く受けているということがある。こうした背景から、民族観光を通じて土家族としての独自性を強く打ち出すために、特徴的な文化を選ぶという傾向が見られる。また、近年、国家が文化保護に関する政策を実施して以来、土家族文化のいくつかの文化要素が「非物質文化遺産」などの重要文化財に指定されていて、土家族の民族観光においてもこれら文化要素が観光資源としてよく取り上げられている。

では、湖北省の少数民族観光の特徴は何か。それは、第一に、恩施地域の土家族の「女兒会」を中心にした民族テーマパークによる民族観光にある。民族テーマパークを重要民族観光様式にして省内の民族観光を展開している。90年代初期から営業されてきた「恩施土司城」は恩施地域だけでなく、湖北省民族観光の重要施設でもある。「恩施土司城」は恩施土家族文化を中心として民族文化に関する展示や交流などが行っている他方、恩施また周辺地域の土家族人々にとっても自民族文化について了解や再認識などの民族文化習い場であり、イベントなどの開催を通して、民族アイデンティティを強化する施設である。そして、2010年代に入ると、土家族と苗族が多く存在する恩施州では、土家族の恋愛習俗である「女兒会」に着目して観光化し、州内に「土家女兒城」と呼ばれる民族テーマパークを造って、この地域の祝日にもなっている「女兒会」を「東方のバレンタインデー（東方情人節・土家女兒会）」と称して盛大なイベントに仕立て上げた。

第二に、土家族のテーマパークである「土家女兒城」が政府主導のものであるということだ。これは、1995年以来政府により展開されてきた地域文化の観光化という流れをくむものであり、2013年に恩施地域の政府と地元観光業者が共同して「女兒会」という婚姻習俗を基に建設したものである。地方政府が観光事業を積極的に展開した背景には困難な地方財政というものがあった [周 2001a:188]。「土家女兒城」が一定の成功を収めたことから、恩施地域の別の観光事業者によって、新たに「施南古城」や「硯

都茶城」¹¹⁰という商業文化施設も次々と建設された。

第三に、恩施地域の少数民族観光を展開する中で、「漢族」との違いが意識されるようになったことである。恩施州の土家族と苗族等の少数民族は長期にわたって漢族と生活を共にしてきたことから、特に土家族は漢族から強く影響を受け、民族文化の多くが「漢化」されてきた。そこで、恩施政府は、少数民族観光を展開するに当たって、「女兒会」という土家族の特定の地域だけに見られた婚姻習俗の一部を、「漢族と違う」土家族独特の「民族風情」のある文化として観光化し利用してきたのである。

第四に、恩施地域の民族テーマパーク「土家女兒城」内の「土家民俗博物館」における土家族文化の展示や「女兒会」イベントの開催は、経済効果とともに土家族の民族文化としての宣伝効果をもたらし、土家族の民族意識の覚醒・強化に貢献していると言える。しかし、「女兒会」のような地域政府による「民族文化の創出」あるいは「土家女兒城」で展示されている「選ばれた民族文化」が、当の土家族の人々に自分たちの「真の」民族文化としてどこまで受け入れられるかは、今後の土家族観光の大きな課題の1つと言える。

¹¹⁰ 恩施市政府により、地域で生産される茶と土家族文化に基づいて建設された商業観光施設であり、住宅街である。

第5章 恩施土家族における「女兒会」の誕生と観光化

第1節 はじめに

民族観光においては、当該地域政府が民族文化の創出や活用において主導権を持っているが、中でも、地方エリートは、観光開発による民族文化の創出において極めて重要な役割を果たしてきた〔長谷川1995〕。兼重（1998）も、民族観光における民族文化の創出において、地方エリートおよび少数民族エリートの重要性について指摘しているが〔兼重1998:143〕、そのなかで少数民族エリートは「幹部」として一括りされている。

しかし、本論では、民族観光において民族文化を創出する人々を「民族エリート」ではなく「地域エリート」と呼ぶことにする。何故なら、湖北省土家族の民族観光において、民族文化を創出するエリートのなかには、土家族以外の漢族や苗族の出身者もいることや、また、そのエリート構成についても、少数民族幹部だけではなく、地域の知識人など他の社会的身分の人もいるからだ。ここで、本論の「地域エリート」を、(1) 地域の知識人、(2) 少数民族幹部、(3) 地域の企業家、(4) 民族文化の伝承人の4つのタイプに分類し、それぞれの地域エリートと民族観光の関係について考察する。

土家族の民族観光において、文化のある部分がどういう基準で観光資源として選ばれ、また、どういう過程を経て民族または地域文化になるのかということについては、国家あるいは地域政府の政策の重要性が指摘されているが〔馬2003、横山2004など〕、民族地域エリートと民族観光の具体的な関わりについてほとんど明らかにされていない。

そこで、本章では、土家族の民族観光のなかでも特に湖北省恩施地域の土家族の代表的な民族観光文化の1つで、これまでも何度も言及してきた「女兒会」と呼ばれるイベント観光に焦点を当て、地域文化および民族文化の創出の過程で浮かび上がってくる土家族の地域エリートと民族観光の相互関係について考察する。

すでに見てきたように、恩施州は、湖北省の西南部に位置し、湖北省で唯一の少数民族自治州、すなわち恩施土家族苗族自治州である。恩施州の前身は、1983年8月19日に「民族区域自治」¹¹¹制度により少数民族自治州として成立した「鄂西土家族苗族自治州」であったが、1993年に改名して「恩施土家族苗族自治州」となっている。州内の民族構成は、少数民族（54%）と漢族（46%）からなり、また少数民族の大半は土家族と苗族が占め、その他には侗（トン）族、彝（イ）族など少数民族がいる。恩施州には8市県があり、その行政の中心は恩施市である¹¹²。

第2節 民族観光としての「女兒会」

¹¹¹ 中央政府の統治に基づいて、少数民族地域で自治地域が成立している。それら自治地域では、自治組織と自治権利を有している。

¹¹² 恩施土家族苗族自治州政府ホームページ：http://www.enshi.gov.cn/zzf/zq/より。2017年8月20日参照。

2.1 「女兒会」の由来

「女兒会」の起源地は、恩施市紅土郷¹¹³の石灰窯行政村¹¹⁴である（図4と図5参照）。

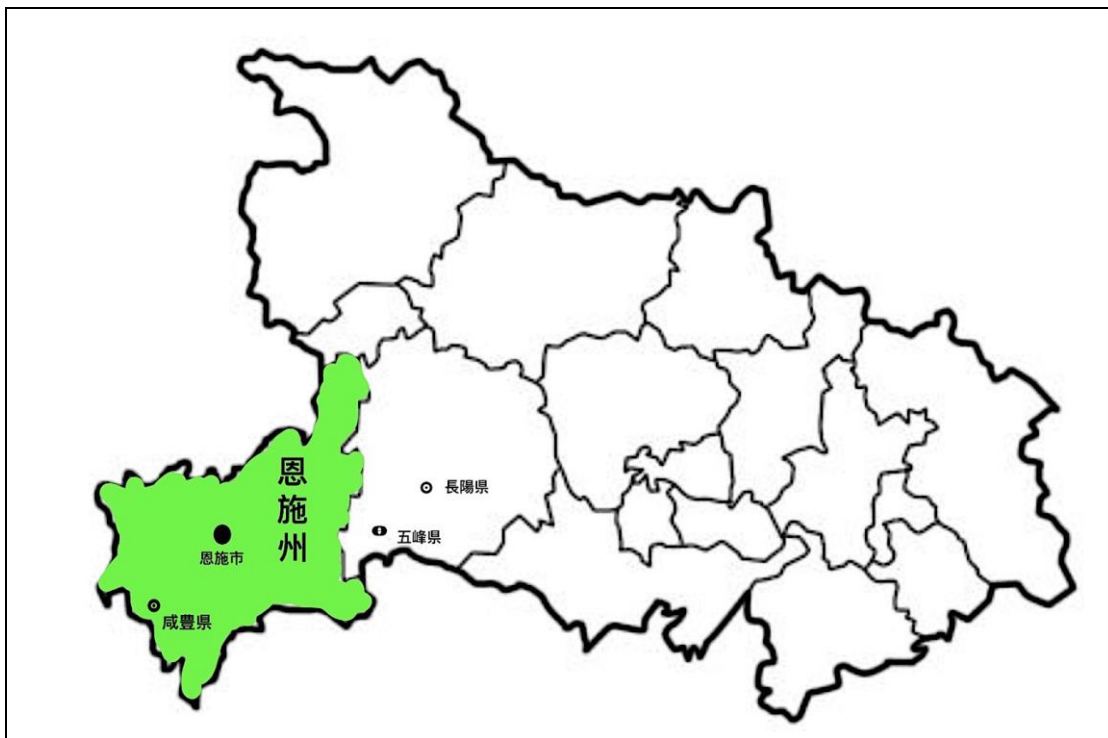


図4 恩施州における恩施市の位置づけ

出典：筆者作成

¹¹³ 恩施市の東南部に位置し、恩施市内から110キロメートルの距離にある。紅土郷の総面積は約231平方キロメートルで、総人口は4.8万人である。恩施市紅土郷政府ホームページ：http://hongtu.es.gov.cn/htgk/201206/t20120625_49397.htmより。2017年8月20日参照。

¹¹⁴ 紅土郷の東南部に位置する。面積は41.57平方キロメートルであり、人口5,290人である。2002年に石灰窯郷から石灰窯村へ変更し、それ以降紅土郷に属する。

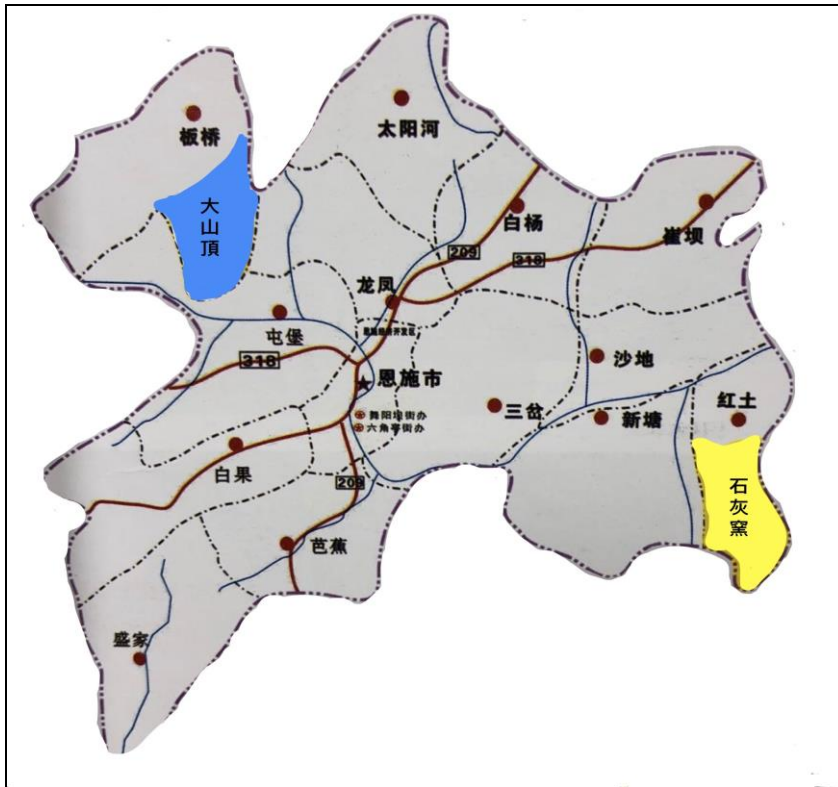


図5 「女兒会」の起源地の恩施市石灰窯村

出典：劉（2009）より筆者作成

「女兒会」は、1949年の建国以降に復活したが、「文化大革命」により一時中止され、「改革開放」以降の1980年代に地域エリートにより伝承されてきた。さらに、1995年以降の全国的な民族観光ブームにより、恩施地域の代表的文化として観光化されてきた。

恩施市の観光パンフレット¹¹⁵によると、「女兒会」についての紹介が以下のように記されている。

「土家女兒会」は「東方情人節（東方のバレンタインデー）」または「土家情人節（土家族のバレンタインデー）」と呼ばれ、恩施地域を代表する伝統的な祝祭日の1つで、毎年旧暦7月7日から12日まで開催される。「土家女兒会」はかつての巴人の原始婚姻習俗の1つと考えられ、恩施土家族の青年男女が自発的に結婚相手を探すという目的のための祝祭日であった。「土家女兒会」は恩施を「相親之都（お見合いの都）」、「恋愛之城（恋愛の町）」とみなしている。

また、現在、恩施市旅遊局が観光資源として利用している「土家女兒会」や「恩施土家女兒会」の前身は恩施市の石灰窯地域の「女兒会」と大山頂地域の「野老公会」¹¹⁶であるが、ここでは石灰窯地域の

¹¹⁵ 恩施市旅遊局編 2016年『恩施旅遊指南』。

¹¹⁶ 毎年の旧暦5月21日と7月22日に、地域の人々は市場に行って、自由に恋愛活動に参加する。その恋愛活動の形は、市場でお互いに好意を持つ人同士が恋愛話しをするほか、既婚者も参加できる。また、既婚者はその日に結婚する前の恋人と会うことが多かった。湖北省恩施市政協文史資料委員会編 2005『恩施土家女兒会』中国文史出版社、pp.6-9。

「女兒会」に焦点を当てる（写真 36 と写真 37 参照）。



(左) 写真 36 石灰窯村の「女兒会」の開催場所 (1)

(右) 写真 37 石灰窯村の「女兒会」の開催場所 (2)

石灰窯地域の「女兒会」については、これまで、詳細な歴史的文献資料がなく、唯一存在した民国期（1912 年）の『黄氏日用雑誌』¹¹⁷の原本が、1953 年に、当時の「土地改革」政策により紛失した。この原本の謄写本¹¹⁸には「女兒会」に関する記述があり、「十個棚女兒会」の説明として、「普段、外出が禁止されている未婚の女子は、この日に綺麗な服を着て市場に行く。お互いに好意を持つ人同士が夜まで恋愛話をする（未婚婦女理頭善粧、穿着一新、相邀趕場。結縁男女、趁此良機、相互瞥見。中意者、嫣然一笑、以為情願、約定交談、傾吐愛慕、至晚而歸）」と記されている。

「女兒会」の発見者である齊書清氏¹¹⁹は、多くの現地調査と歴史資料に基づいて、「女兒会」について次のように述べる。

清朝末と民国期まで、恩施石灰窯地域では、「女兒会」は、毎年旧暦 7 月 12 日に、周辺地域の人々、特に若い人々が市場にやって来て、好きな相手を探す習俗であった。一般的には、未婚の女子が市場に行くのは珍しく、また、ちょうどその時期は地域の「月半節」¹²⁰で、既婚の婦女も里帰りしているので、その日、市場には女性が多く、ゆえに、「女兒会」という名称となった。また、「女兒会」は明朝末期から始まった。

¹¹⁷ 政協恩施市文史資料工作委員会編 1985 年『恩施文史資料』第一冊、p184。

¹¹⁸ 1984 年に謄写者齊書清さんが恩施市誌辦へ提出したが、現在その謄写本は行方不明である。

¹¹⁹ 筆者は 2017 年 6 月に、93 歳の齊書清さんに聞き取り調査を行った。齊さんは 1953 年の「女兒会」に参加して、現在の妻と恋愛になり、結婚に至った。また齊さんは、「女兒会」に関する重要人物であるため、これまで挙げられている「女兒会」に関する多くの研究などに参加している。

¹²⁰ 「月半節」は旧暦の 7 月 12 日であり、亡人を記念するための祭日である。

「女兒会」は、正確な起源は不明であるが、開催時期は毎年旧暦の7月12日である。また、「女兒会」は、かつて恩施石灰窯地域の祝祭日の「月半節」で、自由恋愛で結婚相手を探す活動を指した。一般的に、女性は外出が禁止されていたが、その日に限って、集会の重要参加者として結婚相手を探すこともできた。他の集会比べて、その日はほとんど女性のための集会であるため「女兒会」と言う。「女兒会」は1995年に、全国的な民族観光ブームのなかで観光化されたが、それ以前は、前述のように恩施石灰窯地域の祝祭日であり、自由な恋愛活動を意味した。すなわち、1995年という年は、中国政府が民族観光政策を大々的に打ち出し、その後の少数民族観光に大きな影響を与えたことから、中国の観光化の歴史を考える上で1つの大きな画期と見なすことができる。

よって、以下、「女兒会」の発展過程を2つの段階、すなわち、(1)建国から観光開発の始まる1995年までと、(2)1995年以降に分けて、「女兒会」の発展と地域エリートの関わりについて述べ、湖北省土家族の民族観光における民族文化の表象の一面を明らかにする。

2.2 建国以降から1995年まで

中国建国以降、一連の政治政策と文化大革命により、中国の民族文化は大きく変容した。中でも、建国以降から1978年の「改革開放」まで、多くの伝統習俗や民族文化が「封建的」「旧社会的」「旧弊打破」などの理由で政府により禁止され消滅した。しかし、「改革開放」以降になると、逆に、それらの伝統習俗や民族文化を復活させようとする機運が高まった。さらに、全国的な経済発展を目指して市場経済への転換が行われ、少数民族地域においても地域経済の発展に向けて民族文化が重要な観光資源として観光開発に利用されるようになった。

そこで、以下において、建国から1995年までの期間をさらに、1)建国以降から「改革開放」までと、2)「改革開放」から1995年までという2つの時期に分けて、石灰窯村の人々の聞き取り調査資料から、「女兒会」の変化を見ていく¹²¹。

2.2.1. 建国以降から「改革開放」まで

(1)事例1. 田氏（土家族、女性、60代、主婦）

私は1979年の「女兒会」で夫と恋愛関係になり、その2年後に結婚した。しかし、その時は「女兒会」という呼び方ではなく、「趕月半」¹²²（ガンユエバン）と呼ばれた。「女兒会」は1960年代と1970年代初期にはそれほど重視されなかったもので、普通に市場の日として過ごしたが、1970年代後期から復活した。1970年代後期の「女兒会」の演目として、地域の体育大会（綱引きやバスケットボール）、舞台での歌や踊り（チャルメラなどの楽器演奏と「儺戲」¹²³（ノオシ））などがあった。また、その日の市場はお正月以外で一番賑やかであるため、周辺の村からも大勢参加した。17歳の時友達と一緒に「女兒会」の市場に行って、夫の共通の友人を通して夫と出会い、お互いに好意をもち、その後ずっと連絡して、最後に彼から求婚され、親の許可を得て結婚した。

¹²¹ 筆者は2017年3月と6月に、村で「女兒会」について、10人ぐらいの人に聞き取り調査を行った。

¹²² 石灰窯地域では旧暦の7月12日の月半節を祝い、市場に行く。

¹²³ 土家族の伝統的な祭祀など機能をもつ宗教儀礼や演劇の1つである。

(2) 事例 2. 楊氏（漢族、男性、70 代、農業）

私の若い頃やその前の 1960 年代にあった「女兒会」は、皆わざと「女兒会」とは言わず、「趕月半」という言い方が多かった。旧暦の 7 月 12 日になると市場に行き、買い物をする人もいるし、結婚相手を探す人もいた。それは、かつて「封建的な」習俗であったので、参加者も地域と周辺の人々であった。建国以降の 1950 年代初期に、郷政府は「女兒会」で物品の交換や売買を目的とした「物資交流大会」を 2 回開催し、そこで「儼戲」も披露された。その後、1961 年から 70 年代末期までの「大躍進」¹²⁴政策と「文化大革命」などによって「女兒会」はしばらく禁止されたが、実際には毎年その日になると市場が立った。私はお見合いで妻と結婚した。

(3) 事例 3. 鄧氏（土家族、男性、80 代、農業）

建国以降、「女兒会」は建国前と同様、毎年「月半節」で行なっていたが、周辺地域の人々もやってきた。その時期の「女兒会」には 2 つ重要な内容があった。その 1 つは、主に天麻など漢方薬や日用雑貨の売り場として、もう 1 つは、未婚の青年男女がその日に結婚相手を探す場としてだった。当時は、「女兒会」を通じて結婚相手を探した後、結婚に至った人もいたが、お見合い結婚が主流だった。その後、1950 年代後期から 1970 年代初期まで、「女兒会」は毎年続いたが、市場での商売が重要な内容であった。また、その間、郷政府は「女兒会」に反対の態度をとっていたが、人が多く集まることと、商売が重要な活動内容だったことから、「物資交流大会」として「女兒会」を 2 回主催した。私はお見合いで妻と結婚した。

以上をまとめると、「女兒会」は、従来石灰窯地域の 1 つの祝祭日であった。しかし、当時、石灰窯地域の人々は「女兒会」とは呼ばず、「改革開放」までは「趕月半（ガンユエバン）」と呼ばれた（事例 1、2、3）。その日は市が立ち、地元の人々が参加し、特に未婚の男女はこの日に自由に結婚相手を探すことができた。また、地域政府は、建国以降から「改革開放」まで、「女兒会」を政治的理由により禁止したが、「女兒会」の経済的機能を利用して、「女兒会」を「物資交流大会」という名称で主催した（事例 2、3）。その内容は物品交流会であったが、娯楽として「儼戲（ノオン）」も披露された。1970 年代後期からは地域体育大会も開催されるようになった。一方、毎年「女兒会」は「月半節」の祝祭日に市場を開設するという形で続いている。さらに、「女兒会」の婚恋機能も今日まで続いてきているが、当時は、それほど重要なものではなかった（事例 2、3）。

2.2.2 「改革開放」から 1995 年まで

(1) 事例 4. 田氏（土家族、女性、30 代、自営業）

「女兒会」は私たちの地域にずっと前からある習俗で、子供の時に祖母から「女兒会」の話を知ることがあり、よく参加した。しかし、「女兒会」という呼び方は 1980 年代頃から始まった。その前は「趕月半」と呼んでいた。1980 年代から政府は「女兒会」を開催するようになった。「女兒会」には市場があり、地域の演劇や民族の歌や踊りなどがあるので楽しかった。地域の体育大会も 1980 年代ごろから

¹²⁴ 中央政府が 1958 年から 1960 年まで実施した生産政策であった。

始まった。その時の「女兒会」の参加者は、主に私の地域とその周辺地域の人々であった。「女兒会」で結婚相手を探すことができるのは知っていたが、やはり難しいと思う。80年代後期か90年代初期の頃から、「女兒会」は盛大化し、恩施市内からも観光客が来るようになった。今の「女兒会」は、地域で一番重要な祝祭日として、大人から子供まで楽しんでいる。私はお見合いで隣村の夫と結婚した。

(2)事例 5. 黄氏（土家族、男性、40代、自営業）

私は「女兒会」に何回も参加した。1980年代以降の「女兒会」は市場があり、歌や踊りなど地域の人々が演じるものが毎年あった。「女兒会」で結婚相手を探すことができるのは知っていたが、難しいと思う。私の周りでは、こういう経験者は少数だ。80年代から90年代までの村の「女兒会」は賑やかで、参加者が多く、その内容も豊かであった。「女兒会」の開催期間中、町の店や屋台などの売上げがすごかった。また、「女兒会」での物品交流販売は漢方薬が中心であった。私の妻とは、親戚から紹介されてお見合いで結婚した。

(3)事例 6. 覃氏（土家族、男性、50代、公務員）

「改革開放」後、「女兒会」は復活した。また「女兒会」という呼び方も、1980年代から恩施地域で呼ばれている。地域特産品など物品交流販売以外に、地域体育大会や民族歌などを披露するショーも始まった。「女兒会」は、結婚相手を探すという婚姻習俗の機能だけでなく、「女兒会」の期間中に周辺や他地域から多くの人々がやって来て、地域経済の発展にとっても重要なものだった。特に私たちの地域は、天麻など漢方薬が有名であり、またちょうど「女兒会」の時はその漢方薬が旬であるため、多くの薬関係者が村まで漢方薬を買いに来た。80年代から90年代まで、一般的にはお見合い結婚が多かったが、私たちの地域では「女兒会」に参加して好きな人を探し、結婚するということはよくある話だった。さらに、政府は主催者として、国家の政策、特に民族政策や農業政策などに関する宣伝も、「女兒会」を利用して地域の人々に伝えている。私の妻は同じ学校の出身で、恋愛結婚である。

以上、「改革開放」以降1995年までの間に、「女兒会」は石灰窯地域で復活し、一番盛大な集会になっている。また、地域特産品の販売などの経済活動は「女兒会」の重要な内容になっている（事例4、5、6）。事例4と6から、「女兒会」という呼び方はその時期から次第に広まったことがわかる。また地域政府は「女兒会」の集客力を利用し、国家政策などの政治宣伝の場に利用しただけでなく、「女兒会」の内容を増やした。「女兒会」は、従来の村落の経済交流活動の自然な集会である「趕月半」から、地域政府が主催して多くの機能を併せ持つ重要な地域祝祭日になった。

次に、1995年は、前述のように、中国政府の民族観光政策により、少数民族観光にとって大きな変化の年であるので、以下、1995年以降の「女兒会」について詳しくみていこう。

2.3 1995年以降

1995年以降の「女兒会」は、全国的な民族観光政策に基づいて、恩施地域の重要な観光資源として開発され、石灰窯地域から恩施市、そして恩施市内の観光地へと移植されてきたが、石灰窯地域では現在まで毎年続けて「女兒会」を開催している。以下は、1995年以降の石灰窯地域の「女兒会」の様子

である。

(1)事例7. 祝氏（苗族、女性、30代、主婦）

1990年代後期、「女兒会」は賑やかであった。特に1995年以降「女兒会」は恩施州またその周辺地域で有名になり、観光客も多く地域から来ている。恩施市内から石灰窯村まで車で5時間ぐらいかかる上に、当時、村にはホテルが少なかったが、毎年の観光客は多かった。「女兒会」は恩施市と恩施市内の観光地でも開催されたため広く知られるようになった。その時期から、地域の人々、特に若者は「女兒会」という呼び方に慣れ、かつての「趕月半」という呼称は忘れられていった。また、その時期の「女兒会」は、地域の演劇と民族の歌や踊りの披露、つまり、舞台公演がその重要な内容であった。地域特産品交流会と地域体育大会は毎年続いているが、政府は「女兒会」で好きな人を探すという伝統習俗にも注目し、1990年代後期から話題になったりしたが、多くの若者が都市へ出稼ぎに出て、インターネットの利用が普及するとともに、結婚相手を探す方法も多くなり、かつてのように、「女兒会」でわざわざ結婚相手を探すこともなくなった。私は恋愛結婚である。

(2)事例8. 樊氏（土家族、女性、40代、公務員）

1995年に「女兒会」が恩施市市内で初めて開催されて以来、ずっと続いている。当時、石灰窯地域の人たちは皆喜んだ。自分たちの地域の習俗が重視され、さらに恩施市内にも移植されたのは、地域の誇りであった。また、1995年以降の「女兒会」は地域の一番盛大な集会として、民族文化の展示、つまり民族歌と踊りや演劇「儺戲」の披露が重視されているほか、「女兒会」の焦点も、地域特産品の商業交流から民族文化の展示へと移行し、「女兒会」の恋愛習俗もだんだん重視されつつある。地域の体育大会も続いている。1995年以降、「女兒会」の参加者は、観光客の数が多くなり、地域の道路などの基盤整備やホテルなどのサービス業も発展している。

以上の事例から、1995年以降の「女兒会」は、民族観光という全国的な国家政策の下で、恩施地域の少数民族の文化資源として観光開発され、恩施市内などで開催されている一方、その発祥地である石灰窯地域でも毎年続いている（事例7、8）。しかし、民族観光の関心がそれまでの経済交流から地域文化や民族文化の展示へと変わりつつある。さらに、「女兒会」の観光客の増加により、道路、レストラン、ホテル等の地域の観光インフラの整備にもつながっている（事例8）。

また、文献資料から、建国以降1995年までの石灰窯地域の「女兒会」の内容について見ていくと、以下の通りである。

表5-1 1995年までの「女兒会」の活動年表

年間	テーマ	主催者	内容
1949年～1957年 建国初期、政府は「女兒会」	なし	なし	市場、自由で好きな相手を探す

について状況不明			
1958年	物質交流会	石灰窯郷政府	市場
1959年～1978年 政策により禁止されたが、実際には開催されている	なし	なし	市場、自由で好きな相手を探す
1979年の「改革開放」以降、回復された	なし	郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の出演、体育大会 (市場、自由で好きな相手を探す)
1984年 恩施州が自治州になった後	第1回石灰窯 女兒会	恩施市政協と 郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の出演(市場、自由で好きな相手を探す)
1985年	なし	郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の出演(市場、自由で好きな相手を探す)
1986年	1986 石灰窯 女兒会	恩施市市政府、 郷政府	歌と舞踊など文芸演劇の出演、民間での文化の展示、「女兒会」に関する歴史などの宣伝、歌垣(市場、自由で好きな相手を探す)
1987年	なし	なし	なし
1989年	1989 石灰窯 女兒会	恩施市市政府、 石灰窯区政府	歌と舞踊など文芸演劇の出演、民間文化の展示、体育大会、「女兒会」をテーマとした文章、書道と絵の大会(市場、自由で好きな相手を探す)
1993年	1993 石灰窯 女兒会	恩施市市政府、 石灰窯区政府	歌と舞踊など文芸演劇の出演、民間文化の展示、体育大会(市場、自由で好きな相手を探す)

出典：2005『恩施土家女兒会』と『恩施市郷鎮街道誌叢書・紅土郷誌卷』より筆者作成

表 5-1 にみるように、建国初期に、「女兒会」は政府主催の「物資交流大会」として 2 回開催された。その後、1960 年代から「改革開放」まで中止され、再開されたのは「改革開放」以降であった。一方、建国初期の地域政府は、「女兒会」を地域経済の発展に利用し、その経済的機能を重視していたが、「改革開放」以降 1995 年までの間、政府はその経済的機能に加えて、集会的機能にも注目するようになり、その場を利用して国家政策の政治宣伝と地域体育大会などを行うようになった。その他にも、「改革開放」以降、国家の文化保護発展政策により地域政府が民族文化を重視するようになったため、「女兒会」の期間中に民族および地域文化の展示が盛んに行なわれるようになった。

以上、1995 年の中国政府の「民族観光政策」を境に、その前後の石灰窯地域における「女兒会」について見てきた。以下の表 (5-2、5-3、5-4) は、文献資料から 1995 年以降の恩施市における「女兒会」の観光開発過程について整理し、まとめたものである。

表 5-2 「女兒会」の観光開発過程

1995年以降	湖北省政府と恩施市政府	1995年～1998年	1995年に、恩施市内民族路で「95'湖北民俗風情遊覽恩施土家族女兒会活動」と命名され、地域特産品の交流会を中心として行い、40名の青年男女が民族衣装を着て民族舞踊や土家族の婚姻式を演じた。それ以降1999年まで、毎年、恩施市内で「女兒会」を行う。
	恩施市政府、恩施市委員会と観光会社	1999年～2013年	1999年、初めて恩施地域内の観光地で開催された。2000年、「恩施土家女兒会」と改称し、恩施市内や観光地で開催され、民族舞踊と民族歌が演じられた。また、歌垣でお見合い場面を演じ、地域の人々や観光客もお見合いイベントに参加した。
	恩施市政府、恩施市委員会と観光会社	2013年10月～現在	2013年「女兒会」をテーマとした土家族のテーマパークが建設され、ここで毎年「女兒会」が開催されている。また、そのほかの観光地と恩施市内でも同時に開催された。

出典：『恩施土家女兒会』より筆者作成

表 5-3 「女兒会」に関する重要な観光活動

年別	観光活動内容
2000年	「女兒会」は恩施州の4つの祝祭日の1つと指定された（他の3つは、「恩施州州慶節」、「牛王節」、「摆手舞節」）。
2005年	「女兒会」という観光ブランド商標が国家商標名簿に登録された。 「土家女兒会」のMTV（宣伝広告ビデオ）が作成された。
2006年	石灰窯村で民間組織の「女兒会伝承保護協会」が設立された。 恩施州と恩施市の最初の「非物質文化遺産」として登録された。
2007年	湖北省民族事務委員会は「恩施土家女兒会研究」を研究課題として出した。 「恩施土家女兒会」は恩施市の3つの観光中心の1つになった（他の2つは、「恩施大峽谷風景区」、「恩施玉露茶」）。
2008年	湖北省の文化観光祝祭日になった。
2009年	「恩施土家女兒会」は、民俗類の非物質文化遺産（無形文化財）として、「湖北省第二批省級非物質文化遺産名録」に登録された。
2010年	「女兒会」のホームページ（ http://www.nuerhui.com ）が創設された。

2011年	「女兒会」の舞台劇「嗯嘎・女兒会」が創作された。
2012年	「女兒会」に基づいて創作された28万字に及ぶ長編小説『女兒会』が出版された。
2013年	「女兒会」に基づいて、恩施市内でテーマパーク「土家女兒城」が建立された。

出典：恩施州のホームページ <http://www.hbenshi.gov.cn> (2017年6月28日参照) より筆者作成

表 5-4 1995 年以降 2016 年までの「女兒会」観光史一覧

年別	テーマ	主催側	開催場所
1995年	1995年湖北民俗風情遊覽恩施土家族女兒会活動	恩施市政府	恩施市内
1996年	1996年恩施土家女兒会	恩施市政府	恩施市内
1999年	1999年龍麟宮女兒会	恩施市政府	龍麟宮自然觀光地
2000年	2000年中国首届清江闖灘節閉幕式暨2000年女兒会	恩施市政府	梭布垭石林自然觀光地
2001年	2001年恩施土家女兒会	恩施市政府	梭布垭石林自然觀光地
2002年	2002年恩施土家女兒会	恩施市政府と梭布垭石林風景發展株式会社	梭布垭石林自然觀光地
2003年	2003年恩施土家女兒会	恩施市政府	梭布垭石林自然觀光地
2004年	首届魔芋節暨2004年恩施土家女兒会	恩施市政府	恩施市内
2005年	2005年恩施土家女兒会	紅土郷政府と梭布垭石林風景区開發会社	石灰窑村、梭布垭石林自然觀光地
2006年	2006年恩施土家女兒会	恩施市政府と梭布垭石林風景区開發会社	石灰窑村、梭布垭石林自然觀光地
2007年	走進恩施州・相伴女兒会	恩施市政府	恩施市内と梭布垭石林自然觀光地
2008年	2008年恩施土家女兒会	恩施市政府、福星城不動産会社、恩施和声走商貿会社	恩施市内
2009年	2009年恩施土家女兒会	恩施市政府、恩施市市委員会	恩施市内
2010年	2010年恩施土家女兒会 相約恩施女兒会・夢圓土家情人節	恩施市政府、恩施市市委員会	恩施市内（民族広場、風雨橋西親水走廊）
2011年	2011年恩施土家女兒会 相約恩施女兒会・夢圓土家情人節	恩施市政府、恩施市市委員会	恩施市内（民族広場、清江東路）
2012年	第三屆湖北・恩施生態文化旅遊節 暨2012恩施土家族女兒会 相約晒都女兒会・情定土家情人節	恩施州政府、湖北省旅遊局、恩施市政府、恩施市市委員会、恩施州旅遊委員会	恩施市内

2013年	第四屆湖北・恩施生態文化旅遊節 暨 2013 恩施土家族女兒会	恩施市政府、恩施市市委員会	恩施市内（清和園広場）
2014年	2014 恩施土家族女兒会 東方情人節・土家女兒会	恩施市政府、恩施市市委員会	恩施市内（親水走廊）、 土家女兒城
2015年	2015 恩施土家族女兒会 走進恩施大峽谷・相約土家女兒会	恩施市政府、恩施市市委員会	恩施大峽谷自然觀光地
2016年	2016 恩施土家族女兒会 恋上梭布垭・愛在女兒会	恩施市政府、恩施市市委員会	梭布垭石林自然觀光地
2017年	2017 恩施土家族女兒会 相約龍馬小鎮・情定玉龍湖畔	恩施市政府、恩施市市委員会	龍馬風情小鎮、梭布垭 石林、晒都古城

出典：『恩施土家女兒会演變揭密』と恩施州政府のホームページ <http://www.hbenshi.gov.cn>（2017年12月28日参照）より筆者作成

以上の3つの表（表5-2、表5-3、表5-4）から、1995年以降、「女兒会」は湖北省政府と恩施市政府から注目され、特にその恋愛機能が注目されていることがわかる。こうした民族観光開発の背景には、「女兒会」が、元来、恩施農村地域の祝祭日や習俗であったものが、恩施州政府によって注目され、民族文化や地域祝祭日の1つとして1995年に都市部へ移植されたことと、2000年に、恩施市の3つ観光重要項目の1つとして州内の各観光地（「梭布垭石林」など）で観光に用いられたということがある。2007年には恩施州の3つ観光中心（他の2つは、「恩施大峽谷風景区」、「恩施玉露茶」）の1つになった。2011年に恩施市地域発展政策「3都建設（他の2つは、「世界晒都」と「休閒養身之都」）」において、「女兒会」に基づいた「相親之都（お見合いの都）」が建設された。そして、「女兒会」が恩施市内や恩施自治州内の有名な観光地で開催されるようになり、また、2013年に建造された土家族の民族テーマパーク「土家女兒城」においても重要なイベントとして開催されてきた。さらに、湖北省の観光政策「鄂西生態文化旅遊圈」¹²⁵では、「女兒会」を恩施地域の最も重要な民族観光資源として利用することになった¹²⁶。

表5-3、表5-4からわかるように、「女兒会」は恩施地域の重要な観光資源となり、恩施地域や湖北省の民族観光において重要な役割を果たしている。その所有権もかつての石灰窯村所在の郷政府から、恩施市政府へ移っている。また、近年、観光会社の「女兒会」に関するイベントも重要になりつつある。さらに、「女兒会」が地域の共有文化資源となったため、例えば、2015年と2016年の「女兒会」は、「恩施大峽谷」自然観光地と「梭布垭石林」自然観光地のほかに、テーマパークの「土家女兒城」でも開催されている。一方、石灰窯村でも、1995年以降、毎年「女兒会」を開催しているが、地理的悪条件などの理由により観光化はそれほど進んでいない。例えば、2017年の石灰窯地域の「女兒会」は、紅土郷政府により主催され、地域民間組織の「女兒会伝承協会」が支援して、「風情女兒会・縁聚石灰窯（石灰窯の女兒会へようこそ）」をテーマにし、2017年9月2日に石灰窯村民委員会前の広場と村の道路に

¹²⁵ 恩施州を中心として、その自然環境と少数民族文化を利用して、恩施州またその周辺地域の観光を発展させる政策。

¹²⁶ 恩施土家族苗族自治州政府ホームページ：<http://www.hbenshi.gov.cn>より。2017年8月20日参照。

臨時に作られた市場で行われた。その日の活動は主に4つの部分、すなわち、「石灰窯運動大会（運動会）」、「民族文化公演（民族演芸）」、「趕場相親（お見合い活動）」、「医療隊身体検査（健康診断）」であった。「石灰窯運動大会」は8:00から10:00で、村民と政府職員とのバスケットボール大会であった。そして、「民族文化公演」は10:30から11:30で、村民たちによる歌や踊りと、地元の民族知識人の楊氏が創作した舞台劇『女兒会』と地域の伝統劇「儼」が上演された。「趕場相親」とは、地域特産品の薬品「天麻」などを市場で1日中販売する一方で、「女兒会」に来た全員が自由に好きな人を見つけるというものだ。また、「医療隊身体検査」というのは、恩施市の病院からきた医療チームが村民の医療衛生知識の普及と体調検査を行うものであった。その日、村で最も人気を博したのは「民族文化公演」であり、特に舞台劇の「女兒会」と「儼」の上演であった。村の参加者たちは、既に1ヶ月まえからこの日のために準備していた（写真37と写真38参照）。



(左) 写真 38 村民は儼戲の前の準備



(右) 写真 39 儼戲で展示している儼の面

一方、2017年の恩施市観光地での「女兒会」は、9月1日と2日に、恩施市政府より主催され、「相約龍馬小鎮・情定玉龍湖畔（龍馬小鎮でお見合い大会に参加しよう）」が宣伝文句だった。また、「龍馬風情小鎮」と「梭布垭石林景区」、「晒都茶城」の3つの会場で開催された「女兒会」の詳細は下記（表5-5、表5-6参照）のようになる（写真40、写真41、写真42、写真43、写真44、写真45、写真46、写真47参照）。

表 5-5 2017年「恩施女兒会」活動日程表（1）「龍馬風情小鎮」会場

活動時間	活動テーマ	活動内容	活動主催側
9月1日～2日	「浪漫的味道」萬人油茶湯 民俗体験暨土苗風情美食節	「油茶湯」作り体験と 食べる体験	恩施市委宣傳部、恩施市民 族宗教局、龍鳳鎮政府、湖

			北金果茶業股份有限公司
9月1日 14:00～ 17:00	「浪漫水之舞」水上狂歡秀	龍馬人造湖でウォーター スポーツショー	恩施龍馬風情文化旅遊管 理有限公司
9月1日 19:00～	「愛情讚美詩」詩歌民謠篝 火晚會	湖北省内外の有名な詩 人による朗読会と民謡 の公演	恩施市委宣傳部、摩牙詩刻 文化公司、恩施龍馬風情文 化旅遊管理有限公司
9月2日 9:30～ 11:00	開幕式	土家族の歌、踊りなど 民族文化公演	恩施市文体新広局、恩施龍 馬風情文化旅遊管理有限 公司
9月2日 11:00～	新生活・新風采・新業績 迎接十九大主題攝影展暨 愛在硒都系列采風攝影活 動啓動式	第19回人民代表大會以 降の社会經濟發展成果 の写真展示会と、恩施 地域をテーマにした撮 影会	恩施市文聯、恩施市工、恩 施市新聞中心
9月2日 15:00～ 17:00	浪漫之約土家婚典	お見合い大会、土家族 式集團婚禮と土家族婚 俗の展示など	恩施市民族宗教局、中国共 産主義青年團恩施市委員 会、恩施龍馬風情文化旅遊 管理有限公司
9月2日 19:30～ 21:00	浪漫之聲第五屆恩施山民 歌大賽	恩施市の各郷や鎮政府 の代表チームによる山 歌や民歌の歌合戦への 参加	恩施市文体新広局、恩施龍 馬風情文化旅遊管理有限 公司

表 5-6 2017 年「恩施女兒会」活動日程表 (2)「梭布垭石林景区」と「硒都茶城」会場

活動時間	活動テーマ	活動内容	活動主催側
8月31日～9月2日	第三屆鄂台少数民族相約 女兒会	35人の台湾同胞と「女兒 会」など恩施民族文化の体 験	恩施市統戰部、恩施市 台湾事務辦公室
8月26日～9月2日	恋上梭布垭・愛在女兒会 婚慶博覽會	お見合い大会、婚紗旅拍博 覽會、土家流水宴会	「梭布垭石林景区」
9月1日～9月12日	民俗文化旅遊貿易博覽會	「硒都茶城」で地域特産品 と民族商品の販売会、地域 観光宣伝	恩施市商務局、恩施市 工商局、恩施市硒襄縁 廣告伝媒有限公司



(上左) 写真 40 2017 年梭布垭石林景区の女儿会のお見合い場所 (1)

(上右) 写真 41 2017 年梭布垭石林景区の女儿会のお見合い場所 (2)

(下左) 写真 42 2017 年梭布垭石林景区の女儿会のお見合い場所 (3)

(下右) 写真 43 2017 年梭布垭石林景区の女儿会の宣伝看板





上左：写真 44 2017 年龍馬風情小鎮のお見合い場所

上右：写真 45 2017 年龍馬風情小鎮の「女兒会」の宣伝ポスター

下左：写真 46 龍馬風情小鎮の町風景（1）

下右：写真 47 龍馬風情小鎮の町風景（2）

以上、石灰窯地域での「女兒会」は恩施市政府主催された観光地での「女兒会」と比べて地域住民の、娯楽、文化、医療と福祉、経済交流を意識したプログラムになっているのに対し、恩施市政府主催の観光地での「女兒会」は2日間にわたって恩施市内外の多くの団体や組織が参加し、盛り沢山のプログラムが準備され、土家族の文化が意識的にアピールされている。

また、筆者が参加した2016年の石灰窯地域の「女兒会」に関しても、恩施市内やテーマパークにおける「女兒会」と比較して、いずれの地域でも民族歌や踊りが中心であることがわかるが、上の表で見た2017年のケースと同様、石灰窯地域に特徴的なのが、地域体育大会や医療チームによる無料の診療が民族文化の展示とセットになっていることである。一方、恩施市内と観光地での「女兒会」はお見合い活動が大きな特徴になっている。また、その開催期間について、石灰窯地域での「女兒会」は1日間であるのに対し、恩施市内と観光地での「女兒会」は数日間開催されている。さらに、その参加者について、石灰窯地域の参加者は地元の人々が多いのに対し、恩施市内と観光地は恩施州内外からの観光客が多い。

また、石灰窯地域での「女兒会」に関する事は、紅土郷政府、石灰窯村委員会と「女兒会伝承協会」によって決まるが、恩施市内と観光地での「女兒会」は恩施市政府と観光会社で決める。しかし、いずれの「女兒会」にも地域エリートが参与した。民族文化の観光開発は国家の政策や政治的要因と密接につながっている一方、個々の地域政府は国家の政策という大枠の下で、個別の地域や民族の実情に応じた政策を行っている。その際、重要な働きをするのが地域エリートである。彼らは地域政府の下で、地域や民族文化の保護や伝承、宣伝など多様な取り組みを行ってきた。恩施地域の「女兒会」の民族観光においても、地域エリートとの関わりが重要となる。以下では、この地域エリートと「女兒会」の関係についてみていこう。

2.4 「女兒会」と地域エリート

これまで、「女兒会」の伝承やその観光開発に、地域エリートが多く関わってきた。地域エリートは、

(1) 少数民族幹部、(2) 地域の知識人、(3) 地域の企業家、(4) 民族文化の伝承人という 4 つのタイプに分類でき、そのいずれのタイプも、石灰窯地域と恩施地域のエリートに見られる。以下は、「女兒会」と地域エリートの関わりについて調査事例からみていこう。

2.4.1 少数民族幹部

(1) 事例 1. 齊書清氏

齊書清氏は恩施州建始県の苗族出身で、1952 年から石灰窯郷政府で仕事をするようになった。齊氏は 1950 年に、石灰窯郷の「女兒会」の話聞いたことがあった。1952 年に石灰窯郷へ転勤した後、地域の人々と「女兒会」の話の信憑性を確認し、地域政府に報告した。しかし、建国初期には、国家の経済的、政治的理由などで「女兒会」が禁止された。また齊氏は 1952 年に、政府の事務室で民間から収集した文化資料を整理していたところ、「女兒会」に関する文章を載せている『黃氏日用雑誌』という本を見つけた。しかし、この本は、当時の文化運動により紛失したため、「女兒会」に関しては、一切の文字資料が失われてしまった。さらに、齊氏本人も、「女兒会」の関係者として 2 回も政治的迫害にあった。1995 年以降、恩施州で民族観光が始まった当初、「女兒会」を地域観光資源として開発する最初の段階において、政府側や民族文化伝承人、地域の知識人などと一緒に「女兒会」の歴史を明らかにし、その開催形式と活動内容について決めるなど、「女兒会」の観光開発に尽力した。

1979 年に「撥乱反正」政策があり、私は「女兒会」に関して文章や本を書くことを再開した。多くの民族文化学者と政府の人々が私のところに「女兒会」に関していろいろ情報を入手しに来て、1980 年代に「女兒会」を再開することになった。また、「改革開放」政策により、地域政府は、地域経済の発展のため、「女兒会」の経済的効果を重視するようになり、また伝統文化の伝承や保護に関する文化的政策が復活したため、「女兒会」は政府によって開催されることになった。私はその「女兒会」の開催に関して多くの仕事をした。例えば、「女兒会」に関して雑誌などで文章を発表したり¹²⁷、地域での文化に関する政府の会議で、「女兒会」についてその伝承や保護などを提案した。1995 年以来、恩施市内や他の観光地で「女兒会」が開催されるようになった。「女兒会」の観光開発には、私も政府と観光会社の会議に参加して、その開催方法などについて提案した。例えば地域特産品交流会や歌垣でのお見合い活動などである。また、政府と観光会社は私から「女兒会」に関する伝説や逸話などの情報を入手し、民族文化の宣伝や「女兒会」の観光活動に利用した。

(2) 事例 2. 楊光富氏

楊氏は恩施市芭蕉郷の土家族出身である。1976 年に恩施市財政局から石灰窯地域へ転職になり、政府で文化の宣伝に関する仕事をするようになった。楊氏は、地域の知識人あるいは地域出身者として、1980 年代初期に「女兒会」が復活して以降、「女兒会」の発展のため多くの活動を行った。2006 年に「女兒会伝承協会」¹²⁸の副会長になり、その後 2010 年から 2015 年まで会長を務めた。また、近年の石灰窯

¹²⁷ 「石窯女兒会の由来」1985『恩施文史資料第一期』pp. 198-200 など。

¹²⁸ 恩施地域民族文化復興の民間組織の 1 つである。その組織は 2006 年に成立し、最初は会員数 100 人であったが、2017 年は 60 人で、その多くは石灰窯地域と恩施市内の地域企業家、民族幹部、地域の知識人である。年会費は 100 円で、そ

地域の「女兒会」に関しても、活動計画や内容などの面で多くの貢献をした。

私が「女兒会」に関することを始めたのは1980年代初期からであった。その時期は、「改革開放」が始まったばかりで、「女兒会」を地域の重要な文化として復活するため、政府が主催者となって開催された。そして、「女兒会」の開催などに関して多くの人材を必要としたため、私も誘われた。当時、私が誘われた理由としては、私が石灰窯で文化宣伝に関する仕事をずっとして、地域文化に詳しくあったからだ。それをきっかけとして、地域で「女兒会」の歴史などについて当時の高齢者から多くの聞き取り調査をして記述した。その後、私はそれら調査資料などに基づいて、「女兒会」の由来について、「十個棚女兒会」¹²⁹という舞台劇の劇本を書いた。その舞台劇は毎年の石灰窯地域の「女兒会」で公演されていて、「女兒会」の定番になっている。これまで30年間、私は地域の「女兒会」に全部参加して、現在も「女兒会」の新しい舞台劇の脚本を書いている。2006年から「女兒会伝承保護協会」の副会長をした。会長の時には、その仕事内容を2つに分け、1つは宣伝活動であった。例えば、外部の人、観光客や研究者などが「女兒会」の研究や観光に来た時、私は「女兒会」の歴史、由来、その内容などについて彼らに教え、また地域テレビ局や雑誌などのメディアが「女兒会」を取材に来た時も、その宣伝用資料を準備した。もう1つは、毎年の「女兒会」の開催について、地域政府と協力して、その内容について計画し準備することであった。例えば、「女兒会」の開催資金の準備や、「女兒会」イベント時での司会役や、民族歌や舞踊、舞台劇での役割の分担などであった。

(3) 事例3. 李輝軒氏（石灰窯地域の黄氏や田氏からの聞き取り資料より）

李輝軒氏は石灰窯村出身の土家族で、恩施州の最高幹部である州長として、石灰窯地域の人々の誇りである。李輝軒氏は恩施州政府副州長の田寿延氏など何十人かの少数民族幹部を連れて、1984年の石灰窯での「女兒会」に参加した。彼らの石灰窯「女兒会」への旅は、周辺地域の人々にも注目され、多くの人が石灰窯の「女兒会」に参加しに行ったので、その「女兒会」は大盛況だった。恩施州と湖北省の新聞がこのことについて報道したことから、当時石灰窯の「女兒会」は恩施州やその周辺地域で有名になった。

また、李輝軒氏は、「女兒会」について、『「女兒会」の起源地は石灰窯であるが、恩施土家族の人々の特別な恋愛文化の1つである。地域文化の宝物として重視しないといけない』と評価した¹³⁰。それ以降、恩施州政府は「女兒会」に注目するようになり、「女兒会工作小組（女兒会プロジェクトチーム）」を立ち上げ、「女兒会」に関する現地調査や歴史文献調査、保護活動が始まった。さらに、恩施州政府は、恩施市内と石灰窯を結ぶ道路などの基盤整備に資金を投入したので、石灰窯は周辺地域と比べて大いに発展し、またその発展の理由として、「石灰窯は州長の出生地であるため発展することができた」と地域の人々に思われている。

の活動内容は、毎年政府に協力して「女兒会」を開催こと、毎年の「女兒会」の活動内容を決めること、「女兒会」に関する宣伝などである。

¹²⁹ 石灰窯地域の民国時期前の旧称は「十個棚」であったので、楊光富さんはその地名を使って、舞台劇の名称にした。

¹³⁰ 「村委會」（村の委員会）の職員、黄さんの聞き取り調査から。

(4) 事例 4. 崔在輝氏

崔在輝氏は恩施出身の土家族で、恩施市政協文史委員会の主任であった。また 1995 年以前、恩施市政府が「女兒会」に関する文化保護活動を開始した時の重要な責任者であった。2005 年に、所属する恩施市政協文史委員会と恩施市民族宗教局から『恩施土家女兒会』¹³¹という本を出版した。さらに、「女兒会」が 1995 年に観光化されて以降、観光資源としてその開催や宣伝などに深く関わってきた。

1995 年以前に、私は「女兒会」の歴史などを明らかにするため、仕事場の同僚と何人かの地域の知識人と一緒に何度も石灰窯に行って現地調査をした。「女兒会」について、100 人ぐらいにインタビューをした。1995 年以降、国家の民族観光政策に応じて「女兒会」は観光開発され、私たちもその開催形式と場所などについて何度も協議し、雲南省へも視察に行って、そこの民族観光の形式の 1 つ、つまりイベント観光を参考にした。1999 年以降、「女兒会」を市内の町から観光地へ移したのも、雲南省タイ族の「澆水節」を参考にしていたことだった。また、「女兒会」の特徴、つまりその市場としての機能と自由恋愛の機能を発揮するため、お見合い会場で地域物産交流会を開催するというのは従来の「女兒会」の場合と同じである。さらに、恩施は土家族地域という地域の特徴を打ち出し、その位置づけを明示するため、土家族に関する多くの文化習俗や資料が「女兒会」で展示されている。

(5) 事例 5. 田発剛氏

田発剛氏は恩施州巴東県の土家族出身で、定年前は恩施州民族宗教局の副主任であった。また、恩施州の伝統地域や民族文化、その传承人の保護活動に多くの貢献をしたので、定年後は「恩施州民族民間文化保護と発展促進会」と「恩施州民間文芸家協会」の会長の地位にある。崔在輝氏と齊書清氏によると、田発剛氏は「女兒会」について早くから注目し、特に「女兒会」の伝承や観光開発、特に宣伝に尽力した。例えば、彼は多くの民族文化の保護や伝承に関する会議で、恩施地域や「女兒会」について紹介したり、また地域の代表的な知識人として「女兒会」に関する活動に参加している。さらに、「女兒会」について文学作品も書いたりしている。また、1995 年に「女兒会」を恩施市で開催した時に、「東方文芸匯演」という土家族の婚姻習俗文化を披露するにあたって、多くの提案をした。そして、「女兒会」こそが土家族の文化であるという観点を、多くの会議や文化活動などで表明した。崔在輝氏は、田発剛氏のことを「地域の有名な文化人であり、地域に対して愛情を持っている」と評価している。

2.4.2 地域知識人

(1) 事例 6. 雷翔氏

雷翔氏は恩施地域の土家族出身であり、定年前は湖北省民族学院民族研究所所長であり教授であった。

1980 年代に、私は研究のため石灰窯地域で現地調査を行ったが、「女兒会」に関する文献資料はほとんど見つけることができなかった。1995 年に、「女兒会」を恩施地域の代表的な民族文化として観光展示するための会議で、1980 年代に復活した「女兒会」の信憑性について多くの議論がなされた。石灰

¹³¹ 「女兒会」の歴史や発展状況などについて紹介した。

窯地域の人々は皆「女兒会」について知っていて自発的に行われてきたこと、その後、政府も参加して、その名称の変更や発展方向の指導がなされたが、「女兒会」が地域の習俗という特徴は変わっていないことなどから、「女兒会」は石灰窯の従来からの祝祭日の1つであることに間違いない。さらに、恩施市石灰窯地域の住民の多くは土家族であるため、「女兒会」を土家族の文化として考えるのは自然である。また、土家族文化といっても、恩施という地域性を考えるのも重要である。こうしたことを踏まえて、恩施州政府は観光宣伝と地域のアピールのため、「女兒会」の名称を「恩施土家女兒会」へ変更した。

(2) 事例 7. 呂金華氏

呂金華氏は恩施地域の土家族出身であり、現在、恩施市政府の税関連部門で仕事をしながら、2008年に創刊した『女兒会』という季刊雑誌の編集責任者であり、恩施市作家協会の上席でもある。

「女兒会」の影響を強めるため、恩施市政府宣伝部は「恩施作家協会」と「恩施市文学芸術界連合会」に依頼して、とくに「女兒会」をテーマにした文学作品を募集した。同時に、多くの人が恩施にしかない「女兒会」に関する小説や詩などを書くようになったので、地域文学を発展させるために『女兒会』という季刊雑誌を創刊した。「女兒会」は恩施地域独特の習俗であるが、その一番残念なことは、それに関する歴史文献資料があまりなく、時々民俗学者などが「女兒会」は「偽民俗」だと主張することだ。だから私たちは地域文化を保護するため、『女兒会』研究会」という論壇を何回か開催してきた。そして、多くの地域知識人が、「女兒会」に関する現地でのインタビューや地域の歌謡などの研究を通してその歴史と発展状況を明らかにし、「女兒会」の存在を証明しようとしてきた。論壇においても、観光開発以降の「女兒会」について、その観光発展の方法と問題点や保護などについて議論がなされてきた。

(3) 事例 8. 賀孝貴氏

賀孝貴氏は恩施地域の漢族出身である。定年前は、恩施市文化局と恩施市宣伝局など文化関連部門で仕事を、定年後は、地域および民族文化に関心をもち、地域政府の依頼に応じて、文化の保護や伝承などに関することをしている。

私が最初に「女兒会」と接触したのは1995年であった。1995年に、湖北省と恩施州政府は民族観光開発を実践することになったが、私たちの地域が土家族苗族自治州であり、土家族が多く、また「女兒会」という祝祭日がほかの土家族地域になかったため、恩施州と恩施市政府の民族、旅遊、文化など関連する部門の会議を経た後、恩施州の民族観光を「女兒会」を中心に行なうことに決定した。その理由としては、当時、会議に参加した民族幹部や地域知識人が、「女兒会」が単に民族の祝祭日だけでなく、地域経済発展と民族文化展示の両方に利用できる文化であることを挙げた。その当時、民族観光においては地域の経済発展が一番重要な目標であった。また、文化と経済の両方の発展（「文化搭台、経済唱戲」）が目標であるという当時の社会背景に照らしても、「女兒会」はその目標を実現するのに適した文化であった。また、私は仕事の関係で、1995年から2013年まで恩施市内などで開催され「女兒会」に参加したが、当時私は政府の文化部門の管理職だったので、「女兒会」に対して自分なりに多くの提案をした。特に、1999年から観光地で「女兒会」を開催することは、観光地の観光開発の強化につながっ

た。1995年以降恩施市内で毎年「女兒会」を開催した。また1999年の「女兒会」を恩施の自然観光地「龍鱗宮」で開催したのは、当時、「龍鱗宮」は恩施市の有名な観光地であり、観光客が多かったからだ。定年後、観光会社や政府は「女兒会」を開催する前に、毎年、私と民族文化に詳しい人々を誘い、「女兒会」の活動内容などを相談するようになった。私たちは「女兒会」で展示する民族文化の内容について提案したりした。

2.4.3 地域企業家

(1) 事例 9. 黄焕然氏

黄焕然氏は石灰窯村の土家族出身で、農産品と煤炭などの会社の経営者である。黄氏は1990年代から運送業の営業をして、2000年以降会社を経営するようになった。地元の有名な企業家であり、また、地域のことに熱心で、2006年から「女兒会伝承協会」に参加し、2016年に会長候補者になり、2017年会長になった。

私は1990年以降毎年、石灰窯地域の「女兒会」に参加している。2000年まで、毎年地域体育大会を主催し、「女兒会」の公演参加者を招待した。2000年になると、「女兒会」がますます盛大になり、私の会社が毎年「女兒会」の活動費用の一部を提供している。また、「女兒会伝承協会」では、石灰窯地域の「女兒会」の宣伝や、協会の活動に参加している。2017年に会長になり、その会員数の増加と、石灰窯地域の「女兒会」の観光宣伝などに頑張っている。

(2) 事例 10. 郭輝氏¹³²

郭輝氏は恩施出身者で、出身民族は不明である。現在、恩施州では有名な会社「華碩集団」の経営者である。「華碩集団」は2013年から恩施市土家族テーマパーク「土家女兒城」を運営している。

2010年に、恩施州と恩施市政府は「女兒会」および恩施市の観光開発を強化するため、恩施市内で土家族の「女兒会」文化を中心としたテーマパークの建設を計画した。郭輝氏はずっと民族観光に興味があり、例えば、2012年に彼の「華碩集団」と「湖北省民族歌舞団」による土家族文化をテーマにした舞台劇の「西蘭卡普」が恩施地域の代表的な観光舞台劇になっている。また郭氏の会社が恩施市政府の重要な納税者であったことから、恩施市政府と郭氏の会社が共同でそのテーマパークを建設することが恩施州政府によって認可された。そのテーマパークは、そのコンセプトを「女兒会」および土家族を中心に構成しているため、「土家女兒城」と命名された。恩施市は、毎年の「女兒会」の開催場所の1つにもなっている。郭輝氏は毎年「女兒会」の開催前に、恩施地域の知識人や民族文化传承人などから「女兒会」の開催内容に関する意見を聴いて参考にしている。特に、「女兒会」で、好きな人を探すことができるという点に注目し、「土家女兒城」の宣伝文句を「恋愛之城、相親之都（恋愛の聖地）」にした。2013年以降2017年まで、「土家女兒城」での「女兒会」のお見合い活動は恩施市内と観光客の間で一種のブームになった。

¹³² 郭輝氏に関する情報と彼の「女兒会」との関わりについては、賀孝貴氏と崔在輝氏から聞いた。

2.4.4 民族文化の传承人

(1) 事例 11. 鄧玉書氏

鄧玉書氏は石灰窯村の土家族出身で農業を営む。鄧氏は「儼戲」の表現者として、2010 年ごろから湖北省の「省級非物質文化传承人」（湖北省の無形文化財の传承人）に指定されており、非物質文化＝「儼戲」の演出・創作において優れた熟練者である。また、鄧玉書氏は「改革開放」後に「女兒会」が再開されて以来、毎回「女兒会」で「儼戲」を演じた。5 年前、年を取ったので出演することはやめたが、「儼戲」の演出監督は今でもしている。

私の「儼戲」は父から教えてもらった。今私たちが演じている「儼戲」の脚本も、その多くは、父から教えてもらったものである。恩施州には、「儼戲」と言えば、私たちの地域にしかない。私が「女兒会」で「儼戲」を演じてきて 30 年が経った。1980 年代の第 1 回目の「女兒会」の時に、郷政府が「女兒会」の関心を高め民族文化を表現するため、私たちを招待した。「儼戲」の独創性と娯楽性のゆえに、大いに歓迎され、その後毎年「女兒会」に参加している。また、毎年演じている「儼戲」の内容が違っているが、それはみんなが良く知っている話、例えば「孟姜女哭長城」などであった。いま、私の「儼戲」チームはすでに 40 年の歴史があり、12 人のメンバーからなっている。「女兒会」には、私たちの「儼戲」や、他の地域の人々の自発的参加があり、また皆無償である。私たちの「儼戲」チームはこれからも「女兒会」にずっと参加すると思う。

(2) 事例 12. 魏清国氏

魏清国氏は石灰窯地域の土家族出身であり、農業を営む。魏氏は石灰窯地域の「女兒会」重要な民族文化展示の 1 つである「儼戲」の重要な表現者として、恩施州政府から「恩施州儼戲传承人」に指定されている。

私の「儼戲」は祖父から教えてもらい、18 歳から正式に行っている。私はチームと一緒に、1990 年頃から「女兒会」に参加して、「儼戲」を披露している。私のチームは、村の人々の家で祭祀などの活動も行っている。また、チームに 12 人いるが、年配者が多く、彼らもよく「儼戲」を教えてくれた。また、「女兒会」での「儼戲」の披露は無償でやっている。チームの皆は「女兒会」の場を借りて「儼戲」の魅力を伝えたいと考えている。

以上に述べてきた事例の 12 人の地域エリートについて整理すると、12 人のうち 1 人は苗族出身で、1 人は漢族出身、残りはすべて土家族出身であった。また、そのうち行政幹部は 5 人で、その内訳は恩施州政府 2 名、恩施市政府の幹部が 1 名、恩施郷政府の幹部が 2 名であった。そして、地域知識人 3 人のうち 1 人はかつての民族幹部、1 人は大学教授、1 人は普通の公務員かつ作家である。また、地域企業家 2 名は、石灰窯村の企業家と恩施市の企業家であった。さらに、農民の民族文化传承人が 2 名である。

2 名の州政府幹部の中で 1 人は「女兒会」発祥の地石灰窯村の出身で恩施州政府の州長にまでなった

人物で、州政府が「女兒会」に注目するきっかけを作った人である。また、もう1人の幹部は、「恩施州民族文化保護発展促進会」と「恩施州民間文芸家協会」の会長として「女兒会」の伝承と観光宣伝に尽力し、「女兒会」に関する文学作品まで書いている。恩施市政府の幹部は、石灰窯村での現地調査をもとに、「女兒会」の保護活動に尽力し、少数民族文化観光の先進地である雲南省での視察を元にその観光化に尽力している。行政の末端の郷政府の2人の幹部のうち1人は「女兒会」に関する最も古い記述がある『黄氏日用雑誌』という本の発見者で、後に「女兒会」の観光化に尽力し、もう1人は、石灰窯地域での現地調査に基づいて「女兒会」の由来に関する「十個棚女兒会」という舞台劇の本を書いて、舞台劇の演出も手がけている。3名の地域知識人（民族幹部、大学教授、公務員兼作家）も「女兒会」の観光開発に多くの提案をした。1人は「女兒会」の歴史を解明し、1人は「女兒会」の観光開発方法を提案し、もう1人は「女兒会」の宣伝をした。また、2名の地域企業家うち石灰窯村の企業家は石灰窯地域「女兒会」の活動組織や活動費用の面で協力しており、恩施市の企業家も恩施市内で開催している「女兒会」の観光開発の強化、テーマパークの建立、民族や地域の観光宣伝などに貢献した。さらに、2名の農民兼民族文化伝承者は、石灰窯地域の「女兒会」で民族文化の展示にたずさわって、その伝承にも尽力してきた。

1995年、「女兒会」を観光開発の目玉とすることを決定した恩施市の会議に参加した崔在輝氏によると、1990年代から始まった民族観光ブームにより、湖北省でも民族観光政策が実施され、恩施市も施地域発展に向けて民族観光に着手したという。当時、恩施州は土家族が最も多い地域であったため、土家族を中心として民族観光を推進することに決まったが、当初、その観光開発はかなり難しかった。というのは、土家族文化の中から何を選べば観光資源になるのかということと、恩施地域に特徴的な民族観光を創成することが難しかったからだ。それでも、土家族文化の観光資源選びについて、例えば舞踊の「毛古斯」（マクス）、建築の「吊脚楼」などいろんな提案があったが、そのなかで「女兒会」は少数民族の婚姻習俗として観光化するのが容易であり、恩施の独特な恋愛習俗であったことや、また、「女兒会」が地域の祝祭日であるため観光資源として開発するのに一番ふさわしかったという。また、「女兒会」の自由恋愛という形式は、愛情の自由度を強調しているため、「女兒会」の観光化は、地域の人々にとっても、外来の観光客にとっても、土家族のいい文化と感じてもらえるのではないかと考えたという。そこで、政府は「女兒会」を観光開発するために、他の民族観光地を視察した結果、愛情や婚姻に関する文化は、民族観光にはよく使われていることがわかり、その観光化に踏み切った。「女兒会」の観光化の方策も、ほかの地域の祝祭日を参考にしたほか、恋愛活動以外には、民族文化の歌や踊りなどの展示と、地域特産品の交流会を重視したという。さらに、国内で多くの民族地域が祝祭日を文化イベントに利用しているように、「女兒会」も土家族地域および土家族文化の発展に貢献する地域祝祭日のイベントの1つとなっている。さらに、2010年以降、恩施州政府は「女兒会」の観光開発を強化するため、観光会社と共同で民族文化を開発している。

上記のいずれの事例においても、地域エリートは、民族観光を通して民族文化を利用し、民族や地域の経済的および文化的地位の向上と、民族と地域アイデンティティの強化をはかっているが、その一方で、曾（2001）が指摘するように、同じ民族エリートであっても立場の違いによって民族観光において考え方が違っている。1つは民族観光を民族の自己表象の場として推進する立場であり、もう1つは、地域また人々の経済利潤追求を優先する立場である [曾 2001:98]。即ち、地域知識人や民族幹部の多

くは、民族観光の開発を通して民族文化の伝承と保護さらに復興を目指すことに関心があり、対して、少数民族幹部や地域の企業家は経済利益を第一の目的として観光開発に民族また地域文化を利用する。

次に、「女兒会」は恩施土家族文化においてどう位置づけられているのかということについて、みていこう。

2.5 「女兒会」と土家族の民族文化の表象

1995年以降の全国的な民族観光ブームにおいて、湖北省と恩施地域は、国家の観光政策に沿って、「女兒会」を「少数民族的」文化として選び、観光資源として利用してきた。その上、他の土家族地域の民族観光内容と区別するため、地域特有の文化を恩施土家族文化の表象として注目し、観光資源として開発してきた。ゆえに、「女兒会」の事例では、かつて恩施州の特定の地域の習俗・祝祭日であったものが、政府と地域エリートによって選択され、さらに地域の観光会社などの協力で観光開発された後、恩施州全域の祝祭日になり、または恩施土家族全体の習俗の1つになっている。これが、「女兒会」が現在の「恩施土家女兒会」になるに至った過程である。

一方、「漢化」の影響が強い土家族の民族観光では、「女兒会」のようなある特定の地域の歴史と伝統のある文化が意図的に選択され、広く土家族の地域や文化として創出された。政府は、地域の知識人と民族幹部によって来歴が明らかにされた「女兒会」の民族的、地域的特質に焦点を当てて宣伝している。

「女兒会」に関して、政府やマスコミなどが多くの出版物（本、論文、写真）を出しているということは、山下（1988）の指摘にあるように、「文化を書く」という行為そのものであり、「文化を客体化し、権威づけ、真正化することと深く関係している。（中略）文化が観光開発の対象に据えられることによって、文化は客体化され、物象化され、さらには商品化される」[山下1988:16] ことである。

湖北省土家族の民族観光において、「女兒会」に代表される地域文化は、建国以降の文化大革命の最中にあっても民族幹部によって密かに保護され、その後も民族観光ブームや地域政府の観光政策の下、地元のエリートにより観光化され、今や、地域また民族の代表的な文化になりつつある。このように、民族観光においては、歴史がある文化から、「少数民族的」特質と独特の地域性がある文化要素が、政府や地域エリートによって選別されて1つの民族文化になる過程は、「漢化」の著しい土家族の民族文化に対して、地域エリートが民族観光の力を借りてかなり意識的に行なった土家族としての民族文化の創造であり表象だといえる。

岡田（2001）によれば、中国の「民族識別」工作は、「言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちに現れる心理状態の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人びとの堅固な共同体」[岡田2001:7]に基づいて行われたという。土家族の場合は、「歴史的に構成された人々の堅固な共同体」が先あって、それが「民族識別」政策によって、1つの民族として認可された、というよりは、むしろ「土家族」として認可された後に、改革開放とその後の民族観光政策のなかで「堅固な共同体」が作られようとしているように思われる。観光化や地域政府により創出された代表的民族文化は、土家族全体に対して、民族アイデンティティの強化という面で重要な意味を持っている。「女兒会」を地域全体また民族の文化として観光宣伝することは、現在の土家族に対して、新たな民族意識を強化する1つの契機とみることができるだろう。

第3節 小括

以上見てきたように、「女兒会」は、元々は石灰窯村というある特定の地域でのみ行われていた自然な集会という形から、次第に恩施地域の州政府、市政府、郷政府といった地域政府が主催する観光イベントに発展するという過程を辿った。その活動内容と形式も、従来の経済活動と恋愛活動から、共産党の政治政策の宣伝、歌や舞踊、舞台劇の公演、体育大会等々、その活動内容が更新されてきた。また、多くの地域が祝祭日を文化イベントに利用しているように、「女兒会」も地域および民族文化の発展に貢献する地域の祝祭日のイベントの1つになっている。また、「女兒会」は、恩施地域の人々や土家族の人々自身が自分の地域文化や民族文化をアピールする文化表象の場としても利用されている。

「女兒会」の観光開発は、1950年代に恩施地域郷政府の民族幹部による女兒会の発見と歴史的事実の掘り起こしや現地調査から始まり、1980年代に恩施州政府や恩施市政府が「女兒会」の観光化を主導したが、2000年代には大学教授を含む多くの地域エリート、民族幹部、知識人、民族文化传承人と企業家も「女兒会」の観光開発に参加して、観光化の推進に貢献した。

先行研究でみたように、民族文化の創出において、少数民族エリートの重要性についての指摘は多々あるが、そのなかで少数民族エリートが一括りされ、どういう立場の民族エリートが民族観光開発にどう関わったかということについての細かい分析は見られない。本論では、湖北省土家族の民族観光において、民族文化を創出する地域エリートのなかには土家族以外の漢族や苗族などの出身者もいることや、また、恩施地域の政府関係者だけでなく、企業家、文化知識人、大学教授や農民出身の無形文化財传承人もいることなどから、多様な立場の人たちが地域エリートを構成していたことを明らかにした。また、湖北省土家族の「女兒会」の観光化は、これらの多様な立場の地域エリートによる早い段階での文化的価値の発見と民族文化の伝承や保護、民族や地域文化のアピールのための観光イベント化等々、多様な分野の地域エリートによる様々な努力によって成し遂げられてきたことがわかった。さらに、「女兒会」自体も、経済的機能から集会的機能を利用した文化的展示や民族的アピールへと大きく変わってきたことも明らかになった。

一方、「女兒会」は、地域のエリートとの関わりや、国家の民族観光ブームのなかで展開されてきたことは、政府や地域エリートによる土家族の地域や民族の象徴としての「女兒会」という民族文化の創作と表象であり、問題は、土家族地域の大多数を占める一般の土家族の人々が、地域エリートによって創出されたこのような「民族文化」をどのように受けとめているのかということであるが、この点については、さらなるデータの収集が必要である。

第6章 湖北省恩施土家族における民族文化の継承

第1節 はじめに

これまで見てきたように、中国の民族観光は経済発展や民族融合など多くの面で重要な役割を果たしてきた。なかでも、民族文化の創出や保護、伝承に対する影響は大きいものがある。これまで民族観光と民族文化の関係、特に民族観光と民族文化表象や創出に関しては多くの指摘がある(曾 2001、曾 2005、瀬川 2005、高山 2007 など)。少数民族土家族についても、近年、民族観光による民族文化の創出や復興といった現象が顕著に見られ、多くの研究者によって指摘されている(高山 2007、瀬川 2005、曾 2005)。さらに、瀬川(2005)によると、土家族は、中国国内の少数民族の中でもその民族的なアイデンティティ形成において比較的に後発でありながら、その後顕著かつ急速な展開過程をたどっている点で特殊な事例と考えることができ、その意味で他の中国少数民族の民族文化復興運動や民族意識の展開を考える上でも重要な事例であること、同時にまたそれは、現代中国における「民族」認識そのものの傾向性と特色を理解する上でも、きわめて示唆的な事例であると指摘する[瀬川 2005:331]。

また、土家族の場合、歴史的に「漢化」の度合いが大きいことから、複雑な民族認定工作の過程を経て1つ独立の民族として認定されたという経緯がある。そしてその後の土家族文化の復興運動によく利用されてきた手段の1つが「歴史を語る」というものである(瀬川 2005、高山 2007 など)。それでは、近年の民族観光により創出された「土家族の伝統文化」は、「改革開放」以降、今日までどのような「歴史」として語られ伝承されてきたのであろうか。この問題について明らかにするためには、学校教育の現場における子供たちへの民族教育や土家族社会における土家族民族文化の伝承活動について見ていく必要があるだろう。

そこで本章では、中国湖北省恩施土家族苗族自治州において、民族観光を通して新たに創出された土家族の民族文化が地域の小中学校においてどのように伝承されてきたのか、具体的には、湖北省恩施州地域の民族学校における土家族の民族教育の実態と、地域社会における民族文化の保護・伝承に関する組織化の実態について検証することを通してこの問題を考察する。

第2節 湖北省土家族の伝統文化

2.1 中央政府の文化保護政策

湖北省の土家族人口は210万人(2010年の統計)で、省内の少数民族人口において最も多く、またほぼ省西部の山地に居住している。恩施土家族苗族自治州、長陽土家族自治县、五峰土家族自治县の3つの地域が湖北省主要少数民族地域であり、土家族の主要な居住地である。

瀬川(2005)によれば、土家族の成立とその後展開された民族の歴史と文化の急激な復興・創出運動は、中国の新たな「民族」概念に基づいて形成された「土家族」の人々が新たな社会秩序の中に自らの地歩を築いてゆこうとする模索に他ならないし、その中で、歴史・文化研究は重要な役割を果たしてき

たと述べる [瀬川 2005:358]。その結果として、少数民族土家族の独自性としてよく挙げられるのが言語、民族衣装、民族工芸の「西蘭卡普」、婚姻習俗の「哭嫁」、「山歌」と称する歌謡と歌垣、舞踊の「摆手舞」、祭祀演劇の「毛古斯」と「遊戯」、食文化の「臘肉」、甘酒などである [瀬川 2005:334-335]。しかし、特に言語に関して言えば、近年、土家族の言語「土家話」を話す人は湖南省湘西州の土家族村などのごく僅かの人々に限られ、土家族の大多数の人々は地域の方言や標準語を話しているのである。

「改革開放」以降、中国政府は文化保護を重視し、多くの文化保護政策を制定して、全国的な文化保護運動を始めた。また、各少数民族地域においても、少数民族文化に対する再評価や再整理などの運動が始まり、とくに90年代以降、少数民族文化に対する保護が重視されるようになった。また、2004年から、中国政府はユネスコの無形文化遺産の保護に関する条約に基づいて、国内の文化保護活動を盛んに行われてきた。

ユネスコの無形文化遺産保護リストに最初に登録された中国少数民族文化遺産はモンゴル族の「長調」(2008年)とウイグル族の「大曲」(2008年)で、その後は朝鮮族の「農楽舞」(2009年)、トン族の「大歌」などがある(2009年)。一方、中央政府から各地域の政府に至るまで、少数民族文化に対して多くの文化保護政策が実施された。例えば、2005年12月には「国務院關於加強文化遺産保護的的通知(文化遺産の保護を強化に関する国務院の通知)」がなされた。土家族の場合も、いくつか文化遺産が保護リストに登録され(表6-1)、また県、市、州、省さらに国家レベルの非物質文化遺産になっている。

表 6-1 国家級非物質文化遺産に登録された土家族文化

類別	項目名称
民間文学	土家族梯瑪神歌、土家族山歌、土家族哭嫁歌、土家族挖土鑼鼓歌、都鎮湾故事、都鎮湾故事、酉陽古歌
民間音楽	石柱土家唢兒調、長陽山歌、川江号子、南溪号子、江河号子(長江峡江、酉水船工号子) 土家族打溜子(湘西州、五峰県、鶴峰県)、薊草鑼鼓(宣恩県、五峰県、長陽県、宣漢県)、秀山民歌、酉陽民歌、喜花鼓、建始絲弦鑼鼓、土家鬮鑼、土家族咚咚嗒、鶴峰困鼓、桑植民歌、土家族民歌(湘西州、沿河県)、利川灯歌
民間舞踊	土家族摆手舞、土家族撒葉兒响、土家族毛古斯舞、宣恩土家族八宝銅鈴舞、地龍灯、建始鬧靈歌、耍耍、地盤子、肉連響、蓮花十八響
伝統戯劇	思南花灯戯、恩施灯戯、徳江儺堂戯、鶴峰儺願戯、恩施伝儺、陽戯、南劇、鶴峰柳子戯、巴東堂戯
曲芸	南曲、利川小曲、満堂音
雑技と競技	中塘向氏武術
伝統手工技芸	土家族織錦技芸、恩施儺面具製作工芸
民俗	恩施社節、土家族舍巴日、秀山花灯、土家族過趕年、土家女兒会、土家族哭嫁

出典:『土家族非物質文化遺産研究』(pp.5-6)より筆者作成

表 6-1 には、民族文学の「土家族山歌」と「土家族哭嫁歌」、民間舞踊の「土家族摆手舞」と「土家族毛古斯舞」、伝統戯劇の「儺戲」、民俗の「土家女兒会」と「土家族哭嫁」などが土家族の重要文化として保護の対象となっており、また、各土家族地域の観光開発において、土家族の「民族風情」を表現するために多く利用されている。例えば、第 4 章で述べたように、恩施地域の土家族観光においては、文化遺産の「土家族山歌」と「土家族哭嫁歌」、「土家族摆手舞」が重要な文化観光資源として利用されている。

「摆手舞」の舞踊や、「毛古斯」、「遊戯」などの演劇が民族の特色を代表する文化要素として大きく取り上げられ、これらを核とした観光開発がみられるが、土家族において特徴的なのは、歴史研究における「民族の伝統」の創出が顕著なことだ [瀬川 2005:352]。つまり、土家族の民族観光では、いくつか特定の文化要素が選ばれ、民族観光資源として利用されている一方、第 4 章にすでに明らかにしたように、土家族文化と土家族観光には地域性がある。また、近年、民族観光の発展とともに、各地域政府は吊脚楼・山歌・毛古斯・摆手舞・女兒会などを「民族風情」として「土家族の伝統文化」の一部分に組み入れ、文化の伝承活動を展開しつつある。

1995 年、湖北省の中心的な少数民族地域である恩施地域（恩施市内）で、「中国湖北民俗風情遊覽恩施土家族女兒会活動」をテーマに、土家族の「女兒会」を利用した民族観光イベントが湖北省で初めて開催された。また、恩施州と湖北省政府はこれを恩施のみならず湖北省を全国的にアピールする絶好の機会ととらえ、イベント期間中に、土家族の文化だけではなく、恩施地域の他の少数民族による文化展示活動も催された（例えば、地域民謡の上演や苗族などの民族服装の展示など）。

その後、恩施州は「女兒会」を地域の民族観光の重要な柱として展開してきた。また 2000 年に、恩施州政府は、「女兒会」と「恩施州慶節」、「牛王節」¹³³、「摆手節」を恩施州の 4 つの地域祝祭日に指定した（現在は、「女兒会」と「恩施州州慶節」だけが観光開発されている）。

「恩施州州慶節」は恩施州の成立時期が 1983 年 8 月 19 日であることから、これ以降 8 月 19 日を建州記念日として恩施州の祝日になっている。ちなみに、2017 年「恩施州州慶節」は 2017 年 8 月 19 日から 22 日までの 4 日間で、この期間中、地域の政府や学校は全て休日になった。そして、他の 3 つは、地域の土家族文化から地域祝祭日になったものである。

「女兒会」は「土家女兒会」と呼ばれ、毎年旧暦 7 月 7 日から 12 日まで、施州の中心都市である恩施市で開催される恩施土家族のイベントであり、恩施地域の祝日である。イベントの目的は主に地域の青年男女のお見合い大会で、その日は、ほかに民族歌と舞踊の大会、市場が開催される。

「牛王節」は、毎年旧暦の 4 月 18 日が祝日で、その日には牛を休ませ、牛のため祭事を行う。牛は恩施土家族の重要な生産家畜であり、地域の伝説によれば、歴史上 4 月 18 日は牛が戦争中に恩施土家族の人々を救ったことがあり、その後、牛を敬い感謝するため毎年その日を牛の祝日に定めている¹³⁴。

「摆手節」は、恩施州政府が土家族の伝統的な踊り「摆手舞」を重視するため 1999 年に祝祭日として創設し、これまで 2001 年と 2014 年の 2 回だけ、旧暦の正月 3 日から 15 日まで恩施州来鳳県で開催された。この祝日は、主に、土家族の民族舞踊である「摆手舞」の展示であり、摆手舞は、土家族の王

¹³³ 劉 (1989) によれば、毎年旧暦 4 月 7 日、8 日と 17 日、18 日は、重慶市の酉陽県と湖南省の湘西州において「牛王節」（「牛毛大王節」とも呼ぶ）となっている。しかし、各地域の牛王については伝説の相違がある [劉 1989:48-49]。

¹³⁴ 廖徳根・冉紅芳編著 2013 年『恩施民俗』長江出版伝媒・湖北人民出版社 p. 25。

様の先祖のために行われる祭祀踊りで、各村落の「摆手堂」で開催される。その内容には、狩獵摆手、農事摆手、生活摆手、戦争を現わす軍事摆手等々がある [彭 1991:76-80]。恩施地域は「摆手舞」を地域の少数民族の代表的な民族体育文化として強調している¹³⁵。

この他にも、近年、恩施地域の民族観光の発展とともに、恩施土家族の伝統文化の多くが観光開発された後、地域の主要な観光資源として利用されている（表 4-7 参照）。特に土家族婚姻習俗の「哭嫁」、民歌の「龍船調」、踊りの「摆手舞」、織物の「西蘭卡普」などが恩施地域内多くの観光地や土家族村での見られるようになった。

2.2 湖北省の民族文化保護政策

近年、湖北省の民族政策により、民族文化の保護や伝承活動も展開されている。これら政策には、特に、2010年の「湖北省人民政府關於進一步繁榮發展少数民族文化事業的意見（湖北省人民政府による少数民族文化事業の発展に関する意見）」（鄂發【2010】76号）によると、省内の民族文化発展を法律、経済など多くの側面から促進するとしている（表 6-2 参照）。

表 6-2 「湖北省人民政府關於進一步繁榮發展少数民族文化事業的意見」に見られる文化政策

政策条例	政策内容
（一）制定「湖北省少数民族文化事業發展規劃」	「湖北省少数民族文化事業發展規劃」を制定し、省の「十二五」規劃に入れること。
（二）加強少数民族和民族地区公共文化基礎設施建設	民族地区県レベルの図書館、文化会館と、郷や鎮レベルの文化駅、村レベルの村文化室、さらに農村映画放映工作など文化基礎設施の建設と、これら施設の運営を保障すること。また省政府は文化発展に関する計画を実施するときに、民族地区に対する投資資金を優先すること。
（三）繁榮發展少数民族新聞出版和廣播影視事業	民族のラジオ番組、新聞などメディアの建設と、民族文化専門本の出版を促進すること。
（四）大力開展少数民族文化活動和对外交流	「女兒会」など民族祝祭日の発展を促進する。学校、観光地、住宅団地などでの民族文化の発展を促進すること。
（五）加大对少数民族文芸团体和文化館所建設扶持力度	民族文芸団体の発展と、湖北省少数民族文化宮や恩施州には土家族博物館の建設などを促進する。
（六）加強对少数民族文化遺產的挖掘和保護	少数民族文化遺產の整理や保護政策を行い、また国家レベルや世界レベルの文化遺產リストへの登録と、少数民族村や建築の保護を推進すること。
（七）加強少数民族民俗風情旅遊区建設	少数民族地域で民族文化観光地を建設すること。また、地域政府はこれら観光地に対して政策面で支持すること。
（八）促進少数民族文化產業發展	少数民族文化產業基地などを建設すること。民族観光や民族文化などに関して民族企業を支援すること。
（九）大力推進少数民族文化	新たな少数民族文化作品の創出を促進すること。

¹³⁵ 恩施自治州政府ホームページ : <http://www.enshi.gov.cn/>。2018年10月10日参照。

創新	
(十) 加強少数民族文化人才隊伍建設	少数民族文化の人材を育成すること。また民族文化傳承人の認定や支援を行うこと。
(十一) 加大政策支持和資金投入力度	湖北省の少数民族文化に関する政策を制定すること。湖北省少数民族文化専用資金を設置すること。
(十二) 設立湖北省少数民族文化政府獎	2011 年から省内の少数民族文化作品や演出者などを対象に「湖北省少数民族文化政府獎」を設置する。また 4 年に 1 回優秀な者を選出すること。
(十三) 切實加強对少数民族文化工作的領導	省政府から少数民族地域政府まで少数民族文化に関して政府の政策の一部となし、また少数民族地域では、民族文化、地域經濟と社会の發展を促進し実施すること。

出典：湖北省人民政府ホームページhttp://www.hubei.gov.cn/govfile/ezf/201112/t20111207_1032394.shtmlより筆者作成。2018 年 1 月参照。

また、2017 年の「湖北省少数民族事業發展『十三五』規劃（湖北省少数民族文化事業の發展に関する第 13 次 5 年計画）」¹³⁶は、主に湖北省の主要な少数民族である土家族地域の恩施州、長陽県と五峰県が政策実施の対象である。「規劃」の目的は「民族文化の繁榮」と「民族團結の強化」などである。また、「規劃」の第 3 章「主要任務」としては (2)「發展壯大特色優勢產業（有利な產業の發展擴大）」、(4)「推動少数民族村鎮保護發展（民族村や民族鎮の保護と發展）」さらに、(5)「推動民族文化繁榮發展（民族文化の繁榮、發展の推進）」、(6)「推進民族教育和民族傳統体育發展（民族教育と民族傳統体育の發展推進）」などがある。「規劃」には、2017 年から民族地域や民族文化を發展させ、民族地域の觀光開發、民族地域の經濟や社会の發展を促進することが謳われている。

このように湖北省恩施州の各地域では、土家族の文化要素が創出されるとともに、国や地方政府によるランク付けによって、土家族文化の特徴としての定着化が進行しているといえる。

第 3 節 湖北省恩施における土家族民族教育

上述したような文化保護政策や觀光開發の経緯を経て、「女兒会」などの觀光文化は湖北省土家族の「民族傳統文化」として広く認知されるようになった。特に 2010 年代に入ると、湖北省では少なくとも恩施地域がこれらの觀光文化を強調し、さらに地域・民族文化の教育の一部として当地の民族学校や政府、民間の文化傳承組織などにより民族文化の教育、保護、傳承活動が展開されるようになった。

3.1 恩施州の学校教育における民族教育

3.1.1 恩施の民族小中学校

¹³⁶ 湖北省人民政府ホームページhttp://www.hubei.gov.cn/govfile/ezbf/201710/t20171025_1215829.shtmlより。2018 年 1 月参照。

中国の学校の民族文化教育活動は、漢族を中心とした「愛国主義教育活動」と「少数民族文化教育活動」の2つに分けられる。愛国主義教育活動は全ての学校が対象であるが、少数民族文化教育活動は主に民族学校が対象である。ここで言う民族文化教育とは少数民族文化教育を指す。例えば、2011年の湖北省教育庁の「省教育庁關於在中小學校開展創建湖北省中華優秀文化藝術傳承學校活動的通知（小中学校で湖北省中華優秀文化藝術傳承學校活動の展開に関する湖北省教育庁の通知）」により、湖北省の小中学校では中華文化の伝承活動が展開されてきた。それによって、「湖北省首批中華優秀文化藝術傳承學校」のリストに、省内の小中学校226校が登録された。これはおもに漢族の伝統文化を中心になった教育活動である。またそのなかに、恩施州の16校（小学校14校、中学校2校）がリストに含まれ、これら16校のうち、10校は民族学校¹³⁷である。

また、省内の民族学校を中心にして、少数民族文化教育活動が行われている。例えば、湖北省恩施地域の土家族の若い世代への民族文化の普及や教育活動は、主に、各県・市の民族小中学校で展開されている。民族学校には、それぞれ鎮や郷レベル、県や市レベル、自治州レベルのものがある。省や国レベルの民族学校は大学である。また、少数民族地域では、民族幼稚園、民族小学校、民族中学校、民族高校が設置されている。各地域の民族宗教委員会と教育局が中央民族宗教委員会や国家教育部の管理の下、地域民族学校でそれぞれの民族教育を展開している。湖北省においても地域レベルの民族学校が省内の主な民族地域である恩施州、長陽県、五峰県に設置されているが、本章では、主に、湖北省恩施地域の県市レベルの小中民族学校を対象にする。

恩施州の8県市には小中学校が1,639校あり、生徒数は約44.5万人である。その中で、民族小学校と民族中学校の数は102校である。また、恩施州には28の民族が存在するが、漢族以外では、土家族と苗族が最も多い¹³⁸。

恩施地域では、1995年から学校での民族教育が始まったが、それは、漢語と土家族語の2言語による授業で、現在の来鳳県百福司鎮民族小学校で初めて行われ、現在も、1年生から6年生を対象に土家族語の授業が行われている。この民族小学校では、2006年に「土家語研究室」が設置され、学校の7名の教師が土家語の収集・整理などの活動を始めた。そして、2008年には、来鳳県民族宗教局と土家族出身者の学校教師の儲永明氏（儲氏は2011年に『土家語大詞典』を編著し、現在『土家語法』を編集集中である。また彼は1980年代から、湖南省、湖北省、重慶市の土家族地域で、約100名の60～90歳の土家族出身者に対して聞き取り調査を行っている）など学校の教師たちが土家族語について収集した資料をもとに、『土家語教材』（来鳳県百福司鎮民族小学校編、合計12冊）という民族教科書叢書を刊行した。この教科書には、8,000語の土家語の単語と構文が掲載され、国際音声記号や中国標準語での意味を付して整理されているほか、土家語による童謡（「中国少年先鋒隊隊歌」、「小燕子」など数曲）と古詩（「登鶴雀樓」、「静夜思」など）や学校校歌などが翻訳を付して掲載されている。また、恩施土家族の言語や、習俗、恩施地域の年中行事などについても簡単に紹介されている。例えば恩施地域の方言、「砍腦殼」（怒り、不満などを表現するため叱られる用語）を土家語で[k' go pa ka]、[kov bav gav]、

¹³⁷ 恩施市施州民族小学校、利川市民族実験小学校、鶴峰県中営民族中心学校、来鳳県百福司鎮民族小学校、宣恩県民族実験小学校、巴東県民族実験小学校、建始県民族小学校、建始県龍坪民族実験小学校、建始県長梁民族小学校、咸豊県大路壩民族小学校の10校である。

¹³⁸ 恩施州教育局ホームページ：<http://www.jyj.enshi.gov.cn>より。2018年9月1日参照。

[關 把 嘎]として表示している。また、儲氏は、「私たちの学校は民族学校であるため、民族文化を勉強し、民族特色を強調する必要がある。土家族地域であるため、学校で土家語の授業を行うことは重要なことである」と語る。さらに、儲氏は 2013 年から学校の若い教師に土家語に関する知識を伝承している¹³⁹。

恩施州建始県では、1999 年に、民族宗教局により「五個一」¹⁴⁰という民族文化教育政策が示され、県内の民族学校に対する管理制度、「建始県民族学校管理辦法」も実施されてきた。2000 年代入ると、恩施州民族宗教局と恩施州教育局は建始県の「五個一」政策に基づいて、全州地域での民族文化教育を全面的に実施するようになった。まず、2005 年に州内 13 校の民族学校で試行し、その後全州の 102 校の民族小中学校で実施するようになった。

2009 年 12 月には、湖北省民族宗教委員会が「湖北省『民族文化進校園』標準（試行）」政策に基づいて全省で民族文化教育を実施するようになった¹⁴¹。その政策は「民族文化の繁栄と民族団結の促進」および「愛国主義精神を核に中華民族精神の強化」を目的している。またこの政策には「民族文化を民族学校学生に必要な教育内容とする」ことや「民族文化を学校の教育計画に入れ、専用資金を投入する」といった内容が盛り込まれている。さらに、「民族色のある学校校舎の建設と民族色のある体育活動の展開」の詳細な規定も設定された。こうして、「民族文化進校園」の活動が、湖北省内、特に恩施地域の各民族学校を中心として展開されている。

2011 年から毎年 9 月を湖北省の「民族団結進歩宣伝教育月」に定めて、民族知識や民族政策などを全省的に宣伝し、特に「五進」¹⁴²活動を中心に展開している。例えば、恩施地域では 2013 年 9 月に恩施市民族宗教局が「民族団結進歩宣伝教育月」を通達し、全市の 16 の小中民族学校で「民族文化知識進校園」活動が実施され、学校教師と在校生に対して、民族文化知識宣伝資料（恩施地域と地域民族の基本状況、地域の少数民族の文化的特徴〔言語、祝日、舞踊、宗教など〕について簡単な紹介）約 8,000 人分が配され、恩施州内の民族基本情報や少数民族政策の普及が図られた。

その後、湖北省は、2015 年に中央民族工作会議の民族教育に関する政策「國務院関与加快發展民族教育的決定（國務院による民族教育發展の促進に関する決定）」、「第 6 回国務院民族教育工作會議」の會議内容と湖北省民族教育政策の「湖北省関与加快發展民族教育的實施意見（湖北省民族教育の發展促進に関する實施意見）」により、省内の民族文化教育を民族小中学校で実践している。その中で、「五個一工程」¹⁴³の民族文化モデル活動を省内全ての小中民族学校を対象として行った。また、2017 年には、湖北省民族宗教委と湖北省教育厅により、湖北省内の学校で「湖北省首届民族文化進校園十佳示範学校（第一回湖北省民族文化進学校の優秀校 10 校）」という民族教育活動が実施され、表彰式された 10 校¹⁴⁴

¹³⁹ 恩施州人民政府ホームページ <http://www.enshi.gov.cn/2017/1117/625188.shtml> と、来鳳県政府ホームページ <http://www.laifeng.gov.cn/e/action/ShowInfo.php?classid=57&id=131207> より。2018 年 6 月参照。

¹⁴⁰ 各民族学校では 1 棟の民族特色建築、1 セットの民族服装、1 台の民族文芸節目、1 個の民族伝統体育項目、1 冊の民族常識教育書の 5 つの民族文化教育項目が設置されている。

¹⁴¹ 湖北省民族宗教事務委員会ホームページ <http://www.hbmzw.gov.cn> より（2018 年 9 月 1 日参照）。

¹⁴² 全省範囲内の政府機構、学校、企業、社区、軍營の 5 箇所で民族知識の宣伝活動を展開する。

¹⁴³ 注 3 参照。湖北省では省政府により省内の民族学校で民族教育文化政策が実施されている。

¹⁴⁴ 武漢西藏中学校、武漢市東湖中学校、宜昌市西陵区常劉路小学校、長陽土家族自治县職業教育中心、襄陽市北城回民小学校、恩施市晒都民族実験小学校、建始県民族小学校、来鳳県民族幼稚園、恩施市施州民族小学校、利川市民族実験中学校の 10 校である。

の内の5校は民族学校（恩施市硒都民族実験小学校、恩施市施州民族小学校、建始県民族小学校、来鳳県民族幼稚園、利川市民族実験中学校）であった。

湖北省の主要な民族地域である恩施地域では、中央政府や湖北省の民族政策に基づいた民族教育活動が展開されつつある一方、地域独自の民族教育も行われている。恩施地域の民族教育の形態は主に2つある。1つは民族郷土教科書を中心としたもので、州レベル統一の民族郷土教科書がありながら、州内の各県市において地域の民族学校によって作られた民族郷土教科書である。その中には、2005年に建始県民族宗教委員局により編集された『建始民族』が県内の小中学校で使用されたのが、恩施地域民族郷土教科書による教育活動の正式な始まりと言える。そのあと、恩施州は2008年から民族郷土教科書『恩施民族常識』と『恩施民族文化』を州の全ての小中民族学校に配布して民族文化に関する教育活動を展開している。

現在、恩施州の全ての学校で使用されている教科書『恩施民族常識』は、恩施州教育科学研究所組織によって2008年に編集出版されたもので、上巻と下巻から構成され、2011年の再版から1冊になっている。本書は32課（節）から成り、中国の民族基本状況（民族数、人口、民族分布など）と、恩施州の地域や民族（恩施州の地理や歴史背景に関する基本状況、州内の諸民族）などの他、特に恩施土家族の文化（食文化、服飾文化など）について紹介されている（表6-3参照）。

表 6-3 『恩施民族常識』の詳細紹介

類別	内容紹介
国の民族基本情報	第1課 民族大家庭
地域と民族の基本情報	第2課 我的家郷恩施
	第3課 八百裡清江
土家族の飲食習慣	第4課 油茶湯
	第5課 社飯
	第6課 合渣
	第7課 年肉
地域民族服装	第8課 土家族服飾
	第9課 苗族服飾
	第10課 西蘭卡普
地域民族建築	第11課 吊角樓
	第12課 風雨橋
地域民族体育	第13課 踩高蹺
	第14課 打陀螺
	第15課 蹺旱船
	第16課 板凳龍
地域民族歌・舞踊・儀礼など	第17課 擺手舞
	第18課 龍船調

	第 19 課 肉蓮響
	第 20 課 儼戲
	第 21 課 毛古斯舞
	第 22 課 女兒会
	第 23 課 哭嫁
	第 24 課 祝米酒
	第 25 課 撒爾荷
地域観光地	第 26 課 利川騰龍洞
	第 27 課 恩施大峽谷
	第 28 課 恩施土司城
地域名産物	第 29 課 恩施板党
	第 30 課 恩施玉露茶
	第 31 課 菊花石工芸
地域有名人	第 32 課 民族英雄陳蓮升

出典：恩施州教育科学研究所編 2011 年『恩施民族常識』より筆者作成

表 6-3 によると、恩施地域少数民族民族に関する教科書には、地域の民族文化が土家族文化を中心に紹介されている。また、「非物質文化遺産」としては、「儼戲」や「摆手舞」などが地域や民族の重要文化要素として紹介されている。さらに、本書には恩施土家族文化の主なものとして、近年観光資源として観光開発され創造された民族文化「女兒会」が土家族の代表的な文化として紹介されている。また、地域の観光地「恩施大峽谷」や観光名産品のお茶「恩施玉露」の紹介も重要な内容となっている。

恩施地域の民族教育のもう 1 つの形態は、学校教育である。恩施地域の各民族学校において、多くの民族教育活動が展開されている（表 6-4 参照）。

表 6-4 恩施州の各縣市民族学校（県、市レベル）

所在地	学校名称
恩施市	恩施市施州民族小学校、恩施市硒都民族実験小学校
利川市	利川市第一民族実験小学校、利川市第二民族実験小学校、利川市民族実験中学校
宣恩県	宣恩県民族実験小学校、宣恩県第二民族実験小学校
来鳳県	来鳳県民族小学校
咸豊県	咸豊県民族実験小学校、咸豊県第二民族実験小学校、咸豊県民族中学校
鶴峰県	鶴峰県中営民族中心学校
建始県	建始県民族小学校
巴東県	巴東県民族実験小学校

出典：恩施州教育局ホームページ :<http://www.jyj.enshi.gov.cn> より（2018 年 9 月 1 日参照）
筆者作成

表 6-4 から、恩施州の 8 県市には、民族小中学校が設置されていて、民族小学校は 11 校、民族中学校は 3 校である。以下では、恩施市施州民族小学校など 2 つの民族小学校の事例を通して、恩施地域の民族学校で行われている民族教育活動の現状について紹介する。

3.1.2 恩施市施州民族小学校

当学校は 2008 年に創立され、全校生徒数は 31 クラス 1,800 名である。創立以来、学校では民族文化を重視し、制服は土家族のデザインを使っている。また「儼舞」、「擺手舞」、「苗舞」など民族舞踊に基づいて 30 の基本動作から学校体操の「民族操」の「擺手謡」と「土苗兒女歡」を考案し、毎日午前 10 時の「課間操」運動時間に全校学生と先生と一緒に踊っている。

また、学校の民族文化展示室には、長期間にわたって「儼面文化展」という展覧会を行っている。また、学校の建築物の行政楼 1 階には、「民族文化長廊（民族文化展示処）」を設置し、学校の基本情報や民族教育活動について紹介している。また、民族文化に関する『民族文化探究』という読本を学校の指定教科書にして、指定授業外読本として使用している。

この学校では、「民族文化進校園」活動により、毎学期に土家族風俗画の展覧会を行っている。また、学校の放送番組「紅領巾放送番組室」の「民族文化番組」というプログラムで土家族の飲食や風俗習慣などについて紹介している。さらに、2009 年から毎年 6 月 1 日の「国際児童節」の日に、学校に「校園民族文化節」も行っている。例えば 2010 年の「校園民族文化節」は「舞動恩施風情、伝承民族文化（恩施地域を宣伝して、民族文化を伝承しよう）」をテーマに、恩施の非物質文化遺産に関する知識を普及させるために、全校で民族知識のクイズ大会を行った。また、生徒たちが「銅鈴舞」、「擺手舞」、「苗舞」などの民族踊りを披露し、土家族の民族衣装も展示した。そして、2011 年には、学校で「民族交響楽団」を創設し、民族歌などを演奏している。土家族民歌は学校の音楽科目にも入っており、生徒たちは民族歌を 5 曲歌うと、「擺手舞」を踊ることができる（表 6-5 参照）。

表 6-5 恩施市施州民族小学校民族文化教育の内容

民族文化分類	内容
民族音楽	民族交響楽団、恩施民歌
民族体育	民族操
民族舞踊	銅鈴舞、擺手舞、苗舞
民族工芸	民族服装
理論知識	民族常識

出典：学校の魏先生へのインタビューおよび施州民族小学校民族ホームページ：

<http://www.szmzxx.cn>（2018 年 9 月 20 日参照）

3.1.3 硯都民族実験小学校

恩施市硯都民族実験小学校は、生徒数 4,688 名（2014 年現在）で、そのうち、少数民族出身者は約

75%である。学校の校庭には、本を読んでいる土家族の男子「和和」と苗族の女子「美美」の2人の彫像が立っている。また、学校には「民族空間」という民族文化展示室があり、各民族のトータルや建築様式、服飾などが紹介されている。また、土家族文化を表現する創作舞台劇「大山里的土家娃（山に住んでいる土家族の子供たち）」は学校の代表的な民族文化の公演演目となっている。

2014年から、学校では、土家族の「西蘭卡普」を基にデザインされた春と秋の制服を着用する。当時の田校長によれば、「民族服装は民族学校としての特徴をアピールしながら、民族の団結意識を強化する効果がある」という。また、黄先生によれば、「学校では『民族団結』という概念を多くの教育内容の中に融合していて、授業科目の中に「民族常識」という授業が設けられ、生徒に「土苗服飾（土家族と苗族の服飾）」や「摆手舞」を民族服飾体験や民族体育として教えたり、毎月1回無形文化遺産伝承人を招いて無形文化遺産に関する講演してもらったり、さらに、自分の民族文化に関する教材を編集して利用していることが、我が校の民族学校としての特色である」¹⁴⁵と言う。

当学校では校長先生と教師により「晒都民族実験小学校民族文化進校園实施方案（晒都民族実験小学校における『民族文化進学校』活動の实施方案）」と「晒都民族実験小学校創建団結進歩示範学校实施方案（晒都民族実験小学校の『団結進歩モデル校』の達成方案）」の2つ政策を作成して湖北省政府に提出したため、2014年12月に湖北省民族宗教局より「湖北省民族団結進歩示単位」、そして2017年9月には「湖北省民族団結進歩教育基地」と「湖北省民族団結進歩創建活動示範学校」に指定された。

また、当学校は恩施地域の民族教育の代表的な学校として、湖北省と中央政府の教育および民族部門から民族教育に関する実験校の扱いを受けている。例えば、2018年6月には、中央教育部民族教育司により当学校で民族団結に関する視察が行われ、学校の「民族空間」の文化展示室と学校の民族教材などが紹介されたほか、生徒たちが民族風の制服で「土家摆手舞」や「蓮響操」¹⁴⁶を披露した。

このように、当学校では「民族団結」を核に据えて、民族教育を実施している一方、地域の主要民族の土家族と苗族の文化を民族文化の代表として生徒に教えている。また、地域を代表する民族教育として政治宣伝活動も開催されるなど、恩施地域の民族文化教育を代表するものと言える。

次は、恩施地域における文化伝承組織を通じた民族教育について見ていこう。

3.2 地域土家族文化伝承組織

3.2.1 行政による土家族文化伝承組織

(1) 土家族文化伝承組織

恩施地域の行政側による土家族の文化伝承は、州の文化局と博物館、また各県市の文化局、さらに鎮・郷レベルの文化工作駅の方で行っていて、1979年に活動が開始されたが、当時は民族文化に関してまだ一切の動きがなかった。1980年代に入り、国の民族政策が次第に正常化するなかで、各民族の知識人層の間では学術文化活動を通じて、60年代や70年代には禁止され否定された自民族の伝統や文化を再評価し、自民族の政治的、文化的地位を高めようとする動きが出てきた[曾 2005:318]。

¹⁴⁵ 筆者 2018年2月恩施市で現地調査のインタビューより。

¹⁴⁶ 「蓮廂」ともいい、恩施地域土家族の伝統踊りで、学校ではその踊りを体操に取り入れている。

土家族地域には多くの土家族研究会が設立され、例えば、1991年には貴州省に「貴州土家学研究会」が、2011年には湖南省に「湘西自治州土家族文化研究会」などが組織化された。

近年は、多くの民族高校の教員や民族知識人により、土家族の言語や織物などに関する多くの本が出版されている。例えば、「土家語」に関して、筆者が調べた限りでは、現在以下のような本が出ている。

表 6-6 「土家語」に関する著書

出版年別	著書名	著者・編者	出版社
1986年	『土家語簡誌（中国少数民族語言簡誌叢書・国家民委民族問題五種叢書之一）』	田徳生・何天貞 ほか編	民族出版社
1995年	『土家語研究』	葉徳書	吉首大学湘楚文化研究所
2001年	『土家人和土家語（湖北民族文化系列叢書）』	羅安源・田心 桃・田荊貴・廖 喬婧	民族出版社
2001年	『中国土家語地名考訂（吉首大学民族研究文庫之一）』	葉徳書・向熙勤	民族出版社
2002年	『土家語漢語詞典（土家族語言文化研究集成之一）』	張偉権編	貴州民族出版社
2003年	『土家語常用口語半月通（吉首大学民族研究文庫之五）』	葉徳書	民族出版社
2004年	『土家語探微』	張偉権編	貴州民族出版社
2005年	『仙仁土家語研究（中央民族大学国家「十五」、「211工程」建設項目）』	戴慶夏・田静	中央民族大学出版社
2006年	『漢語土家語詞典（湖北省高校人文社科重点研究基地・湖北民族学院南方少数民族研究中心成果・土家族語言文化研究叢書。またこの辞書は湖北省教育庁資助「土家族語言文化研究」成果である）』	張偉権編	貴州民族出版社
2006年	『土家語研究』	陳康	中央民族大学出版社
2006年	『民族文化伝承的危機与挑戰：土家語瀕危現象研究』	鄧佑玲	民族出版社
2008年	『土家語語言生態研究』	熊英	中央文献出版社
2010年	『土家語（南方少数民族語言基礎教材）』	張偉権・黄柏 権・陳廷亮・冉 茂文・彭大祥編	三峡大学武陵民族研究所
2012年	『保靖県土家語実録』	向魁益・賈心 惠・向治学編	湖南師範大学出版社
2013年	『常用土家語』	唐洪祥編	湖北人民出版社
2013年	『母語存留区龍山坡脚的土家語口語』	姚元森	民族出版社
2015年	『土家語言紀実暨歌謡』	孟祥福	岳麓書社

2015年	『土家語教与学』	田志慧	中央民族大学出版社
2017年	『土家語語法標注文本（中国民族言語語法標注文本叢書）』	徐世璇・周純 祿・魯美艶	社会科学文献出版社

表 6-6 には取り上げられる土家言語に関する本や辞書は、早いものは 1980 年代後期に出ているが、そのほとんどは、主に 2000 年以降出版され、編著者はほぼ土家族出身者である。彼らの中には民族知識人（張偉権氏、元三峡大学教授）や民族企業家（唐洪祥氏、湖北省来鳳県土家織錦村工場の創設者）などがある。2002 年出版された『土家語漢語詞典』の編著者は、この本の主要な利用者としては、(1) 土家族地域の人々、(2) 土家族地域で働いている外来の人々、(3) 土家族に関する研究者また土家語の教師を想定し、さらに、この辞書は湘西北部方言土家語の発音と湘西州龍山県鳳溪郷拉西峒村土家語の文法で編纂されているという [張 2006:1-2]。このように、著書や辞典類も土家族文化の保護や伝承にとって重要であるが、利用者が限られ、購入者の数も多くない。

(2) 無形文化遺産伝承人の認定

また、2000 年代以降、中国政府は文化保護に関する一連の規定と法令を度々制定し公布した。例えば、2004 年 8 月には、全国人大常委会により「保護非物質文化遺産公約（無形文化遺産の保護に関する条約）」の批准が行われた。また、国務院は 2005 年 3 月に「国務院办公厅關於加強我国非物質文化遺産保護工作的意見（我国の無形文化遺産の保護活動の強化に関する意見）」（国発【2005】18 号）と、2005 年 12 月に、「国務院關於加強文化遺産保護通知（文化遺産保護強化に関する国務院通知）」（国弁発【2005】42 号）を公布した。そして、国家文化部は、2006 年 12 月に「国家級無形文化遺産保護管理暫定辦法（国家級無形文化遺産の保護と管理方法）」（中華人民共和國文化部令第 39 号）、2008 年 6 月に「国家級無形文化遺産項目代表性伝承人認定与管理暫定辦法（国家級無形文化遺産項目代表伝承人の認定と管理方法）」（中華人民共和國文化部令第 45 号）を発令した。さらに、2011 年 2 月、全国人大常委会で「中華人民共和國無形文化遺産法」が制定され、2017 年 12 月までに、4 回にわたって国家級文化遺産リストが作成された。その後も文化遺産に関する法制が整備されてきた（表 6-7 参照）

2006 年 5 月、国務院により「国務院關於公布第一批国家級非物質文化遺産名録的通知（第一次国家級無形文化遺産項目の発表に関する国務院通知）」（国発【2006】18 号）が公布され、第一次国家級無形文化遺産名簿には計 518 件登録された。以下、2008 年 6 月の第二次項目に 510 件、2011 年 5 月の第三次項目に 191 件、2014 年 11 月の第四項目リストに 153 件登録された。

他方、文化部により 2007 年 6 月の「第一批国家級非物質文化遺産代表性項目代表性伝承人名単」として 226 名、2008 年 2 月の「第二批伝承人名単」に 551 名、2009 年 6 月の「第三批伝承人名単」に 711 名、2012 年 12 月の「第四批伝承人名単」に 498 名、そして 2018 年 5 月の「第五批代表性伝承人名単」に 1,082 名の伝承人が発表された（表 6-6 参照）。

表 6-6 土家族関係の「国家級非物質文化遺産項目伝承人」

指定項目名称	伝承人	所在地域
--------	-----	------

土家族打溜子	簡伯元	湖北省五峰縣
土家族吊脚楼营造技艺	万桃元	湖北省咸豐縣
都镇湾故事	劉為芬	湖北省宣恩縣
薅草鑼鼓	王愛民	湖北省長陽縣
都镇湾故事	孫家香	湖北省長陽縣
土家族撒葉兒疍	覃自友	湖北省長陽縣
土家族撒葉兒疍	張言科	湖北省長陽縣
利川灯歌	全友發	湖北省利川市
灯戲	孟永香	湖北省利川市
土家族擺手舞（恩施擺手舞）	彭承金	湖北省來鳳縣
土家族撒葉兒疍	毛方明	湖北省五峰縣
土家族撒葉兒疍	黃在秀	湖北省巴東縣
儺戲（恩施儺戲）	鄧玉書	湖北省恩施市
儺戲（恩施儺戲）	蔣品三	湖北省恩施市
南劇	楊道運	湖北省咸豐縣
土家織錦	葉水雲	湖南省
土家織錦	劉代娥	
土家族擺手舞	田仁信	
土家族打溜子	羅仕碧	
土家族打溜子	田隆興	
土家族擺手舞	張明光	
土家族撒葉兒疍	覃自友	
土家族撒葉兒疍	張言科	
湘西土家族毛古斯舞	彭英威	
土家族梯瑪歌	彭繼龍	
土家族咚咚奎	嚴三秀	
土家族哭嫁歌	彭祖秀	
湘西土家族毛古斯舞	彭南京	
土家族吊脚楼营造技艺	彭善堯	
土家族哭嫁歌	嚴水花	
桑植民歌	尚生武	
土家族打溜子	楊文明	
土家族民歌	向漢光	
土家族撒葉兒疍	周純勤	
张家界陽戲	朱麗珍	
土家年	彭家齊	
土家族民歌	王波	貴州省
儺戲（德江儺堂戲）	張月福	
土家族擺手舞（酉陽擺手舞）	田景仁	重慶市
土家族擺手舞（酉陽擺手舞）	田景民	
土家族擺手舞（酉陽擺手舞）	田維政	
玩牛	江再順	
土家族吊脚楼营造技艺	劉成柏	
石柱土家囉兒調	黃代書	
秀山花灯	石化明	
秀山花灯	彭興茂	

石柱土家囉兒調	劉永斌	
南溪号子	楊正澤	

出典：第1回～第5回「国家級非物質文化遺産代表性項目代表性传承人」名簿¹⁴⁷より筆者作成

上記の表 6-6 からわかるように、土家族関係の国家級非物質文化遺産代表性項目代表性传承人のは多くは湖南省（21名）と湖北省（15名）に分布しており、重慶市（10名）と貴州省（2名）にも存在する。また、伝承内容は、土家族の服装文化の「土家織錦」、歌（「囉兒調」、「梯瑪歌」など）や踊り（「撒葉兒疍」、「擺手舞」、「打溜子」など）などに関係する传承人が多く、湖北省からは15名が登録されている。そして、2015年以降は毎回国家政府より传承人に対して毎年1人につき5,000元の補助金が支給されている。

(3) 民族文化活動

また、湖北省では、省内の民族文化の展示と、近年、国家および湖北省の文化政策¹⁴⁸により、省内の少数民族文化産業を促進するため、多くの民族文化活動が開催されている。例えば、湖北省政府は2011年から毎年「少数民族文芸会演」を開催し、省内の少数民族文化を舞台化して紹介している。2017年の湖北省「少数民族文芸会演」は、湖北省民族宗教民族委員会、湖北省文化庁、湖北省廣播電視總台主催、湖北省群衆芸術館の共催により開催された。また、2017年11月26日から12月12日まで、武漢市で「湖北省少数民族文芸会演」が開催され、湖北省内の22地域から約1,500名の参加があった。彼らは少数民族代表（政府幹部、学生、地元民など）であり、なかでも注目されたのが恩施州地域と長陽県、五峰県の3つ地域の土家族の人々であった。

表 6-7 2017年「湖北省少数民族文芸会演」活動日程表

活動時間	活動場所	活動参加者	活動内容
11月26日 19:30～	京韻大舞台	湖北省民族歌舞團	民族歌舞『山韻水謠土風』
11月27日 14:30～	京韻大舞台	「楚風和韻」連合 荊門市 襄陽市 荊州市 十堰 神農架林区 通城市 黃岡市 湖北省援藏工作聯誼会	歌舞『巴山漢水兒女情』と『花兒與少年』 舞蹈『又唱茉莉花』と『彩雲之南』 歌『哭嫁難』、『洪湖岸邊是家鄉』 三弦『獻上一盅蓋碗茶』 『神農架榔鼓』 『通城瑤族拍打舞』 歌舞『女兒花』 舞蹈『天路』、原生态鍋莊舞『喜相會』
11月27日 19:30～	湖北劇院	全員	開幕式
11月28日 19:30～	湖北劇院	長陽県	民族歌舞『巴土恋歌』

¹⁴⁷ 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館ホームページ：<http://www.ihchina.cn/index.html> より。2018年9月参照。

¹⁴⁸ 例えば、「十七届六中全会」により「国務院關於進一步繁荣發展少数民族文化事業的若干意見」（国辦發【2009】29号）には国家文化産業の發展を促進するという政策と、「中共湖北省委、湖北省人民政府關於推動文化大發展大繁荣的若干意見」（鄂發【2009】31号）、さらに「湖北省人民政府關於進一步繁荣發展少数民族文化事業的意見」（鄂發【2010】76号）などである。湖北省人民政府ホームページ <http://www.hubei.gov.cn> より。2018年1月参照。

11月29日 19:30～	京韻大舞台	建始県	綜芸晚会『直立人故里』
11月30日 19:30～	湖北劇院	利川市	歌舞音画『金哪銀兒梭』
12月1日 19:30～	京韻大舞台	巴東県	綜芸晚会『巴風土韻』
12月2日 19:30～	京韻大舞台	鶴峰県	綜芸晚会『鶴舞九天』
12月3日 19:30～	京韻大舞台	来鳳県	綜芸晚会『鳳舞擺手』
12月4日 19:30～	湖北劇院	湖北民族大学	歌舞詩『我從清江來』
12月5日 19:30～	京韻大舞台	咸豊県	歴史故事劇『女兒寨』
12月6日 19:30～	湖北劇院	宜昌市夷陵区	風情歌舞詩『三峽、我的家郷』
12月7日 19:30～	京韻大舞台	中南民族大学	音舞詩『我們的家園』
12月8日 19:30～	湖北劇院	宣恩県	風情歌舞詩『絢恩溢彩』
12月9日 19:30～	武鋼工人劇場	恩施市	恩施土家歌舞詩劇『女兒会』
12月10日 19:30～	湖北劇院	五峰県	舞台劇『土家媽媽羅長姐』
12月12日 19:30～	湖北劇院	全員	閉幕式

出典：湖北省人民政府ホームページ¹⁴⁹より筆者作成。2018年1月参照。

上記の表6-7から、恩施地域には8県市の少数民族団体の代表がこの活動に参加した。また、彼らの「民族文芸演出」には、恩施市代表の恩施土家歌舞詩劇『女兒会』は恩施土家族「女兒会」を、また来鳳県の綜芸晚会『鳳舞擺手』は恩施土家族「擺手舞」などを恩施土家族の独特な文化要素を利用して、民族演芸として披露した。

(4) 民族文化展示施設

恩施地域の恩施土家族苗族自治州の「文化館」と「非物質文化遺産保護センター」は地域や民族文化に関する重要な行政機構である。館内に「非物質文化遺産展示庁」が設置されていて、写真等で地域の非物質文化遺産項目について紹介されている（例えば、2014年12月まで、恩施州の国家級非物質文化遺産項目は15項目、国家級非物質文化遺産項目代表性伝承人は5人いる）。また、館内には「音楽培訓庁」、「舞蹈培訓庁」、「美術培訓庁」などが民族文化の伝承場所として設置され、職員たちにより「土家健身擺手舞（擺手舞の体操）」など民族文化に基づいた舞踊や歌が作成され、全州的に普及されている。

また、恩施市に位置する恩施州博物館や中国土家族博物館を始めとして、州内の他の県や市にも行政側の文化展示伝承施設が設けられていて、地域や民族の文化に関する展示や保護がなされている。例えば、恩施土家族苗族自治州博物館には3層の文化展示室があり、2階の「武陵足音」、「恩施記憶」、「生態恩施」の展示室には、「巴人」に関する文物（「編鐘」、「虎鈕錙於」など）が展示されているほか、恩施地域から出土した「土司」関係の歴史物（服、官印など）を展示している。また、地域の土家族と苗族を中心に飲食や服飾など民族に関する様々な文化が展示されているほか、地域の特産品のお茶や漢方薬などの展示も行われている。さらに、恩施土家族苗族自治州博物館の研究員により『土家族区域的考古文化』、『鄂西古建築文化』などの研究書の出版や、恩施地域や民族に関する論文も数多く発表されている。

また、恩施地域には、湖北民族学院という民族高校には「南方少数民族研究中心」や「鄂西生態文化旅遊研究中心」、「湖北省民間芸術研究中心」などの研究センターが設置され、地域や民族文化に関する

¹⁴⁹ <http://www.hb.xinhuanet.com/zhuanti/ssmz/index.html> より。2018年1月20日参照。

研究活動が行われている。

3.2.2 民間の土家族文化伝承組織

恩施地域の場合、1980年代から民間においても民族文化の保護と伝承のための組織が見られるようになった。まず、1983年に、恩施市三岔郷の「儺戯」をやっている譚学朝氏が自宅で「民族文芸培訓班」という文化伝承組織が創設し、当時の62人の参加者に「肉蓮湘」や「耍耍」などの土家族舞踊を教授した。

また、1990年代以降、自分たちの民族や地域文化が重視され、その文化を保護し伝承するため、恩施地域において民間の文化伝承組織が民族エリートたちにより数多く設立されている。恩施地域の重要な重要な観光資源である土家族イベント「女兒会」に関する民間の伝承組織『『女兒会』伝承保護協会』も、2000年代に、起源地の石灰窯村で設立された。以下、この組織について詳しく見ていこう。

2006年の「女兒会」開催時に、石灰窯村で「石窯女兒会伝承保護協会」（以下「協会」と略称）が設立された。「協会」は、会長と副会長の他、常務理事会が置かれた。また「協会」のメンバーは、定年した民族幹部（初代会長の丁氏など）や地元の民族文化伝承人（鄧氏など）、地域企業家（黄氏など）などから成り、設立時の会員は約300人で、現在は100人である。現在の会長は黄煥然氏、副会長は胡濤氏で、2人とも地元石灰窯村出身の有力な企業家である。「協会」は会費で運営されていて、年会費は100円である。

2006年に「協会」は「女兒会伝承協会章程」という会則を制定し、「協会」の活動内容などについて規定を設けている。例えば、「女兒会に関する歴史、発展経緯など基本状況を確認し記述する」、「毎年地元の女兒会の開催を協助する」、「女兒会に関する宣伝活動を行う」、「女兒会に関して町や、当時参加者の服装などを保存する」などの規定がある。

「協会」は2006年以降、毎年地元の「女兒会」に参加している。例えば、2017年の「石灰窯女兒会」には、会長の黄煥然氏が約5万円を寄付したほか、「協会」メンバーを組織して、「石灰窯女兒会」の運動会のバスケットボール試合にも参加した。また、定年した民族幹部で元会長でもある楊光富氏は、「東方情人節・石灰窯女兒会（中国のバレンタインデー・石灰窯の女兒会）」という舞台劇の台本の編者で、現在も「石灰窯女兒会」のなかの民族文化演出を担当し、村民たちの民族歌や舞台劇を指導している。

「協会」会長の黄氏によると、現在、石灰窯村で「女兒会」に関しては、宣伝が足りないため、観光客数が少なく、観光地の「女兒会」の方が村よりもはっきり開催されていて、参加者や観光客の数もかなり多いと言う。また村の若者が出稼ぎに行き、メンバーの数が徐々に減り、高齢化していることや、活動経費が少なく、自分の会社もかなり奉仕しているが、村の「女兒会」は盛大なイベントになれないと言う¹⁵⁰。

このように、地元で「女兒会」に関する「協会」が設立されたが、元会長の楊氏も現会長の黄会長も、「協会」について次のように語る。『『女兒会』は地元の重要な文化資源である。20年前から地元の人たちもこのことについて了解した上で、協会が出来たが、現在、観光地の方が村の女兒会よりも、ちゃんと開催されているので、『協会』は地域振興や文化の伝承面でまだまだ多くの課題がある。これから

¹⁵⁰ 筆者の2017年現地調査でのインタビュー資料より。

も、大変だが、その文化や地域のため、伝承活動を一生懸命頑張っていく。女兒会は石灰窯村の特色だから」(2017年現地調査資料より)。

これまで多くの文化観光においては、文化の商品化は文化を変容させ破壊するということが言われる一方で、文化の商品化は文化の保護や伝承など積極的な作用もあるという主張も多い。本章では、土家族文化は観光化をきっかけとして、改めて土家族人々が自文化を再認識し、また民族学校などの教育現場においても子供たちに伝承活動が行われていることや、政府も遺産保護リストへの登録や民族文化の伝承人制度を法制度化し、年々保護と伝承に力を注いでいることがわかる。

第4節 小括

本章では、文化の保護・伝承の現状について、1) 国家と地域行政の取り組み、2) 学校教育における取り組み、3) 地域社会の取り組みについて述べた。まず、中央政府と湖北省の行政の取り組みを見ていった。中央政府は文化保護政策に関する様々な通達やユネスコ無形文化遺産保護条約に基づいた国内の文化保護活動を盛んに行ってきた。また、湖北省の地域政府は、例えば、博物館など文化基礎施設の建設、ラジオ、新聞、出版などメディアの活用、民族祝祭日の創設、学や観光地などでの民族文化の促進、民族文芸団体の支援、少数民族文化遺産の整理や保護政策、国家級や世界級の文化遺産リストへの登録、少数民族文化の人材を育成、民族文化伝承人の認定や支援など具体的な政策や支援を展開してきたことがわかった。さらに、恩施州政府は、近年、「関与加強民族文化大州建設的意見」、「恩施土家族苗族自治州民族民間文化保護工程实施方案」、「恩施土家族苗族自治州民族文化研究工作十年綱要」など地域や民族文化に関する保護政策を整備し、また州内の各縣市では多くの文化保護工作が展開されている。

次に、学校教育の現場における民族文化の伝承の取り組みについて、省内の民族学校を中心にして、少数民族文化教育活動が行われていること、特に、恩施州内8縣市の民族小学校と民族中学校合わせて102校で、1995年から『土家語教材』という民族教科書を使って漢語と土家族語の2言語による授業が行われていることや、2008年から民族郷土教科書『恩施民族常識』と『恩施民族文化』を州の全ての小中民族学校に配布して民族文化に関する教育活動を行っていること、また、近年観光資源として観光開発され創造された民族文化「女兒会」が土家族の代表的な文化として学校でも紹介されていることを確認した。具体的には、2つの小学校の事例から、土家族のデザインを使用した制服の着用や民族文化展示室の設置、民族舞踊の「摆手舞」などを参考に考案された学校体操「民族操」の実践、『民族文化探究』という福読教科書の使用、「民族交響楽団」の創設、『民族常識』という授業での民族服飾体験や民族体育、無形文化遺産伝承人の講演等が行われている。

さらに、地域社会における土家族文化の伝承組織として、行政と民間の両方から見ていった。まず、行政による土家族伝承組織として、1) 貴州土家学研究会(1991年)や湖南省の湘西自治州土家族文化研究会(2011年)、2) 国家級国家級無形文化遺産項目代表伝承人の認定、3) 少数民族文化産業を促進するための民族文化活動(「少数民族文芸会演」など)、4) 民族文化展示、伝承施設の設置、例えば、恩施地域の恩施土家族苗族自治州の「文化館」と「非物質文化遺産保護センター」、恩施州博物館や中

国土家族博物館、さらに民族大学には「南方少数民族研究中心」や「鄂西生態文化旅遊研究中心」、「湖北省民間芸術研究中心」などの研究センターの設置が見られた。

次に、民間土家族文化伝承組織として、譚学朝氏による文化伝承組織「民族文芸培訓班」（1983年）や石灰窯村の「石窯女兒会伝承保護協会」（2000年）の存在が確認された。

以上、湖北省では少なくとも恩施地域において、少数民族土家族の文化を強調し、地域・民族文化教育の一環として当地の民族学校や政府や民間の文化伝承組織などにより民族文化教育、保護、伝承活動が展開されているが、これらの保護・伝承の取り組みはここ10年ぐらいの間に始まったものであり、年々、取り組み多方面に広がり、盛んになっている。

第7章 考察

本論は、湖北省恩施土家族苗族自治州の少数民族である土家族の民族観光の事例を取り上げ、1978年の「改革開放」政策以降の観光開発において恩施地域の「土家族の伝統文化」とされるものが、いかにして発掘・選択され、観光資源化されていったのかを、主に、地域エリートの視点から明らかにしようと試みたものである。「土家族」の人々は、建国期以降に、国家の「民族認定工作」によって中国56の「民族」の1つとして正式に認定されたのであるが、「漢化」が進んだことにより、民族の特徴を示す文化に乏しかった。そんな中で、かつてはほとんど知られていなかった「女兒会」と呼ばれるある村落の婚姻習俗の一種が、恩施土家族の地域エリートによって「発見」され「土家族の伝統文化」として調査研究が行われたが、1978年の「改革開放」以前は、「文革」の影響から、大きく取り上げられることはなかった。しかし、「改革開放」後の1980年代以降になると、政府の政策により漢族からの民族籍の変更によって土家族人口が急増する中で、1995年の中央政府による「民族観光政策」により、恩施州土家族地域で、地域のエリートたちによって再び「女兒会」に注目が集まり、「女兒会」を観光資源としたテーマパークが建設されることになったのである。

こうして、土家族テーマパークにおいて「女兒会」が「土家族の伝統文化」として広く紹介されていくという現象が見られたが、これは、土家族の伝統文化の新たな創出であり、この問題は、湖北省や湖南省、貴州省に多く存在する苗（ミャオ）族や瑤（ヤオ）族などの少数民族にも共通する問題であった。そして、恩施土家族の「女兒会」の問題は、中国の地元の研究者により歴史的、民俗誌的説明は数多くなされているが、人類学的視点からの研究は皆無である。また、日本の研究者の間では、中国の少数民族の民族観光と伝統文化の創出に関する研究は多く見られるが、土家族の「女兒会」を事例として取り上げた研究は皆無である。

故に、本論では、第一に、恩施土家族地域の民族観光に至る歴史的背景と現状を詳細に提示することを第一の目的とし、第二の目的は、民族テーマパークでイベント化され、「土家族の伝統文化」として広く知られるようになった「女兒会」に焦点を当て、その「伝統文化の創出」の過程を、これに関わった多くの地域エリートの視点から詳細に記述し考察することにあつた。そして、第三の目的は、「女兒会」を含む土家族の伝統文化として観光資源化され利用されている「土家族の伝統文化」なるものが、土家族地域でどのように伝承され、定着しつつあるのかという問題について、行政の政策や学校教育、地域社会の保護伝承活動の3つの視点から分析することにあつた。そこで、まず、各章をもう一度振り返り、要点を述べたあと、上述の3つの問題について考察を深めたい。

まず、第2章で、中国の観光化の歴史を辿り、次に、中国における民族観光の現状について概観した。そして、民族観光と民族政策の関係および民族文化と観光文化の関係について述べ、さらに民族観光における民族文化の資源化の問題に言及した。こうして、中国における民族観光誕生の背景を探った。

1949年の中国建国以降に始まった観光化は、中央政府の管轄下で国家の政治宣伝と国際交流の手段として、雲南省や貴州省など政府指定の限られた辺境部の少数民族地域だけで行われたが、1978年の「改革開放」以降の急激な経済発展に合わせて、観光業も急速な発展をとげた。中国政府は、国家の経済発展を推進する手段として包括的な観光開発を推進した。また、中国国家旅遊局（観光局）は1992

年以降、全国の観光化に着手し、1995年に少数民族を中心とした「民族観光」を展開する観光政策を打ち出した。この民族観光は、民族地域と少数民族の人々にとって、経済発展や地域振興の有効な手段となった。こうして、中国の民族観光は、少数民族の文化や彼ら自身を観光対象とした「民族観光村」と「民族テーマパーク」を中心に中国全土で展開されてきた。

一方、多くの民族地域において観光の発展は、「西部大開発」から始まった。1999年11月に開かれた中央経済活動会議において「西部大開発の戦略の実施」が決定され、観光業の発展という目標がその中核に据えられた。国家発展・改革委員会は2006年12月に「西部大開発第11次5ヵ年計画」に着手し、西部地域の観光化を促進するため、「西部地区重点観光開発10大地帯」を指定した。これら地域の大半は少数民族地域で、土家族の分布地域でもあり、土家族の民族観光の発展においても重要な政策であった。

民族文化は「民族風情」ともいわれ、各民族の伝統習慣や民族建築、生活様式などを意味し、一般的には漢族以外の少数民族文化を指す。ここでは、中国の民族文化を、1) 中国建国以降から改革開放まで、2) 「改革開放」から民族観光まで、3) 民族観光以降の3つの時期に区分し、それぞれの時期においてどのような民族文化を観光文化として資源化してきたのかを見ていった。

1) 建国以降から「改革開放」まで、少数民族文化は全国的な政治的文化運動により批判・禁止され、少数民族文化に対する正確な認識はなされていなかった。また、経済や社会の発展も停滞状態にあり、国家は対外的にも開放されていなかったため、少数民族地域における観光開発もみられなかった。

2) 「改革開放」以降、国家は観光業を促進するため、1995年に全国の少数民族地域において民族観光を推進し、多くの少数民族地域政府も民族文化を観光資源として観光開発を推進した。こうして、漢族の伝統文化と少数民族文化の再評価がなされ、伝承や保護、再興されると共に、観光開発が推進された。

3) 1995年の全国的な「民族観光」の展開により、民族文化の大規模な観光開発が始まった。都市部の郊外に民族テーマパークが建設され、都市の中にもエスニック・レストランが出来た。特に少数民族地域においては、地域政府が民族観光を地域の経済発展の重要な機会と捉え、民族イベントや祭り、祝日などを観光の目玉に据えて展開するようになった。また、少数民族地域政府は少数民族文化を観光資源としてばかりでなく、少数民族優待政策を獲得するためにも利用したのである。

民族観光の「文化資源」となる少数民族の文化は、観光開発により商業イベント化された民族祝日、舞台演出化された民族歌舞、商品化された少数民族の飲食や服飾などであった。1980年代以降、「改革開放」政策が進むにつれて、観光業は少数民族に富をもたらす手段として注目されるようになり、少数民族の生活のある部分の「観光文化」化（長谷 2007）が急速に進んだ。中国政府は、少数民族の多様な文化を観光資源として活用することを奨励したため、少数民族地域の各地で「民族文化村」が整備された。

以上、中国における観光業の変遷は「改革開放」以降の中国の経済発展と中央政府の民族観光政策と共にあり、辺境に位置する多くの少数民族地域の貧困打開策として国家主導で推進された。その結果、少数民族の多様な文化が観光資源として商品化され、「民族文化」として「観光文化」化されていったのである。

第3章では、中国における民族文化の表象の諸形態として1) 民族テーマパーク、2) 民族観光村、3)

エスニック・レストラン、4) 民族博物館、5) 民族地域の都市観光、6) 民族イベントと民族商品の6つに分類し、それぞれについて詳しく見ていった。

現在、中国の多くの民族テーマパークは深圳の「中国民俗文化村」と北京の「中華民族園」をモデルにして建設と運営がなされ、少数民族の人々自身が観光展示されているほか、民族建築、民族祝日、民族衣装、民族飲食のほかに、民族の歌や踊りと、民族の神話や歴史に基づいて演出された舞台劇による「民族公演」などが少数民族の文化要素として多く利用されている。民族テーマパークは民族文化の保護や伝承、民族文化交流、さらに、政治的宣伝の機能も有している。

「民族観光村」という民族観光の始まりは、1980年代初期、雲南省や貴州省に、いくつかの少数民族村が観光スポットとして国家により観光開発されたことにある。民族観光村では、そこに居住する人たちの伝統文化や民族文化、彼ら自身や日常の生活空間そのものが、観光の対象となり、文化展示、交流などの機能があるので、「野外博物館」ともいわれる。近年、多くの民族地域で、民族観光村という方法が観光開発に利用され、インフラ整備の促進と地域や地元住民の収入の増加につながり、少数民族地域政府にとっても、「低投入、高産出」という理由で、地域発展の有効な選択肢となっている。

エスニック・レストランは現在、中国少数民族地域ばかりでなく都市部の商店街などにも多く見られ、少数民族の料理とショーがセットになっていることが多い。また、都市に暮らす異郷の少数民族の人々の第二故郷となっていて、同じ民族出身者の集会や民族儀礼などの開催場所としても機能している。

多くの民族地域や民族観光地では博物館が建てられ、それらの地域や民族に関する観光の重要な拠点となっているほか、文化交流や教育活動の場としても機能している。公立民族博物館と私有の民族博物館が存在し、公立の民族博物館は民族文化の伝承や保護という機能があるのに対し、私有の民族博物館はその経済効果という機能が重要になっている。

民族地域の都市の観光は、雲南省昆明市のような辺境の少数民族都市で民族風建築を利用して始まった。また少数民族の人々が住んでいた都市の古い街の景観をそのまま残して利用する観光開発も行われた。さらに、多くの民族地域では、都市の中や郊外に伝統的建築群を移築あるいは再建・保存し、「歴史文化名城」、「文化古鎮」、「国家文物保護単位」などとして国家文化保護機関により認定された後、民族観光が展開されている一方、民族地域の都市部でも、少数民族が住んでいる町を「古鎮」や「古城」などとして観光開発がなされている。

最後に、土家族の観光形態について、土家族の民族テーマパークは、土家族文化を唯一のテーマにした観光が展開されている。土家族の伝統建築様式「吊脚楼」を観光のメインにして、土家族地域のかつて統治者「土司」の歴史文化にもとづいた彫刻や宗教儀式、民族風情の演出を通して、土家族という1つの少数民族文化を展示するほか、民族衣装を着けた少数民族のスタッフたちが歌や踊りを披露する。恩施地域土家族の観光は「女兒会」というイベントを観光の中心にして展開されている。

このように、土家族観光は、民族テーマパークと民族観光村を中心にして観光活動が展開されているほか、自然観光などと一緒に展開している場合が多い。

第4章では、まず土家族の概要について説明した後、土家族の観光開発の中でよく取り上げられるいくつかの文化要素について見ていった。さらに、湖北省の土家族の民族観光を事例に、現在の土家族の民族観光の実態と、土家族人々がどのようにして自文化を観光資源として観光開発してきたのかということについて分析した。

少数民族としての土家族は、建国以降、複雑な民族識別工作を通じて、1つの民族として政府から認可された。土家族地域の民族観光は1990年代後半から始まったが、それは自然観光などほかの観光様式と一緒に展開された。そして2000年代に入った頃から、民族観光村や民族テーマパークなどの観光形態が盛んになってきた。

土家族文化に関する観光開発は、その独自性を重視した民族の文化要素の選択を通して民族アイデンティティの強化という側面にも期待が込められている。それは、土家族が漢族および苗族など他の少数民族と長期間に一緒に居住してきたため、彼らの文化の影響を強く受けているということがある。こうした背景から、民族観光を通じて土家族としての独自性を強く打ち出すために、特徴的な文化を選ぶということが見られた。また、近年、国家が文化保護に関する政策を実施して以来、土家族文化のいくつかの文化要素が「非物質文化遺産」などの重要文化財に指定されていて、土家族の民族観光においてもこれら文化要素が政府の「お墨付き」を得たことで観光資源としての価値を高め、利用の促進につながった。

では、湖北省の少数民族観光の特徴は何か。それは、第一に、恩施地域の土家族の「女兒会」を中心にした民族テーマパークによる民族観光にある。土家族と苗族が多く存在する恩施州では、土家族の恋愛習俗である「女兒会」を観光化し、州内に「土家女兒城」と呼ばれる民族テーマパークを造って、この地域の祝日にもなっている「女兒会」を「東方のバレンタインデー」（東方情人節・土家女兒会）と称して盛大なイベントに仕立て上げた。

第二に、土家族のテーマパークである「土家女兒城」が政府主導のものであるということだ。これは、1995年以来政府により展開されてきた地域文化の観光化という流れをくむものであり、2013年に恩施地域の政府と地元観光業者が共同して「女兒会」という婚姻習俗を基に建設したものである。「土家女兒城」が一定の成功を収めたことから、恩施地域の別の観光事業者によって、新たに「施南古城」や「硒都茶城」という商業文化施設も次々と建設された。

第三に、恩施地域の少数民族観光を展開する中で、「漢族」との違いが意識されるようになったことである。恩施州の土家族と苗族等の少数民族は長期にわたって「漢化」されてきた。そこで、恩施政府は、少数民族観光を展開するに当たって、「女兒会」という土家族の特定の地域だけに見られた婚姻習俗の一部を、「漢族と違う」土家族独特の「民族風情」のある文化として観光化し利用してきたのである。

第四に、恩施地域の民族テーマパーク「土家女兒城」内の「土家民俗博物館」における土家族文化の展示や「女兒会」イベントの開催は、経済効果とともに土家族の民族文化としての宣伝効果をもたらし、土家族の民族意識の覚醒・強化に貢献していると言える。しかし、「女兒会」のような地域政府による「民族文化の創出」あるいは「土家女兒城」で展示されている「選ばれた民族文化」が、当の土家族の人々に自分たちの「真の」民族文化としてどこまで受け入れられるかは、今後の土家族観光の大きな課題の1つと言える。

第5章では、「女兒会」が、元々は石灰窯村というある特定の地域でのみ行われていた自然な集会という形から、次第に恩施地域の州政府、市政府、郷政府といった地域政府が主催する観光イベントに発展するという過程を辿ったことを明らかにした。その活動内容と形式も、従来の経済活動と恋愛活動から、共産党の政治政策の宣伝、歌や舞踊、舞台劇の公演、体育大会等々、その活動内容が更新されてき

た。また、多くの地域が祝祭日を文化イベントに利用しているように、「女兒会」も地域および民族文化の発展に貢献する地域の祝祭日のイベントの1つになっている。また、「女兒会」は、恩施地域や土家族の人々自身が自分の地域文化や民族文化をアピールする文化表象の場としても利用されている。

「女兒会」の観光開発は、1950年代に恩施地域郷政府の民族幹部による「女兒会」の発見と歴史的事実の掘り起こしや現地調査から始まり、1980年代に恩施州政府や恩施市政府が「女兒会」の観光化を主導したが、2000年代には大学教授を含む多くの地域エリート、民族幹部、知識人、民族文化传承人と企業家も「女兒会」の観光開発に参加して、観光化の推進に貢献した。

先行研究でみたように、民族文化の創出において、少数民族エリートの重要性についての指摘は多々あるが、そのなかで少数民族エリートが一括りされ、どういう立場の民族エリートが民族観光開発にどう関わったかということについての細かい分析は見られない。本論では、湖北省土家族の民族観光において、民族文化を創出する地域エリートのなかには土家族以外の漢族や苗族などの出身者もいることや、また、恩施地域の政府関係者だけでなく、企業家、文化知識人、大学教授や農民出身の無形文化財传承人もいることなどから、多様な立場の人たちが地域エリートを構成していたことを明らかにした。また、湖北省土家族の「女兒会」の観光化は、これらの多様な立場の地域エリートによる早い段階での文化的価値の発見と民族文化の伝承や保護、民族や地域文化のアピールのための観光イベント化等々の様々な努力によって成し遂げられてきたことがわかった。さらに、「女兒会」自体も、経済的機能から集会的機能を利用した文化的展示や民族的アピールへと大きく変わってきたことも明らかになった。

一方、「女兒会」は、地域のエリートとの関わりや、国家の民族観光ブームのなかで展開されてきたことは、政府や地域エリートによる土家族の地域や民族の象徴としての「女兒会」という民族文化の創作と表象であり、問題は、土家族地域の大多数を占める一般の土家族の人々が、地域エリートによって創出されたこのような「民族文化」をどのように受けとめているのかということであるが、この点については、さらなるデータの収集が必要である。

第6章では、文化の保護・伝承の現状について、1) 国家と地域行政の取り組み、2) 学校教育における取り組み、3) 地域社会の取り組みについて述べた。まず、中央政府と湖北省の行政の取り組みについて、中央政府は文化保護政策に関する様々な通達やユネスコ無形文化遺産保護条約に基づいた国内の文化保護活動を盛んに行ってきた。また、湖北省の地域政府は、博物館など文化基礎施設の建設、ラジオ、新聞、出版などメディアの活用、民族祝祭日の創設、学校や観光地などでの民族文化の促進、民族文芸団体の支援、少数民族文化遺産の整理や保護政策、国家級や世界級の文化遺産リストへの登録、少数民族文化の人材を育成、民族文化传承人の認定や支援など具体的な政策や支援を展開してきたことがわかった。さらに、恩施州政府は、近年、「関与加強民族文化大州建設的意見」、「恩施土家族苗族自治州民族民間文化保護工程实施方案」、「恩施土家族苗族自治州民族文化研究工作十年綱要」など地域や民族文化に関する保護政策を整備し、州内の各縣市では多くの文化保護工作が展開されている。

次に、学校教育の現場における民族文化の伝承の取り組みについて、省内の民族学校を中心にして、少数民族文化教育活動が行われていること、特に、恩施州内8縣市の民族小学校と民族中学校合わせて102校で、1995年から『土家語教材』という民族教科書を使って漢語と土家族語の2言語による授業が行われていることや、2008年から民族郷土教科書『恩施民族常識』と『恩施民族文化』を州の全ての小中民族学校に配布して民族文化に関する教育活動を行っていること、また、近年観光資源として観光

開発され創造された民族文化「女兒会」が土家族の代表的な文化として学校でも紹介されていることを確認した。具体的には、2つの小学校の事例から、土家族のデザインを使用した制服の着用や民族文化展示室の設置、民族舞踊の「摆手舞」などを参考に考案された学校体操「民族操」の実践、『民族文化探究』という副読教科書の使用、「民族交響楽団」の創設、『民族常識』という授業での民族服飾体験や民族体育、無形文化遺産传承人の講演等が行われている。

さらに、地域社会における土家族文化の伝承組織として、行政と民間の両方から見ていった。まず、行政による土家族伝承組織として、1) 貴州土家学研究会（1991年）や湖南省の湘西自治州土家族文化研究会（2011年）、2) 国家級国家級無形文化遺産項目代表传承人認定、3) 少数民族文化産業を促進するための民族文化活動（「少数民族文芸会演」など）、4) 民族文化展示施設の設置、例えば、恩施地域の恩施土家族苗族自治州の「文化館」と「非物質文化遺産保護センター」、恩施州博物館や中国土家族博物館、民族高校には「南方少数民族研究中心」や「鄂西生態文化旅遊研究中心」、「湖北省民間芸術研究中心」などの研究センターの設置が見られた。

次に、民間土家族文化伝承組織として、譚学朝氏による文化伝承組織「民族文芸培訓班」（1983）や石灰窯村の「石窯女兒会伝承保護協会」（2000）などの存在が確認された。

以上、湖北省では少なくとも恩施地域において、少数民族土家族の文化を強調し、地域・民族文化教育の一環として当地の民族学校や政府や民間の文化伝承組織などにより民族文化教育、保護、伝承活動が展開されているが、これらの保護・伝承の取り組みはここ10年ぐらいの間に始まったものであり、年々、取り組み多方面に広がり、盛んになっていることがわかった。

以上を、研究の目的に沿って、再度整理したい。

まず、第一に、1978年の「改革開放」政策以降の観光開発において恩施土家族地域の民族観光の全体像を示すことであり、本論の前半部分で、民族観光の歴史的背景や現状、政府の民族政策や観光政策について記述した。すなわち、土家族が中国建国後の1950年代の「民族工作」政策の結果、55の少数民族の1つとして誕生した経緯や、「漢化」が進んでいたことから、土家族文化の独自性を求めて土家族の知識人や民族エリートによって文化の発掘・記録・研究がなされたことを詳細に記述した。

第二に、湖北省恩施地域の「土家族の伝統文化」とされるものが、いかにして発掘・選択され、観光資源化されていったのかを、主に、地域エリートの視点から明らかにすることを目的に進めてきた。具体的には、「女兒会」という一婚姻習俗が「土家族の伝統文化」に至る過程は、1950年代に恩施地域郷政府の民族幹部による発見と歴史的事実の掘り起こしや現地調査から始まり、1980年代に恩施州政府や恩施市政府が女兒会の観光化を主導し、1995年、湖北省の中心的な少数民族地域である恩施地域（恩施市内）で、「中国湖北民俗風情遊覽恩施土家族女兒会活動」をテーマに、土家族の「女兒会」を利用した民族観光イベントが湖北省で初めて開催されたことにある。その後、恩施州は「女兒会」を地域の民族観光の重要な柱として展開してきた。また2000年に、恩施州政府は、「女兒会」と「恩施州慶節」、「牛王節」、「摆手節」を恩施州の4つの地域祝祭日に指定した。そのほかにも、恩施州土家族の伝統文化の多くが観光開発された、地域の主要な観光資源として利用されている。このなかには、土家族の飲食文化として「油茶湯」、「合渣」、舞踊・儀礼として「摆手舞」、「儺戲」、「毛古斯舞」、歌の代表作品として「龍船調」、婚姻習俗としてイベントの「女兒会」と儀礼の「哭嫁」、服飾として織物の「西蘭卡普」、民族建築として「吊脚楼」、「風雨橋」などがあることを確認した。

以上ように、恩施土家族の民族観光化の歴史やその現状と実態の詳細な記述および、数多くの表で示し「資料化」したことにより、土家族地域の民族観光の全体像は、かなり達成できたのではないと思われる。

第二の目的は、民族テーマパークでイベント化され、「土家族の伝統文化」として広く知られるようになった「女兒会」に焦点を当て、その「伝統文化の創出」の過程を、これに関わった多くの地域エリートからの視点から詳細に記述誌、考察することにあつた。

「女兒会」の観光開発は、1950年代に恩施地域郷政府の民族幹部による「女兒会」の発見と歴史的事実の掘り起こしや現地調査から始まり、1980年代に恩施州政府や恩施市政府が「女兒会」の観光化を主導したが、2000年代には大学教授を含む多くの地域エリート、民族幹部、知識人、民族文化伝承人と企業家も「女兒会」の観光開発に参加して、観光化の推進に貢献したことを明らかにした。

先行研究でみたように、民族文化の創出において、少数民族エリートの重要性についての指摘は多々あるが、そのなかで少数民族エリートが一括りされ、どういう立場の民族エリートが民族観光開発にどう関わったかということについての細かい分析は見られなかったが、本論では、湖北省土家族の民族観光において、民族文化を創出する地域エリートのなかには土家族以外の漢族や苗族などの出身者もいることや、また、恩施地域の政府関係者だけでなく、企業家、文化知識人、大学教授や農民出身の無形文化財伝承者もいることなどから、多様な立場の人たちが地域エリートを構成していたことを明らかにした。また、湖北省土家族の「女兒会」の観光化は、これらの多様な立場の地域エリートによる早い段階での文化的価値の発見と民族文化の伝承や保護、民族や地域文化のアピールのための観光イベント化等々、多様な分野の地域エリートによる様々な努力によって成し遂げられてきたことがわかった。さらに、「女兒会」自体も、経済的機能から集会的機能を利用した文化的展示や民族的アピールへと大きく変わってきたことも明らかになった。

また、「女兒会」は、元々は石灰窯村というある特定の地域でのみ行われていた市場と恋愛の機能を合わせた自然な集会という形から、次第に恩施地域の州政府、市政府、郷政府といった地域政府が主催する観光イベントに発展するという過程を辿り、また、その活動内容と形式も、従来の経済活動と恋愛活動から、共産党の政治政策の宣伝、歌や舞踊、舞台劇の公演、体育大会等々、その活動内容が更新され多機能化してきたことを確認した。そして、多くの地域が祝祭日を文化イベントに利用しているように、「女兒会」も地域および民族文化の発展に貢献する地域の祝祭日のイベントの1つになったことによって、恩施地域の人々や土家族の人々自身が自分の地域文化や民族文化をアピールする文化表象の場としても利用されていることを明らかにした。

一方、「女兒会」は、地域のエリートとの関わりや、国家の民族観光ブームのなかで展開されてきたことは、政府や地域エリートによる土家族の地域や民族の象徴としての「女兒会」という民族文化の創作と表象であり、問題は、土家族地域の大多数を占める一般の土家族の人々が、地域エリートによって創出されたこのような「民族文化」をどのように受けとめているのかということである。

第三の目的は、女兒会を含む土家族の伝統文化として観光資源として利用されている他の文化も合わせて、土家族の伝統文化なるものが、土家族地域でどのように伝承され、定着しつつあるのかという問題について、行政の政策や学校教育、地域社会の保護伝承活動の3つの視点から分析することにあつた。

恩施州内8県市の民族小学校と民族中学校合わせて102校で、1995年から『土家語教材』という民

族教科書を使って漢語と土家族語の2言語による授業が行われていることや、2008年から民族郷土教科書『恩施民族常識』と『恩施民族文化』を州の全ての小中民族学校に配布して民族文化に関する教育活動を行っていること、また、「女兒会」が土家族の代表的な文化として学校でも紹介されていることを確認した。具体的には、2つの小学校の事例から、土家族のデザインを使用した制服の着用や民族文化展示室の設置、民族舞踊の「摆手舞」などを参考に考案された学校体操「民族操」の実践、『民族文化探究』という福読教科書の使用、「民族交響楽団」の創設、『民族常識』という授業での民族服飾体験や民族体育、無形文化遺産传承人の講演等が行われている。

地域社会における土家族文化の伝承組織に関して、まず、行政による土家族伝承組織として、1) 貴州土家学研究会(1991年)や湖南省の湘西自治州土家族文化研究会(2011年)、2) 国家級無形文化遺産項目代表传承人認定、3) 少数民族文化産業を促進するための民族文化活動、4) 民族文化展示施設の設置が見られた。

次に、民間土家族文化伝承組織として、「民族文芸培訓班」(1983年)や「石窯女兒会伝承保護協会」(2000年)の存在が確認された。

最後に、土家族の「女兒会」という婚姻習俗の一部を「土家族の伝統文化」として民族観光政策の中で観光化し、広めることは、土家族の人々にとって何を意味するのかという問題について考察する。中国建国以降から改革開放までの社会主義の時代における観光化の歴史と、土家族を始めとする少数民族の人々の置かれた状況、そして「改革開放」以降の中央政府による新たな観光政策、とりわけ1995年の「民族観光」政策による少数民族地域の観光化の促進という大枠の中で、恩施地域の土家族の人々が土家族の伝統文化にどのように向き合い、民族文化をどのように観光資源化してきたのかということ振り返ってみたとき、「女兒会」を始めとする土家族の伝統文化は、「発見」「観光資源化」「観光利用」を経て、現在、行政や学校教育、民間の伝承活動の実態から見て、「伝承」から文化の「定着」または「固定化」への流れの中に位置づけてみる事が出来るだろう。「女兒会」という一婚姻習俗を「発見」し、調査研究によりその「歴史を語り」、伝統文化への格上げを図ってきた「改革開放」以前の世代の土家族の人々に対して、土家族という「民族」と「伝統文化」の中に生まれ落ちた「改革開放」以降の若い世代の土家族の人々にとっては、土家族の伝統文化として創出されてきた様々な文化要素は、学校教育や様々な伝承活動によって「所与のもの」であり、あるいは今まさにそうなりつつある。文化の「創出」は通常、「発見」と「利用」の段階を想定するが、「創出」された「文化」が「文化」であるためには「伝承」と「固定化」の部分も含めて考える必要があるのではないだろうか。土家族の「女兒会」の事例は、民族文化の「発見」「創出」から「伝承」「固定化」に至る一連の過程を示しているように思われる。

もう一点指摘できることは、民族観光による土家族人々のアイデンティティーや伝統文化の根拠が大きく変わってきたこと、すなわち、その根拠となるものが、従来の土家語や歴史的文献資料から観光により新たに創出された「女兒会」のような「民族観光文化」へと変わってきたことである。

すでに見たように、1949年の建国以降の「民族識別」段階では、民族アイデンティティーの根拠は主に言語、すなわち、土家語であった。土家族地域エリート(民族幹部、知識人)は、民族識別の際、言語や信仰などの文化と民族意識などを理由として挙げて、中央政府により「土家族」として承認された。

その後、1978年の「改革開放」以降から1995年の民族観光政策の開始まで、民族アイデンティティの根拠は主に歴史文献資料であった。「改革開放」までの「土家族」に関して、多くの土家族地域エリート（主に研究者と知識人）が歴史文献資料（地方志や墓碑文など）、地元住民の歴史話、出土文物などによって「土家族」という民族像を作っていた。

そして、1990年代以降の中央政府の観光政策、とりわけ1995年の民族観光政策により、恩施地域の土家族出身者は民族観光を利用して、「女兒会」等の「民族観光文化」で自民族を表象し、さらに、行政や地域社会、学校教育における文化伝承活動を通して、「民族観光文化」を民族アイデンティティの根拠にするようになったと言える。

第8章 結論

本研究は、中国の55の少数民族の1つである湖北省の土家族、とりわけ、恩施州土家族地域の「女兒会」と呼ばれる伝統文化を核として展開された民族観光に関する事例研究である。本論では、研究の目的にそって、以下の点を明らかにした。

第一に、中国の民族観光と民族文化の表象について全体像を示すことであり、民族観光の歴史的背景や現状、政府の民族政策や観光政策について記述した。すなわち、土家族が中国建国後の1950年代の「民族工作」政策の結果、55の少数民族の1つとして誕生した経緯や、「漢化」が進んでいたことから、土家族文化の独自性を求めて土家族の知識人や民族エリートによって文化の発掘・記録・研究がなされたことを詳細に記述した。

第二に、湖北省恩施地域の「女兒会」が「土家族の伝統文化」に至る過程が、1950年代に恩施地域郷政府の民族幹部による発見と歴史的事実の掘り起こしから始まり、「改革開放」以降の1980年代に恩施州政府や恩施市政府と多くの地域エリートが関与して、「女兒会」を利用した民族観光イベントを開催し、その後、恩施州政府は「女兒会」を地域の民族観光の重要な柱として展開したことを見た。

第三に、民族テーマパークでイベント化され広く知られるようになった「女兒会」の「伝統文化の創出」の過程を、これに関わった多くの地域エリートの視点から詳細に記述し考察した。

第四に、観光資源として利用されている「女兒会」を含む土家族の伝統文化が、土家族地域でどのように伝承され、定着しつつあるのかという問題について、行政の政策や学校教育、地域社会の保護伝承活動の3つの視点から分析した。特に、近年、恩施地域民族小、中学校の学校教育の中で、土家語や土家族文化の伝承が教科書や授業に組み込まれて伝承されていることを明らかにした。

最後に、土家族の「女兒会」という婚姻習俗の一部を「土家族の伝統文化」として民族観光政策の中で観光化し、広めることは、土家族の人々にとって何を意味するのかという問題について考察した。まず、「女兒会」を始めとする土家族の伝統文化は、「発見」「観光資源化」「観光利用」を経て、現在は、「伝承」から「固定化」への流れの中に位置づけてみる事が出来る。「文化の創出」は通常、「発見」と「利用」の段階を想定するが、「創出」された「文化」が「文化」であるためには「伝承」と「固定化」の部分も含めて考える必要があること、恩施土家族の「女兒会」の事例は、民族文化の「発見」、「創出」から「伝承」、「固定化」に至る一連の過程を示していることを明らかにした。さらに、民族観光により、土家族の伝統文化やアイデンティティーや根拠が、従来の土家語や歴史的文献資料から観光により新たに創出された「民族観光文化」へと変わってきたことを明らかにした。

本論を閉じる前に、本研究の課題についても触れておきたい。本研究は、恩施土家族の「女兒会」を核にした民族観光について考察したが、その特徴を明らかにするためには、湖南省や貴州省、重慶市の土家族地域の民族観光の事例との比較が必要であろう。同じ理由で、他の少数民族の民族観光との比較研究も必要となるであろう。これらの比較研究については、文献研究によって出来る部分もあるが、現地調査の蓄積も必要となってくる。今後の課題としたい。

参考文献

日本語文献

雨森直也

2008「観光化における歴史の再構成と地域住民の抵抗—中華人民共和国雲南省のペー族の新華民族旅遊村の事例—」『立命館大学人文科学研究紀要』91, pp. 229-238

2012「新たな『地域文化資源』の創造とエスニック・アイデンティティの強化—中国雲南省鶴慶県におけるペー族の観光化村落を事例として—」『アジア経済』06, pp. 72-95

板垣朝之・落合知子・三浦知子

2018「中国における地域文化の観光学及び博物館学的研究—雲南省麗江と昆明を中心として—」『長崎国際大学論叢』18, pp. 101-110

稲垣 勉

2011「観光地とリゾート—日常化する観光、通過型から滞在型へ—」『観光学キーワード』有斐閣, pp. 70-71

袁 俊

2013「中国西南部のトン族社会の『大歌』の伝承と発展に関する一考察：貴州省のトン族の『歌師』を中心に」『比較日本文化学研究』6, pp. 114-127

王 文亮

2008「中国における『三農観光』の現状と課題」『中国 21』3, 風媒社, pp. 77-94

王 柯

2001「経済統合と民族分離の相剋—新疆ウイグル自治区を巡る二つの動き—」『現代中国の民族と経済』世界思想社, pp. 239-266

2005『多民族国家—中国』岩波新書

岡田宏二

2001「トウチャ（土家）族をめぐる中国学界の研究動向について」『東洋研究』142（12）, pp. 1-27

緒川弘孝

2010「貴州省の民族観光と観光地ライフサイクル論」『CATS 叢書』3, pp. 189-201

落合知子・松永朋子・鐘ヶ江樹

2018「風土資源を活かした野外博物館の観光」『博物館と観光—観光資源としての博物館論』雄山閣, pp. 139-189

加治宏基

2008「中国のユネスコ世界遺産政策—文化外交にみる『和諧』のインパクト—」『中国 21』29, 風媒社, pp. 183-202

兼重努

1998「エスニック・シンボルの創成—西南中国の少数民族トン族の事例から—」『東南アジア研究』4, pp. 132-152

2005「ジンポー・ミャンマー・中国国境をまたいで生きる人々」『世界の先住民族—ファースト・ピープ

- ルズの現在—02 東南アジア』明石書店, pp. 49-64
- 2008a 「民族観光の産業化と地元民の対応」『中国 21』3, 風媒社, pp. 133-160
- 2008b 「県級『民族誌』における民族表象—広西・三江トン族自治県の事例から」『民族表象のポリテイクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 89-125
- 雷 翔・趙 力傑
- 2013 「清江上流の土家族における『還壇神』祭祀について (特集: 地域文化研究と地域博物館)」『アジア文化史研究』13, pp. 57-61
- 北川恵美・山村高淑
- 2007 「民族衣装の新潮流」『世界遺産と地域振興: 中国雲南省麗江にくらす』世界思想社, pp. 109-128
- 金 龍哲
- 2015 「中国における少数民族の無形文化財の伝承と学校教育: トン族の歌垣の教育課程化の試みを中心に (カリキュラム)」『教育学研究紀要』61 (1), pp. 67-72
- 国松博・鈴木 勝編
- 2006 『観光大国—中国の未来』同友社
- 熊谷明希・菅原望
- 2012 「中国土家族の伝統歌舞: 保存と伝承情況について 2011 (平成23) 年度学外実習報告 (国外編)」『アジア文化史研究』12, pp. 105-111
- 佐々木信彰
- 2001 a 「中国・経済発展と少数民族」『国立民族学博物館調査報告』20, pp. 417-427
- 2001b 「多民族国家中国と民族区域自治政策」『現代中国の民族と経済』世界思想社, pp. 1-22
- 澤田聖名子
- 2001 「東南アジア少数民族の衣装と伝承—ヤオ族の衣装に見る伝承」『民具マンスリー』34 (7), pp. 7865-7872
- 酒井正子
- 1990 「伝承歌謡と音楽研究: 西南中国山地少数民族の場合」『東洋音楽研究』55, pp. 151-155
- 周 星
- 2001b 「漢族とその経済生活」『現代中国の民族と経済』世界思想社, pp. 23-46
- ジョージナ・アシュワイク編 辻野功・仲尾宏・加藤鏑弘・沢田俊明・鈴木清史・浜嶋聡
- 1990 「中国の 4000 万人」『世界の少数民族を知る事典』明石書店, pp. 39-43
- 鈴木勝
- 2008 「グローバル・ツーリズムを左右する中国観光」『中国 21』3, 風媒社 pp. 35-50
- 鈴木正崇
- 1998 「民族意識」の現在—ミャ族の正月」『民族で読む中国』朝日新聞社, pp. 143-182
- 2017 『東アジアの民族と文化の変貌—少数民族と漢族、中国と日本』風響社
- 須藤廣
- 2013 「妖精たちを消費する—アジアにおける少数民族観光の構造と変容」『北九州市立大学国際論集』11, pp. 39-55

菅 豊

- 2015「中国における『遺産』政策と現実と相克」鈴木正崇編『アジアの文化遺産：過去・現在・未来（東アジア研究所講座）』慶應義塾大学出版社，pp. 269-308

瀬川昌久

- 2003a「中国南部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』風響社，pp. 135-174
- 2003b「中国南部の『ヤオ族』と『盤王節』にみるその民族文化表象について」瀬川昌久編『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』風響社，pp. 175-214
- 2005「トウチア族の成立とその民族文化表象運動」『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社，pp. 331-364
- 2012「漢族の中の多元と一体—100年における客家アイデンティティの動態を例に」『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂，pp. 202-226
- 2013「少数民族の信仰・儀礼と現代中国—トウチア、ヤオ、ショオを中心に」『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂，pp. 223-246

曾 士才・西澤治彦・瀬川昌久編

- 1995『中国 21』河出書房新社

曾 士才

- 1986「民族識別から『民族意識』へ—中国民族学は変わりうるか」『文化人類学』8，pp. 27-37
- 1996「北京のエスニック・レストラン」『月刊しにか』7（12），pp. 2-5
- 1998「中国のエスニック・ツーリズム—少数民族の若者たちと民族文化—」『中国 21』3，風媒社，pp. 43-68
- 2000「概説・中国の少数民族」『月刊しにか』11（1），pp. 16-19
- 2001「中国における民族観光の創出—貴州の事例から—」『民族学研究』66（1），pp. 87-105
- 2002「中国における少数民族の『観光出稼ぎ』と村の変貌」『拡大する中国世界と文化創造—アジア太平洋の底流』弘文堂，pp. 32-54
- 2005「中国における民族表象のポリテイクス—ミャオ族の張秀眉塑像建造運動を例にして」『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社，pp. 303-330
- 2008「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」『民族表象のポリテイクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社，pp. 27-62
- 2009「西南中国のエスニック・ツーリズム」『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶應義塾大学東アジア研究所，pp. 281-308

孫 潔

- 2009「観光における女性の役割分担—中国雲南省大理白族を例として」『尚絅学院大学紀要』58，pp. 39-50
- 2010「雲南省における棚田とハニ族のエスニシティ」『東北アジア研究』14，pp. 123-145
- 2012「中国雲南省元陽県棚田地域における観光開発と地元民の対応」『佛教大学文学部論集』3，

pp. 51-70

谷口裕久

2005「エスニック・メディアをめぐる認識と表象—雲南『苗族』の事例から」『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 145-172

高山陽子

2005「中国のエスニック・ツーリズムに関する人類学的研究」『旅の文化研究所研究報告』12, pp. 49-60

2006「娯楽におけるエスニックの表象—中国のテーマパークの事例を中心に—」『中国 21』2, pp. 267-288

2007『民族の幻影—中国民族観光の行方』東北大学出版会

高 茜

2005「中国麗江納西族における東巴文字復興運動：1990年代以降」『国立民族学博物館研究報告』30(2), pp. 279-326

竹田治美

2018「世紀転換期におけるマイノリティーの言語教育と文化伝承に関する研究：中国北方地域の無文字少数民族を中心に」『奈良学園大学紀要』3, pp. 61-69

谷川清編

2005『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 399-430

2008「都市のなかの民族表象—西双版纳、景洪市における『文化』の政治学」『民族表象のポリテクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 389-418

陳 晶

2004「中国における観光の新しい動向—貴州省少数民族の観光を中心に」『社会学論叢』07, pp. 23-42

武内房司

2014「序」『中国の民族文化資源—南部地域の分析から』風響社, pp. 1-14

覃 光広等編著・林 雅子訳

1993「トウチャ（土家）族」『中国少数民族の信仰と習俗・下巻』第一書房, pp. 714-723

張 広帥

2011「中国観光の発展過程とその特徴に関する一考察」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院』7, pp. 71-79

張 勝蘭

2009「改革開放後における民族服飾に対する認識と民族アイデンティティ—貴州省東南地域の苗族のフィールド調査を中心に—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』4, pp. 131-146

塚田誠之

1994「チュワン族の年中行事の地域差について—漢族との比較において—」『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相』風響社, pp. 175-202

2001「チワン族の『三月三歌節』にみられる文化変容とその背景」『現代中国の民族と経済』世界思想社, pp. 90-106

杜 國慶

- 2009「中国少数民族の分布に関する考察」『立教大学観光部紀要』11, pp. 105-109
- 土田充義・晴永知之・柳 肅・福永尚敬
- 1998「中国湖南土家族民家の研究」『鹿児島大学工学部研究報告』40, pp. 175-188
- 陶 治
- 2010「観光開発に見る『民族文化』の表象:中国貴州省雷山県の『苗年文化節』をめぐって」
『人間と社会の探求—慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』69, pp. 117-129
- 鄧 晓
- 2012「重慶東南地区土家族の特色ある民俗文化」『アジア流域文化研究』8, pp. 15-22
- 何 天貞
- 1994「土家族及其語言（アジア言語論叢）」『神戸市外国語大学外国学研究』31, pp. 11-31
- 橋本和也
- 1999『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社
- 2001「観光研究の再考と展望—フィジーの観光開発の現場から」『民族学研究』66 (1), pp. 51-67
- 2011『観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社
- 長谷千代子
- 2007『文化の政治と生活の詩学—中国雲南省徳宏タイ族の日常実践』風響社
- 2008「表象の中の地域と民族—徳宏タイ族の水かけ祭りをめぐるポリティクス」『民族表象のポリティクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 359-388
- 2014「観光資源化する上座仏教建築—雲南省徳広州芒市の景観変容の中で」『中国の民族文化資源—南部地域の分析から』風響社, pp. 307-330
- 長谷川清
- 1995「美しき『西双版纳』の誕生」『暮らしがわかるアジア読本中国』河出書房新社, pp. 295-301
- 2001「観光開発と民族社会の変容—雲南省・西双版纳傣族自治州」『現代中国の民族と経済』
世界思想社, pp. 107-131
- 2005「民族表象としての『孔雀舞』—タイ族における『民族文化』の創作」
『民族表象のポリティクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 401-430
- 2008「都市のなかの民族表象—西双版纳、景洪市における『文化』の政治学」
『民族表象のポリティクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp. 389-481
- 2012「少数民族教育と中華民族多元一体構造論—雲南・徳宏タイ族の学校教育の事例から」
『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂, pp. 166-201
- 2015「エスニック・ツーリズムと文化遺産—麗江とタナ・トラジャ」『アジアの文化遺産:過去・現在・
未来（東アジア研究所講座）』慶應義塾大学出版社, pp. 223-268
- 東 英寿
- 1993「中国少数民族『土家族』の文学」『鹿児島大学文科報告』9, pp. 77-94
- 1994「土家族“摆手舞”考」『鹿児島大学文科報告』30, pp. 97-109
- 1995「土家族の洪水型創世神話について」『鹿児島大学文科報告』31, pp. 61-72
- 福満正博・周 津菁

- 2012 「重慶市酉陽県の土家族の陽戲（儺戲）について（長尾史郎教授退任記念号）」『人文科学論集』58, pp. 25-45
- 彭 官章
1996 「トゥチャ（土家）族」『中国少数民族の婚姻と家族・上巻』第一書房, pp. 225-247
- 鄒 海寧
2018 「香港と中国の博物館事情：観光資源としての博物館—香港の公立博物館を例として」『博物館と観光—観光資源としての博物館論』雄山閣, pp. 205-221
- 馬 建釗（布施ゆり訳）
2003 「中国の少数民族と民族観光業」『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』風響社, pp. 85-111
- 前田 勇編
1998 『現代観光学キーワード事典』学文社
- 松岡正子
2012 「汶川地震後におけるチャン文化の復興と禹羌文化の創出」『近代中国における民族認識の人類学』昭和堂, pp. 134-164
- 松村嘉久
2000 『中国・民族の政治地理』晃洋書房
- 三村泰臣・王 倩予
2006 「長江流域の死霊祭祀—重慶市酉陽土家族苗族自治州小河鎮桃坂村の『大道場』（民族芸術学的諸相）」『民族芸術』22, pp. 100-107
- 村井信幸
1998 「ナシ族の神話伝承に現れる鶏の役割について」『東洋研究』128, pp. 57-82
- 毛里和子
1998 『周縁からの中国—民族問題と国家』東京大学出版会
2001 『現代中国の構造変動7 中華世界—アイデンティティの再編』東京大学出版会
- 百田弥栄子
1981 「伝承に見る中国西南少数民族の創造神管見：雷神，竜神，天雞，天狗に関連して」『民族学研究』46 (2), pp. 189-207
- 山下晋司
1988 「国家的過程のなかの民族文化—インドネシア，ドラジャにおける伝統的文化の現代の位相—」『国立民族博物館調査報告』13 (1), pp. 1-35
1996 『観光人類学』新曜社
2011 「観光の定義—観光とは何か」山下晋司編『観光学キーワード』有閣斐双書, pp. 6-7
- 山下晋司・船曳建夫編
1997 『文化人類学キーワード』有斐閣
- 山村高淑
2007a 「はじめに」『世界遺産と地域振興：中国雲南省麗江にくらす』世界思想社, pp. 1-16

2007b 「観光産業の創出と文化遺産の継承」『世界遺産と地域振興：中国雲南省麗江にくらす』世界思想社， pp. 155-178

山路勝彦

2002 「土家族とは誰か—中国少数民族の創出と再編」『関西学院大学社会学部紀要』 92， pp. 41-53

2003 「死者の愉悦：土家族の葬送儀礼」『関西学院大学社会学部紀要』 95， pp. 45-70

横山廣子

1991 「白族の本主信仰—地域の守護神の儀礼に見られる漢化と民族の独自性—」『国立民族博物館調査報告・別冊』 14， pp. 381-422

1994 「年中行事と民族間関係—火把節からみた民族境界—」『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相』風響社， pp. 105-142

2004 「観光を中心とする経済発展と文化—雲南省大理盆地の場合—」『少数民族の文化と社会動態—東アジアからの視点—（国立民族博物館調査報告 No. 50）』国立民族博物館， pp. 181-204

2011 「中国雲南省のチノ一族における社会変動と民族文化」『コミュニケーション科学』 33， pp. 17-46

李 小妹

2013 「深圳中国民俗文化村における『少数民族』の表象」『人間文化創成科学論叢』 15， pp. 311-319

李 瑄

1997 「中国観光資源の開発と観光客の受け入れ体制」『産研論集』 18， pp. 87-95

中国語文献

王 傑文

2016 「論民俗伝統的『遺産化』過程—以土家族『毛古斯』為例」『北京師範大学学報（社会科学版）』 4， pp. 59-66

王 長文

1985 「論少数民族地区旅遊市場的開發」『經濟問題探索』 9， pp. 61-63

王 燕妮

2010 「恩施土家『女兒会』空間轉換研究」『湖北民族学院学報』 28（5）， pp. 12-15

王 丹

2012 「民族文化的消費問題研究—以『恩施土家女兒会』為例」『重慶三峡学院学報』 28（142）， pp. 87-90

王 静茹

1954 『關於湘西土家語言的初步意見』

恩施州統計局・恩施州調查隊・恩施州調查觀測分局編

2016 『恩施州統計年鑑 2015』

韓 敏

2010 「鄂西土家族地区旅遊資源開發探析—特色飲食文化」『湖北民族学院学報』 12（28）， pp. 5-9

嚴 学寤

1952 『湖南龍山土家族初步調查報告』

齊 書清

- 1985「石寨『女兒会』的由来」『恩施文史資料』第1輯（出版社なし），pp.198-200
- 2003「我所的知道石寨『女兒会』」『恩施文史：恩施民族工作二十年』（出版社なし），pp.183-188
- 国家民族事務委員会經濟發展司編
- 2015『中国民族地区經濟發展報告（2015）』民族出版社
- 国家民族事務委員会研究室編
- 2009『中国的民族事務』民族出版社，pp.28-31
- 國務院人口普查辦公室・国家統計局人口和就職統計司編
- 2011『2010年第六次全国人口普查主要数据公報（第1号）』
- 湖北省恩施市政協文史資料委員会
- 2010『恩施土家女兒会』中国文史出版社
- 湖北省恩施市政協文史資料委員会・湖北省恩施市民族宗教事務局編
- 2005『恩施土家女兒会』恩施州新聞出版社印刷厂
- 黄 迎新
- 2012「湖北土家族非物質文化遺產的傳播現狀と対策」『三峡論壇』2，pp.76-80
- 黄 柏權
- 2006「土家族非物質文化遺產現狀及保護对策」『湖北民族学院学報』24（2），pp.44-55
- 黄 運海
- 1992「土家族哭嫁習俗起源探討」『貴州民族研究』1，pp.68-74
- 胡 献錦
- 2007「土家族傳統民間舞蹈『花鼓子』初探」『重慶文理学院学報』26（6），pp.37-40
- 伍 世鋼
- 2016「湘西地区土家族古村落旅遊開發路径研究」『湖南行政学院学報』5，pp.48-51
- 吳 永章
- 1983『土家族簡史』民族出版社
- 庾 修明
- 1989「貴州德江土家族地区儺堂戲」『中央民族学院学報』3，pp.86-92
- 蔡 元亨
- 2000「土家族民歌衬詞解密」『中央民族大学学報』27（2），pp.97-104
- 周 星
- 2001a「旅遊產業与少数民族的文化展示」『国立民族学博物館調查報告』20，pp.185-231
- 朱 世学
- 2004『鄂西古建築文化』新華社出版社
- 鐘 明喜
- 1988「發展民族風情旅遊大有作為」『經濟問題探索』12，pp.27-28
- 薛 熙明・覃 璇・唐 雪
- 2012「旅遊对恩施土家族居民民族認同感的影響—基於個人生活史的視点」『旅遊学刊』3，pp.27-35

邱 成斌

2014「黔東土家族花燈戲燈詞藝術特徵」『貴州民族研究』10, pp. 61-63

田 荊貴

1991『中國土家族習俗』中國文史出版社

1993『中國土家族歷史人物』民族出版社

田 敏·吳 永章

2007『鄂西民族地區發展史』民族出版社

田 燕

2012「以文化保育為核心開發土家族旅遊資源的思考」『中南林業科技大學學報（社會科學版）』4, pp. 34-36

田 小雨

2009「土家織錦的現代價值及其保護與傳承」『民族·文化』5, pp. 52-53

田 德生

1982「土家語概況」『民族語文』4, pp. 66-79

田 世高

2004「土家族民歌歌論」『湖北民族學院學報』22（2）, pp. 50-52

田 荊貴

1991『中國土家族習俗』中國文史出版社

高 舜禮

1997「旅遊開發扶貧的經驗、問題及對策」『旅遊學刊』4, pp. 8-11

高 潔·宋 新娟·汪 笑楠

2014「鄂西土家族儺戲多元旅遊開發研究」『湖北社會科學』10, pp. 194-198

譚 志國

2013『土家族非物質文化遺產研究』世界圖書出版有限公司

覃 章梁·覃 瀟

2010「關於恩施土家族傳統節日『女兒會』品牌建設的思考」『湖北民族學院學報』28（1）, pp. 18-20

陳 廷亮·安 靜峰

2004「土家族的舞蹈分類及其藝術特徵」『中南民族大學學報』24（4）, pp. 65-67

陳 廷亮·杜 華

2010「土家族語言文化概論」『長江師範學院學報』6, pp. 87-94

陳 國安

1997『土家族研究』貴州民族出版社

陳 沛照·朱 艷紅

2014「論民族文化與旅遊的協同發展—以湖北省恩施土家族苗族自治州為例」『長江師範學院學報』12（6）, pp. 28-31

唐 衛青·張 瑞

2015「從祭台到舞台的時空變遷：土家摆手舞的人類學解讀—以鳳舍米湖村為例」『湖北民族學院學

報』6 (33), pp. 21-24

段 超

2000『土家族文化史(土家族問題研究叢書)』, 民族出版社
中共中央文獻研究室編

2004『鄧小平年譜(1975-1997)』(上) 中央文獻出版社
中央土家問題調查組

1956『關於土家問題的調查』

張 穎

2008「論民族傳統文化旅遊開發的現代價值—以長陽土家族為例」『懷化學院學報』1, pp. 16-18

張 偉權編

2006『漢語土家語詞典』貴州民族出版社

張 連橋·張 桀

2012「貴州土家族民間文化走進課堂問題研究—以沿河土家族自治縣為例」『教育實踐研究』9,
pp. 166-167

張 沢欣

2012「土家族文化保護和傳承現狀的思考」『歷史與文化』20, pp. 198-199

趙 鴻凱·張 凱雲·吳 海潮

2018「貴州土家族傳統民居旅遊開發與保護—以沿河縣後坪葫蘆灣為例」『城市旅遊研究』7, pp. 86-87

趙 明鵬·趙 玉明·徐 覃

2018「論恩施西蘭卡普手工技藝的傳承和發展」『湖北經濟學院學報』15 (6), pp. 116-120

鄧 輝

1999『土家族區域的考古文化』中央民族大學出版社

土家族簡史編寫組

1986『土家族簡史』湖南人民出版社

范 洪濤

2017「唐崖土司城的營造與土家族的自然觀」『齊齊哈爾大學學報(哲學社會科學版)』7, pp. 29-31

范 麗沙·王 夢徽

2012「試論土家族文化的傳承與保護—以重慶石柱土家族自治縣為例」『重慶廣播大學學報』24 (3),
pp. 54-58

潘 光旦

1995『潘光旦民族研究文集』民族出版社

1999 (1955)「湘西北的『土家』與古代的巴人」『潘光旦選集Ⅱ』光明日報出版社, pp. 309-480

彭 官章

1987「古羌人的起源及其遷徙」『民族論壇』2, p. 2

1988「土家族族稱演變」『民族研究』2, p. 2

1991『中國少數民族文庫—土家族文化』吉林教育出版社

文 斌·譚 惠

- 2007 「重慶西陽土家族文化旅遊研究」『旅遊市場』7, pp. 85-86
- 馬 振
2014 「旅遊對手工藝類非物質文化遺傳傳承的影響—以土家族織錦『西蘭卡普』為例」『中南民族大學學報（人文社會科學版）』3（34），pp. 24-27
- 孟 正輝
2011 「鄂西土家族村寨民居建築的藝術文化—以湖北恩施3個土家族村寨為例」『農村經濟與科技』22（1），pp. 109-110
- 李 軍明
2014 「唐崖土司城的土家族文化剖析」『三峽大學學報（人文社會科學版）』36（3），pp. 6-10
- 李 小紅·余 翠華
2011 「鄂西自治州土家族民俗旅遊資源的開發」『感寧學院學報』1（31），pp. 29-30
- 李 超
2008 「國務院副總理李克強視察恩施土司城」『動態』3, p. 53
- 李 忠斌
1994 「土家族節日文化的傳承及其改造」『懷化師專學報』13（1），pp. 13-18
1996 「土家族居住文化及其開發利用」『湖北民族學院學報』14（1），pp. 53-64
- 李 霞
2011 「文化再生產的謎思—對一個民族鄉『土家女兒會』的考察」『重慶三峽學院學報』27, pp. 133-136
- 劉 孝瑜·王 炬寶編著
1963 『土家族簡史簡誌合編』中國科學院民族研究所出版
1989 『土家族簡史』湖南人民出版社
- 劉 孝瑜
1986 『土家族（民族知識叢書）』民族出版社
- 劉 紹敏·劉 清華
2009 『恩施土家女兒會演變揭密』長江出版傳媒·湖北人民出版社, pp. 104-122
- 劉 建平·袁 志利
2007 「石柱縣土家族非物質文化遺產的保護與傳承」『重慶文理學院學報』26（5），pp. 16-19
- 劉 琮
2008 「對土家族傳統文化傳承與創新的辯證思考」『民俗·文化』8, pp. 42-43
- 劉 潔·王 印英
2015 「湖南土家族『地花鼓』文化傳承探索」『貴州民族研究』5, pp. 66-69
- 廖 德根·董 祖昌編
2015 『恩施民俗文化』恩施市第三高級中學校本資料
- 廖 德根·冉 紅芳編
2013 『恩施民俗』長江出版傳媒·湖北人民出版社
- 廖 敏·吳 飲羽·王 文傑
2017 「產業融合視覺下土家族文化旅遊資源開發研究—以張家界老院子為例」『管理縱橫』18, p. 27

盧 世菊

2011「論旅遊演藝產品的開發—以湖北恩施土家族『女兒會』為例」『瀋陽師範大學學報』35(3), pp. 75-78

汪 明禹

1954『湘西土家概況』

于 世桀

2010「渝東南文化旅遊發展前景研究」『重慶教育學院學報』23(2), pp. 79-81

熊 曉輝

2007「土家族灘堂戲的戲劇品格」『內江師範學院學報』22(3), pp. 145-146

2009「土家族毛古斯的保護與研究」『長江師範學院學報』25(1), pp. 21-25

2011「土家族古老樂器『咚咚奎』的藝術形態」『長江師範學院學報』27(5), pp. 14-16

2012「土家族跳喪舞的表現形式與文化特徵」『湖北民族學院學報』30(2), pp. 1-6

姚 丹

2010「文化人類學視域下土家族哭嫁習俗的功能探析—以恩施土家族苗族自治州為例」『凱里學院學報』28(1), pp. 69-72

楊 昌鑫

1997「一幅母系氏族社會農耕文化畫卷—土家族打『挖土鑼鼓』考」『中南民族學院學報』3, pp. 62-66

楊 洪林

2018「非物質文化的歷史境遇與公共文化重塑—以恩施土家女兒會為考察中心」『中南民族大學學報(人文社會科學版)』1, pp. 64-68

余 永霞

2013「貴州土家族民歌的傳承與傳播」『貴州民族研究』4, pp. 44-47

冉 紅芳

2008「土家織錦文化變遷及其動因分析—以湖南葉家寨為例」5, pp. 1-5

畢 曼

2018「少數民族文化產業轉化的矛盾張力研究—以恩施土家族『女兒會』文化為研究中心」『湖北大學學報(哲學社會科學版)』3, pp. 152-158

徐 贛麗

2016「追逐奇異性風俗：民族旅遊的兩難」『西南民族大學學報(人文社會科學版)』10, pp. 135-140

參考資料

國家政府關係資料

「國務院關於進一步推進西部大開發的若干意見」(國發【2004】6號)

「國務院關於加強文化遺產保護的通知」(國發【2005】42號)

「國務院關於公布第一批國家級非物質文化遺產名錄的通知」(國發【2006】18號)

「國務院關於進一步繁榮發展少數民族文化事業的若干意見」(國發【2009】29號)

「國務院辦公廳關於印發少數民族事業『十一五』的通知」(國辦發【2007】14號)

「國務院辦公廳關於印發少數民族事業『十二五』的通知」(國辦發【2012】38號)

「國務院關於加快發展民族教育的決定」(國發【2015】46 号)
「中共中央、國務院關於進一步加強民族工作、加快少數民族和民族地區經濟社會發展的決定」(中發【2005】10 号)
「中共中央關於制定國民經濟和社會發展『九五』計划和 2010 年遠景目標的建議」
「中共中央國務院關於深入實施西部大開發戰略的若干意見」(中發【2010】11 号)
「中共中央國務院關於加強和改進新形勢下民族工作的意見」(中發【2014】9 号)
「中華人民共和國國民經濟和社會發展五年規划」
「中華人民共和國關於國民經濟和社會發展十年規划和第八個五年計划綱要」
「中華人民共和國國民經濟和社會發展第十一年規划綱要」
「中華人民共和國國民經濟和社會發展第十二五年規划綱要」
「中華人民共和國國民經濟和社會發展第十三五年規划綱要」
「關於絲綢之路經濟帶和 21 世紀海上絲綢之路的戰略規划」

國家民族事務委員會關係資料

「國家民委關於印發開展中國少數民族特色村寨命名掛牌工作意見的通知」(民委發【2013】240 号)

國家發展和改革委員會關係資料

「西部大開發『十三五』規划」
「西部大開發『十二五』規划」
「西部大開發『十一五』規划」

湖北省關係資料

「湖北省人民政府關於進一步繁榮發展少數民族文化事業的意見」(鄂發【2010】76 号)
「湖北省『十一五』旅遊業發展計划綱要」
「湖北省旅遊業發展『十二五』計划綱要」
「湖北省旅遊業發展『十三五』計划綱要」
「湖北省少數民族事業發展『十三五』規划」
「湖北省關於加快發展民族教育的實施意見」(鄂政發【2016】54 号)
「省教育廳關於在中小學校開展創建湖北省中華優秀文化藝術傳承學校活動的通知」(鄂教體藝發【2010】23 号)

「湖北省『民族文化進校園』標準(試行)」(鄂民宗發【2009】38 号)

湖北省恩施土家族苗族自治州政府關係資料

「關於加強民族文化大州建設的意見」
「恩施土家族苗族自治州民族民間文化保護工程實施方案」
「恩施土家族苗族自治州民族文化研究工作十年綱要」

重慶市關係資料

「重慶市人民政府関与進一步繁榮發展少數民族文化事業的通知」（渝府發【2010】64号）

観光パンフレット

「恩施市観光」観光宣伝パンフレット：恩施市旅遊局編 2016年『恩施旅遊指南』

「恩施土司城」宣伝パンフレット

「恩施大峽谷」宣伝パンフレット

「土家女兒城」宣伝パンフレット

「雲南民族村」宣伝パンフレット

「中華民俗村」宣伝パンフレット

参考ウェブサイト

恩施土家族苗族自治州人民政府ホームページ：<http://www.enshi.gov.cn>

恩施州教育局ホームページ：<http://www.jyj.enshi.gov.cn>

恩施市施州民族小学校民族ホームページ：<http://www.szmzxx.cn>

恩施市紅土郷政府ホームページ：http://hongtu.es.gov.cn/htgk/201206/t20120625_49397.htm

海南省政府ホームページ：http://www.hainan.gov.cn/data/lyxx_jd/2003/12/64/

湖北省人民政府ホームページ：<http://www.hubei.gov.cn>

湖北省統計局ホームページ：<http://www.stats-hb.gov.cn>

湖北省民族宗教事務委員会ホームページ：<http://www.hbmzw.gov.cn>

湖北省旅遊局ホームページ：<http://www.hubeitour.gov.cn>

湖北省文化与旅遊庁（旅遊）ホームページ：<http://lyw.hubei.gov.cn>

五峰県政府ホームページ：<http://www.wufeng.gov.cn>

長陽県政府ホームページ：<http://www.changyang.gov.cn>

重慶市人民政府ホームページ：<http://www.cq.gov.cn>

重慶市民族宗教事務委員会ホームページ：<http://www.cqsmzw.gov.cn/mzzjgk/8015.htm>

重慶市旅遊局ホームページ：<http://www.cqta.gov.cn>

重慶市石柱県ホームページ：<http://www.zgsz.gov.cn>

沿河県ホームページ：<http://www.zgyh.gov.cn>（中国沿河網）

人民網ホームページ：<http://politics.people.com.cn/n/2014/0926/c1001-25745084.html>

中華人民共和国中央人民政府ホームページ：<http://www.gov.cn>

中華人民共和国文化与旅遊部ホームページ：<https://www.mct.gov.cn>（2018年までは中華人民共和国国家旅遊局ホームページ：<http://www.cnta.gov.cn>であった）

中華人民共和国国家民族事務委員会ホームページ：<http://www.seac.gov.cn>

中華人民共和国国家文物局ホームページ：<http://www.sach.gov.cn>

中国国家统计局ホームページ：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/>

中華人民共和国全国人大網ホームページ：

http://www.npc.gov.cn/wxzl/gongbao/2001-01/02/content_5003506.htm

中華人民共和国国家發展和改革委員会ホームページ:<http://www.ndrc.gov.cn>
中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館ホームページ: <http://www.ihchina.cn>
中国民族博物館ホームページ:<http://www.cnmuseum.com>
張家界旅遊景点在線ホームページ:<http://www.zjjto.com>
張家界中信国際旅遊有限公司ホームページ: <http://www.china-zhangjiajie.com/zt/jq/tjfqy/>
張家界魅力文旅發展会社ホームページ:<http://www.meilixiangxi.cn>
錦秀中華・中国民俗文化村ホームページ:<http://www.cn5000.com.cn>
雲南省民族博物館ホームページ:<http://www.ynmuseum.com/abouts.html>
雲南民族村ホームページ:<http://www.ynmzc.cc>
中華民俗園ホームページ:<http://www.emuseum.org.cn>
中国經濟網ホームページ:http://travel.ce.cn/gdtj/201709/04/t20170904_5627959.shtml

地図

<http://www.baidu.com>
http://edit.freemap.jp/rewriter_trial_version.php?id=select_map.php

謝辞

本論文をまとめる過程において、たくさんの方々から様々な支援を頂きました。下記のお世話になった多くの方々に心より感謝いたします。

まず、私は3年前に博士前期課程を修了後、そのまま博士後期課程へ進学できたのは、指導教授の桑原季雄先生のお陰です。先生からは5年間にわたって、文化人類学の専門知識ばかりでなく、修士論文や投稿論文、そして博士学位論文の作成に当たりご指導いただきました。本論文の構成、文章の書き方から細部の表現、さらに日本語の修正に至るまで、終始ご親切なご指導をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。また、副指導教員の萩野誠先生からも博士論文の作成に際して多くの貴重なコメントをいただきました。さらに、合同ゼミの尾崎孝宏先生、兼城糸絵先生、特任助教の熊華磊さん、そして合同ゼミ仲間の皆さんから多くコメントとアドバイスをいただきました。ここに、記して感謝申し上げます。

そして、本論文の作成に際しては、5年間の中国での現地調査においても、各方面の関係者から多大なご協力を頂くことができ、大変多くの貴重な資料を入手することができました。調査地の「土家女兒城」など観光地の従業員の方々、石灰窯村や彭家寨村、唐崖寺村の村民の方々、恩施市施州民族小学校、晒都民族小学校、宣恩県第一民族実験小学校と咸豊県第一民族実験小学校の先生方々、そして紅土郷政府、沙道溝鎮政府、唐崖寺鎮政府の職員の方々、恩施市「土家女兒城」と「恩施土司城」の運営会社の方々、さらに恩施市観光局の楊天然氏、恩施地域文化人の冉紅芳先生、崔在輝氏、賀孝貴氏、黄煥然氏、呂金華氏などからの多大なご協力に対し、心より感謝申し上げます。

また、博士後期課程の3年間に研究助成金を提供していただいた種村完司個人奨学金とロータリー米山記念奨学会に対し、ここに記して感謝申し上げます。

最後に、日本での留学をずっと共にした親友の邵利軍さんや日本友人たち、中国の両親や親戚、友人達から物心両面で多くのご支援を頂いたことに深く感謝いたします。